

第5次レッドデータブック： 絶滅のおそれのある日本の野生生物

The 5th Red Databook Bryophytes: Threatened wildlife of Japan

蘚苔類



令和7（2025）年3月



この文献はクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja>

表紙の写真：イリオモテウロコゼニゴケ（左上）、クマノゴケ（右上）、ヒメトロイブゴケ（左下）、ヒメハナガサゴケ（右下）

第5次レッドデータブック全体を引用する場合には以下のように記述してください。

引用表示：環境省（編）. 2025. 第5次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物 蘚苔類. 環境省，東京. 1195pp.

Citation: Ministry of the Environment, Japan (ed.). 2025. *The 5th Red Databook Bryophytes: Threatened wildlife of Japan*. Ministry of the Environment, Japan, Tokyo. 1195pp.

はじめに

私たちが生きる現代は「第6の大量絶滅時代」ともいわれ、過去5回発生した大絶滅より種の絶滅速度は速く、その主な原因は人間活動による影響と考えられています。2019年に生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学-政策プラットフォーム（IPBES）により公表された「生物多様性と生態系サービスに関する地球規模評価報告書」によると、世界の陸地の約75%は著しく改変され、海洋の66%は複数の人為的な影響下にあり、1700年以降湿地の85%以上が消失するなど、人類史上かつてない速度で地球全体の自然が変化していると報告されています。また、過去50年間の地球上の種の絶滅は、過去1,000万年平均の少なくとも数十倍、あるいは数百倍の速度で進んでおり、適切な対策を講じなければ、今後更に加速すると指摘されています。

2019年の国連総会においては、世界中の生態系の劣化を予防し、食い止め、反転させるための努力を支援し、拡大させるために、2030年までに陸と海の30%以上を保護・保全する「30by30目標」が提唱されました。30by30目標の達成に当たっては、自然保護を目的とした国立公園等の保護地域に加えて、それ以外の場所で生物多様性の保全に資する地域として OECM（Other Effective area-based Conservation Measures）の役割も重視されました。この OECM は、持続可能な生産活動の場を含め、より広範囲における生物多様性保全や生態系回復の動きを後押しできる可能性を有するものであり、我が国においても、民間の取組等によって生物多様性の保全が図られている里地里山、企業緑地、社寺林などの区域を自然共生サイトとして認定する制度が始まりました。

また、2022年12月に採択された新たな生物多様性に関する世界目標である「昆明・モンテリオール生物多様性枠組」においては、「人間によって引き起こされる既知の絶滅危惧種の絶滅を阻止し、また絶滅リスクを大幅に減らすための種、特に絶滅危惧種を回復及び保全し、並びに適応能力の維持のために在来種、野生種及び家畜・栽培種の個体群内及び個体群間の遺伝的多様性を維持及び回復するために、生息域内及び生息域外保全や持続可能な管理の実践等を通じて緊急の管理行動を確保するとともに、共存に向けて人間と野生生物との軋轢を最小化するため、人間と野生生物の相互作用を効果的に管理する」ことが位置づけられました。これを受け、令和5年には、自然を回復軌道に乗せるため、生物多様性の損失を止め、反転させる「2030年ネイチャーポジティブ」を掲げ、その実現のためのロードマップとして「生物多様性国家戦略 2023-2030」を策定しました。

「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」については、自然とのふれあいや関わりを維持しつつ、積極的な生息地・生育地の保全活動等を推進するため、平成29年度に「特定第二種国内希少野生動植物種」制度を創設しました。本制度は、主に里地里山など二次的自然に生息する両生類、淡水魚類、昆虫類などの指定を想定しており、調査研究や環境教育等を目的とした捕獲等の行為については規制されないため、自然との関わりやふれあいを維持しつつ、各地域で積極的な生息・生育地の保全活動等が展開され、対象種の保全が進むことが期待されます。

本書は、平成24年に公表した「第4次レッドリスト」並びにその解説版である「レッドデータブック 2014」、平成29年に公表した「環境省版海洋生物レッドリスト」及び「第4次レッドリスト」の内容を一部見直して公表した環境省レッドリスト 2020 について、最新の知見を踏まえ改訂を行い、「第5次レッドリスト・レッドデータブック」として編纂したものです。「第5次レッドリスト」では、これまでと異

なり、個別の分類群の事情を超えて統一的な評価を行うために、「レッドリスト作成の手引」を作成し、絶滅のおそれに関する基準をより具体的に規定するとともに、定量的な情報に基づいて評価することを原則とすることで、生息地・生育地の現状をより正確に反映できるよう努めました。また、都道府県レッドリストの作成が充実してきたことに伴う「絶滅のおそれのある地域個体群」(LP)の評価基準の見直しやクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの表示等による利用のしやすさの改善など、さまざまな見直しを行っております。

レッドリスト・レッドデータブックは、捕獲規制等の直接的な法的効力を生むものではありませんが、社会への警鐘として広く社会に情報を提供することにより、さまざまな場面で多様な活用が図られるものです。環境省においても、環境影響評価法に基づく環境アセスメント等、さまざまな環境政策において基礎資料として活用され、近年、規制を伴う政策との関連がますます強化される傾向にあります。特に、「種の保存法」との関係では、レッドリスト掲載種の中で特に保護の優先度の高い種について、生息状況等に関する詳細な調査の実施等によりさらなる情報収集を行い、その結果や生息地・生育地の自然的・社会的状況等に応じて同法に基づく国内希少野生動植物種に指定する等、必要な保護措置を講じていくこととしています。一方で、今回の改訂では、個体数が回復したこと等により絶滅危惧カテゴリーから除外された国内希少野生動植物種もあり、こうした種については、次回の見直しに向けて引き続き生息状況等を注視し、今後の評価結果も踏まえて、必要に応じて指定の解除を検討することとしています。

なお、掲載種の中には、人為による捕獲・採取圧(密猟・盗掘を含む)が主な減少要因となっている種が少なくありませんが、レッドリスト・レッドデータブックに掲載されることにより、かえって商業目的や観賞目的等による乱獲・盗掘等の対象となるおそれが増大することが懸念される種もあります。今回のレッドリスト・レッドデータブックに掲載された種を将来にわたって存続させていくには、国民をはじめ多様な主体が、その種がレッドリスト・レッドデータブックに掲載された意味を真摯に考えることが重要です。環境省としては、こうした観点からの普及啓発・広報や保護措置の充実等の各種対策を一層推進していく考えです。

今回のレッドリスト・レッドデータブック編纂に当たっては、レッドリスト掲載種の選定・評価からレッドデータブックの執筆まで、絶滅のおそれのある野生生物の選定評価検討会及び同分科会の委員各位、その他多くの研究者や専門家の方々から多大なるご指導、ご協力、ご尽力を賜りました。また、種の選定から本書の編纂にわたる過程において、データの整理等は(一財)自然環境研究センターが担当しました。

本書の編纂にご協力いただいた関係各位に対し、ここに改めて厚く感謝申し上げるとともに、本書が今後、行政、事業者、関係団体等、様々な主体による取組に広く活用されることを祈念します。

環境省自然環境局野生生物課
希少種保全推進室

目 次

はじめに.....	i
環境省レッドリスト・レッドデータブック作成の目的と経緯	iv
第5次レッドリスト作成の検討体制.....	vii
第5次レッドリスト(蘚苔類)の作成と評価結果	ix
第5次レッドリスト(蘚苔類)	xiii
第5次レッドデータブック(蘚苔類)の掲載内容	xxii
第5次レッドデータブック(蘚苔類) 各種の解説.....	1
第5次レッドリスト(蘚苔類)においてカテゴリー外(レッドリスト不掲載)となった種の解説	1172
■学名索引.....	1187
■和名索引.....	1192

環境省レッドリスト・レッドデータブック作成の目的と経緯

レッドリスト・レッドデータブックとは

レッドリストとは、日本に生息又は生育する野生生物について、生物学的観点から個々の種の絶滅の危険度を評価した上で絶滅危惧種を選定し、リストにまとめたものであり、おおむね5年ごとに見直しを行っている。絶滅危惧種の保存施策は、生物学的知見に立脚しつつ、時機を失うことなく適切に実施される必要があり、種の保存法に基づく希少野生動植物種保存基本方針に基づいてレッドリストを作成し、施策の推進に必要な各種の調査研究を積極的に推進することとしている。また併せて、レッドリストに掲載された種について、その生息状況等を取りまとめ編纂したレッドデータブックを作成し、おおむね10年ごとに見直しを行っている。

これまでのレッドリストの改訂状況

・初版レッドデータブック（平成3年）

野生生物の保全のためには、絶滅のおそれのある種を的確に把握し、一般への理解を広める必要があることから、環境省では、昭和61年度より「緊急に保護を要する動植物の種の選定調査」を行った。その結果を踏まえ、動物については平成3年に環境庁（当時）版レッドデータブック「日本の絶滅のおそれのある野生生物－脊椎動物編」及び「日本の絶滅のおそれのある野生生物－無脊椎動物編」を取りまとめた。

なお、植物については、平成元年に、日本植物分類学会が中心となって維管束植物を対象として編集した「我が国における保護上重要な植物種の現状」が、我が国で最初のレッドデータブックである。

・第2次レッドリスト・レッドデータブック（平成9年～18年）

平成7年度には、国際自然保護連合（IUCN）で採択された新しいカテゴリー（ランク）の考え方を踏まえ、動物についてはレッドリストの見直し、植物については新たに環境省版としてレッドリストの作成に着手した。動物では、①哺乳類 ②鳥類、③爬虫類、④両生類、⑤汽水・淡水魚類、⑥昆虫類、⑦陸・淡水産貝類、⑧その他無脊椎動物（クモ形類、甲殻類等）、植物では⑨植物I（維管束植物）、⑩植物II（蘚苔類、藻類、地衣類、菌類）の計10分類群ごとに、平成9～12年度にかけて順次レッドリストを公表した。また、このレッドリストを元に、分類群ごとのレッドデータブックを平成12～18年度に発行した。

・第3次レッドリスト（平成18年・19年）

平成14年度より2回目のレッドリストの見直し作業に着手し、平成18年12月に鳥類、爬虫類、両生類、その他無脊椎動物の4分類群、平成19年8月に残りの哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物I（維管束植物）、植物II（蘚苔類、藻類、地衣類、菌類）の6分類群のレッドリストを公表した（動物については3回目、植物については2回目の公表）。新たにレッドリストに掲載された種や、カテゴリーが変更された種については、現行レッドデータブックの付属説明資料を作成した。

・第4次レッドリスト及びレッドデータブック2014（平成24年～27年）

平成 20 年度より、上記の見直しに引き続き、3 回目のレッドリスト見直し作業に着手した。前回見直し後の生息・生育状況や生息・生育環境の変化等の最新の知見を収集し検討を行ってきた。平成 24 年度に 10 分類群のレッドリストについて見直し作業が終了し、新たな第 4 次レッドリストを取りまとめ、公表した。

・第 4 次レッドリストの随時見直し（平成 27 年～令和 2 年）

第 4 次レッドリストについては、平成 27 年度から令和 2 年度まで、生息状況の悪化等によりカテゴリーの再検討が必要な種について、時期を定めず必要に応じて個別に見直しを行った。

平成 27 年に、哺乳類の一部の種及び絶滅のおそれのある地域個体群（ゼニガタアザラシ、カモシカの地域個体群）についてカテゴリー（ランク）を見直したレッドリスト 2015 を公表した。

平成 29 年に、13 分類群の 60 種についてカテゴリーを見直したレッドリスト 2017 を公表した。絶滅危惧種は 38 種増加し、合計 3,634 種となった。また、平成 29 年 10 月には、レッドリスト 2017 において新規に掲載された種（亜種、変種等を含む。）及びカテゴリーが変更された種（合計 60 種）を対象に、レッドデータブックに代わる解説資料として、それらの評価理由や生息状況等を解説した「環境省レッドリスト 2017 補遺資料」を公表した。

平成 30 年に、67 種についてカテゴリーを見直したレッドリスト 2018 を公表した。絶滅危惧種は 41 種増加（44 種追加、3 種削除）し、合計 3,675 種となった。また、レッドデータブックに代わる解説資料として、上記 67 種について随時見直しの評価理由や生息状況等を解説した「環境省レッドリスト 2018 補遺資料」を公表した。

平成 31 年に、トキ及びトキウモウダニについてカテゴリーを見直したレッドリスト 2019 を公表した。絶滅危惧種は 1 種増加し、合計 3,676 種となった。また、レッドデータブックに代わる解説資料として、上記 2 種について随時見直しの評価理由や生息状況等を解説した「環境省レッドリスト 2019 補遺資料」を公表した。

令和 2 年に、75 種のカテゴリーを見直したレッドリスト 2020 を公表した。絶滅危惧種は 39 種増加し、合計 3,716 種となった。平成 29 年度に公表された海洋生物レッドリストに掲載された種数とあわせると、環境省が絶滅危惧種と評価した種は 3,772 種となった。また、レッドデータブックに代わる解説資料として、上記 75 種について、随時見直しの評価理由や生息状況等を解説した「環境省レッドリスト 2020 補遺資料」を公表した。

・海洋生物レッドリスト（平成 29 年）

平成 23 年に「海洋生物多様性保全戦略」が策定され「海洋生物の希少性等の評価」の推進が位置づけられるなど、海洋の生物に対する関心の高まりを受け、平成 24 年度より海洋生物レッドリスト作成の作業を開始した。魚類、サンゴ類、甲殻類、頭足類、その他無脊椎動物の 5 分類群のうち、これまで評価を行っていなかった種について、新たにレッドリストを取りまとめ海洋生物レッドリストとして公表した。海洋生物レッドリストでは絶滅危惧種として 56 種が掲載された。なお、水産庁が資源評価を実施している種や小型鯨類などの 94 種は、水産庁が評価した。

・第 5 次レッドリスト・レッドデータブック（令和 7 年～）

令和2年度より、従来のレッドリストと海洋生物レッドリストの検討体制を統合した。令和7年3月に、①維管束植物、②蘚苔類、③藻類、④地衣類、⑤菌類の5分類群について第5次レッドリスト・レッドデータブックを公表した。今後、他の分類群についても令和8年以降に順次公表することとしている。

第5次レッドリスト作成の検討体制

環境省第5次レッドリストの作成に当たっては、専門家による「絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会」を設置し、その下に分類群毎に分科会を設置して検討を進めることとした。

- 第5次レッドリスト検討体制（敬称略。50音順。所属は原則として令和6（2024）年度現在。）

[絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会委員]

座長：石井 実	大阪府立大学 名誉教授 兼 地方独立行政法人大阪府立環境農林水産総合研究所 理事長
委員：石井 信夫	東京女子大学 名誉教授
岩崎 敬二	奈良大学文学部地理学科 教授
大高 明史	弘前大学 名誉教授
尾崎 清明	山階鳥類研究所 副所長
柏谷 博之	国立科学博物館 名誉研究員
角野 康郎	神戸大学 名誉教授
木村 清志	三重大学 名誉教授
白山 義久	京都大学 名誉教授
田中 次郎	東京海洋大学 名誉教授
深見 裕伸	宮崎大学農学部海洋生物環境学科 教授
逸見 泰久	熊本大学 名誉教授
細谷 和海	近畿大学 名誉教授
細矢 剛	国立科学博物館植物研究部 部長
松井 正文	京都大学 名誉教授
山口 富美夫	広島大学大学院統合生命科学研究科 教授

[分科会]

哺乳類分科会	座長：石井信夫 委員数：5名
鳥類分科会	座長：尾崎清明 委員数：7名
爬虫類・両生類分科会	座長：松井正文 委員数：5名
淡水魚類分科会	座長：細谷和海 委員数：10名
海水魚類分科会	座長：木村清志 委員数：13名
サンゴ類分科会	座長：深見裕伸 委員数：5名
昆虫類分科会	座長：石井 実 委員数：12名
甲殻類分科会	座長：逸見泰久 委員数：12名
軟体動物分科会	座長：岩崎敬二 委員数：10名
陸域その他無脊椎動物分科会	座長：大高明史 委員数：6名
海域その他無脊椎動物分科会	座長：白山義久 委員数：10名

維管束植物分科会 座長：角野康郎 委員数：10 名

蘚苔類分科会 座長：山口富美夫 委員数：5 名

藻類分科会 座長：田中次郎 委員数：6 名

地衣類分科会 座長：柏谷博之 委員数：5 名

菌類分科会 座長：細矢 剛 委員数：5 名

第5次レッドリスト(蘚苔類)の作成と評価結果

第5次レッドリスト(蘚苔類)について

本リストの掲載種は、レッドリスト 2020 から 17 種増加し 289 種となった。それとともに、下で記したようにカテゴリーのランクが多数変動した。たとえば、レッドリスト 2020 掲載種のうち 26 種のカテゴリーのランクが上昇した一方、58 種についてはランクが下降している。このようなカテゴリーランクの変動から、蘚苔類では絶滅の危険度が減り生育環境が改善したかのようにもみえるが、これは定量的な評価を実施したことが原因であろう。今回のレッドリスト改定では、現地調査および検証可能な論文報告に基づいた生育地情報を重視してカテゴリーを評価しており、生育地の数によってはカテゴリーが変動する場合もあった。十分な生育地情報が得られない対象種については、情報不足(DD)と判断され、レッドリスト 2020 で絶滅危惧I類(CR+EN)と評価された 30 種については DD に変更された。その結果、第5次レッドリストでは合計 75 種が DD となった。

定量的な評価に基づいた本レッドリストは、より実態を反映したリストになったと我々は考えている。しかし、DD が全体の 26%を占めていることから、対象種によっては調査が十分とは言えず、各対象種の生育地情報の量と精度に偏りがあることも否めない。例えば、注目度の高い種についてはより詳細に野外調査が実施され、論文の報告数も多くなる傾向がある。今後は、対象種全体を同じような精度で現地調査をする必要があろう。また、生育地点の確認だけでなく、個体群サイズの経時的変化も重要である。同一地域での継続的な調査も必要である。

レッドデータブックが出版され、レッドリストが公表されるようになって 30 年以上が経過し、社会での認知度や自然保護に対する関心も高まりつつある。人為的な要因による野生生物の絶滅の危険度は減少しつつあると思えるが、近年は気候変動とそれに伴う自然災害により、野生生物の生育・生息地の破壊が危惧される。蘚苔類は微小な種が多く、土壌、岩、樹木など生育地の環境要因により影響を受けやすい。洪水や土砂崩れのような自然災害ばかりでなく、植生遷移による環境の変化に対しても蘚苔類はより敏感に反応する。蘚苔類の生育状況の調査は大変時間のかかる作業である。この微小な植物に興味をもつ人々が少しでも増えて、生育状況のデータが蓄積されることを願いたい。

令和7年3月

蘚苔類分科会座長 山口 富美夫

[蘚苔類分科会委員]

座 長 :	山口 富美夫	広島大学 大学院統合生命科学研究科 教授
委 員 :	有川 智己	慶應義塾大学 経済学部 教授
	片桐 知之	高知大学 理工学部 講師
	樋口 正信	国立科学博物館 名誉研究員
	古木 達郎	千葉県立中央博物館 自然誌・歴史研究部 元部長

協力者一覧（敬称略）

第5次レッドリスト・レッドデータブックは、下記の方々のご協力によって作成されたものです。ご協力いただきました方々のお名前を掲載し、厚く御礼申し上げます。

秋山弘之、池松泰一、鶴沢美穂子、出下 卓、井上侑哉、岩田和鷹、上野 健、内田暁友、大石善隆、太田正文、大塚政雄、笠井 譲、川合啓二、木口博史、岸田知展、桐生賢太、久保晴盛、坂井奈緒子、佐藤匠、白崎 仁、鈴木 直、Seo Jae Heum、竹中大祐、立石幸敏、土永浩史、坪田博美、出口博則、西畑和輝、西村直樹、長谷川二郎、林田信明、林 正典、堀 清鷹、松井 透、松本美津、横山正弘

（１）第５次レッドリスト（藓苔類）作成の手順

第５次レッドリスト（藓苔類）については、レッドリスト作成の手引の「第一 絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価における基本的事項」及び「第二 各分科会における基本的事項」に従って、評価対象となる種（亜種、変種等を含む、以下同じ）を選定したうえで１種ずつ各対象種の既知情報等を「第三 環境省レッドリストカテゴリーと判定基準」の各基準に当てはめてカテゴリー評価を実施した。その他、レッドリスト作成に係る詳細については、レッドリスト作成の手引を参照のこと。

参考：環境省レッドリストのカテゴリー

カテゴリー		定義と基本概念
絶滅 Extinct (EX)		我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
野生絶滅 Extinct in the Wild (EW)		飼育・栽培下、あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種
絶滅危惧	絶滅危惧 IA 類 Critically Endangered (CR)	深刻な絶滅の危機に瀕している種 (現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なものであって、ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの)
	絶滅危惧 IB 類 Endangered (EN)	絶滅の危機に瀕している種 (現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なものであって、IA 類 (CR) ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの)
	絶滅危惧 II 類 Vulnerable (VU)	絶滅の危険が増大している種 (現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、「絶滅危惧 IA 類 (CR)」または「絶滅危惧 IB 類 (EN)」のカテゴリーに移行することが確実と考えられるもの)
準絶滅危惧 Near Threatened (NT)		存続基盤が脆弱な種 (現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位カテゴリーに移行する要素を有するもの)
情報不足 Data Deficient (DD)		カテゴリーを判定するための情報が不足している種 (現時点での絶滅危険度は確定できないが、今後情報が得られれば「絶滅危惧」等になりうるもの)

付属資料

絶滅のおそれのある地域個体群 Threatened Local Population (LP)	孤立した地域個体群で、絶滅のおそれが高いもの

出典：環境省レッドリストカテゴリーと判定基準を抜粋して作成

（２）第５次レッドリスト（藓苔類）掲載種数

今回の見直しの結果による第５次レッドリスト掲載種の 카테고리内訳と、レッドリスト 2020 からの各 카테고리における種数の変遷は、以下のとおりである。

表 1 第５次レッドリスト（藓苔類）掲載種の 카테고리内訳

EX	EW	CR	EN	VU	NT	DD	合計
4	0	25	73	71	41	75	289

表 2 各 카테고리における種数の変遷（レッドリスト 2020 と第５次レッドリストの比較）

		第5次レッドリストにおける評価								
		EX	EW	CR	EN	VU	NT	DD	不掲載	合計
内訳		4	0	25	73	71	41	75	10	299
レッドリスト 2020	EX	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	EW	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	CR+EN	3	0	20	46	31	7	30	0	137
	VU	0	0	4	21	38	20	18	2	103
	NT	0	0	0	0	0	12	3	6	21
	DD	0	0	1	2	1	1	14	2	21
新規追加		1	0	0	4	1	1	10	0	17

（３）第５次レッドリスト（藓苔類）から明らかになった点

第５次レッドリストには、新たにアカサキジロゴケ、イボイボムクムクゴケ、イボヒシヤクゴケなど 17 種が掲載された。前回の RL2020 と比較すると、絶滅危惧Ⅰ類（CR,EN）および絶滅危惧Ⅱ類（VU）を含む絶滅危惧種は、240 種から 169 種に減少した。この減少の主な要因は、第５次レッドリストで初めて定量評価が実施されたことに伴い、前回 CR,EN,VU と評価された種の多くが情報不足（DD）と評価されたことによるものである。具体的には、前回 CR,EN,VU と評価された種のうち、エビスゴケ、カメゴケモドキ、キヌシッポゴケなど 48 種が DD と評価された。一方で、前回 DD と評価された種のうち、イトスジゴケ、イトミゾゴケ、キレハウロコゴケ、マゴメゴケは絶滅危惧に 카테고리が変更となった。

また、RL2020 掲載種のうち、第５次レッドリストではウルシゼニゴケ、シワナシチビイタチゴケ、ヤクシマスギバゴケが、過去 50 年間前後の間に信頼できる生息の情報が得られていないなどの理由で、絶滅（EX）と評価された。その他、クロジクツガゴケ、コキジノオゴケ、マルバホラゴケモドキなど 10 種が、現時点での絶滅危険度は小さい、あるいは最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でないという理由で、レッドリスト不掲載となった。

第5次レッドリスト(蘚苔類)

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名	学名
BR0001	絶滅(EX)	ダンゴゼニゴケ	<i>Mannia androgyna</i>
BR0002	絶滅(EX)	ウルシゼニゴケ	<i>Mannia californica</i>
BR0003	絶滅(EX)	ヤクシマスギバゴケ	<i>Lepicolea yakusimensis</i>
BR0004	絶滅(EX)	シワナシチビイタチゴケ	<i>Pterogoniadelphus esquirolii</i>
BR0005	絶滅危惧IA 類(CR)	ミドリツノゴケ	<i>Folioceros glandulosus</i>
BR0006	絶滅危惧IA 類(CR)	ヒカリゼニゴケ	<i>Cyathodium cavernarum</i>
BR0007	絶滅危惧IA 類(CR)	ヤツガタケウロコゼニゴケ	<i>Fossombronia pusilla</i>
BR0008	絶滅危惧IA 類(CR)	ケミドリゼニゴケ	<i>Aneura hirsuta</i>
BR0009	絶滅危惧IA 類(CR)	イトスジゴケ	<i>Riccardia pumila</i>
BR0010	絶滅危惧IA 類(CR)	オノイチョウゴケ	<i>Anastrophyllum ellipticum</i>
BR0011	絶滅危惧IA 類(CR)	コダマイチョウゴケ	<i>Crossocalyx hellerianus</i>
BR0012	絶滅危惧IA 類(CR)	ヒメウキヤバナゴケ	<i>Odontoschisma francisci</i>
BR0013	絶滅危惧IA 類(CR)	モグリゴケ	<i>Lethocolea naruto-toganensis</i>
BR0014	絶滅危惧IA 類(CR)	ハッコウダゴケ	<i>Eremonotus myriocarpus</i>
BR0015	絶滅危惧IA 類(CR)	ユキミイチョウゴケ	<i>Mesoptychia heterocolpos</i>
BR0016	絶滅危惧IA 類(CR)	トゲバウロコゴケ	<i>Heteroscyphus wettsteinii</i>
BR0017	絶滅危惧IA 類(CR)	ハットリムカイバハネゴケ	<i>Chiastocaulon theriotanum</i>
BR0018	絶滅危惧IA 類(CR)	フィリピンオヤコゴケ	<i>Schistochila aligera</i>
BR0019	絶滅危惧IA 類(CR)	サンカクヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea drepanolejeuneoides</i>
BR0020	絶滅危惧IA 類(CR)	オガサワラケビラゴケ	<i>Radula boninensis</i>
BR0021	絶滅危惧IA 類(CR)	オリンピックゴケ	<i>Brachydontium olympicum</i>
BR0022	絶滅危惧IA 類(CR)	イボイボカタシロゴケ	<i>Calymperes strictifolium</i>
BR0023	絶滅危惧IA 類(CR)	ヌマチゴケ	<i>Paludella squarrosa</i>
BR0024	絶滅危惧IA 類(CR)	コシノシンジゴケ	<i>Schizymenium sasaokae</i>
BR0025	絶滅危惧IA 類(CR)	クチボソミノゴケ	<i>Macromitrium holomitrioides</i>
BR0026	絶滅危惧IA 類(CR)	オクヤマツガゴケ	<i>Daltonia carinata</i>
BR0027	絶滅危惧IA 類(CR)	キノボリヒメツガゴケ	<i>Distichophyllum yakumontanum</i>
BR0028	絶滅危惧IA 類(CR)	オニゴケ	<i>Pseudospiridentopsis horrida</i>
BR0029	絶滅危惧IA 類(CR)	マメハネゴケ	<i>Pinnatella ambigua</i>
BR0030	絶滅危惧IB 類(EN)	キレハコマチゴケ	<i>Haplomitrium hookeri</i>
BR0031	絶滅危惧IB 類(EN)	イワゼニゴケ	<i>Mannia triandra</i>
BR0032	絶滅危惧IB 類(EN)	リシリゼニゴケ	<i>Peltolepis quadrata</i>
BR0033	絶滅危惧IB 類(EN)	ジンチョウゴケ	<i>Sauteria spongiosa</i>
BR0034	絶滅危惧IB 類(EN)	ヤマトヤハズゴケ	<i>Sandeothallus japonicus</i>

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名	学名
BR0035	絶滅危惧IB 類 (EN)	ミズゴケモドキ	<i>Pleurozia purpurea</i>
BR0036	絶滅危惧IB 類 (EN)	ヒメモミジゴケ	<i>Barbilophozia hatcheri</i>
BR0037	絶滅危惧IB 類 (EN)	ヤクシマアミバゴケ	<i>Hattoria yakushimensis</i>
BR0038	絶滅危惧IB 類 (EN)	ミツデモミジゴケ	<i>Neoorthocaulis floerkei</i>
BR0039	絶滅危惧IB 類 (EN)	マエバラアミバゴケ	<i>Schizophyllopsis bidens</i>
BR0040	絶滅危惧IB 類 (EN)	キノボリヤバネゴケ	<i>Sphenolobopsis pearsonii</i>
BR0041	絶滅危惧IB 類 (EN)	カラフトイチョウゴケ	<i>Sphenolobus saxicola</i>
BR0042	絶滅危惧IB 類 (EN)	フクレヤバネゴケ	<i>Nowellia aciliata</i>
BR0043	絶滅危惧IB 類 (EN)	ケスジヤバネゴケ	<i>Cephaloziella elachista</i>
BR0044	絶滅危惧IB 類 (EN)	ミゾゴケモドキ	<i>Scapania cuspiduligera</i>
BR0045	絶滅危惧IB 類 (EN)	イボヒシヤクゴケ	<i>Scapania verrucosa</i>
BR0046	絶滅危惧IB 類 (EN)	エゾヒメソロイゴケ	<i>Cryptocoleopsis imbricata</i>
BR0047	絶滅危惧IB 類 (EN)	イトミゾゴケ	<i>Marsupella boeckii</i>
BR0048	絶滅危惧IB 類 (EN)	ミジンコミゾゴケ	<i>Marsupella vermiformis</i>
BR0049	絶滅危惧IB 類 (EN)	キレハウロコゴケ	<i>Nardia breidleri</i>
BR0050	絶滅危惧IB 類 (EN)	ヤツガタケツボミゴケ	<i>Jungermannia borealis</i>
BR0051	絶滅危惧IB 類 (EN)	オオイチョウゴケ	<i>Mesoptychia collaris</i>
BR0052	絶滅危惧IB 類 (EN)	ヤエヤマスギバゴケ	<i>Neolepidozia mamillosa</i>
BR0053	絶滅危惧IB 類 (EN)	シャンハイハネゴケ	<i>Plagiochila shangaica</i>
BR0054	絶滅危惧IB 類 (EN)	サトミヨツデゴケ	<i>Pseudolepicolea andoi</i>
BR0055	絶滅危惧IB 類 (EN)	イボイボムクムクゴケ	<i>Trichocolea japonica</i>
BR0056	絶滅危惧IB 類 (EN)	ケナシオヤコゴケ	<i>Schistochila nuda</i>
BR0057	絶滅危惧IB 類 (EN)	ヤクシマオヤコゴケ	<i>Schistochila sciurea</i>
BR0058	絶滅危惧IB 類 (EN)	イリオモテヤスデゴケ	<i>Frullania iriomotensis</i>
BR0059	絶滅危惧IB 類 (EN)	イボヤスデゴケ	<i>Frullania repandistipula</i>
BR0060	絶滅危惧IB 類 (EN)	アマカワヒメゴヘイゴケ	<i>Archilejeunea amakawana</i>
BR0061	絶滅危惧IB 類 (EN)	リュウキュウシゲリゴケ	<i>Cheilolejeunea ryukyuensis</i>
BR0062	絶滅危惧IB 類 (EN)	キララヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea ceratilobula</i>
BR0063	絶滅危惧IB 類 (EN)	ホソバイトクズゴケ	<i>Cololejeunea sintenisii</i>
BR0064	絶滅危惧IB 類 (EN)	オガサワラキララゴケ	<i>Cololejeunea subminutilobula</i>
BR0065	絶滅危惧IB 類 (EN)	マルバサンカクゴケ	<i>Drepanolejeunea obtusifolia</i>
BR0066	絶滅危惧IB 類 (EN)	ツメクサリゴケ	<i>Lejeunea apiculata</i>
BR0067	絶滅危惧IB 類 (EN)	オオハラバクサリゴケ	<i>Lejeunea sordida</i>
BR0068	絶滅危惧IB 類 (EN)	ゴマダラクサリゴケ	<i>Stictolejeunea iwatsukii</i>
BR0069	絶滅危惧IB 類 (EN)	ヒメゴヘイゴケ	<i>Thysananthus retusus</i>
BR0070	絶滅危惧IB 類 (EN)	コバノイクビゴケ	<i>Diphyscium perminutum</i>

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名	学名
BR0071	絶滅危惧IB 類 (EN)	スズキイクビゴケ	<i>Diphyscium suzukii</i>
BR0072	絶滅危惧IB 類 (EN)	クロコゴケ	<i>Luisierella barbula</i>
BR0073	絶滅危惧IB 類 (EN)	ウシオギボウシゴケ	<i>Schistidium maritimum</i>
BR0074	絶滅危惧IB 類 (EN)	エゾキヌシッポゴケ	<i>Seligeria tristichoides</i>
BR0075	絶滅危惧IB 類 (EN)	キイアミゴケ	<i>Syrrhopodon kiiensis</i>
BR0076	絶滅危惧IB 類 (EN)	ヤクシマアミゴケ	<i>Syrrhopodon yakushimensis</i>
BR0077	絶滅危惧IB 類 (EN)	ヘビゴケ	<i>Campylopodium medium</i>
BR0078	絶滅危惧IB 類 (EN)	フチドリコゴケ	<i>Pachyneuropsis perinvoluta</i>
BR0079	絶滅危惧IB 類 (EN)	ムカゴネジレゴケ	<i>Syntrichia gemmascens</i>
BR0080	絶滅危惧IB 類 (EN)	オオツボゴケ	<i>Splachnum ampullaceum</i>
BR0081	絶滅危惧IB 類 (EN)	ヒメハナガサゴケ	<i>Splachnum melanocaulon</i>
BR0082	絶滅危惧IB 類 (EN)	ウワバミゴケ	<i>Breutelia arundinifolia</i>
BR0083	絶滅危惧IB 類 (EN)	マルバツガゴケ	<i>Distichophyllum obtusifolium</i>
BR0084	絶滅危惧IB 類 (EN)	ヒメコガネハイゴケ	<i>Podperaea krylovii</i>
BR0085	絶滅危惧IB 類 (EN)	キャラハゴケモドキ	<i>Taxiphyllopsis iwatsukii</i>
BR0086	絶滅危惧IB 類 (EN)	ムチエダイトゴケ	<i>Haplohymenium flagelliforme</i>
BR0087	絶滅危惧IB 類 (EN)	オニシメリゴケ	<i>Limnophyllum mizushimae</i>
BR0088	絶滅危惧IB 類 (EN)	フウチョウゴケ	<i>Macrothamnium macrocarpum</i>
BR0089	絶滅危惧IB 類 (EN)	オオシカゴケ	<i>Neodolichomitra yunnanensis</i>
BR0090	絶滅危惧IB 類 (EN)	ツヤダシタカネイタチゴケ	<i>Leucodon alpinus</i>
BR0091	絶滅危惧IB 類 (EN)	モミノキゴケ	<i>Taiwanobryum anacamptolepis</i>
BR0092	絶滅危惧IB 類 (EN)	マツカリタケナガゴケ	<i>Plagiothecium obtusissimum</i>
BR0093	絶滅危惧IB 類 (EN)	ミミヒラゴケ	<i>Calypothecium philippinense</i>
BR0094	絶滅危惧IB 類 (EN)	サジバラツコゴケ	<i>Gollania japonica</i>
BR0095	絶滅危惧IB 類 (EN)	オオカギイトゴケ	<i>Gollania splendens</i>
BR0096	絶滅危惧IB 類 (EN)	ヒロハコモチイトゴケ	<i>Clastobryellina ceylonensis</i>
BR0097	絶滅危惧IB 類 (EN)	イボミスジャバネゴケ	<i>Clastobryum cuculligerum</i>
BR0098	絶滅危惧IB 類 (EN)	ミスジャバネゴケ	<i>Clastobryum glabrescens</i>
BR0099	絶滅危惧IB 類 (EN)	シマフデノホゴケ	<i>Acroporium secundum</i>
BR0100	絶滅危惧IB 類 (EN)	マムシゴケ	<i>Meiothecium microcarpum</i>
BR0101	絶滅危惧IB 類 (EN)	リュウキュウカギホソエゴケ	<i>Radulina borbonica</i>
BR0102	絶滅危惧IB 類 (EN)	ヤクシマヒラツボゴケ	<i>Filibryum yakoushimae</i>
BR0103	絶滅危惧II類 (VU)	オガサワラキブリツノゴケ	<i>Dendroceros tubercularis</i>
BR0104	絶滅危惧II類 (VU)	オオサイハイゴケ	<i>Asterella cruciata</i>
BR0105	絶滅危惧II類 (VU)	チチブゼニゴケ	<i>Clevea pusilla</i>
BR0106	絶滅危惧II類 (VU)	ハマグリゼニゴケ	<i>Targionia hypophylla</i>

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名	学名
BR0107	絶滅危惧II類 (VU)	ヒメトロイブゴケ	<i>Apotreubia nana</i>
BR0108	絶滅危惧II類 (VU)	イリオモテウロコゼニゴケ	<i>Fossombronia myrioides</i>
BR0109	絶滅危惧II類 (VU)	チデレヤハズゴケ	<i>Moerckia blytii</i>
BR0110	絶滅危惧II類 (VU)	ムカシヒシヤクゴケ	<i>Scapania ornithopoides</i>
BR0111	絶滅危惧II類 (VU)	ケハネゴケモドキ	<i>Acrobolbus knightii</i>
BR0112	絶滅危惧II類 (VU)	サイシュウホラゴケモドキ	<i>Eocalypogeia quelpaertensis</i>
BR0113	絶滅危惧II類 (VU)	カネマルムチゴケ	<i>Bazzania ovistipula</i>
BR0114	絶滅危惧II類 (VU)	イリオモテスギバゴケ(テララゴケ)	<i>Tricholepidozia neesii</i>
BR0115	絶滅危惧II類 (VU)	ミジンコゴケ	<i>Zoopsis liukuensis</i>
BR0116	絶滅危惧II類 (VU)	アマノウロコゴケ	<i>Heteroscyphus aselliformis</i>
BR0117	絶滅危惧II類 (VU)	オオサワラゴケ	<i>Mastigophora diclados</i>
BR0118	絶滅危惧II類 (VU)	キヤスデゴケ	<i>Frullania gaudichaudii</i>
BR0119	絶滅危惧II類 (VU)	サカワヤスデゴケ	<i>Frullania sackawana</i>
BR0120	絶滅危惧II類 (VU)	サガリヤスデゴケ	<i>Frullania trichodes</i>
BR0121	絶滅危惧II類 (VU)	ハットリヤスデゴケ	<i>Neohattoria herzogii</i>
BR0122	絶滅危惧II類 (VU)	オオシマヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea inflata</i>
BR0123	絶滅危惧II類 (VU)	ヤマトケクサリゴケ	<i>Cololejeunea schmidtii</i>
BR0124	絶滅危惧II類 (VU)	カギヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea subfloccosa</i>
BR0125	絶滅危惧II類 (VU)	イヌイムシトリゴケ	<i>Colura inuii</i>
BR0126	絶滅危惧II類 (VU)	ボウズムシトリゴケ	<i>Colura meijeri</i>
BR0127	絶滅危惧II類 (VU)	ナガバムシトリゴケ	<i>Colura tenuicornis</i>
BR0128	絶滅危惧II類 (VU)	オチクサリゴケ	<i>Lejeunea otiana</i>
BR0129	絶滅危惧II類 (VU)	オビケビラゴケ	<i>Radula campanigera</i> subsp. <i>obiensis</i>
BR0130	絶滅危惧II類 (VU)	ミミケビラゴケ	<i>Radula chinensis</i>
BR0131	絶滅危惧II類 (VU)	イシヅチゴケ	<i>Oedipodium griffithianum</i>
BR0132	絶滅危惧II類 (VU)	ミギワイクビゴケ	<i>Diphyscium chiapense</i> subsp. <i>unipapillosum</i>
BR0133	絶滅危惧II類 (VU)	カシミールクマノゴケ	<i>Diphyscium kashmirensense</i>
BR0134	絶滅危惧II類 (VU)	シナノセンボンゴケ(セイタカヤリカツギ)	<i>Encalypta streptocarpa</i>
BR0135	絶滅危惧II類 (VU)	ラクヨウクサスギゴケ	<i>Timmia norvegica</i>
BR0136	絶滅危惧II類 (VU)	コキヌシツポゴケ	<i>Seligeria pusilla</i>
BR0137	絶滅危惧II類 (VU)	シロシラガゴケ	<i>Leucobryum glaucum</i>
BR0138	絶滅危惧II類 (VU)	ジャバシラガゴケ	<i>Leucobryum javense</i>
BR0139	絶滅危惧II類 (VU)	オガサワラカタシロゴケ	<i>Calymperes boninense</i>

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名	学名
BR0140	絶滅危惧II類(VU)	シラガゴケモドキ	<i>Exostratum blumii</i>
BR0141	絶滅危惧II類(VU)	ニセハブタエゴケ	<i>Leucophanes angustifolium</i>
BR0142	絶滅危惧II類(VU)	ジョウレンハウオウゴケ	<i>Fissidens geppii</i>
BR0143	絶滅危惧II類(VU)	ジャバハウオウゴケ	<i>Fissidens javanicus</i>
BR0144	絶滅危惧II類(VU)	キブネゴケ	<i>Rhachithecium nipponicum</i>
BR0145	絶滅危惧II類(VU)	マゴメゴケ	<i>Rhachithecium perpusillum</i>
BR0146	絶滅危惧II類(VU)	ナガバハリイシバイゴケ	<i>Molendoa hornschuchiana</i>
BR0147	絶滅危惧II類(VU)	ハリエゾネジレゴケ	<i>Tortula hoppeana</i>
BR0148	絶滅危惧II類(VU)	ヒョウタンハリガネゴケ	<i>Plagiobryum japonicum</i>
BR0149	絶滅危惧II類(VU)	イボタチヒダゴケ	<i>Lewinskya iwatsukii</i>
BR0150	絶滅危惧II類(VU)	ヤマタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum anomalum</i>
BR0151	絶滅危惧II類(VU)	イブキキンモウゴケ	<i>Ulota perbreviseta</i>
BR0152	絶滅危惧II類(VU)	ヤクシマキンモウゴケ	<i>Ulota yakushimensis</i>
BR0153	絶滅危惧II類(VU)	キダチゴケ	<i>Hypnodendron vitiense</i>
BR0154	絶滅危惧II類(VU)	カクレゴケ	<i>Garovaglia elegans</i>
BR0155	絶滅危惧II類(VU)	キダチクジャクゴケ	<i>Dendrocyathophorum decolyi</i>
BR0156	絶滅危惧II類(VU)	フチナシツガゴケ	<i>Distichophyllum osterwaldii</i>
BR0157	絶滅危惧II類(VU)	サオヒメゴケ	<i>Callicostella papillata</i>
BR0158	絶滅危惧II類(VU)	トガリバギボウシゴケ	<i>Bryonorrhisia acutifolia</i>
BR0159	絶滅危惧II類(VU)	カマバコモチゴケ	<i>Habrodon perpusillus</i>
BR0160	絶滅危惧II類(VU)	ヌマシノブゴケ	<i>Helodium paludosum</i>
BR0161	絶滅危惧II類(VU)	コマイタチゴケ	<i>Leucodon coreensis</i>
BR0162	絶滅危惧II類(VU)	トサノタスキゴケ	<i>Aerobryidium laosense</i>
BR0163	絶滅危惧II類(VU)	ヒカゲノカズラモドキ	<i>Aerobryopsis parisii</i>
BR0164	絶滅危惧II類(VU)	タカサゴハイヒモゴケ	<i>Meteoriopsis reclinata</i>
BR0165	絶滅危惧II類(VU)	ヤワラクシノハゴケ	<i>Ctenidium molluscum</i>
BR0166	絶滅危惧II類(VU)	カタナワゴケ	<i>Oedycladium fragile</i>
BR0167	絶滅危惧II類(VU)	シライワスズゴケ	<i>Forsstroemia noguchii</i>
BR0168	絶滅危惧II類(VU)	カイガラゴケ	<i>Myurella julacea</i>
BR0169	絶滅危惧II類(VU)	トガリカイガラゴケ	<i>Myurella tenerrima</i>
BR0170	絶滅危惧II類(VU)	オオタマコモチイトゴケ	<i>Aptychella robusta</i>
BR0171	絶滅危惧II類(VU)	ハシボソゴケ	<i>Papillidiopsis macrosticta</i>
BR0172	絶滅危惧II類(VU)	フトハイゴケ	<i>Stereodontopsis pseudorevoluta</i>
BR0173	絶滅危惧II類(VU)	リュウキュウホソエゴケ	<i>Trichosteleum lutschianum</i>
BR0174	準絶滅危惧(NT)	キノボリツノゴケ	<i>Dendroceros japonicus</i>
BR0175	準絶滅危惧(NT)	オキナワサイハイゴケ	<i>Asterella wallichiana</i>

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名	学名
BR0176	準絶滅危惧 (NT)	ヤワラゼニゴケ	<i>Monosolenium tenerum</i>
BR0177	準絶滅危惧 (NT)	イチョウウキゴケ	<i>Ricciocarpos natans</i>
BR0178	準絶滅危惧 (NT)	タチクモマゴケ	<i>Anastrepta orcadensis</i>
BR0179	準絶滅危惧 (NT)	イイシバヤバネゴケ	<i>Odontoschisma jishibae</i>
BR0180	準絶滅危惧 (NT)	キレハヤバネゴケ	<i>Cephaloziella massalongii</i>
BR0181	準絶滅危惧 (NT)	チチブイチョウゴケ	<i>Acrobolbus ciliatus</i>
BR0182	準絶滅危惧 (NT)	ヒラウロコゴケ	<i>Nardia compressa</i>
BR0183	準絶滅危惧 (NT)	イギイチョウゴケ	<i>Mesoptychia igiana</i>
BR0184	準絶滅危惧 (NT)	ハンデルソロイゴケ	<i>Solenostoma handelii</i>
BR0185	準絶滅危惧 (NT)	サケバキハネゴケ	<i>Plagiochila fordiana</i>
BR0186	準絶滅危惧 (NT)	ヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea trichomanis</i>
BR0187	準絶滅危惧 (NT)	カビゴケ	<i>Leptolejeunea elliptica</i>
BR0188	準絶滅危惧 (NT)	ナンジャモンジャゴケ	<i>Takakia lepidozoides</i>
BR0189	準絶滅危惧 (NT)	ホソベリミズゴケ	<i>Sphagnum junghuhnianum</i>
BR0190	準絶滅危惧 (NT)	オオミズゴケ	<i>Sphagnum palustre</i>
BR0191	準絶滅危惧 (NT)	ガッサンクロゴケ	<i>Andreaea nivalis</i>
BR0192	準絶滅危惧 (NT)	ヒメハミズゴケ	<i>Pogonatum camusii</i>
BR0193	準絶滅危惧 (NT)	ヤマトハクチョウゴケ	<i>Campylostelium brachycarpum</i>
BR0194	準絶滅危惧 (NT)	イサワゴケ	<i>Syrrhopodon tosaensis</i>
BR0195	準絶滅危惧 (NT)	キサゴゴケ	<i>Hypnodontopsis apiculata</i>
BR0196	準絶滅危惧 (NT)	ダンダンゴケ	<i>Eucladium verticillatum</i>
BR0197	準絶滅危惧 (NT)	フガゴケ	<i>Gymnostomiella longinervis</i>
BR0198	準絶滅危惧 (NT)	アオシマヒメシワゴケ	<i>Aulacopilum glaucum</i> subsp. <i>trichophyllum</i>
BR0199	準絶滅危惧 (NT)	カサゴケモドキ	<i>Rhodobryum ontariense</i>
BR0200	準絶滅危惧 (NT)	キジノオゴケ	<i>Cyathophorum adiantum</i>
BR0201	準絶滅危惧 (NT)	ササオカゴケ (アオモリカギハ イゴケ)	<i>Sasaokaea aomoriensis</i>
BR0202	準絶滅危惧 (NT)	イトヒバゴケ	<i>Cryphaea obovatocarpa</i>
BR0203	準絶滅危惧 (NT)	カワブチゴケ	<i>Cyptodontopsis leveillei</i>
BR0204	準絶滅危惧 (NT)	オオミツヤゴケ	<i>Entodon conchophyllus</i>
BR0205	準絶滅危惧 (NT)	コシノヤバネゴケ	<i>Dichelyma japonicum</i>
BR0206	準絶滅危惧 (NT)	クロカワゴケ	<i>Fontinalis antipyretica</i>
BR0207	準絶滅危惧 (NT)	カワゴケ	<i>Fontinalis hypnoides</i>
BR0208	準絶滅危惧 (NT)	イヌコクサゴケ	<i>Neobarbella comes</i>
BR0209	準絶滅危惧 (NT)	ヒロハシノブイトゴケ	<i>Trachycladiella aurea</i>

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名	学名
BR0210	準絶滅危惧 (NT)	ヒメタチヒラゴケ	<i>Homaliadelphus targionianus</i> var. <i>rotundatus</i>
BR0211	準絶滅危惧 (NT)	カトウゴケ	<i>Palisadula katoi</i>
BR0212	準絶滅危惧 (NT)	ホウライハゴロモゴケ	<i>Circulifolium microdendron</i>
BR0213	準絶滅危惧 (NT)	キブリハネゴケ	<i>Pinnatella makinoi</i>
BR0214	準絶滅危惧 (NT)	タイワントラノオゴケ	<i>Taiwanobryum speciosum</i>
BR0215	情報不足 (DD)	ムカシヤバナゴケ	<i>Cephaloziella crispata</i>
BR0216	情報不足 (DD)	タガワヤバナゴケ	<i>Cylindrocolea tagawae</i>
BR0217	情報不足 (DD)	マルバイチョウゴケ	<i>Obtusifolium obtusum</i>
BR0218	情報不足 (DD)	タニガワヒシヤクゴケ	<i>Scapania ciliatospinosa</i>
BR0219	情報不足 (DD)	ツバサヒシヤクゴケ	<i>Scapania crassiretis</i>
BR0220	情報不足 (DD)	コサキシロゴケ	<i>Gymnomitrium laceratum</i>
BR0221	情報不足 (DD)	アカサキシロゴケ	<i>Gymnomitrium mucronulatum</i>
BR0222	情報不足 (DD)	ヒロシウロコゴケ	<i>Nardia hiroshii</i>
BR0223	情報不足 (DD)	ヒトスジウロコゴケ	<i>Nardia unispiralis</i>
BR0224	情報不足 (DD)	リシリツボミゴケ	<i>Solenostoma hokkaidense</i>
BR0225	情報不足 (DD)	タカネハネゴケモドキ	<i>Plagiochila vexans</i>
BR0226	情報不足 (DD)	オキナワヤスデゴケ	<i>Frullania okinawensis</i>
BR0227	情報不足 (DD)	ユーレンキララゴケ	<i>Cololejeunea aequabilis</i>
BR0228	情報不足 (DD)	ヤエヤマサンカクゴケ	<i>Drepanolejeunea spicata</i>
BR0229	情報不足 (DD)	オノクサリゴケ	<i>Lejeunea syoshii</i>
BR0230	情報不足 (DD)	トガリバクラマゴケモドキ	<i>Porella acutifolia</i> subsp. <i>acutifolia</i>
BR0231	情報不足 (DD)	オキナスギゴケ	<i>Polytrichum juniperinum</i> subsp. <i>strictum</i>
BR0232	情報不足 (DD)	クマノゴケ	<i>Diphyscium lorifolium</i>
BR0233	情報不足 (DD)	シロウマヤリカツギ	<i>Encalypta alpina</i>
BR0234	情報不足 (DD)	ミヤマヤリカツギ	<i>Encalypta rhaptocarpa</i>
BR0235	情報不足 (DD)	ミヤマクススギゴケ	<i>Timmia megapolitana</i>
BR0236	情報不足 (DD)	ミギワギボウシゴケ	<i>Grimmia mollis</i>
BR0237	情報不足 (DD)	ノグチゴケ	<i>Brachydontium noguchii</i>
BR0238	情報不足 (DD)	キヌシッポゴケモドキ	<i>Brachydontium trichodes</i>
BR0239	情報不足 (DD)	キヌシッポゴケ	<i>Blindiadelphus recurvatus</i>
BR0240	情報不足 (DD)	ハナシキヌシッポゴケ	<i>Seligeria donniana</i>
BR0241	情報不足 (DD)	マユハケゴケ	<i>Campylopus fragilis</i>
BR0242	情報不足 (DD)	ヒロスジツリバリゴケ	<i>Campylopus gracilis</i>
BR0243	情報不足 (DD)	フジサンギンゴケモドキ	<i>Aongstroemia julacea</i>
BR0244	情報不足 (DD)	ハタキゴケ	<i>Aongstroemia orientalis</i>

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名	学名
BR0245	情報不足 (DD)	ニセタマウケゴケ(シバゴケ)	<i>Garckea flexuosa</i>
BR0246	情報不足 (DD)	ヤクホウオウゴケ	<i>Fissidens obscurus</i>
BR0247	情報不足 (DD)	ヒカリゴケ	<i>Schistostega pennata</i>
BR0248	情報不足 (DD)	ヤマゴケ	<i>Oreas martiana</i>
BR0249	情報不足 (DD)	アカネジクチゴケ	<i>Husnotiella asperifolia</i>
BR0250	情報不足 (DD)	ミヤマコネジレゴケ	<i>Syntrichia sinensis</i>
BR0251	情報不足 (DD)	ヒトヨシゴケ	<i>Bruchia microspora</i>
BR0252	情報不足 (DD)	マエバラナガダイゴケ	<i>Trematodon mayebarae</i>
BR0253	情報不足 (DD)	マルバユリゴケ	<i>Tayloria hornschurchii</i>
BR0254	情報不足 (DD)	ユリゴケ(タイワンユリゴケ)	<i>Tayloria indica</i>
BR0255	情報不足 (DD)	スルメゴケ	<i>Tayloria splachnoides</i>
BR0256	情報不足 (DD)	ヤスダゴケ	<i>Anomobryum yasudae</i>
BR0257	情報不足 (DD)	シノブチョウチンゴケ	<i>Cyrtomnium hymenophylloides</i>
BR0258	情報不足 (DD)	タチチョウチンゴケ	<i>Orthomnion dilatatum</i>
BR0259	情報不足 (DD)	タチチョウチンゴケモドキ	<i>Orthomnion javense</i>
BR0260	情報不足 (DD)	テヅカチョウチンゴケ(アズミ チョウチンゴケ)	<i>Plagiomnium tezukae</i>
BR0261	情報不足 (DD)	ツブツブヘチマゴケ	<i>Pohlia drummondii</i>
BR0262	情報不足 (DD)	ホソバゴケ	<i>Schizymenium japonicum</i>
BR0263	情報不足 (DD)	イブキタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum cupulatum</i>
BR0264	情報不足 (DD)	ヒログチキンモウゴケ	<i>Ulota eurystoma</i>
BR0265	情報不足 (DD)	カメゴケモドキ	<i>Zygodon viridissimus</i>
BR0266	情報不足 (DD)	コアブラゴケ	<i>Thamniopsis utacamundiana</i>
BR0267	情報不足 (DD)	ミハランゴケ	<i>Aerobryum speciosum</i> var. <i>nipponicum</i>
BR0268	情報不足 (DD)	スギバシノブゴケ	<i>Bryochenea vestitissima</i>
BR0269	情報不足 (DD)	オオヤマトイタチゴケ	<i>Leucodon giganteus</i>
BR0270	情報不足 (DD)	キタイタチゴケ	<i>Leucodon sciuroides</i>
BR0271	情報不足 (DD)	ヨコグライタチゴケ	<i>Leucodon sohayakiensis</i>
BR0272	情報不足 (DD)	ホソヒモゴケ	<i>Meteorium papillarioides</i>
BR0273	情報不足 (DD)	ハナシタチヒラゴケ	<i>Homaliadelphus targionianus</i> var. <i>laevidentatus</i>
BR0274	情報不足 (DD)	ヤクシマナワゴケ	<i>Oedocladium rufescens</i> var. <i>yakushimense</i>
BR0275	情報不足 (DD)	エビスゴケ	<i>Neckeropsis cyclophylla</i>
BR0276	情報不足 (DD)	レイシゴケ	<i>Myurella sibirica</i>

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名	学名
BR0277	情報不足 (DD)	ホソバツヤゴケ(タチミツヤゴケ)	<i>Orthothecium rufescens</i>
BR0278	情報不足 (DD)	オオサナダゴケ	<i>Plagiothecium neckeroideum</i>
BR0279	情報不足 (DD)	ハイヒバゴケモドキ	<i>Buckia vaucheri</i>
BR0280	情報不足 (DD)	クイシコモチイトゴケ	<i>Bonnosukea serrulata</i>
BR0281	情報不足 (DD)	ナメリヒメコモチイトゴケ	<i>Clastobryellina merrillii</i>
BR0282	情報不足 (DD)	ニセヒメコモチイトゴケ	<i>Clastobryellina orientalis</i>
BR0283	情報不足 (DD)	コモチイチイゴケ	<i>Isopterygium propaguliferum</i>
BR0284	情報不足 (DD)	ニセシダレウニゴケ	<i>Symphyodon asper</i>
BR0285	情報不足 (DD)	チチブウニゴケ	<i>Symphyodon copelandii</i>
BR0286	情報不足 (DD)	ラッコゴケモドキ	<i>Symphyodon gollanioides</i>
BR0287	情報不足 (DD)	シダレウニゴケ	<i>Symphyodon recurvomarginatus</i>
BR0288	情報不足 (DD)	ナガレウニゴケ	<i>Symphyodon rheophilus</i>
BR0289	情報不足 (DD)	カラフトシノブゴケ	<i>Echinophyllum sachalinense</i>

第5次レッドデータブック(蘚苔類)の掲載内容

本書では、上記のレッドリストに掲載された種の概要を示すため、種ごとに以下の項目と内容を記載した。

(1) 判定対象種情報

1) 評価分科会名

判定対象種を評価した分科会名を記載した。

2) 高次分類群名

目名、科名を記載した。

3) 和名

標準和名を記載した。

4) 学名等

学名、記載者名を記載した。

5) 日本における固有性

日本にのみ生育すると考えられる場合、「日本固有」と記載した。

(2) カテゴリー判定結果

1) カテゴリー区分

カテゴリーの記号と、名称として、「EX (絶滅)」、「EW (野生絶滅)」、「CR (絶滅危惧IA 類)」、「EN (絶滅危惧IB 類)」、「VU (絶滅危惧II類)」、「NT (準絶滅危惧)」、「DD (情報不足)」の、いずれかの区分を記載した。

2) カテゴリー判定基準

環境省レッドリストカテゴリーと判定基準により、どの判定基準によりカテゴリーが決定されたか明示するとともに、各判定基準適用の判断理由を記載した。

(3) 概要

種の基礎的情報、我が国における現在の生育状況、存在を脅かす要因、保護対策の現状等、特にその種が現在おかれている状況を要約して記載した。

(4) 協力者

レッドデータブックの執筆に際して、情報提供等の協力者がいる場合は、氏名、所属等を記載した。

(5) 基礎情報

1) 形態

その種の大きさや色など、基本的事項を簡潔に記載した。近縁種がある場合はその識別点も含めた。

2) 生活史

出現期や生育環境選択性、生育に必要な条件などについて判明している事項を記載した。

3) 生育環境

対象種の一般的な生育環境について簡潔に記載した。ただし、生育環境の現状や悪化状況などに関しては、本項目ではなく「生育地の現況」に記載した。また別表1の「生息・生育環境区分」に該当するカテゴリ及び別表2の「国土地域区分」の該当するカテゴリを記載した。

4) 分布域

個体群が縮小する以前の健全と考えられる時代の分布域を、分かる範囲で記載した。近縁種がある場合は分布域の違いを記述した。

また、島嶼群の名称は原則として自然環境保全基礎調査報告書の分布図に示されている表記を使用し、南西諸島地域では、大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島、尖閣諸島、大東諸島、等とした。琉球列島は、奄美・沖縄・宮古・八重山の各諸島を含むものとした。

(6) 掲載種の基礎情報

1) 分布域の現況

基本的に国内の分布域について現在の状況を記載した。産地数、過去と比べた現在の分布域の縮小の変遷、具体的な面積や分布域の分断状況等、詳細が分かる場合は、その内容も記載した。なお、現況が分からない場合は不明とした。

2) 生育地の現況

基本的に国内の生育地について現在の状況を記載した。産地数、過去と比べた現在の生育範囲の縮小の変遷等、詳細が分かる場合は、その内容も記載した。なお、現況が分からない場合は不明とした。

3) 個体数の現況

基本的に国内の個体数について現在の状況が分かる場合に記載した。なお、現況が分からない場合は不明とした。

(7) 存続を脅かす要因

対象種の存続を脅かしていると考えられる要因について記載した。また、別表3の「存続を脅かす要因のタイプ区分」から該当するタイプ区分を過去(2000年以前)と現在(2000年以降)で分けて該当するカテゴリを記載した。

(8) 絶滅に至った経緯とその要因

絶滅と判定された種については、対象種が最後まで分布していた地域、絶滅に至るまでの個体数や分布域の推移、絶滅に至った要因(原因)等をまとめて記載した。

絶滅の要因が分かっている場合は、別表3の「存続を脅かす要因のタイプ区分」から該当するカテゴリを記載した。

(9) 特記事項

特筆すべき学術的重要性や、保護の意義、必要性、具体策等について記載した。また、前回の見直し以降、あるいはレッドリスト公表後に、学名又は和名の変更等につながる分類群の変更(新たな分類体系による科や属等の分類群間の移動、種・亜種の統合・分離等)があった種については、この項目にそ

の旨を記載した。

(10) 旧レッドリストカテゴリと掲載名

過去のレッドリストからのカテゴリ及び学名並びに和名の変更の経過を、公表年次とともに記載した。

(11) 都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況

2023 年 3 月時点における 47 都道府県のレッドリスト・レッドデータブックに掲載されているカテゴリについて記載した。なお、都道府県により対象種の分類体系が異なる場合があるため注意が必要。

(12) 保護に係る法令指定状況

2023 年 3 月時点における、種の保存法に基づく国内希少野生動植物の指定状況、保護増殖事業計画策定状況、国指定天然記念物指定状況について記載した。

(13) 参考文献

原則として、カテゴリ判定の根拠になった文献（最近の分布や生育地の状況、推移等がわかるもの）を中心に本書を活用する方に役立つと考えられる文献名を掲載した。また、分類について様々な意見のある種や未記載種であっても種・亜種レベルで評価されているものは、学名並びに和名表記の根拠、及び別種とされている根拠となる文献を挙げた。

(14) アセスメントサマリー

カテゴリ判定結果、存続を脅かす要因、生育環境区分及び保護に係る法令指定状況（国指定のみ）について定型の英文を記載した。

(15) 解説執筆者

レッドデータブックの執筆者の氏名、所属等を記載した。

別表 1 第5次レッドリスト生息・生育環境区分

大区分	中区分	小区分	細区分
陸域	山地・丘陵地	高標高地 (約 2500m 以上; 高山帯に相当※ ¹⁾)	裸地
			森林
			草地
			田地・畑地
		中標高地 (約 500-2500m まで; 亜高山帯・ 山地帯に相当※ ¹⁾)	耕作放棄地
			農業用水路
			湿地・湿原・細流
			砂地・風衝地
		低標高地 (約 500m 以下; 低地帯・丘陵帯 に相当※ ¹⁾)	岩壁・ガレ場(石灰岩地等)
			洞窟・地下浅層・地下水域
			河川源流域
			河川上流域
		その他 (自由記入)	河川中流域
			ため池・池沼
			湖・ダム湖
			その他(自由記入)
	台地・平野・盆地・海岸	平地部 海岸部 その他 (自由記入)	裸地
			森林
			草地
			田地・畑地
			耕作放棄地
			湿地・湿原
			住宅地
			商業・工業施設
			市街緑地
			砂地・礫地
			河川中流域
			河川下流域
			河口域
			ワンド
			農業用水路
			小河川
			ため池・池沼
			潟・湖・ダム湖
			地下水域
			井戸
			洞窟・地下浅層

大区分	中区分	小区分	細区分
海域			砂浜・礫浜
			海崖・岩浜・岩礁(磯)
			汽水域
			塩沼地・塩性湿地・河口干潟 (マングローブ湿地を含む)
			潟・汽水湖
			陸封潮溜まり (アンキアライン池・洞窟)
			その他(自由記入)
	沿岸※ ²	潮間帯	海面
			漂泳界(水柱環境)
		表層 (低潮線から水深 200m まで)	岩礁(磯)
			藻場
			アマモ場
			サンゴ礁
		中深層以深 (水深 200m 以深)	干潟
			砂底・礫底
			泥底
		その他 (自由記入)	洞窟
			その他(自由記入)
	外洋※ ³	表層 (水深 200m まで)	海面
			漂泳界(水柱環境)
		中深層以深 (水深 200m 以深)	岩底
			砂底・礫底
			泥底
			洞窟
		その他 (自由記入)	熱水噴出孔
			冷水湧出帯
			その他(自由記入)

※ 1 : 高度帯の区分は、高地植物学(柴田, 1985)における区分に基づく。

※ 2 : ここでは海岸線から接続水域まで(0km～約 44km(24 海里))

※ 3 : ここでは接続水域から排他的経済水域(EEZ)まで(約 45km～約 370km(200 海里))

別表2 「国土の特性に応じたグランドデザイン」における7つの地域区分（生物多様性国家戦略2012
－2020より抜粋）

①奥山自然地域	……………	相対的に自然性の高い地域
②里地里山・田園地域（人工林が優占する地域を含む）	……………	①と③の間に位置する地域
③都市地域	……………	人間活動が集中する地域
④河川・湿地地域	……………	各地域を結びつける生態系ネットワークの基軸となる水系
⑤沿岸域	……………	海岸線を挟む陸域及び海域
⑥海洋域	……………	沿岸域を取り巻く広大な海域
⑦島嶼地域	……………	沿岸域・海洋域にある島々

別表3 存続を脅かす要因のタイプ区分

新No 第5次RL		要因の適用範囲に係る説明
A 開 発	A01 森林伐採	自然林や二次林を含む伐採による森林の減少や消失に起因する場合に適用する。 樹洞の減少等の森林面積の減少を伴わないような要因を広義に含む。
	A02 湖沼開発	湖沼、ため池等の開発行為に起因する場合に適用する。 水域の消失だけでなく護岸整備や取水施設の設置等の開発行為に係る要因を広義に含む。
	A03 河川開発	全ての河川種別（一級、二級、準用、普通）における開発行為に起因する場合に適用する。 護岸整備、河床の掘削や整備、河道の付け替え等を含む。ダムをはじめとした河川工作物の建設に起因する場合は「ダム・河川工作物建設」の区分に含める。
	A04 海岸開発	海岸や砂浜域の開発行為に起因する場合に適用する。 海岸の埋め立てや護岸整備、港湾整備等に関する要因も広義に含む。
	A05 海砂採取	沿岸域における砂礫の採取に起因する場合に適用する。 周辺での海砂採取に伴う砂浜域の後退等の直接的に確認される要因を広義に含む。
	A06 湿地開発	湿地の開発行為に起因する場合に適用する。 湿地の埋め立てや周辺の湿地を維持するための水源の開発等も広義に含む。
	A07 圃場整備	水田、畑地等の農地整備に起因する場合に適用する。 圃場整備に伴う田面の乾田化や水路、畦の消失及びコンクリート化等の整備による要因を含む。
	A08 草地開発	草地として維持されている環境の開発に起因する場合に適用する。 開発行為に係るものを広義に含む。
	A09 石灰採掘	石灰の採掘に起因する場合に適用する。 石灰採掘に関わる人為的な影響に関するものを広義に含む。
	A10 洞窟の消失や環境悪化	人為的影響による洞窟の消失、もしくは環境悪化に起因する場合に適用する。 開発行為をはじめレジャー等による環境悪化も含む。
B 建 設	B01 ゴルフ場	ゴルフ場の開発に起因する場合に適用する。
	B02 スキー場	スキー場の開発に起因する場合に適用する。
	B03 土地造成	場所を問わず特に土地造成の影響に起因する場合に適用する。 宅地化、リゾート開発等の土地の造成に伴うものを広義に含む。
	B04 交通インフラ建設	道路工事や鉄道工事等の交通インフラの建設の影響に起因するものを広義に含んで適用する。 側溝への転落や生息場所の分断化、交通インフラ建設に起因する弊害も含む。自動車や鉄道等による交通事故は含まない。
	B05 ダム・河川工作物建設	ダム建設をはじめ、砂防ダム、堰堤、樋門、頭取工等の河川工作物による影響に起因する場合に適用する。
	B06 発電施設建設	太陽光や風力等の発電施設の建設の影響に起因するものを広義に含んで適用する。 発電施設のみではなく、それらに係る送電設備建設等の影響に起因するものも広義に含む。
C 環 境 汚 染	C01 水質汚濁	河川、水路、ため池等の水域における水質汚濁に起因する場合に適用する。 状況や物質を問わず汚濁が原因と特定可能な全ての要因を含む。
	C02 水温変化	河川、水路、ため池等の水域における水温変化に起因する場合に適用する。 水温変化が原因と特定可能な場合のみ使用する。
	C03 農業汚染/化学物質汚染	農地（水田、畑、果樹園等）及びその周辺域（水路、畦等）における農業汚染に起因する場合に適用する。 水質汚濁の場合でも特に農業汚染と特定できる場合はこちらを選択する。
	C04 感染症/病原菌	病原体に起因するもの。感染症に関わるものを広義に含む。
	C05 大気汚染	大気汚染に起因するもの。大気汚染が原因であると特定できる場合のみ適用する。

新No 第5次RL			要因の適用範囲に係る説明
D 捕獲・採取	D01	捕獲・狩猟/園芸採取	人による捕獲・採取行為に起因する場合に適用する。 狩猟、ペット業者による商業的採集、園芸採取、研究者による採集等に関係する要因を広義に含む。
	D02	食用・薬用採取	食用や薬用採取に起因する場合に適用する。 食用や薬用を目的の採取に関わる要因を広義に含む。
	D03	違法採集	人による捕獲・採取行為に起因する場合のうち、違法性が疑われる場合に適用する。 D01、D02を選択した場合で、違法なものを含む場合は、本項目もチェックする。
	D04	混獲・錯誤捕獲	他種の捕獲・採取に付随した非意図的な捕獲・採取に起因する場合に適用する。 その他、混獲・錯誤捕獲に関係する要因を広義に含む。
E 生物間相互作用	E01a	シカ食害	シカによる食害に起因する場合に適用する。 食害に起因して生じた間接的な影響についても広義に含む。
	E01b	その他動物食害	シカ以外の動物による食害に起因する場合に適用する。 食害に起因して生じた間接的な影響についても広義に含む。
	E02a	捕食(外来種による)	外来種による捕食に起因するものに適用する。 国内外来種を含めた、人為的な移動に起因して侵入した生物による捕食の影響に関するもの。
	E02b	捕食(在来種による)	在来種による捕食に起因するものに適用する。 環境の変化等に伴う生態系のバランスの変化等で、自然分布域において在来種による捕食の影響が増大した場合等が該当する。
	E03a	競争/競合(外来種による)	外来種との競争に起因するものに適用する。国内外来種を含めた、人為的な移動に起因して侵入した生物との競争による影響が該当する。
	E03b	競争/競合(在来種による)	在来種による競争に起因するものに適用する。環境の変化等に伴う生態系のバランスの変化等で、在来種との競争の影響が増大した場合等が該当する。
	E04a	交雑(外来種による)	外来種との交雑に起因するものに適用する。国内外来種を含めた、人為的な移動に起因して侵入した生物との交雑による影響に関するもの。
	E04b	交雑(在来種による)	在来種との交雑に起因するものに適用する。環境の変化等に伴う生態系のバランスの変化等で、在来種との交雑が生じるようになった場合等が該当する。
	E05	宿主の減少	寄生・共生性の生物において、宿主である生物の減少に起因している場合に適用する。 なお、宿主の存続を脅かす要因がわかる場合には、併せて宿主の要因も選択する。
F その他の人為的要因	F01	人の踏みつけ	人による踏みつけ行為に起因するものに適用する。 場所や意図等は問わず、踏みつけに起因するものを広義に含む。
	F02	交通事故	自動車、鉄道等の犠牲による直接的な事故のみに適用する。道路工事やトンネル建設等による間接的な影響は、「交通インフラ建設」に含める。
	F03	人工構造物への衝突	風力発電施設の風車ブレード等への生物の衝突に起因する場合に適用する。 その他、送電線、鉄塔等の人工構造物への衝突に係るものを広義に含む。
	F04	光害	水銀灯等の照明器具の設置方法や配光によって、生物の行動パターン等に変化を与えていることに起因する場合に適用する。光害に関係する間接的な要因も広義に含む。
	F05	管理放棄	人為的な管理により維持されていた二次的自然の管理放棄に起因するもの。草地の遷移、ため池の湿地化、水田の放棄等に起因するものを広義に含む。
G 環境変化	G01	遷移進行・植生変化/自然遷移	河原、草地、森林、湿地等の場所は問わず、遷移進行、植生変化、自然遷移に起因する場合に適用する。
	G02	基質・基物の減少及び消失	対象生物の生息・生育に必要な基質・基物となる生物・無機物の減少や消失に起因する場合に適用する。 なお、基質・基物が生物であり、その生物種の存続を脅かす要因が分かる場合には、併せてその要因を選択する。
	G03	自然災害	集中豪雨による土砂崩れや洪水、地震、津波、火山噴火等のあらゆる自然災害に起因する場合に適用する。
	G04	気候変動	気温や水温の上昇、頻繁な異常気象等の気候変動が原因の可能性が高いと判断される自然現象に起因する場合に適用する。適用に際しては、存続を脅かす要因となる現象の長期的な動向を考慮した上で気候変動の影響か否かを判断する。
Z その他/不明	Z01	分布・産地局限	地史的に生息・生育地が局限しており、環境変化や自然災害等で容易に絶滅する危険を有する場合に適用する。
	Z02	近交弱勢	生息・生息地の局限や個体数の急減等による、近親交配、遺伝的多様性の低下に起因する場合に適用する。
	Z03	その他(自由記入)	上記のいずれにも当てはまらない場合に適用する項目。基本的には上記のいずれかの項目を広義に解釈して当てはめることが望ましい。選択する場合には、具体的な要因の名称を自由記入欄に記述する。なお、第5次レッドリストにおいて全分類群の結果を集計した際に、同じ名称の要因が複数確認された場合には、今後の追加を検討する予定である。
	Z04	不明	存続を脅かす要因が明確ではない場合に適用する。 原因が明確ではないもの、不明なものはこの項目を選択する。

第5次レッドデータブック（蘚苔類）各種の解説

ダンゴゼニゴケ

Mannia androgyna (L.) A.Evans

カテゴリー判定結果 絶滅 (EX)

②③

基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種

具体的には、以下の事項を満たす。

②信頼できる複数の調査によっても、生育が確認できなかった。

③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。

【判断理由】

本種は 1957 年に埼玉県秩父山地において採集されていたが、ウルシゼニゴケであると誤同定されていた。その後、度重なる調査において、採集された標本や生育が確認されていないため、絶滅したと判断した。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ダンゴゼニゴケは秩父山地から 1957 年に採集された葉状苔類。長い間、ウルシゼニゴケであると誤同定されていた。ウルシゼニゴケは、埼玉県秩父湖周辺に生育し、1953 年に *Mannia levigata* として新種記載されたが、2006 年に *Mannia californica* の同種異名にされた。しかし、1957 年に採集された標本はウルシゼニゴケではなく、ダンゴゼニゴケであることが 2014 年に指摘された。本種は胞子の求心面が大きく半球状に盛り上がり、遠心面が大きくて明瞭な数個の囊状突起で覆われる特徴によって識別される。本種は 1957 年以降、今日まで生育が確認されていないため、絶滅した可能性が高い。

基礎情報

【形態】

植物体は複雑葉状、緑色から深緑色で光沢り、縁が暗紫色、長さ 1～2 cm、幅 2～4 mm、気室は 3～4 層、気室孔はアーチ状。腹鱗片は 2 列、附属物は長楕円形。雄器床は盤状。雌器托は腹側枝となり、傘状、頭が半球状、包膜は筒状。無性芽はない。胞子の求心面は大きく半球状に盛り上がり、遠心面は大きくて明瞭な数個の囊状突起で覆われる。

【生活史】

雌雄同株。胞子は夏に成熟する。

【生育環境】

落葉広葉樹の自然林において、やや乾燥した向陽傾斜面の岩隙に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では埼玉県から報告されている。国外では南ヨーロッパ、北アフリカ、アラビア半島、ヒマラヤ、ロシア、サハリンなどに分布する。

絶滅に至った経緯とその要因

現在はスギの植林で覆われており暗いため、森林の変化が影響している可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 土地造成, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

長年、ウルシゼニゴケ *Mannia californica* (= *Mannia levigata*) と混同されていたが、1957 年に採集されていた標本はダンゴゼニゴケ *Mannia androgyna* (L.) A.Evans であると指摘された (Borovichev, et al. 2014)。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	—	—	—
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—
第4次 2017:	—	—	—

第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—
都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）			
掲載なし			
保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）			
指定なし			

参考文献
● Borovichev, E. A., V. A. Bakalin and M. Higuchi, 2014. On <i>Mannia androgyna</i> (Aytoniaceae, Marchantiophyta) in East Asia. Polish Bot. J., 59: 221-228. ● Inoue, H., 1963. Hepaticae and Anthocerotae of the Chichibu Mountains, central Japan. J. Hattori Bot. Lab., 25: 186-216. ● Schill, D. B., 2006. Taxonomy and phylogeny of the liverwort genus <i>Mannia</i> (Aytoniaceae, Marchantiales), 348 pp., Edinburgh: University of Edinburgh and Royal Botanic Garden Edinburgh. ● Shimizu, D. and S. Hattori, 1953. Marchantiales of Japan (2). J. Hattori Bot. Lab., 10: 49-55.

アセスメントサマリー（Assessment summary）	
<i>Mannia androgyna</i> has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. <i>Mannia androgyna</i> is listed as EX under criteria ②③. The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met. ②Multiple reliable surveys could not confirm the existence of this species. ③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Limited distribution

Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ウルシゼニゴケ

Mannia californica (Underw.) L.C.Wheeler

カテゴリー判定結果 絶滅 (EX)

③

基準 A: —

基準 B: —

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種

具体的には、以下の事項を満たす。

③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。

【判断理由】

最後に報告されたのが 1963 年である。その後の複数回の調査では生育が確認されていない。最後に生育が確認されていた頃と現在とでは環境が変わっており、本種は絶滅した可能性が高い。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

1953 年に秩父湖畔の崖地から新種 *Mannia levigata* として記載され、長年日本固有種とされてきたが、2006 年に本種の同種異名にされた葉状苔類。葉状体に光沢があることが特徴であり、和名になっている。孢子と弾糸の表面に微小突起があり、孢子の遠心面は不規則に脈状に盛り上がる。生育地は向陽地の崖とされていたが、現在はスギの植林で覆われている。度重なる調査にもかかわらず 50 年以上にわたり生育が確認されていない。

基礎情報

【形態】

植物体は複雑葉状、緑色から深緑色で光沢があり、縁が暗紫色、長さ 1～2 cm、幅 2～4 mm、気室は 3～4 層、気室孔はアーチ状。腹鱗片は 2 列、附属物は長楕円形。雄器床は盤状。雌器托は腹側枝となり、傘状、頭が半球状、包膜は筒状。無性芽はない。孢子と弾糸の表面に微小突起があることが大きな特徴である。遠心面は不規則に脈状に盛り上がる。肉眼的には、葉状体の表面が滑らかで光沢があることにより他種から区別され、和名の由来にもなっている。

【生活史】

雌雄同株。孢子は夏に成熟する。

【生育環境】

落葉広葉樹の自然林において、やや乾燥した向陽傾斜面の岩隙に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では秩父山地（埼玉県）に分布し、国外では北米、アフリカ、インド、中国などに不連続に分布する。

絶滅に至った経緯とその要因

産地が局限し、現在はスギの植林で覆われており暗いため、森林の変化が影響している可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 土地造成, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

ウルシゼニゴケは 1953 年に *Mannia levigata* Shimizu & S.Hatt.として新種記載されたが、2006 年に本種の同種異名にされた。また、これまで *Mannia californica* とされていた日本産の標本の一部はダンゴゼニゴケ *Mannia androgyna* (L.) A.Evans であると指摘されており (Borovichev, et al. 2014)、両種とも絶滅した可能性が高い。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ウルシゼニゴケ	<i>Mannia californica</i> (Underw.) L.C.Wheeler	CR+EN
第4次 2019:	ウルシゼニゴケ	<i>Mannia californica</i> (Underw.) L.C.Wheeler	CR+EN

第4次 2018:	ウルシゼニゴケ	<i>Mannia californica</i> (Underw.) L.C.Wheeler	CR+EN
第4次 2017:	ウルシゼニゴケ	<i>Mannia californica</i> (Underw.) L.C.Wheeler	CR+EN
第4次 2015:	ウルシゼニゴケ	<i>Mannia californica</i> (Underw.) L.C.Wheeler [= <i>Mannia levigata</i> Shimizu & S.Hatt.]	CR+EN
第4次:	ウルシゼニゴケ	<i>Mannia californica</i> (Underw.) L.C.Wheeler [= <i>Mannia levigata</i> Shimizu & S.Hatt.]	CR+EN
第3次:	ウルシゼニゴケ	<i>Mannia levigata</i> Shimizu & S.Hatt.	CR+EN
第2次:	ウルシゼニゴケ	<i>Mannia levigata</i> Shim. et Hatt.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧 I 類(CE)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Borovichev, E. A., V. A. Bakalin and M. Higuchi, 2014. On *Mannia androgyna* (Aytoniaceae, Marchantiophyta) in East Asia. Polish Bot. J., 59: 221-228.
- Inoue, H., 1963. Hepaticae and Anthocerotae of the Chichibu Mountains, central Japan. J. Hattori Bot. Lab, 25: 186-216.
- Schill, D. B., 2006. Taxonomy and phylogeny of the liverwort genus *Mannia* (Aytoniaceae, Marchantiales), 348 pp., Edinburgh: University of Edinburgh and Royal Botanic Garden Edinburgh.
- Shimizu, D. and S. Hattori, 1953. Marchantiales of Japan (2). J. Hattori Bot. Lab., 10: 49-55.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Mannia californica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Mannia californica* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g.

	limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ヤクシマスギバゴケ

Lepicolea yakusimensis (S.Hatt.) S.Hatt.

カテゴリー判定結果 絶滅 (EX)

③

基準 A: —

基準 B: —

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種

具体的には、以下の事項を満たす。

③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。

【判断理由】

屋久島で数か所産地が知られていたが、森林伐採などの影響で、消失した産地がある。また、他地域と比べ屋久島では蘚苔類研究者による調査が比較的多数行われているが、1973 年以降、本種は確認されていない。本種は苔類としては大型で、野外でも目立つため、本種を他の種と間違える可能性は低い。したがって、過去 50 年前後の間に、信頼できる野外での生育の情報が得られていないため、EX と判断した。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

南半球要素のひとつで北半球では珍しい属の茎葉状苔類。また、熱帯の雲霧林の林床に生育し、屋久島を北限とする雲霧林要素の種である。しかし、森林伐採などの影響で消失した産地があり、1973 年以降確認されていないため、絶滅したと判断した。

基礎情報

【形態】

植物体は斜上し、黄緑色で茎葉、長さ 5 cm に達し、幅は葉を含めて 1.2~1.5 mm。茎は羽状に分岐し、枝の先端は時に鞭状になる。葉は倒瓦状に重なり、約 1/2 まで不等に 3~4 裂し、裂片は披針形で長く尖り、背縁に数個の長毛がある。腹葉は葉に似るがやや小さい。無性芽はない。本属としては日本に生育する唯一の種である。

【生活史】

国内では造精器や造卵器、胞子体は見つかっていない。近年は生育が確認されていないため、詳細は不明である。

【生育環境】

霧のかかりやすい針広混交樹と常緑広葉樹の雲霧林において、林床に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では九州（屋久島）にのみ分布し、国外では中国、スリランカ、タイ、マレーシアなどに分布する。

絶滅に至った経緯とその要因

屋久島に数か所知られていたが、森林伐採による影響で消失した生育地もあり、1973 年以降確認されていない。その他の生育地においても減少した要因は不明であるが、生育が確認できなくなった。

要因の区分：	(過去)	不明, 森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	不明, 森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

生育地は国立公園内である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヤクシマスギバゴケ	<i>Lepicolea yakusimensis</i> (S.Hatt.) S.Hatt.	CR+EN
第4次 2019:	ヤクシマスギバゴケ	<i>Lepicolea yakusimensis</i> (S.Hatt.) S.Hatt.	CR+EN
第4次 2018:	ヤクシマスギバゴケ	<i>Lepicolea yakusimensis</i> (S.Hatt.) S.Hatt.	CR+EN
第4次 2017:	ヤクシマスギバゴケ	<i>Lepicolea yakusimensis</i> (S.Hatt.) S.Hatt.	CR+EN
第4次 2015:	ヤクシマスギバゴケ	<i>Lepicolea yakusimensis</i> (S.Hatt.) S.Hatt.	CR+EN

第4次:	ヤクシマスギバゴケ	<i>Lepicolea yakusimensis</i> (S.Hatt.) S.Hatt.	CR+EN
第3次:	ヤクシマスギバゴケ	<i>Lepicolea yakusimensis</i> (S.Hatt.) S.Hatt.	CR+EN
第2次:	ヤクシマスギバゴケ	<i>Lepicolea yakusimensis</i> (Hatt.) Hatt.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 服部新佐, 1947. 屋久島苔類誌（其二）. J. Hattori Bot. Lab., 2: 1-26.
- 服部新佐, 1967. 日本苔類標本第15集. 服部植物研究所, 日南市
- 岩月善之助・水谷正美, 1972. 原色日本蘚苔類図鑑. 405 pp., 48 pls. 保育社, 大阪.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp., 192 pls. 平凡社, 東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lepicolea yakusimensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lepicolea yakusimensis* is listed as EX under criteria ③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025年3月

シワナシチビイタチゴケ

Pterogoniadelphus esquirolii (Thér.) Ochyra & Zijlstra

カテゴリー判定結果 絶滅 (EX)

②③

基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

過去に我が国に生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、我が国ではすでに絶滅したと考えられる種

具体的には、以下の事項を満たす。

②信頼できる複数の調査によっても、生育が確認できなかった。

③過去 50 年間前後の間に、信頼できる生育の情報が得られていない。

【判断理由】

本種は国内では秋山（1984）が 1955 年に福岡県香春岳で採集された標本を元に報告した以外の記録はない。その標本は、標高 400 m の石灰岩上に生育していたとされている。しかし、以後の調査では発見できず、Suzuki & Iwatsuki（2012）も、2010 年 5 月に本種の再発見を試みたが見いだせず、本種の生育地は石灰岩採掘のために既に破壊されている、と言及している。当地は、石灰岩採掘のために山の形がすっかり変わっている。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

シワナシチビイタチゴケは、日本および中国から知られている。日本では、1955 年に福岡県香春岳の石灰岩地の岩上や樹幹で採集された標本を元にした報告（秋山, 1984）以外の記録はない。当地は、石灰岩採掘のために山の形がすっかり変わっており、生育地は既に破壊されている。周辺での度重なる再調査でも発見できていない。そのため、我が国では既に絶滅したと考えられる。

基礎情報

【形態】

植物体は明るい褐色で光沢のある黄緑色を帯びた密なマットを作る。茎は尾状になり、長さ 2～3 cm。4～5 細胞の腋毛、披針形の偽毛葉を持つ。茎葉は広卵形、長さ 1.8～2 mm、しわ寄らず、強くくぼむ。葉身細胞は上部で長い菱形、中部で厚膜の短い矩形～波形となる。無性芽（鞭枝）をつける。蒴柄は長さ 10～11 mm、蒴は長さ 2.5～5 mm で、赤褐色を帯びる。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

石灰岩地の樹幹や石灰岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では九州（福岡県香春岳）に、国外では中国南部に分布する。

絶滅に至った経緯とその要因

石灰採掘によって生育地が消失した。また、産地が局限していたため絶滅する可能性が高かった。

要因の区分：	（過去）	石灰採掘、分布・産地局限
	（現在）	石灰採掘、分布・産地局限

特記事項

Suzuki & Iwatsuki (2012) は、本種とされていた国内で採集された唯一の標本（Ohuchi 202, NICH）の正体を、中国南部に生育する別属別種 *Pterogonium gracile* var. *tsinlingense* と同定し、さらに独立種として、*Pterogonium tsinlingense* という新名を公表した。さらに Suzuki (2016) はこの属名の合法性から新組み合わせを *Nogopterium tsinlingense* とし、また同時にこの学名にチンリンイボイタチゴケという和名を与えたが、Ochyra & Bednarek-Ochyra (2017) はこの新組み合わせの発表が有効でないとして、あらためてこの新組み合わせを有効とした。しかし、Zhang & He (2011) は両種をそもそも同物異名としており、この見解が広く受け入れられている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	シワナシチビイタチゴケ	<i>Felipponea esquirolii</i> (Thér.) H.Akiyama	CR+EN
第4次 2019:	シワナシチビイタチゴケ	<i>Felipponea esquirolii</i> (Thér.) H.Akiyama	CR+EN
第4次 2018:	シワナシチビイタチゴケ	<i>Felipponea esquirolii</i> (Thér.) H.Akiyama	CR+EN
第4次 2017:	シワナシチビイタチゴケ	<i>Felipponea esquirolii</i> (Thér.) H.Akiyama	CR+EN
第4次 2015:	シワナシチビイタチゴケ	<i>Felipponea esquirolii</i> (Thér.) H.Akiyama	CR+EN
第4次:	シワナシチビイタチゴケ	<i>Felipponea esquirolii</i> (Thér.) H.Akiyama	CR+EN
第3次:	シワナシチビイタチゴケ	<i>Felipponea esquirolii</i> (Thér.) H.Akiyama	CR+EN
第2次:	シワナシチビイタチゴケ	<i>Felipponea esquirolii</i> (Thér.) Akiyama	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 秋山弘之, 1984. *Leucodon esquirolii* Thér. シワナシチビイタチゴケ（新称）日本に産す. Acta Phytotax. Geobot., 34: 29.
- Ochyra, R. and H. Bednarek-Ochyra, 2017. Nomenclatural notes on *Pterogonium* (Bryophyta, Leucodontaceae). Polish Botanical Journal, 62: 187-190.
- Suzuki, T. and Z. Iwatsuki, 2012. Notes on Leucodontaceae (I) Gen. *Pterogonium* Sw. newly found in Japan. Hattoria, 3: 57-66.
- Suzuki, T., 2016. A revised new catalog of the mosses of Japan. Hattoria, 7: 9-223.
- Zhang M. and S. He, 2011. Leucodontaceae. Moss Flora of China, English version., 5: 153-181, Science Press & Missouri Botanical Garden Press, Beijing & St. Louis.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Pterogoniadelphus esquirolii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pterogoniadelphus esquirolii* is listed as EX under criteria ②③.

The species that was confirmed to have inhabited Japan in the past and is now considered extinct, including individuals in captivity and cultivation. Specifically, the following criteria is anticipated to be met.

②Multiple reliable surveys could not confirm the existence of this species.

③No reliable information on the existence of this species has been obtained for approximately the past 50 years

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limestone mining, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ミドリツノゴケ

Folioceros glandulosus (Lehm. & Lindenb.) D.C.Bharadwaj

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地は道路際の崖土上なので、生育地の人為的な攪乱により産地が消失する恐れがある。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は葉状体の縁や背面に球状の無性芽を密につけること、胞子の求心極面に大なり小なり明瞭な Y 字マークがあることによって、他のツノゴケ類の種から容易に区別することができる。日本では奄美諸島の徳之島が唯一の産地である。

基礎情報

【形態】

植物体は葉状性で、鮮緑色、先の丸くなった短冊状で、幅 3.5~5.0 mm、長さ約 2 cm。葉状体は縁や背面に球状~楕円体状の無性芽を密につけ、無性芽は多細胞で一般に長さ 0.4~0.5 mm 程度。蒴は角状でビール樽状の包膜から突出する。成熟した胞子は丸みを帯びた四面体で、直径 30~35 μm 、Y 字マークはあまりよく発達しないが、明瞭である。弾糸は細長く伸張し、細胞壁が著しく肥厚する。葉状体の縁や背面に球状の無性芽を密につけることによって、他のツノゴケ類の種から容易に区別することができる。

【生活史】

雌雄異株。生育地は定期的に自然に崩壊するような不安定な場所なので、そのような環境にうまく適応した生活史を有していると考えられるが、十分な調査はなされていない。

【生育環境】

低地の谷沿いの崖土上や、山地の道路沿いの崖土上に生育している。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

日本では奄美諸島の徳之島が唯一の産地である。国外ではジャワ、スマトラ、フィリピン、サモア、北マリアナ、セラム、ニューカレドニアなど、東南アジア、南太平洋地域に広く分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

徳之島にしか知られていないが、大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

生育地は道路際の崖や、人家の近くの崖のような人為的作用が働いているような場所である。

【個体数の現況】

生育数は少ない。

存続を脅かす要因

日本では、徳之島だけにしか分布しておらず、生育地の数も多くないので、この島の産地が消滅することによって絶滅する可能性がある。生育地は道路際の崖や、人家の近くの崖のような人為的作用が働いているような場所なので、管理方法が変わることによ

って環境条件が生育に適さなくなることが危惧される。

要因の区分：	(過去)	土地造成, 分布・産地局限
	(現在)	土地造成, 分布・産地局限

特記事項

ミドリツノゴケの生育地は定期的に崩壊するような場所にあり、世代更新のための生存戦略を明らかにすることは、この種の保全を考えるために重要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ミドリツノゴケ	<i>Folioceros appendiculatus</i> (Steph.) J.Haseg.	VU
第4次 2019:	ミドリツノゴケ	<i>Folioceros appendiculatus</i> (Steph.) J.Haseg.	VU
第4次 2018:	ミドリツノゴケ	<i>Folioceros appendiculatus</i> (Steph.) J.Haseg.	VU
第4次 2017:	ミドリツノゴケ	<i>Folioceros appendiculatus</i> (Steph.) J.Haseg.	VU
第4次 2015:	ミドリツノゴケ	<i>Folioceros appendiculatus</i> (Steph.) J.Haseg.	VU
第4次:	ミドリツノゴケ	<i>Folioceros appendiculatus</i> (Steph.) J.Haseg.	VU
第3次:	ミドリツノゴケ	<i>Folioceros appendiculatus</i> (Steph.) Haseg.	VU
第2次:	ミドリツノゴケ	<i>Folioceros appendiculatus</i> (Steph.) Haseg.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hasegawa, J., 1986. The Anthocerotae collected by Drs. Z. Iwatsuki and N. Kitagawa in New Caledonia and Fiji. J. Hattori Bot. Lab., 60: 379-390.
- 長谷川二郎, 1991. 日本新産の *Folioceros appendiculatus* (ミドリツノゴケ, 新称). 日本蘚苔類学会会報, 5: 137-140.
- Söderström, L., S. R. Gradstein and A. Hagborg, 2010. Checklist of hornworts and liverworts of Java. Phytotaxa, 9: 53-149.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Folioceros glandulosus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Folioceros glandulosus* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area _ Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Land development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 片桐知之 (高知大学)
Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月: 2025 年 3 月

ゼニゴケ目 Marchantiales ヒカリゼニゴケ科 Cyathodiaceae

ヒカリゼニゴケ

Cyathodium cavernarum Kunze ex Lehm.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 場所は神社の境内であり、踏みつけなどによる人為的な攪乱により絶滅する危険性が高いと判断される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

葉状体が光を反射して輝くことからヒカリゼニゴケと呼ばれる。世界の熱帯に広く分布しているが、国内では熊本県の石灰洞窟のみに生育し、分布の北限になっている。1959 年に報告されたが、生育地が崩落したことから絶滅したと考えられていた。2011 年に同じ洞窟内で再確認されたが、人為的な攪乱により、絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

植物体は葉状性で白緑色であるが、光の反射によって黄金色に輝く。葉状体は長さ 1 cm、幅 1～2 mm と小型で、造卵器は葉状体先端の腹面につき、傘状の雌器托は発達せず、孢子体は 1 対の包膜に包まれて成熟する。雄器床は葉状体の先端か脇につき、柄はなく団子状。無性芽はない。本属は熱帯を分布の中心とし、本種は葉状体の構造や孢子の表面模様によって、他種と区別できる。

【生活史】

雌雄同株。熱帯では多年生であるが、日本では寒さのために植物体は枯れ、初冬に成熟する孢子で越冬するため一年生的である。

【生育環境】

低地にある石灰岩の洞窟において湿った岩上や土上に生育している。

生育環境区分：	【陸域_平地部】洞窟・地下浅層
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

国内では九州（熊本県）に分布し、国外では世界の熱帯～亜熱帯に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

熊本県の 1 か所の石灰洞窟において生育が確認されていたが、洞窟の崩壊により絶滅したと考えられていた。2011 年に同じ洞窟内において、約 50 年ぶりに再発見された。

【生育地の現況】

生育範囲は非常に狭い。場所は神社の境内であり、踏みつけなどによる人為的な攪乱により絶滅する危険性が高いと判断される。

【個体数の現況】

生育数は少ない。

存続を脅かす要因

産地が 1 か所と局限しており、一部は崩壊により消失した。近年、再発見された生育地は踏みつけなどによる人為的な影響を受け易い。

要因の区分：	(過去)	洞窟の消失や環境悪化, 分布・産地局限
	(現在)	洞窟の消失や環境悪化, 分布・産地局限

特記事項

生育地は県指定天然記念物に指定されている神社の境内である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヒカリゼニゴケ	<i>Cyathodium cavernarum</i> Kunze	CR+EN
第4次 2019:	ヒカリゼニゴケ	<i>Cyathodium cavernarum</i> Kunze	CR+EN
第4次 2018:	ヒカリゼニゴケ	<i>Cyathodium cavernarum</i> Kunze	CR+EN
第4次 2017:	ヒカリゼニゴケ	<i>Cyathodium cavernarum</i> Kunze	CR+EN
第4次 2015:	ヒカリゼニゴケ	<i>Cyathodium cavernarum</i> Kunze	CR+EN
第4次:	ヒカリゼニゴケ	<i>Cyathodium cavernarum</i> Kunze	CR+EN
第3次:	ヒカリゼニゴケ	<i>Cyathodium cavernarum</i> Kunze	EX
		<i>Cyathodium cavernarum</i> Kunze Syn. <i>C.</i>	
第2次:	ヒカリゼニゴケ	<i>africanum</i> Mitt.; <i>C. smaragdinum</i> auct. non Schiffn.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

熊本県[絶滅危惧ⅠA類(CR)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 古木達郎・城戸美智子・白河潤一・星 良和, 2012. ヒカリゼニゴケが九州で再発見される. 蘚苔類研究, 10: 255-256.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 352 pp., 192 pls. 平凡社, 東京.
- 水谷正美, 1959. 人吉にてヒカリゼニゴケ発見. 蘚苔地衣雑報, 1: 2-3.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Cyathodium cavernarum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cyathodium cavernarum* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-

c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Cave/Shallow underground
Threat types:	Loss of caves and environmental deterioration, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



執筆者: 片桐知之（高知大学）
Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

ヤツガタケウロコゼニゴケ

Fossombronia pusilla (L.) Nees

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 2015 年の現地調査では生育が確認されなかった。以前の生育環境は水が滴る程湿っていたが、2015 年の現地調査の際は乾燥していた。乾燥化が進んでいるようだ。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は八ヶ岳の山頂付近の露岩地において、非常に狭い範囲の湿った崖に生育したが、最近の調査では生育が確認されなかった。本属の種としては、国内で唯一の高山性の種である。近年、夏場に生育地の乾燥化が著しいため、生育数が減少しており、絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、淡緑色、匍匐し、長さ約 1 cm、幅 1.5～3.0 mm。茎は二叉状に分枝し、先端付近裏面に 1～3 細胞長の腹鱗片がある。葉は半円形。腹葉はない。花被は杯形。無性芽はない。胞子の遠心面に放射状に広がる山脈状の薄板があることで他種から区別される。

【生活史】

雌雄異株。胞子は夏に成熟する。

【生育環境】

高山帯の露岩地において、湿った崖上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では長野県のみ分布し、国外ではヨーロッパ、北アフリカ、ヒマラヤ、中国、ニューギニア、ハワイなどの高地に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

国内唯一の産地である長野県八ヶ岳では近年生育が確認できない。

【生育地の現況】

以前は水が滴っていたが、今回の調査時には乾燥しており、生育地の環境の変化が認められた。

【個体数の現況】

近年、確認されていない。

存続を脅かす要因

産地が 1 か所と局限し、近年、夏季の乾燥により減少しているため、絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限, 気候変動
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

八ヶ岳にのみ知られ、和名の由来になっている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヤツガタケウロコゼニゴケ	<i>Fossombronia pusilla</i> (L.) Dumort.	CR+EN
第4次 2019:	ヤツガタケウロコゼニゴケ	<i>Fossombronia pusilla</i> (L.) Dumort.	CR+EN
第4次 2018:	ヤツガタケウロコゼニゴケ	<i>Fossombronia pusilla</i> (L.) Dumort.	CR+EN
第4次 2017:	ヤツガタケウロコゼニゴケ	<i>Fossombronia pusilla</i> (L.) Dumort.	CR+EN
第4次 2015:	ヤツガタケウロコゼニゴケ	<i>Fossombronia pusilla</i> (L.) Dumort. [= <i>F. wondraczekii</i> var. <i>loitlesbergeri</i> auct., non (Schiffn.) Müll.Frib.]	CR+EN
第4次:	ヤツガタケウロコゼニゴケ	<i>Fossombronia pusilla</i> (L.) Dumort. [= <i>F. wondraczekii</i> var. <i>loitlesbergeri</i> auct., non (Schiffn.) Müll.Frib.]	CR+EN
第3次:	ヤツガタケウロコゼニゴケ	<i>Fossombronia pusilla</i> (L.) Dumort. (= <i>F. wondraczekii</i> var. <i>loitlesbergeri</i> auct. non (Schiffn.) Müll.Frib.)	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kravesky, D. M., B. Crandall-Stotler and R. E. Stotler, 2005. A revision of the genus *Fossombronia* Raddi in east Asia and Oceania. J. Hattori Bot. Lab., 98: 1-45.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Fossombronia pusilla has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Fossombronia pusilla* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location. b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ケミドリゼニゴケ

Aneura hirsuta Furuki

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地は河川流域の草地であり、環境の変化は認められないが、過去 10 数年間に行われた調査では生育が確認されていない。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種はミドリゼニゴケ属の中では葉状体の背面に毛を生じる特異な苔類。西表島に固有で限られた地域にのみ生育する。生育地の環境に変化は認められないが、最近の詳細な調査により生育が確認できないため、絶滅が危惧される。

協力者： 山口富美夫（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は鮮緑色で単純葉状性。葉状体は同化組織が分化せず、長さ 1～1.5 cm、幅 2～5 mm、背面に毛を生じる。造卵器は短い側枝に裸出する。造精器は短い側枝の背面の穴につく。受精すると多肉質のカリプトラが生じ、若い孢子体を保護する。無性芽はない。葉状体の背面に毛を生じることで同属の他種と容易に区別できる。

【生活史】

雌雄異株。孢子は、春に成熟する。

【生育環境】

常緑広葉樹の溪谷の湿地に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 湿地・湿原・細流

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

琉球列島に固有に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

生育地は西表島の 1 か所に限られていたが、過去 10 数年間に行われた調査では生育が確認されていない。

【生育地の現況】

生育地は森林内の溪谷の湿地であり、環境の変化は認められない。

【個体数の現況】

確認されている個体はない

存続を脅かす要因

産地が 1 か所と局限し、生育数が少ない。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

1991 年に西表島産の標本を基に新種として記載された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ケミドリゼニゴケ	<i>Aneura hirsuta</i> Furuki	VU
第4次 2019:	ケミドリゼニゴケ	<i>Aneura hirsuta</i> Furuki	VU
第4次 2018:	ケミドリゼニゴケ	<i>Aneura hirsuta</i> Furuki	VU
第4次 2017:	ケミドリゼニゴケ	<i>Aneura hirsuta</i> Furuki	VU
第4次 2015:	ケミドリゼニゴケ	<i>Aneura hirsuta</i> Furuki	VU
第4次:	ケミドリゼニゴケ	<i>Aneura hirsuta</i> Furuki	VU
第3次:	ケミドリゼニゴケ	<i>Aneura hirsuta</i> Furuki	VU
第2次:	ケミドリゼニゴケ	<i>Aneura hirsuta</i> Furuki	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Furuki, T., 1991. A taxonomical revision of the family Aneuraceae (Hepaticae) of Japan. J. Hattori Bot. Lab., 71: 293-397.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Aneura hirsuta has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Aneura hirsuta* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy
 - area, extent and/or quality of habitat
 - number of locations or subpopulations
 - number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, Wetland/Marsh/Stream
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

イトスジゴケ

Riccardia pumila Furuki

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 唯一の生育地では台風により生育数の著しい減少が認められた。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は単純葉状性タイ類であり、葉状体が 1～2 回羽状に分枝し、枝がしばしば立ち上がる。油体は葉状体の内部細胞にだけに含まれ、茶色、小さい微粒からなる。日本では、宮崎県に分布し、台湾からも報告されている。常緑樹林内の朽木上に生育し、生育数が少なく、生育地では台風により被害を受けている。しかし、近年は十分な調査が行われているとは言えず、更なる調査が望まれる。

基礎情報

【形態】

植物体は単純葉状性で、透明感のある黄緑色～青緑色、2 回ないし 2 回羽状に分枝し、枝が立ち上がる。葉状体は長さ 1.5 cm 以下、幅 0.6～0.9 mm とこの属としては小さく、断面で表皮細胞が内部細胞の 1/5～1/4 と小さく、1 細胞層の翼部は 1～2 細胞幅と狭い。油体は内部細胞にだけ含まれている。

【生活史】

雌雄異株。無性芽が知られている。

【生育環境】

照葉樹林内の湿った朽木上に生育している。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では宮崎県のみ知られている。また、台湾からも報告されている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

宮崎県猪谷の溪谷の林床に生育していたが、約 20 年前から確認できない。

【生育地の現況】

2000 年頃に台風により生育していた林床が流される大きな被害を受け、以後回復していない。

【個体数の現況】

約 20 年前に確認できず、その後は未確認。

存続を脅かす要因

既知の生育地は局所的に分布しており、台風などの何らかの要因による環境の悪化が懸念される。

要因の区分：	(過去)	自然災害, 分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	イトスジゴケ	<i>Riccardia pumila</i> Furuki	DD
第4次 2019:	イトスジゴケ	<i>Riccardia pumila</i> Furuki	DD
第4次 2018:	イトスジゴケ	<i>Riccardia pumila</i> Furuki	DD
第4次 2017:	イトスジゴケ	<i>Riccardia pumila</i> Furuki	DD
第4次 2015:	イトスジゴケ	<i>Riccardia pumila</i> Furuki	DD
第4次:	イトスジゴケ	<i>Riccardia pumila</i> Furuki	DD
第3次:	イトスジゴケ	<i>Riccardia pumila</i> Furuki	DD
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Furuki, T., 1991. A taxonomical revision of the Aneuraceae (Hepaticae) of Japan. J. Hattori Bot. Lab., 70: 293-397.
- Yao, K. -Y., 2007. A taxonomic study of Aneuraceae of Taiwan. Tunghai University, Taichung. 79pp

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Riccardia pumila has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Riccardia pumila* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy
 - area, extent and/or quality of habitat
 - number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Natural disasters, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

オノイチョウゴケ

Anastrophyllum ellipticum Inoue

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 本種の生育環境を考えるとまだ生育している可能性はあるものの、最近 35 年間の調査で生育が確認されていないため、生育量が減少していると判断する。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

日本に固有な葉茎状の苔類。本種は楕円形をした 2 細胞性の無性芽を持つことで同属の他種から区別され、1978 年に新種として記載された。高山帯の倒木上に生育しており、1 か所にしか知られていないが、最近 35 年間の調査でも生育が確認できない。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、暗赤色、斜上し、長さ 1.0～1.5 cm、幅 0.5～0.8 mm。葉は 1/3～1/2 ま
で 2 裂し、裂片が三角形で鋭頭、全縁である。無性芽が 2 細胞性で楕円形である特徴に
より同属の他種から区別される。

【生活史】

造精器や造卵器、胞子体は知られていない。無性芽は豊富である。

【生育環境】

高山性針葉樹の自然林において倒木上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

日本固有で、八ヶ岳（長野県）に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1978 年に報告されたタイプ産地にしか知られていない。

【生育地の現況】

生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

未確認。

存続を脅かす要因

唯一の産地では何らかの要因により生育量が減少し、過去 35 年間の調査では生育が確
認できないため、絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	オノイチョウゴケ	<i>Anastrophyllum ellipticum</i> Inoue	CR+EN
第4次 2019:	オノイチョウゴケ	<i>Anastrophyllum ellipticum</i> Inoue	CR+EN
第4次 2018:	オノイチョウゴケ	<i>Anastrophyllum ellipticum</i> Inoue	CR+EN
第4次 2017:	オノイチョウゴケ	<i>Anastrophyllum ellipticum</i> Inoue	CR+EN
第4次 2015:	オノイチョウゴケ	<i>Anastrophyllum ellipticum</i> Inoue	CR+EN
第4次:	オノイチョウゴケ	<i>Anastrophyllum ellipticum</i> Inoue	CR+EN
第3次:	オノイチョウゴケ	<i>Anastrophyllum ellipticum</i> Inoue	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Inoue, H., 1978. *Anastrophyllum ellipticum* Inoue (sp. nov., Hepaticae) from Japan. Bull. Natl. Sci. Mus. Ser. B. Bot., 4: 13-17.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Anastrophyllum ellipticum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Anastrophyllum ellipticum* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy
 - area, extent and/or quality of habitat
 - number of locations or subpopulations
 - number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)

Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ツボミゴケ目 Jungermanniales アミバゴケ科 Anastrophyllaceae

コダマイチョウゴケ

Crossocalyx hellerianus (Nees ex Lindenb.) Meyl.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 過去に 4 地点から知られていたが、3 地点では 50 年以上確認されていない。その理由として、乾燥化や火山噴火などによって生育地の環境が激変したことが推測される。現在も生育していると考えられるのは 1 地点のみである				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種はアミバゴケ科の茎葉状苔類で、近縁属からは雌苞葉に鋸歯があることで区別され、同属としては日本産唯一の種である。欧米やシベリア、中国などに分布し、国内では本州中部の 4 か所の亜高山帯に知られていたが、3 か所では 50 年以上生育が確認できない。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、褐色、匍匐し、長さ約数 mm、幅 0.5～1 mm。葉は茎の背側に偏向し、1/4～1/3 まで 2 裂して槌状、全縁、裂片は鋭尖。腹葉はない。花被は長紡錘形。無性芽は葉先につけ単細胞性で多角体。雌苞葉の縁が鋸歯状であることを特徴として近縁種から区別される。

【生活史】

雌雄異株。胞子が成熟する季節は夏である。無性芽は豊富である。

【生育環境】

亜高山性針葉樹林以上において倒木上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州中部と紀伊半島の高山に分布し、国外では欧米やロシア中部、シベリアなどに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

大普賢岳（奈良県）に知られているが、秩父山地（長野県）と御嶽山（長野県）、伯母子岳（奈良県）では 50 年以上生育が確認できない。

【生育地の現況】

秩父山地十文字峠では近年、生育地の乾燥化が進んでいる。長野県では近年の噴火の影響が懸念される。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

産地が少なく局限しており、生育量が少ないことから絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

学名は長年、*Anastrophyllum hellerianum* (Lindenb.) R.M.Schust とされていたが、近年

の分子系統学的な研究の結果、かつてのように別属とされていた扱いが再評価された (Yatsentyuk et al., 2004)。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	コダマイチョウゴケ	<i>Crossocalyx hellerianus</i> (Lindenb.) Meyl.	CR+EN
第4次 2019:	コダマイチョウゴケ	<i>Crossocalyx hellerianus</i> (Lindenb.) Meyl.	CR+EN
第4次 2018:	コダマイチョウゴケ	<i>Crossocalyx hellerianus</i> (Lindenb.) Meyl.	CR+EN
第4次 2017:	コダマイチョウゴケ	<i>Crossocalyx hellerianus</i> (Lindenb.) Meyl.	CR+EN
		<i>Crossocalyx hellerianus</i> (Lindenb.) Meyl. [=	
第4次 2015:	コダマイチョウゴケ	<i>Anastrophyllum hellerianum</i> (Lindenb.) R.M.Schust.]	CR+EN
		<i>Crossocalyx hellerianus</i> (Lindenb.) Meyl. [=	
第4次:	コダマイチョウゴケ	<i>Anastrophyllum hellerianum</i> (Lindenb.) R.M.Schust.]	CR+EN
		<i>Anastrophyllum hellerianum</i> (Nees ex Lindenb.) R.M.Schust.	DD
第3次:	コダマイチョウゴケ		
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[情報不足（DD）] 奈良県[絶滅寸前種]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kitagawa, N., 1966. A revision of the family Lophoziaceae of Japan and its adjacent regions, II. J. Hattori Bot. Lab., 29: 101-149.
- Yatsentyuk, S. P., N. A. Konstantinova, M. S. Ignatov, J. Hyvönen and A. V. Troitsky, 2004. On phylogeny of Lophoziaceae and related families (Hepaticae, Jungermanniales) based on trnL-trnF intron-spacer sequences of chloroplast DNA. Monogr. Syst. Bot. Missouri Bot. Gard., 98: 150-167.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Crossocalyx hellerianus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Crossocalyx hellerianus* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
 Author: Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ヒメウキヤバネゴケ

Odontoschisma francisci (Hook.) L.Söderstr. & Vána

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 既知の産地が 2 か所に限られているが、1 か所では生育が確認できず、1 か所では永久凍土が溶けつつあり環境が継続的に悪化している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は北半球の北極圏に分布する小型の茎葉状苔類。北海道において、噴気孔地帯の湿地と永久凍土丘のパルサ湿原という特殊な立地に確認されている。前者においては近年生育が確認できず、後者では 1 群落が確認されているだけであることから絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

植物体は、匍匐し、淡緑色、茎葉状、長さ 2～8 mm、幅は葉を含めて 0.5～0.8 mm。茎は先端がときどき鞭糸状となる。葉は瓦状につき、接在しないし離在、先端から 1/5～1/3 まで 2 裂する。裂片は鋭頭から鈍頭。腹葉は痕跡的なものから葉と同形のものまである。無性芽は 1～2 細胞性。近縁のウキヤバネゴケ (*Odontoschisma fluitans* (Nees) L.Söderstr. & Váňa) は、無性芽がなく、高地の湿原に生育する。

【生活史】

国内では造精器や造卵器、胞子体は見つかっていない。無性芽は豊富である。

【生育環境】

北海道中部の 2 か所の湿原に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】湿地・湿原・細流

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では北海道の屈斜路湖近くの噴気孔周辺の湿原と大雪山忠別前岳のプルサ湿原に分布する。国外では欧米など北半球の冷温帯に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1985 年に日本新産として報告された屈斜路湖付近では、非常に狭い範囲に生育していたが、近年の調査では生育が確認されていない。しかし、1990 年代に大雪山忠別前岳プルサ湿原において採集された標本があり、近年も確認されている。

【生育地の現況】

屈斜路湖付近の湿原では現況に大きな変化はないが、忠別前岳湿原では永久凍土が溶けつつあり、環境が悪化している。

【個体数の現況】

近年に確認されたのは 1 群落だけである。

存続を脅かす要因

産地が少なく局限していることや、特異な生育地であることから、環境の変化が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限, 気候変動
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヒメウキヤバネゴケ	<i>Cladopodiella francisci</i> (Hook.) Jørg.	CR+EN
第4次 2019:	ヒメウキヤバネゴケ	<i>Cladopodiella francisci</i> (Hook.) Jørg.	CR+EN
第4次 2018:	ヒメウキヤバネゴケ	<i>Cladopodiella francisci</i> (Hook.) Jørg.	CR+EN
第4次 2017:	ヒメウキヤバネゴケ	<i>Cladopodiella francisci</i> (Hook.) Jørg.	CR+EN
第4次 2015:	ヒメウキヤバネゴケ	<i>Cladopodiella francisci</i> (Hook.) Jørg.	CR+EN
第4次:	ヒメウキヤバネゴケ	<i>Cladopodiella francisci</i> (Hook.) Jørg.	CR+EN
第3次:	ヒメウキヤバネゴケ	<i>Cladopodiella francisci</i> (Hook.) Joerg.	CR+EN
第2次:	ヒメウキヤバネゴケ	<i>Cladopodiella francisci</i> (Hook.) Joerg.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 古木達郎, 1985. 日本新産 *Cladopodiella francisci* (Hook.) Joerg. ヒメウキヤバネゴケ (新称). 日本蘚苔類学会会報, 4: 33-35.
- 古木達郎・木口博史・内田暁友・佐藤 謙, 2023. 北海道で確認された日本新産タイ類アミバゴケ科 *Biantheridion undulifolium*. 蘚苔類研究, 12: 282-283.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Odontoschisma francisci has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Odontoschisma francisci* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Wetland/Marsh/Stream
Threat types:	Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

モグリゴケ

Lethocolea naruto-toganensis Furuki

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab

基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。

【地点数】1 地点

b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

生育地の乾燥化が進んでおり、生育面積の減少が続いている。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

本種は茎葉状苔類で、茎の先端が伸びて、マルスピウムになり土壤に潜ることを大きな特徴としており、和名の由来であり、本属の特徴でもある。本属としては国内で唯一の種であり、日本固有種である。九十九里平野の砂地湿原に生育しているが、かつては生育地であったと思われる湿原のほとんどが消失した。現在は、国指定天然記念物に指定されている湿地に僅かに生育している。生育数も少ないことから絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、緑色、長さ 1～2 cm、幅約 2 mm。葉は瓦状につき、斜めに開出し、背側に偏向し、心臓形、全縁。花被はなく、マルスピウムが地中にもぐる特徴が和名になった。円盤形の無性芽を葉縁につける。本属としては日本に生育する唯一の種である。

【生活史】

雌雄同株。多年生であるが、無性芽で越冬し、春季に植物体が現れ、冬季の乾燥により孢子体が成熟する前に植物体は乾燥により枯死する。

【生育環境】

低地に発達する砂質湿地において、背丈が低い草本からなる草原に生育する。

生育環境区分：	【陸域_平地部】湿地・湿原

国土地域区分：	(4) 河川・湿地地域

【分布域】

日本固有で、千葉県（九十九里平野）に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

生育地は、1950 年代までは九十九里平野に無数に帯状に点在した砂質湿原のひとつである。現在、他には砂質湿原がなく、この 1 か所の湿原において、数 m² 程度の非常に狭い範囲にだけ生育する。本種が確認されたのは 1994 年であるが、かつては九十九里平野に広く分布していた可能性が高い。

【生育地の現況】

生育地は、国指定天然記念物地域内の湿原であり保護されているが、乾燥化が進み、人為的な植生管理によって維持されており、極狭い範囲にしか生育していない。近年、生育地の乾燥化が進み、生育数が減少している。

【個体数の現況】

数百個体。

存続を脅かす要因

周辺の湿原は開発により消失し、現在知られている湿原が残された唯一の生育地である。生育範囲が非常に狭く、植生の遷移や、最近の河川開発により成長期の夏季に乾燥化の影響を受けている。

要因の区分：	(過去)	河川開発, 湿地開発, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限

	(現在)	河川開発, 湿地開発, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地 局限

特記事項

本属は、南半球に広く分布しているが、北半球では非常に珍しく、東アジアでは本生育地のみに分布している。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	モグリゴケ	<i>Lethocolea naruto-toganensis</i> Furuki	CR+EN
第4次 2019:	モグリゴケ	<i>Lethocolea naruto-toganensis</i> Furuki	CR+EN
第4次 2018:	モグリゴケ	<i>Lethocolea naruto-toganensis</i> Furuki	CR+EN
第4次 2017:	モグリゴケ	<i>Lethocolea naruto-toganensis</i> Furuki	CR+EN
第4次 2015:	モグリゴケ	<i>Lethocolea naruto-toganensis</i> Furuki	CR+EN
第4次:	モグリゴケ	<i>Lethocolea naruto-toganensis</i> Furuki	CR+EN
第3次:	モグリゴケ	<i>Lethocolea naruto-toganensis</i> Furuki	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

千葉県[最重要・重要保護生物（A-B）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Furuki, T., 2001. *Lethocolea naruto-toganensis*, a new hepatic from swamps of Japan. *Bryologist*, 104: 306-309.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lethocolea naruto-toganensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lethocolea naruto-toganensis* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Wetland
Threat types:	River development, Wetland development, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
 Author: Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ハツコウダゴケ

Eremonotus myriocarpus (Carrington) Pearson

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab

基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。

【地点数】1 地点

b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

唯一現存する生育地では、崖崩れにより生育数の減少が確認されている。他の産地では、道路建設や夏季の乾燥化等による生育地の環境悪化が原因で、生育が確認できなくなった。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

本種は単型属で系統学的に重要な茎葉状苔類。分枝が葉腋際にある大きな表皮細胞を起源とする特徴は本属だけに見られる。和名は日本では、八甲田山の高山で初めに発見されたことにちなむ。その後、中部山岳地帯からも発見された。近年は道路建設により消失した産地や、夏季の乾燥化の影響を受けて生育量が激減した産地などがあり、絶滅が危惧される。

協力者： 樋口正信（国立科学博物館）

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、褐緑色、長さ 0.5～1 cm、幅約 0.2 mm。葉は横につき、圧接ないし斜めに開出し、1/2～2/3 まで 2 裂し、裂片が三角形で鋭頭、全縁で、基部にまれに短棘がある。花被は円筒形で口部は広い。無性芽はない。分枝は葉腋際にある大きな表皮細胞を起源とすることが本属に特異な特徴である。本属としては日本に生育する唯一の種である。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

高山帯の露岩地において、湿った風が当たり、水が滴るような岩壁に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では八甲田山（青森県）や秩父山地（長野県 3 か所）、八ヶ岳（長野県）、南アルプス（山梨県）、北アルプス（富山県）の高山に点在し、国外では北半球の冷温帯に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

八甲田山（山頂付近）では微量が生育しているが、八ヶ岳（横岳）と秩父山地（五郎山、金峰山、甲武信岳）では生育が確認されていない。南アルプス（北沢峠）では道路建設に伴い消失した。北アルプスでは不明である。

【生育地の現況】

八甲田山では崖崩れにより、生育数が減少している。

【個体数の現況】

近年、確認されているのは 100 個体以下であると推定される。

存続を脅かす要因

八甲田山では崖崩れにより生育する岩が崩落し、八ヶ岳では夏季の乾燥により減少が著しい。秩父山地も夏季の乾燥の影響を受けていると推測される。南アルプスでは道路建設により消失した。

要因の区分：	（過去）	交通インフラ建設, 分布・産地局限, 気候変動
	（現在）	交通インフラ建設, 分布・産地局限

特記事項

単型属の本種は、系統的に重要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ハッコウダゴケ	<i>Eremonotus myriocarpus</i> (Carrington) Pearson	CR+EN
第4次 2019:	ハッコウダゴケ	<i>Eremonotus myriocarpus</i> (Carrington) Pearson	CR+EN
第4次 2018:	ハッコウダゴケ	<i>Eremonotus myriocarpus</i> (Carrington) Pearson	CR+EN
第4次 2017:	ハッコウダゴケ	<i>Eremonotus myriocarpus</i> (Carrington) Pearson	CR+EN
第4次 2015:	ハッコウダゴケ	<i>Eremonotus myriocarpus</i> (Carrington) Pearson	CR+EN
第4次:	ハッコウダゴケ	<i>Eremonotus myriocarpus</i> (Carrington) Pearson	CR+EN
第3次:	ハッコウダゴケ	<i>Eremonotus myriocarpus</i> (Carrington) Lindenb. & Kaal. ex Pearson	CR+EN
第2次:	ハッコウダゴケ	<i>Eremonothus myriocarpus</i> (Carring.) Pears.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

青森県[最重要希少野生生物（A ランク）] 長野県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎，2001．日本の野生植物コケ．平凡社，東京．355pp., 192 pls.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Eremonotus myriocarpus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Eremonotus myriocarpus* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Transportation infrastructure construction, Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ユキミイチョウゴケ

Mesoptychia heterocolpos (Thed. ex Hartm.) L.Söderstr. & Vána

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 主に石灰岩地に生育しているが、生育地の乾燥化が見られることから継続的な減少が予測される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は北極周辺やヒマラヤ、中国などに分布するが、国内では、北海道、本州（東北・中部の 6 か所に知られる茎葉状苔類。和名は、高地に分布することにちなむ。茎葉先は細く伸び無性芽を葉先につけることで同属の他種から区別できる。1 地点で確認されているが、他 5 地点では近年の報告がなく、最近 40 年の調査でも確認できない。減少した理由は不明であり、継続調査が望まれる。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、黄褐色、長さ約 1.5 cm、幅約 1.5～2.0 mm、斜上する。葉はやや長く、1/5～1/4 まで浅く 2 裂し、裂片は三角形、鋭頭、全縁。腹葉は舌状で不規則に 2 裂し、基部に鋸歯がある。茎葉先端は細く伸び無性芽を葉先につけることを特徴として同属の他種から区別できる。無性芽は 1～2 細胞性楕円体。

【生活史】

国内では生殖器官は見つかっていない。無性芽は豊富である。

【生育環境】

亜高山帯、高山帯の露岩地において、主に石灰岩の岩上や岩隙の腐食土上に生育している。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道、本州（東北、中部）に分布し、国外では欧米の北極周辺とヒマラヤなどに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

北海道（釧路）、宮城県白石市（寒成山風穴）、山梨県（八ヶ岳）、長野県（南アルプス：仙丈ヶ岳、塩川）、石川県（白山）の 6 か所から報告されているが、現在、生育が確認されているのは、南アルプス山麓の塩川だけである。

【生育地の現況】

長野県の 1 か所では、わずかに生育が確認されている。生育地の乾燥化が見られる。

【個体数の現況】

生育数が少ないため、100 個体以下であると推測する。

存続を脅かす要因

産地が 1 か所に局在し、絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限, 気候変動
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

学名は、*Lophozia heterocolpos* (Thed. ex Hartm.) M.Howe とされていたが、近年、分子系統学的な知見に基づき属の分類が見直され、*Leiocolea* に移され、更に近年の分子系統学的な研究結果により、ブシュカンゴケ属 *Mesoptychia* 属とされた (Váňa et al., 2012)。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ユキミイチョウゴケ	<i>Leiocolea heterocolpos</i> (Hartm.) H.Buch	CR+EN
第4次 2019:	ユキミイチョウゴケ	<i>Leiocolea heterocolpos</i> (Hartm.) H.Buch	CR+EN
第4次 2018:	ユキミイチョウゴケ	<i>Leiocolea heterocolpos</i> (Hartm.) H.Buch	CR+EN
第4次 2017:	ユキミイチョウゴケ	<i>Leiocolea heterocolpos</i> (Hartm.) H.Buch	CR+EN
第4次 2015:	ユキミイチョウゴケ	<i>Leiocolea heterocolpos</i> (Hartm.) H.Buch [= <i>Lophozia heterocolpos</i> (Hartm.) Howe]	CR+EN
第4次:	ユキミイチョウゴケ	<i>Leiocolea heterocolpos</i> (Hartm.) H.Buch [= <i>Lophozia heterocolpos</i> (Hartm.) Howe]	CR+EN
第3次:	ユキミイチョウゴケ	<i>Leiocolea heterocolpos</i> (Thed. ex Hartm.) H.Buch (= <i>Lophozia heterocolpos</i> (Thed. ex Hartm.) Howe)	DD
第2次:	ユキミイチョウゴケ	<i>Lophozia heterocolpos</i> (Hartm.) Howe	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮城県[情報不足（DD）] 長野県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 平岡照代・磯野寿美子・平岡正三郎. 2008. 塩川（長野県下伊那郡大滝村）の苔類. 自然環境科学研究, 21: 21-36.
- Kitagawa, N., 1966. A revision of the family Lophoziaceae of Japan and its adjacent regions, II. J. Hattori Bot. Lab., 29: 101-149.
- 釧路市郷土博物館, 2024. 植物標本目録（6）滝田謙讓氏採集蘚苔類標本. 釧路市立博物館資料目録. 25 pp. 釧路市立博物館, 釧路.
- 宮城植物の会, 2024. ユキミイチョウゴケ. 宮城県野生植物分布図集（電子版）. 宮城県野生生物分布図編集委員会.

- Váňa, J., L. Söderström, A. Hagborg and M. von Konrat, 2012. Notes on early land plants today 8. New combinations and some lectotypifications in *Mesoptychia*. *Phytotaxa*, 65: 52-56.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Mesoptychia heterocolpos has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Mesoptychia heterocolpos* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
 Author: Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ツボミゴケ目 Jungermanniales ウロコゴケ科 Lophocoleaceae

トゲバウロコゴケ

Heteroscyphus wettsteinii (Schiffn.) Schiffn.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 過去の調査では、生育範囲が限られており、生育数も少なかった。生育環境に大きな変化はないため、まだ生育していると考えられるが、最近の調査では確認されていない。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

葉の先端が 3 裂し、3～6 細胞からなる長い毛があり、腹葉にも葉と同様に長い毛があることを特徴とする茎葉性苔類。東南アジアの熱帯において湿性常緑樹林に生育しているが、日本では、1987 年に西表島から報告された。その後 40 年以上生育が確認されていないため、絶滅が危惧される。

協力者: 山口富美夫 (広島大学)・佐藤匠 (広島大学)・西畑和輝 (広島大学)・桐生賢太 (広島大学)

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、黄緑色、長さ 1～2.5 cm、幅 2～4 mm。葉は斜めにつき、瓦状に重なり、広く開出し、矩形、先端は 3 裂し、3～6 細胞からなる長い毛がある。腹葉は小さく、葉と同様に長い毛がある。無性芽はない。葉縁の長い棘のような毛は同属の他種から区別する特徴であり、和名の由来でもある。

【生活史】

国内では造精器や造卵器、胞子体は見つかっていない。確認されている個体が少ないため、詳細は不明である。

【生育環境】

低地の常緑広葉樹の自然林において、湿った林床に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では琉球列島（西表島）のみに分布し、国外では東南アジアやニューギニアに広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

唯一の生育地である西表島（仲良川）では 1981 年に生育が確認されているが、その後の調査でも 40 年以上再確認できていない。

【生育地の現況】

生育範囲は限られている。最近の調査では確認されていない。

【個体数の現況】

生育数は少ない。

存続を脅かす要因

産地は 1 か所と局限しており、生育量も少なかったが、最近の調査では確認されておらず、絶滅した可能性もある。

要因の区分：	(過去)	不明, 分布・産地局限
	(現在)	不明, 分布・産地局限

特記事項

古木（1987）では本種の産地が浦内川とされているがこれは誤記であり、正しくは仲良川である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	トゲバウロコゴケ	<i>Heteroscyphus wettsteinii</i> (Schiffn.) Schiffn.	CR+EN
第4次 2019:	トゲバウロコゴケ	<i>Heteroscyphus wettsteinii</i> (Schiffn.) Schiffn.	CR+EN
第4次 2018:	トゲバウロコゴケ	<i>Heteroscyphus wettsteinii</i> (Schiffn.) Schiffn.	CR+EN
第4次 2017:	トゲバウロコゴケ	<i>Heteroscyphus wettsteinii</i> (Schiffn.) Schiffn.	CR+EN
第4次 2015:	トゲバウロコゴケ	<i>Heteroscyphus wettsteinii</i> (Schiffn.) Schiffn.	CR+EN
第4次:	トゲバウロコゴケ	<i>Heteroscyphus wettsteinii</i> (Schiffn.) Schiffn.	CR+EN
第3次:	トゲバウロコゴケ	<i>Heteroscyphus wettsteinii</i> (Schiffn.) Schiffn.	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Furuki, T., 1987. On some liverworts from Iriomote Islands, Ryukyu Archipelago. *Hikobia*, 10: 73-75.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Heteroscyphus wettsteinii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Heteroscyphus wettsteinii* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy
 - area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations	
(v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Unknown, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

ツボミゴケ目 Jungermanniales ハネゴケ科 Plagiochilaceae

ハットリムカイバハネゴケ

Chiastocaulon theriotanum (Steph.) S.D.F.Patzak, M.A.M.Renner.Schäff.-Verw.
& Heinrichs

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab

基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。

【地点数】1 地点

b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

現存する生育地は以前よりも乾燥しており、この状態が続くことによる継続的な減少が予測される。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

本種はハネゴケ科としては、葉が対生につくという特異な茎葉状苔類として知られている。葉が三角形で基部が下延しないという特徴がある。東南アジアなどの雲霧林に分布し、九州南部と屋久島に知られる。湿った森林において樹幹に着生している。九州南部では森林伐採などの影響を受け、絶滅したと考えられる。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、黄褐色、長さ 3.0～5.0 cm、幅 2.5～3.5 mm。茎は斜上し、鞭枝がある。葉は対生につき、瓦状に重なり、斜めに開出し、三角形で背縁基部が下延する、先端が円みを帯び、不規則で大きな鋸歯がある。無性芽はない。花被は円錐状、口環に大きな鋸歯がある。胞子体は未知。近縁種のムカイバハネゴケ *Chiastocaulon oppositum* は八丈島に分布し、葉はより短く、基部が下延しない。

【生活史】

雌雄異株。国内では胞子体は見つかっていない。

【生育環境】

空中湿度の高い常緑広葉樹の雲霧林の自然林において、樹幹に着生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では九州南部と屋久島に分布し、国外では台湾と中国、東南アジア、ニューギニアなどに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

鹿児島県屋久島においては生育を確認しているが、鹿児島県南部の半島では長年、生育が確認されておらず、現在の生育環境から推察して絶滅した可能性が高い。

【生育地の現況】

屋久島では山頂付近の雲霧帯の樹幹に僅かに着生している。これまでに 3 か所に知られていたが、近年は 1 か所でしか確認されていない。

【個体数の現況】

ごく僅かである。

存続を脅かす要因

産地が局限している。九州南部では森林伐採により、環境が変化しているが、詳細は不明である。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限, 気候変動
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

ハネゴケ科の中では葉が対生であるという特異な形質を持つ。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	ハットリムカイバハネゴケ	<i>Plagiochilon theriotanum</i> (Steph.) Inoue	VU
第4次 2019:	ハットリムカイバハネゴケ	<i>Plagiochilon theriotanum</i> (Steph.) Inoue	VU
第4次 2018:	ハットリムカイバハネゴケ	<i>Plagiochilon theriotanum</i> (Steph.) Inoue	VU
第4次 2017:	ハットリムカイバハネゴケ	<i>Plagiochilon theriotanum</i> (Steph.) Inoue	VU
第4次 2015:	ハットリムカイバハネゴケ	<i>Plagiochilon theriotanum</i> (Steph.) Inoue	VU
第4次:	ハットリムカイバハネゴケ	<i>Plagiochilon theriotanum</i> (Steph.) Inoue	VU
第3次:	ハットリムカイバハネゴケ	<i>Plagiochilon theriotanum</i> (Steph.) Inoue	VU
第2次:	ハットリムカイバハネゴケ	<i>Plagiochilon theriotanus</i> (Steph.) Inoue	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮崎県[情報不足(DD-1)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Inoue, H., 1964. The genus *Plagiochilon*. J. Hattori Bot. Lab, 27: 51-72.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Chiastocaulon theriotanum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Chiastocaulon theriotanum* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

フィリピンオヤコゴケ

Schistochila aligera (Nees & Blume) J.B.Jack & Steph.

カテゴリ判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 徳之島井之川岳山頂で数個の個体群を確認したが、生育量が減少しており、絶滅の危険性が高いと判断される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

日本では徳之島にしか分布しておらず、アマミオヤコゴケ属の植物地理を考える上で興味深い。葉の腹片に明瞭な鋸歯があることが本種の特徴である。同属で奄美大島と徳之島に分布するケナシオヤコゴケ *Schistochila nuda* は腹片がほぼ全縁であることから本種と区別することができる。

協力者： 秋山弘之（兵庫県立人と自然の博物館）

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性で長さ 2 cm、幅 10 mm 前後、葉は横に広く開出し、小型の背片と大型の腹片に 2 裂する。背片は非対称な長楕円形～卵形で腹片の中央部につき、縁に少数の歯をもつ。腹片は狭長楕円形で鈍頭～鋭頭、縁に明瞭な鋸歯がある。腹葉は生殖器官の周辺に限られる。無性芽はない。奄美大島と徳之島に分布するケナシオヤコゴケ *Schistochila nuda* は腹片がほぼ全縁であるところから本種と区別することができる。

【生活史】

生殖器官は国内では見つからない。国内では産地が 1 か所のみであり十分な調査がなされていない。

【生育環境】

常緑樹林内の林床に散在する岩にへばりつくように生えている。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では徳之島だけから知られている。国外では東南アジアに広く分布しており、インドやニューカレドニアなどからも知られている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1967 年に徳之島（奄美諸島）の井之川岳の山頂近くで採集されたのが唯一の記録であったが、今回、井之川岳山頂で数個の個体群が確認された。

【生育地の現況】

湿度の高い自然林内に限られ、生育量は減少している。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

日本では産地が 1 か所に局限されており、また、湿度の高い自然林内に生育するので、森林の伐採などによって、森林内の湿度が低くなることによって消滅するおそれがある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

生育地は国定公園内にある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	フィリピンオヤコゴケ	<i>Schistochila aligera</i> (Nees & Mont.) Jack & Steph.	CR+EN
第4次 2019:	フィリピンオヤコゴケ	<i>Schistochila aligera</i> (Nees & Mont.) Jack & Steph.	CR+EN
第4次 2018:	フィリピンオヤコゴケ	<i>Schistochila aligera</i> (Nees & Mont.) Jack & Steph.	CR+EN
第4次 2017:	フィリピンオヤコゴケ	<i>Schistochila aligera</i> (Nees & Mont.) Jack & Steph.	CR+EN
第4次 2015:	フィリピンオヤコゴケ	<i>Schistochila aligera</i> (Nees & Mont.) Jack & Steph. [= <i>S. philippinensis</i> (Mont.) Nees]	CR+EN
第4次:	フィリピンオヤコゴケ	<i>Schistochila aligera</i> (Nees & Mont.) Jack & Steph. [= <i>S. philippinensis</i> (Mont.) Nees]	CR+EN
第3次:	フィリピンオヤコゴケ	<i>Schistochila aligera</i> (Nees & Mont.) Jack & Steph. (= <i>S. philippinensis</i> (Mont.) Nees)	DD
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Inoue, H., 1985. Studies on Taiwan Hepaticae VI. Schistochilaceae. Bull. Natl. Sci. Mus., Tokyo, Ser. B, 11: 109-118.
- Juengprayoon, W., P. Shukkharak and S. Chantanaorrapint, 2015. Genus *Schistochila* Dumort. (Schistochilaceae, Marchantiophyta) in Thailand. Songklanakarin J. Sci. Technol., 37: 409-415.
- So, M. L., 2003. The genus *Schistochila* in Asia. J. Hattori Bot. Lab., 93: 121-138.

- 高木典雄・葛山博次, 1978. *Schistochila philippinensis* 日本に産す. 蘚苔地衣雑報, 8: 10.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Schistochila aligera has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Schistochila aligera* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 片桐知之 (高知大学)
Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月: 2025 年 3 月

サンカクヨウジョウゴケ

Cololejeunea drepanolejeuneoides (Horik.) R.M.Schust.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 現在の生育地に台風による増水や樹木の倒木、あるいは少雨による乾燥化といった脅威が確認されるため、継続的な減少が予測される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

1936 年に小笠原諸島の父島から採取された標本に基づき新種記載された苔類。グアム島にも知られる茎葉性苔類で、日本では父島にだけ知られ、シダ植物の生葉上に着生する。原記載以来生育が確認されていなかったが、近年生育が再確認された。生育数が少なく、絶滅が危惧される。

協力者： 山口富美夫（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、葉は倒瓦状に重なり、表面は平滑。背片は卵形、全縁、鋭尖。腹片は背片の約 1/3 長、第 1 歯は 2 細胞からなる。腹葉はない。花被は扁平で倒心臓形。無性芽はない。近縁種は東南アジアなどに分布する *Cololejeunea wightii* などとされるが、葉の表面にベルカがあることや腹片の第 1 歯が単細胞であることで本種と区別される。

【生活史】

雌雄同株。胞子が成熟する季節は不明である。

【生育環境】

湿性常緑広葉樹の自然林において、コケシノブ科シダ植物の生葉上に着生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では小笠原諸島（父島）のみに分布し、国外ではグアム島に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

原記載以来生育が確認されていなかったが、近年生育が再確認された。

【生育地の現況】

生育地では台風による増水や樹木の倒木、あるいは少雨による乾燥化といった脅威が確認される。

【個体数の現況】

生育数が少ない。

存続を脅かす要因

産地が 1 か所に局限し、絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	サンカクヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea</i>	<i>drepanolejeuneoides</i>	(Horik.)	CR+EN
		R.M.Schust.			
第4次 2019:	サンカクヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea</i>	<i>drepanolejeuneoides</i>	(Horik.)	CR+EN
		R.M.Schust.			
第4次 2018:	サンカクヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea</i>	<i>drepanolejeuneoides</i>	(Horik.)	CR+EN
		R.M.Schust.			
第4次 2017:	サンカクヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea</i>	<i>drepanolejeuneoides</i>	(Horik.)	CR+EN
		R.M.Schust.			
第4次 2015:	サンカクヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea</i>	<i>drepanolejeuneoides</i>	(Horik.)	CR+EN
		R.M.Schust.			
第4次:	サンカクヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea</i>	<i>drepanolejeuneoides</i>	(Horik.)	CR+EN
		R.M.Schust.			
第3次:	サンカクヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea</i>	<i>drepanolejeuneoides</i>	(Horik.)	CR+EN
		R.M.Schust.			
第2次:	サンカクヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea</i>	<i>drepanolejeuneoides</i>	(Horik.)	DD
		Schust.			
第1次:	—	—			—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Horikawa, Y., 1936. Symbolae florae bryophytae Orientalii-Asiae. X. Bot. Mag. Tokyo, 50: 556-561.
- Inoue, H., 1970. Bryophytes of the Bonin Islands and the Volcano Islands, 2. J. Hattori Bot. Bab., 33: 381-389.
- 内田慎治・坪田博美・山口富美夫, 2011. 72年ぶりに日本で再発見された苔類 *Cololejeunea drepanolejeuneoides* (Horik.) R. M. Schust. サンカクヨウジョウゴケ (Lejeuneaceae). 蘚苔類研究, 10: 176.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Cololejeunea drepanolejeuneoides has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cololejeunea drepanolejeuneoides* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area _Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 片桐知之 (高知大学)
Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月: 2025 年 3 月

オガサワラケビラゴケ

Radula boninensis Furuki & K.Yamada

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地は周辺の崖崩れにより乾燥化が進み、生育数が減っている。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

小笠原諸島母島石門の隆起石灰岩上に生育する固有な苔類である。葉の縁に多数の無性芽をつけることや腹片の仮根を生じる部位があまり突き出ないことを特徴とする。近年、生育地の基岩が崩落したことによる、森林の乾燥化が進み、生育数が減少した。最近の調査では生育が確認できない。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、匍匐し、長さ約 1 cm、幅 1～1.5 mm。葉は倒瓦状に重なり、広く開出、扁平に展開、大きな背片と小さな腹片に 2 裂し、折り目が弓形のキールになる。背片は円形、全縁、縁に円盤状の無性芽をつける。腹片は矩形。腹葉はない。近縁のコモチケビラゴケ *Radula gedena* とは、腹片の仮根の出る場所があまり突出しないことや葉細胞に大きさの変異が少ないことで区別される。

【生活史】

造精器や造卵器、胞子体は知られていない。無性芽は豊富である。

【生育環境】

常緑広葉樹の自然林において隆起石灰岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

日本固有で、小笠原諸島（母島）石門に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

数 m² 程度の非常に狭い範囲に生育していたが、最近の調査では確認できない。

【生育地の現況】

生育地は周辺の崖崩れにより乾燥化が進んでいる。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地は 1 か所と少なく、生育する石灰岩は少なかった。近年、生育地の岩盤が海に崩落し、森林の乾燥化が進み、生育量が減り、最近の調査では確認できない。

要因の区分：	(過去)	自然災害, 分布・産地局限
	(現在)	自然災害, 分布・産地局限

特記事項

生育地の母島石門は、固有種が多く生育する地域として知られるが、本種もその一例である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オガサワラケビラゴケ	<i>Radula boninensis</i> Furuki & K.Yamada	CR+EN
第4次 2019:	オガサワラケビラゴケ	<i>Radula boninensis</i> Furuki & K.Yamada	CR+EN
第4次 2018:	オガサワラケビラゴケ	<i>Radula boninensis</i> Furuki & K.Yamada	CR+EN
第4次 2017:	オガサワラケビラゴケ	<i>Radula boninensis</i> Furuki & K.Yamada	CR+EN
第4次 2015:	オガサワラケビラゴケ	<i>Radula boninensis</i> Furuki & K.Yamada	CR+EN
第4次:	オガサワラケビラゴケ	<i>Radula boninensis</i> Furuki & K.Yamada	CR+EN
第3次:	オガサワラケビラゴケ	<i>Radula boninensis</i> Furuki & Yamada	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Furuki, T. and K. Yamada, 1986. The genus *Radula* (Hepaticae) of the Bonin and Volcano Islands. J. Jpn. Bot., 61: 311-315.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Radula boninensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Radula boninensis* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy
 - area, extent and/or quality of habitat
 - number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Natural disasters, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

オリンピックゴケ

Brachydontium olympicum (E.Britton) T.T.McIntosh & J.R.Spence

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 河川氾濫の影響を受けやすい場所に生育しており、かつ個体数も少ないことから、継続的な減少が予測される。2019 年の調査では少数のみ確認された。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

オリンピックゴケは国内では富山県の立山に、国外では北米西部に分布する微小な直立性の蘚類。生育量が少なく、生育環境も不安定で絶滅が危惧される。

協力者： 坂井奈緒子（富山市立科学博物館）

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 2.5-4.2 mm。茎はほとんど分枝せず、長さ 1.75-2.3 mm の線形の葉を密につける。蒴は葉から抜き出る。キヌシツポゴケモドキ属の他種からは、茎の中心束が少し分化する、蒴柄がより長いこと（1.0-1.35 mm）、蒴のふたがくちばし状であることなどで区別される。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

国内では、富山県の立山の標高 2,300-2,400 m の沢の岩または岩の割れ目に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では富山県に分布し、国外では北米西部に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2019 年の調査では立山称名川の流域で十数個体の群落が確認された。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、個体群の数もサイズも小さい。河川氾濫により、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失
	(現在)	分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失

特記事項

1997 年に富山県の立山から新種 *Brachydontium polycarpum* (ボンチゴケ) として記載された種が、その後、*Brachydontium olympicum* であることが明らかになった。本種の国内の生育地は 1 か所であり、和名をオリンピックゴケとすることが提唱された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オリンピックゴケ	<i>Brachydontium olympicum</i> (E.G.Britton) T.T.McIntosh & J.R.Spence	CR+EN
第4次 2019:	オリンピックゴケ	<i>Brachydontium olympicum</i> (E.G.Britton) T.T.McIntosh & J.R.Spence	CR+EN
第4次 2018:	オリンピックゴケ	<i>Brachydontium olympicum</i> (E.G.Britton) T.T.McIntosh & J.R.Spence	CR+EN
第4次 2017:	オリンピックゴケ	<i>Brachydontium olympicum</i> (E.G.Britton) T.T.McIntosh & J.R.Spence	CR+EN
第4次 2015:	オリンピックゴケ	<i>Brachydontium olympicum</i> (E.G.Britton) T.T.McIntosh & J.R.Spence	CR+EN
第4次:	オリンピックゴケ	<i>Brachydontium olympicum</i> (E.G.Britton) T.T.McIntosh & J.R.Spence	CR+EN
第3次:	オリンピックゴケ	<i>Brachydontium olympicum</i> (E.G.Britton) T.T.McIntosh & J.R.Spence	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

富山県[絶滅危惧Ⅰ類]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Akivama, H., 1997. *Brachydontium polycarpum* (Seligeriaceae, Musci), a new species from Japan. Acta Phytotax. Geobot., 48: 61-67.
- 樋口正信, 2015. オリンピックゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 15. ぎょうせい, 東京.
- Iwatsuki, Z., T. Suzuki and H. Kiguchi, 2004. *Brachydontium olympicum*, a moss misunderstood by Japanese bryologists. J. Hattori Bot. Lab., 95: 199-205.
- 坂井奈緒子. 2011. 富山県立山室堂平周辺の蘚苔類相の訂正と追記. 富山市科学博物館研究報告, 34: 135-136.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Brachydontium olympicum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Brachydontium olympicum* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution, Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—

執筆者: 樋口正信 (国立科学博物館)
 Author: Masanobu Higuchi

公表年月: 2025 年 3 月

イボイボカタシロゴケ

Calymperes strictifolium (Mitt.) G.Roth

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】 1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 これまで西表島の 1 か所でのみ生育が確認されていたが、その個体群は消滅したものと考えられる。2017 年に西表島の別の場所で再確認されたが、生育地は局限され、生育量は極めて少なく、倒木などにより個体群が消滅する危険がある。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

イボイボカタシロゴケは国内では西表島に分布し、国外ではアジアの熱帯地域、ポリネシアに分布する。カタシロゴケ属の他種からは、葉の中肋の背腹両面や葉の縁にこぶ状の突起があることなどで区別される。

協力者： 佐藤匠（広島大学）・西畑和輝（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 5～10 mm。茎は分枝せず、長さ 4～5 mm の広い基部から線形に伸びる葉を少数つける。葉は乾燥してもほとんど変化しない。カタシログケ属の他種からは、葉の中肋の背腹両面や葉の縁にこぶ状の突起があることなどで区別される。

【生活史】

孢子体は知られていない。

【生育環境】

常緑広葉樹林の溪流沿いの樹幹に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では西表島に分布し、国外ではアジアの熱帯地域、ポリネシアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1985 年に西表島から報告されて以来、1998 年までは同じ場所で生育を確認できていたが、それ以降は確認されていなかった。第 5 次レッドリスト作成のための調査でも初報告の場所では生育を確認できなかったが、仲良川の流域で新たな生育地を発見できた。また、標本調査によって、仲良川流域の別の場所から採集された標本も確認できた（西畑ほか 2019）。

【生育地の現況】

生育地の一部では自然災害などにより生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

生育量は極めて少ない。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

西表島が分布の北限となっている。生育地は国立公園内にある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	イボイボカタシロゴケ	<i>Calymperes strictifolium</i> (Mitt.) G.Roth	CR+EN
第4次 2019:	イボイボカタシロゴケ	<i>Calymperes strictifolium</i> (Mitt.) G.Roth	CR+EN
第4次 2018:	イボイボカタシロゴケ	<i>Calymperes strictifolium</i> (Mitt.) G.Roth	CR+EN
第4次 2017:	イボイボカタシロゴケ	<i>Calymperes strictifolium</i> (Mitt.) G.Roth	CR+EN
第4次 2015:	イボイボカタシロゴケ	<i>Calymperes strictifolium</i> (Mitt.) G.Roth	CR+EN
第4次:	イボイボカタシロゴケ	<i>Calymperes strictifolium</i> (Mitt.) G.Roth	CR+EN
第3次:	イボイボカタシロゴケ	<i>Calymperes strictifolium</i> (Mitt.) Roth	CR+EN
第2次:	和名なし	<i>Calymperes strictifolium</i> (Mitt.) Roth Syn. <i>C. tuberosum</i> (Ther. et Dix.) Broth.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- 西畑和輝・佐藤 匠・山口富美夫, 2019. イボイボカタシロゴケ（カタシロゴケ科、セン類）の新産地. *Hikobia*, 18: 57-59.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Calymperes strictifolium has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Calymperes strictifolium* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence

(ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫（広島大学）
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

ヌマチゴケ

Paludella squarrosa (Hedw.) Brid.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 大雪山の 2 か所で記録されていたが、1 か所は絶滅、1 か所では群落サイズが減少している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ヌマチゴケは国内では北海道の大雪山に、国外ではヨーロッパ、中国、シベリア、北米、グリーンランドに分布する直立性の蘚類。高層湿原に生育する。生育地の 1 か所では絶滅し、他の 1 か所では生育量が減少しており、絶滅が危惧される。

協力者： 古木達郎（元千葉県立中央博物館）・内田暁友（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 4-7 cm。茎はほとんど分枝せず、倒卵形の葉が 5 列につき、下部は仮根が密生する。葉は長さ 1.5-2 mm で、先端は短く尖り、中肋部で竜骨状に折りたたまれ、中央で反り返る。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

高山の高層湿原に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】湿地・湿原・細流

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道の大雪山に、国外ではヨーロッパ、中国、シベリア、北米、グリーンランドに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2019 年の調査では忠別沼で生育が確認されたが群落サイズが減少しており、忠別前岳湿原では確認されなかった。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

北海道忠別沼では 2016 年の群落サイズが 200 cm×60 cm とされていたが、2019 年の調査ではその約半分程度になっていた。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

本種は神田（1971）により北海道大雪山忠別沼から国内で初めて報告された。その後、忠別前岳湿原でも報告された（Kanda & Sato, 1994）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヌマチゴケ	<i>Paludella squarrosa</i> (Hedw.) Brid.	CR+EN
第4次 2019:	ヌマチゴケ	<i>Paludella squarrosa</i> (Hedw.) Brid.	CR+EN
第4次 2018:	ヌマチゴケ	<i>Paludella squarrosa</i> (Hedw.) Brid.	CR+EN
第4次 2017:	ヌマチゴケ	<i>Paludella squarrosa</i> (Hedw.) Brid.	CR+EN
第4次 2015:	ヌマチゴケ	<i>Paludella squarrosa</i> (Hedw.) Brid.	CR+EN
第4次:	ヌマチゴケ	<i>Paludella squarrosa</i> (Hedw.) Brid.	CR+EN
第3次:	ヌマチゴケ	<i>Paludella squarrosa</i> (Hedw.) Brid.	CR+EN
第2次:	ヌマチゴケ	<i>Paludella squarrosa</i> (Hedw.) Brid.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. ヌマチゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 73. ぎょうせい, 東京.
- Kanda, H. and K. Sato, 1994. An arctic moss, *Loeskyopnum badium* (Hartm) Paul (Amblystegiaceae), new to Japan. Hikobia, 11: 429-433.
- 神田啓史, 1971. *Paludella squarrosa* (Hedw.) Brid. 日本に産す. Hikobia, 6: 52.
- 神田啓史・乙幡康之, 2019. 北海道, 大雪山のヌマチゴケの生育状況. 蘚苔類研究 11: 351-353.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Paludella squarrosa has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Paludella squarrosa* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Wetland/Marsh/Stream
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

コシノシンジゴケ

Schizymenium sasaokae (Broth.) Tad.Suzuki

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 かつて記録があった地点でも長年確認されていない。1981 年に生育が確認されているハケ岳についても、その後の調査で確認されていないが、周辺に残存している可能性があるため今回は判断した。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

コシノシンジゴケは、日本とヒマラヤに分布し、亜高山帯の岩上に生育する。葉の中肋が葉頂から突き出るのが特徴である。関東山地から中部山岳地帯にかけて報告があるが、過去に確認された地点でも再調査で見つからないことが多く、現在確認されている地点はない。崖崩れなどにより生育地が失われる心配がある。

基礎情報

【形態】

植物体は光沢のない密なマットを作る。茎は高さ 10 mm に達する。茎下部の葉は線状披針形、上に向かって大きく、長さ約 2 mm になる。葉縁は平坦で、上部に鋸歯がある。中肋は葉頂から短く突き出す。葉身細胞は線状、厚壁、表面に微細な肥厚（ベルカ）が見られる。蒴柄は長さ 1 cm。同属のホソバゴケ *Schizymenium japonicum* とは、細胞が線形で、葉の中肋が葉頂から突き出し、植物体がより大型なことなどで区別される。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

亜高山帯の岩上に生育する。鉄や銅イオンの多い土上をよく好む。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では関東山地から中部山岳地帯の亜高山帯に記録があり、国外ではヒマラヤに分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

新潟県、群馬県、埼玉県、富山県、長野県、山梨県から過去の記録がある（Ochi, 1959 など）。前回の第 4 次レッドデータブックには新潟県黒姫山での確認について言及があるが（神田, 2000）、これは 1951 年の確認事例のようである。長野県八ヶ岳での 1981 年の確認については、岩月ほか（2001）に写真も掲載されているが、1995 年の調査では確認されておらず、それ以降は確認されていない。新潟県、富山県のレッドデータブックも、過去の記録について言及しているのみで、現況を確認してはいない。そのため、現在確認されている地点はない。

【生育地の現況】

詳細については不明。非常に希な種。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

崖崩れなどにより生育地が失われる心配がある。

要因の区分：	(過去)	遷移進行・植生変化/自然遷移, 自然災害

	(現在)	遷移進行・植生変化/自然遷移, 自然災害

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	コシノシンジゴケ	<i>Mielichhoferia sasaokae</i> Broth.	VU
第4次 2019:	コシノシンジゴケ	<i>Mielichhoferia sasaokae</i> Broth.	VU
第4次 2018:	コシノシンジゴケ	<i>Mielichhoferia sasaokae</i> Broth.	VU
第4次 2017:	コシノシンジゴケ	<i>Mielichhoferia sasaokae</i> Broth.	VU
第4次 2015:	コシノシンジゴケ	<i>Mielichhoferia sasaokae</i> Broth.	VU
第4次:	コシノシンジゴケ	<i>Mielichhoferia sasaokae</i> Broth.	VU
第3次:	コシノシンジゴケ	<i>Mielichhoferia sasaokae</i> Broth.	VU
第2次:	コシノシンジゴケ	<i>Mielichhoferia sasaokae</i> Broth.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

新潟県[絶滅危惧（EN+VU）] 富山県[情報不足] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 神田啓史, 2000. コシノシンジゴケ. 環境庁（編）, 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—9 植物Ⅱ（維管束植物以外）. p. 52. 自然環境研究センター, 東京.
- Noguchi, A., 1988. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 2. pp. 243-491. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- Ochi, H., 1959. A revision of the Bryaceae in Japan and the adjacent regions. The Biological Institute, Faculty of Liberal Arts, Tottori University, Tottori. 124pp
- Ochi, H., 1968. A revised list of mosses of the family Bryaceae in Japan and the adjacent regions. J. Fac. Educ. Tottori Univ., 19: 1-40.
- Suzuki, T., 2014. Notes on Bryaceae (Bryopsida) in Japan. Hattoria, 5: 51-70.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Schizymenium sasaokae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Schizymenium sasaokae* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
 Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月: 2025 年 3 月

クチボソミノゴケ

Macromitrium holomitrioides Nog.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 本種の生育が日本において唯一確認されている宮崎県日南市猪八重溪谷では、これまでに数点の資料が得られているが、これまでのレッドリスト作成のための調査では生育を確認できていないので、少なくとも減っていると思われる。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

クチボソミノゴケは、初め台湾から記載された種で、国内では宮崎県日南市の猪八重溪谷でだけ見つかっている。蒴は楕円形で縦しわがあり、乾くと蒴口の部分がしわ寄り、蒴歯を欠くという変わった特徴がある。本種の日本での唯一の産地である猪八重溪谷では、これまでに数点の資料が得られているが、これまでのレッドリスト作成のための調査では生育を確認できていない。

基礎情報

【形態】

樹幹上に黄緑色のマットを作る。茎は長く這い、長さ 1.5 cm くらいの多くの枝を出す。枝の葉は乾くと内側に巻き、湿ると展開する。卵状披針形で長さ 2.5～3.8 mm、幅 0.55～0.80 mm の大きさがあり、上部で竜骨状に凹み、葉先は尖り、やや内側に巻く。中肋は葉先に達する。葉身中部の細胞は丸みを帯びた六角形で厚角、大きさは、長さ 10～15 μm 、中央部が盛り上がる。葉の下部の細胞は矩形で、しばしば 1 個の大きなパピラがある。胞子体は枝に側生。蒴柄は長さ 3 mm くらい、平滑。蒴は楕円形で縦しわがあり、乾くと口の部分でしわ寄る。ふたは長い円錐形。蒴歯を欠く。帽には上向きの毛がある。枝葉が卵状披針形で幅広いこと、葉身細胞が厚角で膨らむこと、蒴歯を欠くことなどで同属の他種から区別される。

【生活史】

雌雄異株。雄植物は小さく（矮雄）0.3 mm、雌植物の葉の上に生育する。

【生育環境】

暖地の溪流沿いの湿った林内で樹幹上あるいは倒木上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では宮崎県日南市の猪八重溪谷のみで確認されており、国外では台湾、中国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本種の生育が日本において唯一確認されている宮崎県日南市猪八重溪谷では、これまでに数点の資料が得られているが、1995 年以降これまでのレッドリスト作成のための調査では生育を確認できていない。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

林内の環境要因の変動の少ない場所に生育するので、森林伐採による生育環境変化の影響を受ける可能性がある。また、産地が局限し、個体群の数が少なく、絶滅する可能

性が高い。		
要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	クチボソミノゴケ	<i>Macromitrium holomitrioides</i> Nog.	CR+EN
第4次 2019:	クチボソミノゴケ	<i>Macromitrium holomitrioides</i> Nog.	CR+EN
第4次 2018:	クチボソミノゴケ	<i>Macromitrium holomitrioides</i> Nog.	CR+EN
第4次 2017:	クチボソミノゴケ	<i>Macromitrium holomitrioides</i> Nog.	CR+EN
第4次 2015:	クチボソミノゴケ	<i>Macromitrium holomitrioides</i> Nog.	CR+EN
第4次:	クチボソミノゴケ	<i>Macromitrium holomitrioides</i> Nog.	CR+EN
第3次:	クチボソミノゴケ	<i>Macromitrium holomitrioides</i> Nog.	CR+EN
第2次:	クチボソミノゴケ (新称)	<i>Macromitrium holomitrioides</i> Nog.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況 (令和4年度末時点)

宮崎県[絶滅危惧 I A 類(CR-r)]

保護に係る法令指定状況 (令和4年度末時点)

指定なし

参考文献

- 岩月善之助, 2000. クチボソミノゴケ (新称). 環境庁 (編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック 9 植物 II (維管束植物以外). p. 60. 自然環境研究センター, 東京.
- Noguchi, A., 1967. Musci Japonici. VII. The genus *Macromitrium*. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 30: 205-230.
- 山口富美夫, 2015. クチボソミノゴケ. 環境省 (編), レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 59. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Macromitrium holomitrioides has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Macromitrium holomitrioides* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月: 2025 年 3 月

オクヤマツガゴケ

Daltonia carinata (Dixon & W.E.Nicholson) B.C.Ho & L.Pokorny

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 溪流沿いの石灰岩上に生育が限られ、長野県の生育地では沢崩れにより生育適地が減少し、個体群が縮小した。分布も局在していることから、個体群の減少あるいは消滅が危惧される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本属の種のほとんどは熱帯から温帯に分布するが、本種だけは比較的寒冷なヨーロッパとアジアの高地に隔離分布する。すでにヨーロッパではほとんど絶滅したといわれる。日本では長野県でわずかに記録があるが、2018 年の調査では確認できなかった。森林伐採、河川開発、あるいは自然災害によって生育環境の悪化が危惧される。また、産地が局限しているため絶滅が危惧される。

協力者： 井上侑哉（国立科学博物館）

基礎情報

【形態】

体は小さく、茎は長さ約 2 cm、柔軟で、鮮緑色の塊を作る。茎は不規則に分枝する。葉は密につき、広い楕円形で葉先は鋭頭、長さ 1~1.3 mm、中肋は弱いが葉長の 4/5 くらいの長さがある。葉は中肋の部で竜骨状に縦に折りたたまれて舟状になる。葉縁には舷があるが全縁、反曲する。葉身細胞は六角形、長さ 30~40 μm 、幅 15~17 μm 、薄壁。中肋上に糸状の無性芽ができる。同属の他の種に比べ小型で、葉が中肋部で竜骨状に縦に折りたたまれることによって、区別される。

【生活史】

雌雄異株だと思われるが不明。孢子体は知られていない。

【生育環境】

石灰岩地の溪谷沿いで石灰岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では本州に分布し、国外では台湾、中国、タイ、ヨーロッパに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための 2018 年の調査では、長野県の産地で確認できなかった。広島大学植物標本庫には、長野県で 2015 年に採集された標本が保管されている。

【生育地の現況】

2018 年の調査では、溪流の増水のため生育適地の減少を確認した。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

森林伐採、河川開発、あるいは自然災害によって生育環境の悪化が危惧される。また、産地が局限しているため絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発, 自然災害, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 河川開発, 自然災害, 分布・産地局限

特記事項

本属の種は一般に温帯から熱帯地方に分布するが、本種はヨーロッパ（アルプス）とアジア東部の高地に隔離分布する特異な種である。ヨーロッパではすでにほとんど絶滅したと言われる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オクヤマツガゴケ	<i>Distichophyllum</i>	<i>carinatum</i>	Dixon & W.E.Nicholson	CR+EN
第4次 2019:	オクヤマツガゴケ	<i>Distichophyllum</i>	<i>carinatum</i>	Dixon & W.E.Nicholson	CR+EN
第4次 2018:	オクヤマツガゴケ	<i>Distichophyllum</i>	<i>carinatum</i>	Dixon & W.E.Nicholson	CR+EN
第4次 2017:	オクヤマツガゴケ	<i>Distichophyllum</i>	<i>carinatum</i>	Dixon & W.E.Nicholson	CR+EN
第4次 2015:	オクヤマツガゴケ	<i>Distichophyllum</i>	<i>carinatum</i>	Dixon & W.E.Nicholson	CR+EN
第4次:	オクヤマツガゴケ	<i>Distichophyllum</i>	<i>carinatum</i>	Dixon & W.E.Nicholson	CR+EN
第3次:	オクヤマツガゴケ	<i>Distichophyllum</i>	<i>carinatum</i>	Dixon & W.E.Nicholson	CR+EN
第2次:	オクヤマツガゴケ	<i>Distichophyllum carinatum</i> Dix. et Nich.			CR+EN
第1次:	—	—			—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1956., Musci Japonici, V. The genus *Distichophyllum*. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 17: 19-31.
- Noguchi, A., 1991. Illustrated moss flora of Japan. Part 4. pp. 743-1012. Hattori Botanical Laboratory, Nichinan.

- 高木典雄, 1951. 日本産蘚類植物報告 (5). 植物研究雑誌, 26: 237-242.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Daltonia carinata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Daltonia carinata* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Natural disasters, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

キノボリヒメツガゴケ

Distichophyllum yakumontanum H.Akiyama & Matsui

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 産地が屋久島のみであり、個体群の数もサイズも小さいので、森林伐採による生育環境の変化によって壊滅的な影響を受ける可能性がある。また、生育地は登山道沿いであり、登山者の手が届くところに生育しているため、人為的な影響も危惧される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

キノボリヒメツガゴケは日本固有で屋久島でのみ生育が確認されている。ツガゴケ属の中ではもっとも小型のものである。木の根元や樹幹に生える。同属の他種からは葉形その他、中肋が太く丈夫で枝分かれすること、木の根元や樹幹に生育することなどで区別される。

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、長さ約 5～10 mm。密に重なりあって生える。茎はほとんど分枝せず、長さ 0.7～0.8 mm の倒卵形からさじ状楕円形の葉を平たく密につける。ツガゴケ属の中では小型で、ツガゴケ (*Distichophyllum maibarae*) に似る。本属の他種からは、葉形その他、中肋が太く丈夫で枝分かれすること、木の根元や樹幹に生育することなどで区別される。

【生活史】

胞子体は知られていない。

【生育環境】

屋久島の標高 1,400～1,600 m の森林内数か所で、ヤマグルマとモミの根元や樹幹に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

日本固有種で、九州（屋久島）に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では確認されなかった。岩田（2018）は屋久島から本種を報告している。

【生育地の現況】

屋久島の標高 1400 m 程度の森林内のツガの樹幹上に生育する。生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

産地が局限し、個体群の数もサイズも小さいので、森林伐採による生育環境の変化によって壊滅的な影響を受ける可能性がある。生育地は登山道沿いで、登山者の手が届くところに生育している。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

2005 年に新種記載された日本固有種である。ツガゴケ属の種は溪谷などの湿った岩や土の上に生育することが多いのに対し、キノボリツノゴケは木の根元や樹幹に生育する。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	キノボリヒメツガゴケ	<i>Distichophyllum yakumontanum</i> H.Akiyama & Matsui	CR+EN
第4次 2019:	キノボリヒメツガゴケ	<i>Distichophyllum yakumontanum</i> H.Akiyama & Matsui	CR+EN
第4次 2018:	キノボリヒメツガゴケ	<i>Distichophyllum yakumontanum</i> H.Akiyama & Matsui	CR+EN
第4次 2017:	キノボリヒメツガゴケ	<i>Distichophyllum yakumontanum</i> H.Akiyama & Matsui	CR+EN
第4次 2015:	キノボリヒメツガゴケ	<i>Distichophyllum yakumontanum</i> H.Akiyama & Matsui	CR+EN
第4次:	キノボリヒメツガゴケ	<i>Distichophyllum yakumontanum</i> H.Akiyama & Matsui	CR+EN
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hasegawa, J. 1980. Taxonomical studies on Asian Anthocerotae II. Some Asia species of *Dendroceros*. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 47: 287-309.
- 長谷川二郎. 1989. 小笠原諸島のキノボリツノゴケ. 日本蘚苔類学会会報, 5: 216-217.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Distichophyllum yakumontanum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Distichophyllum yakumontanum* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
 Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

オニゴケ

Pseudospiridentopsis horrida (Cardot) M.Fleisch.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 これまで鹿児島県屋久島と熊本県五木村の 2 か所から報告があるが、屋久島では 1936 年以來確認されていない。現在は、熊本県五木村でのみ生育が確認されているが、1965 年に報告されて以来、生育量の極端な減少が認められている。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

大型の蘚類で、石灰岩壁に大きな群落を作る。日本では九州のみから記録され、熊本県五木村では詳しい生育状況が記録されてきた。第 5 次レッドリスト作成のための調査でも同じ地点で生育が確認された。

協力者： 立石幸敏（岡山コケの会）・木口博史（岡山コケの会）

基礎情報

【形態】

大型の蘚類で、ふつう黄緑色、下部は褐色または黒色。茎は固くて長さ 15 cm 前後にもなり、わずかに分枝する。葉は大きく、長さ 6~9 mm で、密につき、卵状楕円形の基部から著しく反り返り、乾いても横に展開する。葉の基部は耳状、葉先は長く漸尖する。葉縁には細かい歯がある。中肋は葉頂下に終わる。葉身細胞は長い楕円形~菱形で、長さ 35~45 μm 、幅 4.0~5.5 μm 、中央に 1 個の乳頭があり、壁は非常に厚く、明瞭なくびれがある。本属の種は日本では本種のみが生育する。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

石灰岩壁上に大きな群落を作るが、岩壁近くの樹幹上にも生育する。アジアの熱帯、亜熱帯に分布するが、日本での産地は非常に限られている。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

日本からは Horikawa (1936) が鹿児島屋久島から報告したのが最初である。その後、野口 (1952)、今江 (1965) が熊本県五木村の石灰岩地から報告しているが、日本で生育が確認されているのはこの 2 か所のみである。国外では中国、フィリピン、インド（アッサム）、ヒマラヤに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト調査 (2016-2019) では熊本県五木村の石灰岩上で少量が確認された。屋久島にも記録はあるが、Horikawa (1936) 以来確認されていない。

【生育地の現況】

生育地の一部では森林伐採や自然災害などにより生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

熊本県五木村は第 4 次レッドリスト調査 (2010) でも生育が確認された場所であるが、やや生育量の減少が認められた。なお、この五木村の石灰岩上からは今江 (1965) が「岸壁で予想以上に量も多く、発育も良いので、ここの環境条件はこの種の生育に適しているものと思われる」と報告している。しかし、近年の調査では現地の生育量は激減しており、継続して減少が認められつつあることから、絶滅の危険性があると考えられる。

存続を脅かす要因

森林伐採や石灰採掘によって生育環境の変化、生育地の消失が危惧される。また、産地が局限しているため絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 石灰採掘, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 石灰採掘, 分布・産地局限

特記事項

日本は本種の分布の北限である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オニゴケ	<i>Pseudospiridentopsis</i>	<i>horrida</i>	(Cardot)	CR+EN
		M.Fleisch.			
第4次 2019:	オニゴケ	<i>Pseudospiridentopsis</i>	<i>horrida</i>	(Cardot)	CR+EN
		M.Fleisch.			
第4次 2018:	オニゴケ	<i>Pseudospiridentopsis</i>	<i>horrida</i>	(Cardot)	CR+EN
		M.Fleisch.			
第4次 2017:	オニゴケ	<i>Pseudospiridentopsis</i>	<i>horrida</i>	(Cardot)	CR+EN
		M.Fleisch.			
第4次 2015:	オニゴケ	<i>Pseudospiridentopsis</i>	<i>horrida</i>	(Cardot)	CR+EN
		M.Fleisch.			
第4次:	オニゴケ	<i>Pseudospiridentopsis</i>	<i>horrida</i>	(Cardot)	CR+EN
		M.Fleisch.			
第3次:	オニゴケ	<i>Pseudospiridentopsis</i>	<i>horrida</i>	(Cardot)	CR+EN
		M.Fleisch.			
第2次:	オニゴケ	<i>Pseudospiridentopsis</i>	<i>horrida</i>	(Card.) Fl.	VU
第1次:	—	—			—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

熊本県[絶滅危惧 I A 類(CR)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Horikawa, Y., 1936. Symbolae florae bryophytae orientali-asiae et *micronesiae*, IX. Botanical Magazine, Tokyo, 50: 380-385.
- 今江正知, 1965. 九州におけるオニゴケの生育地. 蘚苔地衣雑報, 3: 149-150.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 野口 彰, 1952. 日本産蘚類の研究 (12). 植物研究雑誌, 27: 121-124.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Pseudospiridentopsis horrida has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pseudospiridentopsis horrida* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

マメハネゴケ

Pinnatella ambigua (Bosch & Sande Lac.) M.Fleisch.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I A 類 (CR) B2ab				
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 10 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 最近 10 年間で確認されている産地は公園内の歩道沿いにあり、生育量は変動しているように見られる。生育量も少なく、歩道の整備などによって生育地が失われる可能性もある。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は東南アジアから中国、台湾に広く分布し、日本が北限となる。日本では沖縄島の石灰岩地のみから記録されているが、生育地は限られている。

基礎情報

【形態】

第一次茎は基物上を這い、第二次茎は長さ 2～5 cm で立ち上がる。第二次茎には中心束があり、基部は柄状になって、上部はやや扁平に枝を出す。第二次茎の葉は卵形の基部から披針形に漸尖し、先は尖り、長さは約 1.8 mm、縁に細かい歯があり、葉縁下部は内曲し、葉基部は茎に下延しない。葉は乾くと縦じわができる。本種はキブリハネゴケ (*Pinnatella makinoi*) に似るが、より小型で、第二次茎に中心束があり、葉基部が茎に下延しないことで区別できる。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

暖地の石灰岩地の林内の樹幹か、石灰岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

国内では沖縄県（沖縄島）に分布し、国外では台湾、中国、ブータン～東南アジアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では確認できなかったが、広島大学植物標本庫には 2014 年沖縄島で採集された標本がある。

【生育地の現況】

生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

国内の産地は公園内の歩道沿いにあるため、遊歩道の整備などの影響が懸念される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

Enroth (1994) は日本新産として沖縄県那覇市首里で採集された標本を引用している。その標本は、おそらく広島大学植物標本庫に保管されている標本の採集点の近傍にあると考えられる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	マメハネゴケ	<i>Pinnatella ambigua</i> (Bosch & Sande Lac.) M.Fleisch.	CR+EN
第4次 2019:	マメハネゴケ	<i>Pinnatella ambigua</i> (Bosch & Sande Lac.) M.Fleisch.	CR+EN
第4次 2018:	マメハネゴケ	<i>Pinnatella ambigua</i> (Bosch & Sande Lac.) M.Fleisch.	CR+EN
第4次 2017:	マメハネゴケ	<i>Pinnatella ambigua</i> (Bosch & Sande Lac.) M.Fleisch.	CR+EN
第4次 2015:	マメハネゴケ	<i>Pinnatella ambigua</i> (Bosch & Sande Lac.) M.Fleisch. [= <i>P. pusilla</i> Nog.]	CR+EN
第4次:	マメハネゴケ	<i>Pinnatella ambigua</i> (Bosch & Sande Lac.) M.Fleisch. [= <i>P. pusilla</i> Nog.]	CR+EN
第3次:	ヒメハネゴケ	<i>Pinnatella ambigua</i> (Bosch & Sande Lac.) M.Fleisch. (= <i>P. pusilla</i> Nog.)	CR+EN
第2次:	ヒメハネゴケ	<i>Pinnatella pusilla</i> Nog.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Enroth, J., 1994. A taxonomic monograph of the genus *Pinnatella* (Neckeraceae, Bryopsida). Acta Bot. Fennica, 151: 1-90.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1935. Contributions to the moss flora of Formosa. 3. Transactions of the Natural History Society of Formosa, 25: 63-68, pl. IV.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Pinnatella ambigua has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pinnatella ambigua* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

コマチゴケ目 Calobryales コマチゴケ科 Haplomitriaceae

キレハコマチゴケ

Haplomitrium hookeri (Lyell ex Sm.) Nees

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 いずれの産地でも生育量が非常に少なく、登山道の整備の影響等により減少している。富山県では 50 年以上生育が確認されていない。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

コマチゴケ目を代表する茎葉性苔類。世界の寒冷地に隔離分布しており、寒冷期の遺存種といわれる。日本では 5 か所の高山の草原や落葉樹林にのみ分布している。いずれの産地においても生育量が少なく、登山道の整備の影響等により減少しており絶滅が危惧される。

協力者： 山口富美夫（広島大学）・佐藤匠（広島大学）・桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は地下茎を持ち、枝が直立する茎葉性、鮮緑色で、長さ 1～2 cm、幅は葉を含めて 3～5 mm。仮根はない。葉は茎に 3 列につき、1 列が背方に、2 列は側方につく。葉は数個の角を持つ広卵形。雌苞葉は茎の上端に束生する。花被を欠き、多肉質のカリプトラは棍棒状。雄苞葉は茎の上端に集まり雄花盤となる。葉縁が角張ることで、全縁のコマチゴケ *Haplomitrium mnioides* と区別される。

【生活史】

雌雄異株。国内では未成熟な孢子体のみが確認されている。無性芽をつける植物体が過去に報告されているが再確認されておらず極めて稀な現象と考えられている。

【生育環境】

高山帯において、ハイマツ林やダケカンバ林の林床に発達する明るい草原の地面に生育する。群落を作らず、他の蘚苔類に混生し孤生することが多い。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】森林, 草地

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州中部高山帯に分布し、国外では、欧州大西洋岸、ロシア北極圏、北アメリカ、グリーンランド、ヒマラヤ、中国などに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

富山県では 50 年以上生育が確認されていない。

【生育地の現況】

北アルプス（富山県）、八ヶ岳（長野県）に知られていたが生育量が減少している。南アルプス（山梨県、静岡県）で新たな産地が発見されたが、いずれの産地でも生育量は非常に少ない。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

産地が局限しており、いずれの地点においても生育量が少ない。登山道の整備などにより、減少しているため絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

生育地は国立公園または国定公園内である。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	キレハコマチゴケ	<i>Haplomitrium hookeri</i> (Sm.) Nees	CR+EN
第4次 2019:	キレハコマチゴケ	<i>Haplomitrium hookeri</i> (Sm.) Nees	CR+EN
第4次 2018:	キレハコマチゴケ	<i>Haplomitrium hookeri</i> (Sm.) Nees	CR+EN
第4次 2017:	キレハコマチゴケ	<i>Haplomitrium hookeri</i> (Sm.) Nees	CR+EN
第4次 2015:	キレハコマチゴケ	<i>Haplomitrium hookeri</i> (Sm.) Nees	CR+EN
第4次:	キレハコマチゴケ	<i>Haplomitrium hookeri</i> (Sm.) Nees	CR+EN
第3次:	キレハコマチゴケ	<i>Haplomitrium hookeri</i> (Sm.) Nees	CR+EN
第2次:	キレハコマチゴケ	<i>Haplomitrium hookeri</i> (Sm.) Nees	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

富山県[絶滅危惧Ⅰ類] 長野県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2017. 南アルプス（明石山脈）仙水峠に見つかったキレハコマチゴケとヒメトロイブゴケ. 蘚苔類研究, 11: 295-297.
- Inoue, H., 1971. *Haplomitrium hookeri* (Smith) Nees in Japan. J. Jpn. Bot., 46: 353-357.
- 片桐知之・佐藤 匠, 2017. ハケ岳産キレハコマチゴケの遺伝的実体. 蘚苔類研究, 11: 291-194.
- 榊崎浩亮・片桐知之, 2010. 北岳・間の岳の苔類. 増沢武弘（編）, 南アルプス地形と生物, pp. 257-276. 静岡県, 静岡.
- Sato, T. and T. Katagiri, 2016. On the presence of *Haplomitrium minutum* (Haplomitriaceae, Marchantiophyta) in Japan. Bryologist, 119: 332-340.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Haplomitrium hookeri has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Haplomitrium hookeri* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Forest, Grassland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



©片桐知之

執筆者: 片桐知之 (高知大学)
Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月: 2025 年 3 月

ゼニゴケ目 Marchantiales ジンガサゴケ科 Aytoniaceae

イワゼニゴケ

Mannia triandra (Scop.) Grolle

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 奥武蔵では、以前は林道脇に生育していたが、道路建設などの人間活動により生育地が減少している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

北半球の寒冷地に分布する葉状のゼニゴケ目の仲間として知られ、日本では北海道と東北、関東の山地に生育する。雌器托の頭部の笠が球状になる。東北では最近確認できない。道路整備などの影響により、生育が危ぶまれている。

基礎情報

【形態】

植物体は葉状、緑色～淡緑色、縁が紫色、長さ 5～13 mm、幅 3～4 mm、気室は 3～4 層、気室孔はアーチ状。腹鱗片は不規則に 2～3 列、縁が鋸歯状、附属物は長楕円形。雄器床は盤状で雌器托の根元か葉状体の先端付近にできる。雌器托は傘状、頭部が球状。無性芽はない。近縁種のキイチゴゼニゴケ (*Mannia pilosa* (Hornem.) Frye & L.Clark) は南アルプスに分布し、雄器床が腹短枝に生じる。

【生活史】

雌雄同株。胞子は初夏に成熟し、繁殖している。

【生育環境】

低地において、落葉広葉樹の自然林の土上や岩壁上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道と岩手県、埼玉県に点在し、国外では欧米、中国などに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

三角山（北海道札幌市）と根室半島（北海道根室市）、奥武蔵（埼玉県飯能市）に生育している。五葉山（岩手県）では、近年生育が確認されていない。

【生育地の現況】

北海道では僅かに生育している。奥武蔵で道路工事により減少したが、少数が生育している。

【個体数の現況】

数 10 個体。

存続を脅かす要因

産地が少なく、道路建設など、人間活動により生育環境が悪化している。

要因の区分：	(過去)	交通インフラ建設, 分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

寒冷地を分布の中心とする種の中で、国内のおもに低地に生育している数少ない苔類

である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	イワゼニゴケ	<i>Mannia triandra</i> (Scop.) Grolle	CR+EN
第4次 2019:	イワゼニゴケ	<i>Mannia triandra</i> (Scop.) Grolle	CR+EN
第4次 2018:	イワゼニゴケ	<i>Mannia triandra</i> (Scop.) Grolle	CR+EN
第4次 2017:	イワゼニゴケ	<i>Mannia triandra</i> (Scop.) Grolle	CR+EN
第4次 2015:	イワゼニゴケ	<i>Mannia triandra</i> (Scop.) Grolle	CR+EN
第4次:	イワゼニゴケ	<i>Mannia triandra</i> (Scop.) Grolle	CR+EN
第3次:	イワゼニゴケ	<i>Mannia triandra</i> (Scop.) Grolle	CR+EN
第2次:	イワゼニゴケ	<i>Mannia triandra</i> (Scop.) Grolle Syn. <i>M. rupestris</i> (Nees) Frye et Clark	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 井上 浩, 1974. 日本産苔類図鑑, 189 pp. 築地書館, 東京.
- 井藤賀操・木村 真・山口 勇・古木達郎, 2004. 埼玉県で見つかったイワゼニゴケ. 蘚苔類研究, 8: 317-319.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Mannia triandra has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Mannia triandra* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Transportation infrastructure construction, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ゼニゴケ目 Marchantiales ジンチョウゴケ科 Cleveaceae

リシリゼニゴケ

Peltolepis quadrata (Saut.) Müll.Frib.

カテゴリ判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 現在までに確認されている生育地点は 3 地点であり、その内八ヶ岳では 50 年以上生育が確認されていないため、継続的な減少が推定される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は苔類ジンチョウゴケ科に属するが、本科の中では、葉状体がスポンジ状にならないという特徴があり、欧州やシベリア、アラスカに分布し、最近まで北海道利尻島だけに知られていたことからリシリゼニゴケと呼ばれている。近年、中部高山帯の山頂付近に生育していたヤツガタケゼニゴケも同種であるとされた。生育範囲が非常に狭く、生育数も少ないことから絶滅が危惧される。

協力者： 桐生賢太（広島大学）・佐藤匠（広島大学）・山口富美夫（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は複雑葉状性、緑色で縁が赤味を帯び、長さ約 2 cm、幅 1～2 cm、断面で気室は 3～4 層である。腹鱗片は鱗片状。雌托柄溝は 2 本、雌器床は笠状で数個に深裂、包膜は縦に 2 裂し、偽花被はない。雄孔口は盤状に集まる。胞子は金平糖状。単型属。無性芽はない。

【生活史】

雌雄同株。胞子は夏に成熟する。

【生育環境】

高山帯の露岩地において湿った岩壁に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道（利尻島）と本州中部の高山（八ヶ岳、南アルプス）に分布し、国外では欧州、シベリア、アラスカなどに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

北海道利尻島では 1954 年に報告され、近年わずかに生育が確認されている。八ヶ岳（山梨県、長野県）では 50 年以上確認されていないが、南アルプスにおいて 2008 年に新たに少数が確認された。

【生育地の現況】

利尻島では、生育地は山頂付近の崖に生育しており、崩落により消失する可能性がある。八ヶ岳では原因は不明であるが、確認されていない。生育地は夏季に以前よりも乾燥している場所が目立つことから、乾燥化が危惧される。南アルプスでは近年新たに発見されたが、現況に変化はないと推定される。

【個体数の現況】

どの産地においても、個体数は少ない。

存続を脅かす要因

産地が少なく、登山者による産地の環境悪化や夏季の乾燥化の影響を受けていると思われる。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限, 気候変動
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

これまで本属として、本種とヤツガタケゼニゴケ (*Peltolepis japonica* (Shimizu & S.Hatt.) S.Hatt.) が知られていたが、後者は 2011 年に本種の同種異名にされ、本属は単型属となった。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	リシリゼニゴケ (ヤツガタケゼニゴケ)	<i>Peltolepis quadrata</i> (Saut.) Müll.Frib.	CR+EN
第4次 2019:	リシリゼニゴケ (ヤツガタケゼニゴケ)	<i>Peltolepis quadrata</i> (Saut.) Müll.Frib.	CR+EN
第4次 2018:	リシリゼニゴケ (ヤツガタケゼニゴケ)	<i>Peltolepis quadrata</i> (Saut.) Müll.Frib.	CR+EN
第4次 2017:	リシリゼニゴケ (ヤツガタケゼニゴケ)	<i>Peltolepis quadrata</i> (Saut.) Müll.Frib.	CR+EN
第4次 2015:	リシリゼニゴケ (ヤツガタケゼニゴケ)	<i>Peltolepis quadrata</i> (Saut.) Müll.Frib. [= <i>Peltolepis japonica</i> (Shimizu & S.Hatt.) S.Hatt.]	CR+EN
第4次:	リシリゼニゴケ (ヤツガタケゼニゴケ)	<i>Peltolepis quadrata</i> (Saut.) Müll.Frib. [= <i>Peltolepis japonica</i> (Shimizu & S.Hatt.) S.Hatt.]	CR+EN
第3次:	ヤツガタケゼニゴケ	<i>Peltolepis japonica</i> (Shimizu & S.Hatt.) S.Hatt.	CR+EN
第2次:	ヤツガタケゼニゴケ	<i>Peltolepis japonica</i> (Shim. et Hatt.) Hatt.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況 (令和4年度末時点)

掲載なし

保護に係る法令指定状況 (令和4年度末時点)

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- 片桐知之・出口博則, 2010. 日本におけるリシリゼニゴケとタカネゼニゴケの新産地. 蘚苔類研究, 10: 1-4.
- 大石善隆・山田耕作, 2008. 利尻島産のタイ類とツノゴケ類. 利尻研究, 27: 63-72.
- Rubasinghe, S. C. K., 2011. Phylogeny and taxonomy of the complex thalloid liverwort family Cleveaceae Cavers. University of Edinburgh, Scotland. 264pp

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Peltolepis quadrata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Peltolepis quadrata* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
 Author: Tatsuwo Furuki

公表年月: 2025 年 3 月

ゼニゴケ目 Marchantiales ジンチョウゴケ科 Cleveaceae

ジンチョウゴケ

Sauteria spongiosa (Kashyap) S.Hatt.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 利尻島と八ヶ岳では以前と比較して、生育面積と個体数が減少している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は葉状体が白緑色をしたスポンジのように見え、野外でも目立つ苔類。ヒマラヤや中国に分布するが、日本では北海道利尻島と八ヶ岳、南アルプスの山頂付近にのみ生育し、近年の夏場の乾燥等により、生育数が減少しており、影響が懸念される。

協力者： 桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、白緑色、葉状、長さ 7~18 mm、幅 2~5 mm、通気組織は 2~3 層、柔らかくてスポンジ状、同化糸はない、気室孔はアーチ状。腹鱗片は不規則に 3~6 列、付属物が不明瞭で、多細胞列。無性芽はない。雌器托は傘状、柄は短く溝は 1 本、雌器床は 2~6 列し、陣笠状。雄器床は短枝または盤状となる。無性芽はない。近縁種の (*Sauteria alpina* (Nees) Nees) は欧州と北米に分布し、葉状体がスポンジ状にならないことで区別される。

【生活史】

雌雄同株。胞子は夏に成熟する。

【生育環境】

高山帯の露岩地において、湿った岩上や岩隙に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道と本州中部の高山に分布し、国外ではヒマラヤ、中国、シベリアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

北海道利尻島や長野県八ヶ岳では近年、生育数が減っている。南アルプス（長野県）において新たな生育地が報告された。

【生育地の現況】

利尻島と八ヶ岳では近年の夏季の乾燥化により、生育環境が悪化している。

【個体数の現況】

最近、10 年間に減少傾向が顕著である。利尻島と八ヶ岳では近年の夏季の乾燥化により、生育量が激減している。近年報告された南アルプスの生育地も生育量は少ない。

存続を脅かす要因

産地が少なく局在していたが、登山道の整備や夏季の乾燥化の影響を受けている。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限, その他（登山道整備）, 気候変動
	(現在)	分布・産地局限, その他（登山道整備）

特記事項

日本からは従来、 ジンチョウゴケ *Sauteria alpina* (Nees) Nees とタカネゼニゴケ (*Sauteria japonica* (Shimizu & S.Hatt.) S.Hatt.)、ヤツガタケジンチョウゴケ (*Sauteria yatsuensis* S.Hatt.) の3種が知られていたが、1種にまとめられた。また、日本産は全て *Sauteria alpina* であるとする見解もあり、更なる研究が必要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ジンチョウゴケ (タカネゼニゴケ, ヤツガタケジンチョウゴケ)	<i>Sauteria spongiosa</i> (Kashyap) S.Hatt.	VU
第4次 2019:	ジンチョウゴケ (タカネゼニゴケ, ヤツガタケジンチョウゴケ)	<i>Sauteria spongeosa</i> (Kashyap) S.Hatt.	VU
第4次 2018:	ジンチョウゴケ (タカネゼニゴケ, ヤツガタケジンチョウゴケ)	<i>Sauteria spongeosa</i> (Kashyap) S.Hatt.	VU
第4次 2017:	ジンチョウゴケ (タカネゼニゴケ, ヤツガタケジンチョウゴケ)	<i>Sauteria spongeosa</i> (Kashyap) S.Hatt.	VU
第4次 2015:	ジンチョウゴケ (タカネゼニゴケ, ヤツガタケジンチョウゴケ)	<i>Sauteria spongeosa</i> (Kashyap) S.Hatt. [= <i>S. alpina</i> auct., non (Nees) Nees; <i>S. japonica</i> (Shimizu & S.Hatt.) S.Hatt.; <i>S. yatsuensis</i> S.Hatt.]	VU
第4次:	ジンチョウゴケ (タカネゼニゴケ, ヤツガタケジンチョウゴケ)	<i>Sauteria spongeosa</i> (Kashyap) S.Hatt. [= <i>S. alpina</i> auct., non (Nees) Nees; <i>S. japonica</i> (Shimizu & S.Hatt.) S.Hatt.; <i>S. yatsuensis</i> S.Hatt.]	VU
第3次:	ジンチョウゴケ	<i>Sauteria alpina</i> (Nees) Nees	VU
第2次:	ジンチョウゴケ	<i>Sauteria alpina</i> (Nees) Nees	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況 (令和4年度末時点)

掲載なし

保護に係る法令指定状況 (令和4年度末時点)

指定なし

参考文献

- Borovichev, E. A., N. A. Konstantinova and E. N. Andrejeva, 2012. The genus *Sauteria* Nees (Cleveaceae, Marchantiophyta) in Russia. *Arctoa*, 21: 181-188.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- 片桐知之・出口博則, 2010. 日本におけるリシリゼニゴケとタカネゼニゴケの新産地. *蘚苔類研究*, 10: 1-4.
- 榊崎浩亮・片桐知之, 2010. 北岳・間ノ岳の苔類. 増沢武弘 (編), 南アルプス地形と生物, pp. 257-276. 静岡県, 静岡.
- Rubasinghe, S. C. K., 2011. Phylogeny and Taxonomy of the complex thalloid liverwort family Cleveaceae Cavers. University of Edinburgh, Scotland. 264 pp
- Shimizu, D. and S. Hattori, 1954. Marchantiales of Japan. III. *J. Hattori Bot. Lab.*, 12: 53-75.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Sauteria spongiosa has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sauteria spongiosa* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy
 - area, extent and/or quality of habitat
 - number of locations or subpopulations
 - number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution, Other (登山道整備) , Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
Author: Tatsuwo Furuki

公表年月: 2025 年 3 月

ヤマトヤハズゴケ

Sandeothallus japonicus (Inoue) Crand.-Stotl. & Stotler

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 本種は雪渓や高山草原、高層湿原に生育するが、近年の気候変動による高山帯の気温上昇によって生育適地が減少している状況にある。高山草原に生育する個体群は、年によっては消失して見られなくなることもある。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は 1985 年に北アルプスから新種として記載された単純葉状苔類で、葉状体に中心束がなく、雌包膜が大きな背面側の 1 枚の裂片となることを特徴としている。高山草原の湿った土手などに生育するが、範囲が狭く、生育数も非常に少ないことから、登山者などの影響により絶滅が危惧される。

協力者： 坂井奈緒子（富山市立科学博物館）

基礎情報

【形態】

植物体は葉状、匍匐し、黄緑色、長さ 2～3 cm、幅 3～8 mm。中肋部は不明瞭で、中心束はない。無性芽はない。雌包膜が鱗片状で、円筒状の偽花被の後方のみにあることを特徴とする。近縁種の *Sandeothallus radiculosus* (Schiffn.) R.M.Schust. は東南アジアに分布するが、胞子の表面模様が異なる。

【生活史】

雌雄異株。胞子は夏に成熟する。

【生育環境】

高山草原の湿った地面に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】湿地・湿原・細流 【陸域_平地部】農業用水路, 小河川
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

日本固有で、北アルプス立山・薬師岳（富山県）、鳥海山（秋田県）、蔵王山（山形県）に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

4 か所の産地の内、立山と鳥海山において確認された。蔵王山では、数年前に生育が確認されている。薬師岳では近年は未調査である。

【生育地の現況】

どの産地においても高山草原の登山道脇や雪渓脇の湿った土手などに生育している。比較的新しい裸地を好むことから、生育か所は移動し易い。近年の気候変動による高山帯の気温上昇によって生育適地が減少している状況である。

【個体数の現況】

今回の調査において富山県では、小さな群落が点在していた。秋田県では数群落数 10 個体が確認された。山形県では 1 か所において数群落が確認されている。また、生育数は年によって変動が激しい。

存続を脅かす要因

産地が少なく局限しており、生育量が少なく、近年の温暖化の影響や登山者の影響などが懸念される。

要因の区分：	（過去）	分布・産地局限, その他（登山者の影響）, 気候変動
	（現在）	河川開発, 分布・産地局限, 宿主の減少

特記事項

1985 年に *Moerckia japonica* Inoue として新種記載され、2007 年にヤマトヤハズゴケ属 *Sandeothallus* に移された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヤマトヤハズゴケ	<i>Sandeothallus japonicus</i> (Inoue) Crand.-Stotl. & Stotler	CR+EN
第4次 2019:	ヤマトヤハズゴケ	<i>Sandeothallus japonicus</i> (Inoue) Crand.-Stotl. & Stotler	CR+EN
第4次 2018:	ヤマトヤハズゴケ	<i>Sandeothallus japonicus</i> (Inoue) Crand.-Stotl. & Stotler	CR+EN
第4次 2017:	ヤマトヤハズゴケ	<i>Sandeothallus japonicus</i> (Inoue) Crand.-Stotl. & Stotler	CR+EN
第4次 2015:	ヤマトヤハズゴケ	<i>Sandeothallus japonicus</i> (Inoue) Crand.-Stotl. & Stotler [= <i>Moerckia japonica</i> Inoue]	CR+EN
第4次:	ヤマトヤハズゴケ	<i>Sandeothallus japonicus</i> (Inoue) Crand.-Stotl. & Stotler [= <i>Moerckia japonica</i> Inoue]	CR+EN
第3次:	ヤマトヤハズゴケ	<i>Moerckia japonica</i> Inoue	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

秋田県[絶滅危惧種Ⅰ類(CR+EN)] 富山県[絶滅危惧Ⅱ類]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Crandall-Stotler, B. J. and R. Stotler, 2007. On the identity of *Moerckia hibernica* (Hook.) Gottsche (*Moerckiaceae* fam. nov., *Marchantiophyta*). *Nova Hedwigia*, Beih., 131: 41-59.
- Inoue, H., 1985. Studies on *Pallaviciniaceae* & *Allisoniaceae* (*Metzgeriales*) in Japan, 2. *Bull. Natl. Sci. Mus.*, Ser. B, 11: 1-10.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Sandeothallus japonicus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sandeothallus japonicus* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Wetland/Marsh/Stream 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Agricultural ditch, Small river
Threat types:	Limited distribution, Other（登山者の影響）, Climate change
Law designation status for conservation	—



©古木達郎（元千葉県立中央博物館）

執筆者: 古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author: Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ミズゴケモドキ

Pleurozia purpurea Lindb.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 現在谷川岳では少数しか確認できず生育数が減少している。南アルプスでは 60 年以上確認されていない。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

葉が不等に 2 裂し、葉の背片が常に袋状になり、腹片が円形で大きいことを特徴とする茎葉性苔類。日本では谷川岳と南アルプスの高山山頂付近に知られていた。近年八ヶ岳からも新たに報告されているが、谷川岳では少数しか確認できず生育数が減少しており、南アルプスでは 60 年以上確認されていない。

協力者： 古木達郎（元千葉県立中央博物館）・木口博史（岡山コケの会）

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、紅紫色から赤褐色、直立し、長さ 5~8 cm、幅約 2 mm、葉は瓦状に密に重なり、約 1/3 まで不等に 2 裂する。背片は袋状。腹片は円形で大きく、凹状、鈍頭で 1/3 まで 2 裂し、鋸歯がある。花被は長卵形、多稜。無性芽はない。腹片が円いことで他種から区別される。

【生活史】

雌雄同株とされるが国内では造精器や造卵器、孢子体は見つかっていないため、生活史は不明である。

【生育環境】

高山帯のハイマツ林や露岩地において他の蘚苔類と混生する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州中部の高山に点在し、国外ではヨーロッパ北西部、ヒマラヤ、台湾、北米北西部、西インド諸島に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

谷川岳（群馬県、新潟県）と南アルプス（長野県）に知られていたが、南アルプスでは 60 年間以上確認されていない。近年、八ヶ岳（長野県）でも生育が確認された。

【生育地の現況】

現在、谷川岳と八ヶ岳で少数が確認されているだけである。

【個体数の現況】

生育数は少ない。

存続を脅かす要因

これまでに確認された産地は 3 か所と少なく、何らかの要因により、生育量が減少している。最近の調査では、2 か所において少数が確認されているだけであり、絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	不明, 分布・産地局限
	(現在)	不明, 分布・産地局限

特記事項

生育地は国立公園内である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ミズゴケモドキ	<i>Pleurozia purpurea</i> Lindb.	CR+EN
第4次 2019:	ミズゴケモドキ	<i>Pleurozia purpurea</i> Lindb.	CR+EN
第4次 2018:	ミズゴケモドキ	<i>Pleurozia purpurea</i> Lindb.	CR+EN
第4次 2017:	ミズゴケモドキ	<i>Pleurozia purpurea</i> Lindb.	CR+EN
第4次 2015:	ミズゴケモドキ	<i>Pleurozia purpurea</i> Lindb.	CR+EN
第4次:	ミズゴケモドキ	<i>Pleurozia purpurea</i> Lindb.	CR+EN
第3次:	ミズゴケモドキ	<i>Pleurozia purpurea</i> Lindb.	CR+EN
第2次:	ミズゴケモドキ	<i>Pleurozia purpurea</i> Lindb.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

新潟県[絶滅危惧（EN+VU）] 長野県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信・古木達郎, 2018. ハケ岳の蘚苔類チェックリスト. 国立科博専報, 52: 39-64.
- Ikegami, Y., 1957. On *Pleurozia purpurea* in Japan and Formosa. J. Hattori Bot. Lab., 18: 65-69.
- 井上 浩, 1958. 甲斐駒ヶ岳産の苔類2種. 蘚苔地衣雑報, 1: 2-3.
- Thiers, B. M., 1993. A monograph of *Pleurozia* (Hepaticae; Pleuroziaceae). Bryologist, 96: 517-554.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Pleurozia purpurea has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pleurozia purpurea* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Forest
Threat types:	Unknown, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

ツボミゴケ目 Jungermanniales アミバゴケ科 Anastrophyllaceae

ヒメモミジゴケ

Barbilophozia hatcheri (A.Evans) Loeske

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 高山の山頂付近に生育地が限られており、近年生育地の乾燥化が進んでいる。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は、葉が 3~4 裂しており、モミジの葉に似ている茎葉状苔類で、葉の形により近縁種から区別される。南北極地周辺やヒマラヤに分布し、国内では本州中部の高山に 5 か所の産地が知られているが、近年、2 か所では確認できない。何らかの影響により減少したと考えられる。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、緑褐色、匍匐し、長さ約 1.5 cm、幅約 1～1.5 mm。葉は 1/3 まで 3～4 裂しモミジの葉に似て、裂片は鋭頭、基部に毛状の突起がある。腹葉は大きく、深く 2 裂し、裂片基部に長毛がある。無性芽は葉先につけ 2 細胞性。モミジゴケ (*B. lycopodioides* (Wallr.) Loeske) に似るが、葉の先端が尖ることで区別される。

【生活史】

雌雄異株。国内では雄株しか確認されておらず、孢子体は見つかっていない。無性芽は豊富である。

【生育環境】

高山帯において、腐食土上や湿った岩、岸壁に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州中部の高山に分布し、国外では両極の寒帯、ヒマラヤなどに分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

至仏山（群馬県）、燕岳（長野県）、南アルプス仙丈岳（長野県）の山頂付近に知られていたが、1965 年に報告されて以来、確認されていなかった。しかし、近年、南アルプス北岳とその周辺（山梨県、長野県）から確認された。

【生育地の現況】

生育地の乾燥化が進んでいる。

【個体数の現況】

生育数は少ない。

存続を脅かす要因

産地が少なく、何らかの要因により、生育範囲と生育量が減少したため、絶滅が危惧される。

要因の区分：	（過去）	分布・産地局限, 気候変動
	（現在）	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヒメモミジゴケ	<i>Barbilophozia hatcheri</i> (A.Evans) Loeske	CR+EN
第4次 2019:	ヒメモミジゴケ	<i>Barbilophozia hatcheri</i> (A.Evans) Loeske	CR+EN
第4次 2018:	ヒメモミジゴケ	<i>Barbilophozia hatcheri</i> (A.Evans) Loeske	CR+EN
第4次 2017:	ヒメモミジゴケ	<i>Barbilophozia hatcheri</i> (A.Evans) Loeske	CR+EN
第4次 2015:	ヒメモミジゴケ	<i>Barbilophozia hatcheri</i> (A.Evans) Loeske	CR+EN
第4次:	ヒメモミジゴケ	<i>Barbilophozia hatcheri</i> (A.Evans) Loeske	CR+EN
第3次:	ヒメモミジゴケ	<i>Barbilophozia hatcheri</i> (A.Evans) Loeske	DD
第2次:	ヒメモミジゴケ	<i>Barbilophozia hatcheri</i> (Evans) Loeske	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kitagawa, N., 1965. A revision of the family Lophoziaaceae of Japan and its adjacent regions, I. J. Hattori Bot. Lab., 28: 239-291.
- 榊崎浩亮・片桐知之, 2010. 北岳・間ノ岳の苔類. 増沢武弘（編）, 南アルプス 地形と生物, pp. 257-276. 静岡県, 静岡.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Barbilophozia hatcheri has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Barbilophozia hatcheri* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ツボミゴケ目 Jungermanniales アミバゴケ科 Anastrophyllaceae

ヤクシマアミバゴケ

Hattoria yakushimensis (Horik.) R.M.Schust.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 現在生育が確認されている屋久島においても非常に狭い地域に限られており生育数が少ない。登山道の整備などにより減少する可能性があるため。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

1934 年に屋久島産の標本に基づき新種として発表され、その後、鹿児島県大隅半島および三重県御在所岳から発見された。葉が全縁で 2 型をなすという顕著な特徴がある。樹幹上および岩上に生育するが森林伐採などの影響により絶滅が危惧される。屋久島以外では近年生育が確認されてない。

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、黄緑色ないし、赤褐色を帯びる緑色、茎葉状、長さは2 cmに達し、幅は葉を含めて0.8～1.0 mm。葉は瓦状につき、ほぼ円形、全縁。葉が2型をなすことで他属から区別される。1型は茎に横につき、重なり、椀状、縁は内曲し2～3列の透明細胞で縁取られる。他の1型は茎に斜めつき、緩く重なり、ほとんど椀状とならず、縁は透明細胞で縁取られない。無性芽はない。

【生活史】

雌雄異株。胞子体は夏～秋に成熟する。

【生育環境】

山地の湿潤な常緑広葉樹の自然林において、樹幹や岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

本州（三重県）、九州（鹿児島県大隈半島、屋久島）の山地に不連続に分布する。国外では中国、韓国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

三重県御在所岳、鹿児島県大隅半島、屋久島に知られていたが、鹿児島県甬与志岳では絶滅し、三重県御在所岳でも近年生育が確認されていない。

【生育地の現況】

屋久島における生育は非常に狭い地域に限られる。

【個体数の現況】

屋久島における生育数は少ない。

存続を脅かす要因

産地が少なく、何らかの環境変化による乾燥化や登山道などの整備の影響が懸念され、絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採、分布・産地局限
	(現在)	森林伐採、分布・産地局限

特記事項

国立公園内にある生育地もある。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	ヤクシマアミバゴケ	<i>Hattoria yakushimensis</i> (Horik.) R.M.Schust.	CR+EN
第4次 2019:	ヤクシマアミバゴケ	<i>Hattoria yakushimensis</i> (Horik.) R.M.Schust.	CR+EN
第4次 2018:	ヤクシマアミバゴケ	<i>Hattoria yakushimensis</i> (Horik.) R.M.Schust.	CR+EN
第4次 2017:	ヤクシマアミバゴケ	<i>Hattoria yakushimensis</i> (Horik.) R.M.Schust.	CR+EN
第4次 2015:	ヤクシマアミバゴケ	<i>Hattoria yakushimensis</i> (Horik.) R.M.Schust.	CR+EN
第4次:	ヤクシマアミバゴケ	<i>Hattoria yakushimensis</i> (Horik.) R.M.Schust.	CR+EN
第3次:	ヤクシマアミバゴケ	<i>Hattoria yakushimensis</i> (Horik.) R.M.Schust.	CR+EN
第2次:	ヤクシマアミバゴケ	<i>Hattoria yakushimensis</i> (Horik.) Schust.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

三重県[絶滅危惧 IA 類(CR)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 長谷川二郎, 2002. 南九州の苔類相の研究 II. 甬与志岳の苔類相. 南九州大学園芸部研究報告, 32: 19-27.
- 井上浩, 1974. 日本産苔類図鑑. 189 pp. 築地書館, 東京.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp., 192 pls. 平凡社, 東京.
- Katagiri, T. and Y. Inoue, 2018. Phylogenetic position of the East Asian endemic genus *Hattoria* (Anastrophyllaceae) based on chloroplast DNA sequences. *Hattoria*, 9: 41-52.
- 山田耕作・小笠原昇一, 1971. *Hattoria yakushimensis* の新産地. 蘚苔地衣雑報, 5: 181.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hattoria yakushimensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hattoria yakushimensis* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



©片桐知之



©片桐知之

執筆者: 片桐知之（高知大学）
 Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

ミツデモミジゴケ

Neoorthocaulis floerkei (F.Weber & D.Mohr) L.Söderstr., De Roo & Hedd.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地は 5 か所が知られていたが、北アルプスの 2 か所では近年報告が無く、1 か所では生育数が少ない。また、本種の生育地は夏期の乾燥化が著しく、生育環境が悪化している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は、葉が和名のようにモミジに似て 3 裂する茎葉状苔類で、葉の形により近縁種から区別される。欧州や南北米などに分布しており、国内では南、北アルプスの数か所から知られる。生育地が少ないことから絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、緑褐色、匍匐し、長さ約 2.5 cm、幅約 2 mm。葉は外形は広卵形、1/5～1/4 まで浅く 3 裂し、裂片は鋭頭、基部に毛状の突起がある。腹葉は大きく、深く 2 裂し、裂片基部に長毛がある。無性芽はない。ヒメモミジゴケ (*Barbilophozia hatcheri* (A.Evans) Loeske) に似るが、葉は中部がもっとも幅広いことで区別される。

【生活史】

国内では造精子や造卵器、孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

高山帯において、腐植土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州中部高山に分布し、国外では北半球の寒帯、南アメリカ北部などに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

富山県北アルプスの立山、五色ヶ原、三俣蓮華に知られていが、五色ヶ原と三俣蓮華の現状は不明である。立山では室堂と称名川において確認されている。また、南アルプスの北岳（長野県）、間ノ岳（長野県）の山麓に分布している。

【生育地の現況】

生育地では夏期の乾燥化の影響が懸念される。

【個体数の現況】

少数。

存続を脅かす要因

産地が少なく局限しており、生育数が少ない。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

学名は長年、*Barbilophozia floerkei* (F.Weber & D.Mohr) Loeske であるとされてきたが、

近年の分子系統学的な研究の結果、新属が提唱された（Söderström et al., 2010）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ミツデモミジゴケ	<i>Neoorthocaulis floerkei</i> (F.Weber & D.Mohr) L.Söderstr., De Roo & Hedd.	VU
第4次 2019:	ミツデモミジゴケ	<i>Neoorthocaulis floerkei</i> (F.Weber & D.Mohr) L.Söderstr., De Roo & Hedd.	VU
第4次 2018:	ミツデモミジゴケ	<i>Neoorthocaulis floerkei</i> (F.Weber & D.Mohr) L.Söderstr., De Roo & Hedd.	VU
第4次 2017:	ミツデモミジゴケ	<i>Neoorthocaulis floerkei</i> (F.Weber & D.Mohr) L.Söderstr., De Roo & Hedd.	VU
第4次 2015:	ミツデモミジゴケ	<i>Neoorthocaulis floerkei</i> (F.Weber & D.Mohr) L.Söderstr., De Roo & Hedd. [= <i>Barbilophozia floerkei</i> (F.Weber & D.Mohr) Loeske]	VU
第4次:	ミツデモミジゴケ	<i>Neoorthocaulis floerkei</i> (F.Weber & D.Mohr) L.Söderstr., De Roo & Hedd. [= <i>Barbilophozia floerkei</i> (F.Weber & D.Mohr) Loeske]	VU
第3次:	ミツデモミジゴケ	<i>Barbilophozia floerkei</i> (F.Weber & D.Mohr) Loeske	DD
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

富山県[情報不足]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kitagawa, N., 1967. Two species of Lophoziaaceae, new to Japan. Bull. Nara U. Educ. (Nat.), 15: 37-43.
- 榊崎浩亮・片桐知之, 2010. 北岳・間の岳の苔類. 増沢武弘（編）, 南アルプス 地形と生物, pp. 257-276. 静岡県, 静岡.
- 坂井奈緒子, 2009. 富山県立山室堂平周辺の蘚苔類. 植物地理・分類研究, 56: 99-107.

- Söderström, L., R. D. Roo and T. Hedderson, 2010. Taxonomic novelties resulting from recent reclassification of the Lophoziaceae/Scapaniaceae clade. *Phytotaxa*, 3: 47-53.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Neoorthocaulis floerkei has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Neoorthocaulis floerkei* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
 Author: Tatsuwo Furuki

公表年月: 2025 年 3 月

マエバラアミバゴケ

Schizophyllopsis bidens (Reinw., Blume & Nees) Vána & L.Söderstr.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育が確認できなくなった地点が複数か所存在する。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は葉が 2/3 まで不等に 2 裂した全縁で、裂片が狭三角形で鋭尖することで近縁種から区別される茎葉状の苔類。東南アジアやヒマラヤなどの雲霧林に分布し、国内では屋久島の雲霧林において、樹幹にわずかに着生しているが、何らかの要因により、近年、生育数が減少している。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、暗赤色、匍匐ないし斜上し、長さ約 1 cm、幅約 1.3 mm。葉は 2/3 まですべて不等に 2 裂した全縁である。無性芽はない。裂片が狭三角形で鋭尖する特徴により近縁種から区別される。

【生活史】

国内では造精器や造卵器、胞子体は見つかっていない。

【生育環境】

空中湿度が高い常緑広葉樹やスギの自然林において樹幹に着生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では九州（屋久島）に分布し、国外ではヒマラヤ、中国、東南アジアにかけての雲霧林に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

湿度が高い溪谷や山頂付近に点在して分布するが、数十年前と比較すると確認された地点が減少した。

【生育地の現況】

減少は著しいが、その要因は明らかでない。何らかの環境変化によると思われる。

【個体数の現況】

かつては純群落を形成していたが、近年は生育量が少なく、他の蘚苔類にわずかに混生していることが多い。

存続を脅かす要因

産地は屋久島に局限し、何らかの要因により、生育量が減少しているため、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

Anastrophyllum bidens (Nees) Steph. から *Schizophyllopsis bidens* (Reinw., Blume & Nees)

Váňa & L.Söderstr.に変更された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	マエバラアミバゴケ	<i>Anastrophyllum bidens</i> (Nees) Steph.	CR+EN
第4次 2019:	マエバラアミバゴケ	<i>Anastrophyllum bidens</i> (Nees) Steph.	CR+EN
第4次 2018:	マエバラアミバゴケ	<i>Anastrophyllum bidens</i> (Nees) Steph.	CR+EN
第4次 2017:	マエバラアミバゴケ	<i>Anastrophyllum bidens</i> (Nees) Steph.	CR+EN
第4次 2015:	マエバラアミバゴケ	<i>Anastrophyllum bidens</i> (Nees) Steph.	CR+EN
第4次:	マエバラアミバゴケ	<i>Anastrophyllum bidens</i> (Nees) Steph.	CR+EN
第3次:	マエバラアミバゴケ	<i>Anastrophyllum bidens</i> (Nees) Steph.	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ, 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- Kitagawa, N., 1966. A revision of the family Lophoziaceae of Japan and its adjacent regions, II. J. Hattori Bot. Lab, 29: 101-149.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Schizophyllopsis bidens has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Schizophyllopsis bidens* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ツボミゴケ目 Jungermanniales アミバゴケ科 Anastrophyllaceae

キノボリヤバネゴケ

Sphenolobopsis pearsonii (Spruce) R.M.Schust.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 八ヶ岳と仙丈ヶ岳、御嶽山では近年確認されていない				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は単型属のアミバゴケ科茎葉状苔類。本科の中では小型で、腹葉が痕跡的で、分枝が茎の側面から出る頂端分枝に限られることを特徴としている。和名はヤバネゴケ科に似ており、樹幹に着生することにちなむ。実際には、岩上にも生育し、中部以西の亜高山帯に分布している。4 か所から確認されているが、40 年以上に亘り確認できない産地もあり、絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、緑褐色、長さ約 0.5 cm、幅は 1 mm 以下、葉は横につき、槌状、1/2～3/4 まで 2 裂し、裂片は披針形、葉基部にまれに棘がある。腹葉は数細胞からなる。無性芽はない。本科の中では腹葉が痕跡的で、分枝が茎の側面からでる頂端分枝をすることを特徴とする単型属。

【生活史】

雌雄異株。国内では花被と孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

亜高山帯、高山帯において、湿った風が当たる樹幹や岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州（山梨県、長野県）、四国（愛媛県）に分布し、国外では欧州、シベリア、北米東部、ヒマラヤ、台湾、ボルネオ、ニューギニアなどに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

八ヶ岳（山梨県）の落葉樹林の溪谷に生育していたが、近年は確認できない。南アルプス仙丈ヶ岳（長野県）の山頂下に生育していたが、近年は確認できない。御嶽山（長野県）の山頂付近で 1952 年に採集されているが、現状は不明である。愛媛県では石鎚山において確認されている。

【生育地の現況】

八ヶ岳や南アルプスでは生育地が乾燥化している。御嶽山は不明。石鎚山では溪谷の湿った岩上や倒木に少数が生育している。

【個体数の現況】

少数。

存続を脅かす要因

産地が局限しており、確認できない産地があり、生育量が非常に少ないことから絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

和名は樹幹に着生することにちなむが、岩上にも生育する。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	キノボリヤバネゴケ	<i>Sphenolobopsis pearsonii</i> (Spruce) R.M.Schust.	CR+EN
第4次 2019:	キノボリヤバネゴケ	<i>Sphenolobopsis pearsonii</i> (Spruce) R.M.Schust.	CR+EN
第4次 2018:	キノボリヤバネゴケ	<i>Sphenolobopsis pearsonii</i> (Spruce) R.M.Schust.	CR+EN
第4次 2017:	キノボリヤバネゴケ	<i>Sphenolobopsis pearsonii</i> (Spruce) R.M.Schust.	CR+EN
第4次 2015:	キノボリヤバネゴケ	<i>Sphenolobopsis pearsonii</i> (Spruce) R.M.Schust.	CR+EN
第4次:	キノボリヤバネゴケ	<i>Sphenolobopsis pearsonii</i> (Spruce) R.M.Schust.	CR+EN
第3次:	キノボリヤバネゴケ	<i>Sphenolobopsis pearsonii</i> (Spruce) R.M.Schust.	VU
第2次:	キノボリヤバネゴケ	<i>Sphenolobopsis pearsonii</i> (Spruce) Schust.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

愛媛県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎. 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Sphenolobopsis pearsonii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sphenolobopsis pearsonii* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

カラフトイチョウゴケ

Sphenolobus saxicola (Schrader) Steph.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 既知の生育地に近年確認されていない地点が多い。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種はヒメイチョウゴケ属の茎葉状苔類であるが、葉が2裂し、背側の裂片が著しく小さく、ヒシヤクゴケ属のように見えることが特徴である。北海道と本州の高山帯ハイマツ林の林床に知られているが、登山者の影響などを受けている産地もあり、絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、黄褐色、茎は斜上し、長さ約 3 cm、幅 1.5～1.8 mm。葉は 1/2 まで不等に 2 裂し、裂片は広三角形で鈍頭、全縁である。無性芽はない。背側の裂片が著しく小さく、ヒシャクゴケ属 (*Scapania*) のように見えることが特徴である。

【生活史】

雌雄異株。国内では胞子体は見つかっていない。

【生育環境】

高山帯においてハイマツ林やダケカンバ林の林床や岩壁に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道、本州中部の高山に点在して分布し、国外では欧米など北半球の冷温帯に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

北海道日高山脈や富山県では近年未確認である。長野県において、八ヶ岳、甲斐駒ヶ岳、仙状ヶ岳では少数が確認されているが、金峰山や白馬山では未確認である。山梨県では南アルプス北岳では近年に新たな産地が見つかった。

【生育地の現況】

比較的良好な生育地もあるが、夏期の乾燥や登山道整備の影響などにより分布範囲が狭くなっている生育地が多い。

【個体数の現況】

確認された産地においては、非常に少ない生育地もあるが、豊富に生育している生育地も確認された。個体数の詳細は不明。

存続を脅かす要因

夏期の乾燥や登山道整備により激減した産地もあり、多くの生育地において生育量が少ない。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限、気候変動
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

Anastrophyllum saxicola (Schr.) R.M.Schust. とされていたが、近年の分子系統学的解析の結果、従来亜属とされていた概念が属にされた。(Yatsentyuk et al., 2004)

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	カラフトイチョウゴケ	<i>Sphenolobus saxicola</i> (Schr.) Steph.	CR+EN
第4次 2019:	カラフトイチョウゴケ	<i>Sphenolobus saxicola</i> (Schr.) Steph.	CR+EN
第4次 2018:	カラフトイチョウゴケ	<i>Sphenolobus saxicola</i> (Schr.) Steph.	CR+EN
第4次 2017:	カラフトイチョウゴケ	<i>Sphenolobus saxicola</i> (Schr.) Steph.	CR+EN
第4次 2015:	カラフトイチョウゴケ	<i>Sphenolobus saxicola</i> (Schr.) Steph. [= <i>Anastrophyllum saxicola</i> (Schr.) R.M.Schust.]	CR+EN
第4次:	カラフトイチョウゴケ	<i>Sphenolobus saxicola</i> (Schr.) Steph. [= <i>Anastrophyllum saxicola</i> (Schr.) R.M.Schust.]	CR+EN
第3次:	カラフトイチョウゴケ	<i>Anastrophyllum saxicola</i> (Schr.) R.M.Schust.	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kitagawa, N., 1966. A revision of the family Lophoziaceae of Japan and its adjacent regions, Ⅱ. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 29: 101-149.
- Yatsentyuk, S. P., N. A. Konstantinova, M. S. Ignatov, J. Hyvönen and A. V. Troitsky, 2004. On phylogeny of Lophoziaceae and related families (Hepaticae, Jungermanniales) based on trnL-trnF intron-spacer sequences of chloroplast DNA. Molecular Systematics of Bryophytes Monographs in Systematic Botany, 98: 150-167.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Sphenolobus saxicola has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.
Sphenolobus saxicola is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
 Author: Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ツボミゴケ目 Jungermanniales ヤバネゴケ科 Cephaloziaceae

フクレヤバネゴケ

Nowellia aciliata (P.C.Chen & P.C.Wu) Mizut.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 1 か所では約 30 年間、生育が確認されていないため。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は中国と屋久島に知られている茎葉状苔類であり、葉縁の毛が短いことで長いフクロヤバネゴケと区別されている。屋久島の溪谷に知られているが、生育数が少ないため、絶滅が危惧されている。

協力者： 長谷川二郎（服部植物研究所）

基礎情報

【形態】

植物体は緑色～茶色の茎葉状で、腐木上を匍匐する。茎は 7～10 mm の長さで、あまり分枝しない。葉は茎から斜めに立ち上がるように開出し、広卵形で広く 2 裂し、背片の先は浅く湾入し、その先端は短く毛状になり、腹片は内側に巻いて袋状になる。雌花序は短い枝に頂生し、花被は先のつぼんだ円柱状で、3 稜。近縁のフクロヤバネゴケ (*N. curvifolia* (Dicks.) Mitt.) からは、葉先の毛状の棘が短い (1～4 細胞長) ことで区別される。

【生活史】

雌雄異株。国内では雄株と孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

常緑広葉樹の自然林の林床の腐木上に群生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

日本では、屋久島だけに知られている。国外では中国に分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

屋久島の限られた狭い範囲に確認されているが、約 30 年に亘り確認できない生育地がある。

【生育地の現況】

大きな変化はないと思われる。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

日本では屋久島でしか見つかっておらず、屋久島でも産地が狭い範囲に局限されており、消滅の可能性がある。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

1994年に、中国大陸から知られているこの種が屋久島に生育していることが明らかにされた。その後も、日本では屋久島以外では見つかっていない。日本にごく普通に見られるこの属の他の1種、フクロヤバネゴケとは葉縁の棘が非常に短いことなどで区別される。屋久島に生育する同属のフクレヤバネゴケを本種であると誤同定されている例があり、注意が必要である。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	フクレヤバネゴケ	<i>Nowellia aciliata</i> (P.C.Chen & P.C.Wu) Mizut.	VU
第4次 2019:	フクレヤバネゴケ	<i>Nowellia aciliata</i> (P.C.Chen & P.C.Wu) Mizut.	VU
第4次 2018:	フクレヤバネゴケ	<i>Nowellia aciliata</i> (P.C.Chen & P.C.Wu) Mizut.	VU
第4次 2017:	フクレヤバネゴケ	<i>Nowellia aciliata</i> (P.C.Chen & P.C.Wu) Mizut.	VU
第4次 2015:	フクレヤバネゴケ	<i>Nowellia aciliata</i> (P.C.Chen & P.C.Wu) Mizut.	VU
第4次:	フクレヤバネゴケ	<i>Nowellia aciliata</i> (P.C.Chen & P.C.Wu) Mizut.	VU
第3次:	フクレヤバネゴケ	<i>Nowellia aciliata</i> (P.C.Chen & P.C.Wu) Mizut.	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 水谷正美. 1994. 屋久島のとげの短いフクロヤバネゴケ. *Hikobia*, 11: 469-470.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Nowellia aciliata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Nowellia aciliata* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ケスジヤバネゴケ

Cephaloziella elachista (Gottsche & Rabenh.) Schiffn.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 今までに生育が報告された 3 地点の内、1 地点では生育が確認できなくなり、継続的な減少が推定される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

コヤバネゴケ属の種は多くの場合、微小な植物体がかたまって生えているが、ケスジヤバネゴケは細長い毛のような植物体が 1 本 1 本まばらにミズゴケ属の植物体の隙間を縫うようにして生育している。著しく離在し、深く切れ込んだ葉の基部に長い棘を生じるのが本種の特徴である。北半球の高緯度地域に広く分布しているが、国内では 2 か所に限られている。

協力者： 長谷川二郎（服部植物研究所）

基礎情報

【形態】

植物体は微小で茎葉状、淡緑色でミズゴケのマットの中に散在する。茎は匍匐し糸状で、長さは15 mmに達する。葉は著しく離在し、深く2裂し、裂片は鋭く尖り、一般に両縁の基部に1個の長い棘を有する。葉細胞は長方形、薄膜でトリゴンは不明瞭である。腹葉は顕著で、葉と同形であるが、やや小さい。無性芽は見つかっていない。近縁種のミヤマバネゴケ (*Cephaloziella spinigera* (Lindb.) Warnst.) からは、葉基部に棘状の鋸歯があること、葉細胞が薄膜あることで区別される。

【生活史】

国内では生殖器官も無性芽も見つかっておらず、繁殖の仕方については不明。

【生育環境】

ミズゴケ湿原のミズゴケのマットの中に、糸くずのような植物体の1本1本がまばらに、かたまりを作ることなく生育している。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 低標高地】湿地・湿原・細流

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では、本州（青森県、福島県、京都府）の3か所で確認されている。国外ではヨーロッパと北アメリカに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

青森県八甲田山と福島県赤井谷地、京都府深泥池のミズゴケ湿原に知られていた。福島県と京都府では生育が確認されているが、青森県の生育地では近年の詳細な調査においても生育が確認できない。

【生育地の現況】

福島県と京都府の産地では、生育は比較的良好であるが、青森県の生育地では何らかの要因により、悪化している可能性がある。生育地は特殊な環境条件を有しているので、その条件を維持できるよう生育地を保護する必要がある。

【個体数の現況】

少数。

存続を脅かす要因

世界的には、北半球の高緯度地方に広く分布しているが、日本では産地はミズゴケ湿原に局限されており、気候変動や遷移の進行による湿原の乾燥化により消滅することが危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

本種はミズゴケ属の植物体に絡まるように生育しており、現地調査において見過ごされている可能性もある。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	ケスジャバナゴケ	<i>Cephaloziella elachista</i> (Gottsche & Rabenh.) Schiffn.	VU
第4次 2019:	ケスジャバナゴケ	<i>Cephaloziella elachista</i> (Gottsche & Rabenh.) Schiffn.	VU
第4次 2018:	ケスジャバナゴケ	<i>Cephaloziella elachista</i> (Gottsche & Rabenh.) Schiffn.	VU
第4次 2017:	ケスジャバナゴケ	<i>Cephaloziella elachista</i> (Gottsche & Rabenh.) Schiffn.	VU
第4次 2015:	ケスジャバナゴケ	<i>Cephaloziella elachista</i> (Gottsche & Rabenh.) Schiffn.	VU
第4次:	ケスジャバナゴケ	<i>Cephaloziella elachista</i> (Gottsche & Rabenh.) Schiffn.	VU
第3次:	ケスジャバナゴケ	<i>Cephaloziella elachista</i> (Gottsche & Rabenh.) Schiffn.	VU
第2次:	ケスジャバナゴケ	<i>Cephaloziella elachista</i> (Gott. et Rabenh.) Schiffn.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

青森県[要調査野生生物（D ランク）] 福島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 京都府[絶滅寸前種]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 長谷川二郎, 1981. 深泥池に見つかった北方系の苔類. 深泥池の自然と人, p. 134. 京都市文化観光局, 京都.
- 北川尚史, 1978. 日本新産 *Cephaloziella elachista*. 蘚苔地衣雑報, 8: 9.
- 大須賀昭雄・湯澤陽一・樋口利雄, 1996. 赤井谷地の自然 -赤井谷地とその周辺のフロラ-. 会津若松市文化財調査報告書, (49): 43-66.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Cephaloziella elachista has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cephaloziella elachista* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Low-altitude area】 Wetland/Marsh/Stream
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
Author: Tatsuwo Furuki

公表年月: 2025 年 3 月

ミゾゴケモドキ

Scapania cuspiduligera (Nees) Müll.Frib.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧 I B 類 (EN)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。					
【地点数】5 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
生育が確認できなくなった地点が複数か所存在する。生育が確認できる 1 地点では個体数が非常に少なく、有性生殖は確認できず、無性芽による生殖しか確認できない。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

本種はヒシヤクゴケ属の茎葉状苔類であるが、葉が約 1/3 まで不等に 2 裂し、緩く折りたたまれ、背片が背側に開くため、ミゾゴケ属のように見えることが大きな特徴で、和名の由来になっている。本州中部の石灰岩地域に分布しているが、河川開発にともなう森林伐採や生育地の乾燥化などの影響により減少している産地がある。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、黄緑色、長さ 1～1.5 cm、幅 1～2 mm。葉は広く開出し、約 1/3 まで不等に 2 裂し、裂片は三角形、鈍頭。緩く折りたたまれ、背片が背側に開くため、ミゾゴケ属 (*Marsupella*) のように見えることが和名の由来であり、この特徴により、同属の他種から容易に区別できる。無性芽は葉先につき、2 細胞性で楕円体。

【生活史】

国内では造精器や造卵器、孢子体は見つかっていない。無性芽は豊富である。

【生育環境】

ブナ林や亜高山性針葉樹林の自然林において石灰岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では関東甲信地方の山岳地帯（南アルプス、秩父山地）の石灰岩地に点在し、国外では欧州、シベリア、中国、北米、コロンビア、アルゼンチン、コンゴなどに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

秩父山地では生育が確認できない。南アルプスでは近年生育が確認できない生育地もあり、生育面積が狭く、生育量も非常に少ない。

【生育地の現況】

秩父山地のブナ林では河川開発にともなう森林伐採の影響により乾燥化が進んでいる。秩父山地の亜高山帯では生育地が何らかの影響により乾燥化した。

【個体数の現況】

個体数は非常に少なく、250 個体未満であると推測される。

存続を脅かす要因

産地は 4 か所と少なく局限している。秩父山地のブナ林では河川開発にともなう森林伐採の影響により乾燥化が進んでいる。秩父山地の亜高山帯では生育地が何らかの影響により乾燥化した。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発, 分布・産地局限, 気候変動
	(現在)	森林伐採, 河川開発, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ミゾゴケモドキ	<i>Scapania cuspiduligera</i> (Nees) Müll.Frib.	CR+EN
第4次 2019:	ミゾゴケモドキ	<i>Scapania cuspiduligera</i> (Nees) Müll.Frib.	CR+EN
第4次 2018:	ミゾゴケモドキ	<i>Scapania cuspiduligera</i> (Nees) Müll.Frib.	CR+EN
第4次 2017:	ミゾゴケモドキ	<i>Scapania cuspiduligera</i> (Nees) Müll.Frib.	CR+EN
第4次 2015:	ミゾゴケモドキ	<i>Scapania cuspiduligera</i> (Nees) Müll.Frib.	CR+EN
第4次:	ミゾゴケモドキ	<i>Scapania cuspiduligera</i> (Nees) Müll.Frib.	CR+EN
第3次:	ミゾゴケモドキ	<i>Scapania cuspiduligera</i> (Nees) Müll.Frib.	CR+EN
第2次:	ミゾゴケモドキ	<i>Scapania cuspiduligera</i> (Nees) K. Muell.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 長野県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 平岡照代・磯野寿美子・平岡庄三郎, 2008. 塩川（長野県下伊那郡大鹿村）の苔類. 自然環境科学研究, 21: 21-36.
- Inoue, H., 1958. An arctic *Scapania* found in the Chichibu Mountains, Japan. Bryologist, 61: 259-261.
- 榊崎浩亮・片桐知之, 2010. 北岳・間の岳の苔類. 増沢武弘（編）, 南アルプス 地形と生物. pp. 257-276, 静岡県, 静岡.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Scapania cuspiduligera has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Scapania cuspiduligera* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location. b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

イボヒシヤクゴケ

Scapania verrucosa Heeg

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 本種の生育地では乾燥化が進んでいるため、生育面積および生育数が減少している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種はヒシヤクゴケ科の茎葉状苔類で、葉身細胞の表面に著しいいぼ状ベルカがあることからイボヒシヤクゴケと呼ばれている。同じようなイボ状ベルカを持つウニバヒシヤクゴケは葉縁に長毛状の歯があり、本種は鋸歯状である。国外では欧州、ヒマラヤ、中国、ロシア（極東）、ハワイなどに知られているが、国内では徳島県阿南市、長野県南アルプス山麓、埼玉県秩父山地の 3 か所だけに生育し、生育範囲が狭く、近年、生育地の乾燥により生育数が減少している生育地があり、絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、黄緑～黄褐色、長さ 1～2 cm、幅 2.5～3.5 mm。葉は広く開出し、約 1/3 まで不等に 2 裂し、腹片は楕円形、円頭～鋭頭。背片は楕円形、腹片の約 3/5 長、円頭～鋭頭。緩く折りたたまれ、葉縁に 1～2 細胞からなる鋸歯があり、葉身細胞の表面に著しいいぼ状ベルカがある。無性芽は葉先につき、2～4 細胞性で多面体、黄～赤褐色～褐色。

【生活史】

国内では造精器や造卵器、胞子体は見つかっていない。無性芽は豊富である。

【生育環境】

中標高地の石灰岩地帯の湿った岸壁に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】裸地、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では徳島県、長野県、埼玉県に分布し、国外では欧州、ヒマラヤ、中国、ロシア（極東）、ハワイなどに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

徳島県阿南市、長野県南アルプス山麓、埼玉県秩父山地の石灰岩地の湿った崖に生育している。

【生育地の現況】

乾燥化が進み、生育面積が減少し、生育数も減少している。

【個体数の現況】

おおよそ数 100 個体であると推定される。

存続を脅かす要因

産地は国内では 3 か所に局限し、生育地は何らかの要因により乾燥化しているため、近年、生育面積と生育数が減少し、絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限, その他（生育地の乾燥化）, 気候変動
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	—	—	—
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—
第4次 2017:	—	—	—
第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 長野県[情報不足(DD)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 秋山弘之, 2014. 中央新幹線アセスメント調査で確認された長野県産絶滅危惧種. 蘚苔類研究, 1: 81-82.
- Inoue, H., 1985. Taxonomic miscellany on hepatics (5). J. Jpn. Bot., 60: 332-336.
- 狩野登之助・佐治まゆみ, 2016. イボヒシヤクゴケは徳島県にも産す. 蘚苔類研究, 11: 219.
- Mamontov, Y. S. & A. D. Potemkin., 2013. *Scapania verrucosa* Heeg (Scapaniaceae, Marchantiophyta) in Russia. Arctoa, 22: 145-149.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Scapania verrucosa has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Scapania verrucosa* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Bare area, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution, Other（生育地の乾燥化）, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ツボミゴケ目 Jungermanniales ミゾゴケ科 Gymnomitriaceae

エゾヒメソロイゴケ

Cryptocoleopsis imbricata Amakawa

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab

基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。

【地点数】5 地点以下

b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

生育地では森林の遷移による環境の変化や生育地の乾燥化等により、個体群が衰退、減少傾向であることが観察されている。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

本種は北海道利尻島から記載された単型属の茎葉状苔類。ミゾゴケ科の中では花被を欠くという際だった特徴がある。北海道と本州の亜高山帯に分布する。生育地の乾燥や光環境の変化の影響と思われる生育数の減少が見られ、生育を確認できない産地がある。

協力者： 樋口正信（国立科学博物館）

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、匍匐ないし斜上し密な群落を作り、弱い金属光沢がある緑色で、長さ 5～8 mm、幅は葉を含めて 0.5～1 mm。葉は茎に横ないし斜めにつき、瓦状に密に重なり、卵形。腹葉はない。油体は 1 細胞に 2～4 個、ブドウの房状で、眼点がある。無性芽はない。雌花は茎に頂生、花被を欠き、多肉質となる。単型属。

【生活史】

雌雄異株。胞子は夏に成熟する。

【生育環境】

高山帯ハイマツ林や亜高山性針葉樹の自然林の明るい林内の岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道、本州の亜高山帯以上に分布し、国外では中国とロシアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

近年、北海道では確認されていないが、八甲田山（青森県）や八ヶ岳（長野県）、南アルプス（山梨県）ではわずかに確認されている。御嶽山では噴火の影響を受けていると思われるが詳細は不明。立山（富山県）では 50 年以上現状不明である。

【生育地の現況】

高山帯の岩上や明るい亜高山帯の林内に生育する。八ヶ岳亜高山帯では樹木の成長により暗くなり、減少している産地がある。

【個体数の現況】

生育地では数 10 個体からなる小さい群落を形成している。

存続を脅かす要因

産地が少なく局限している。生育地の乾燥化や森林の更新により、影響を受けている生育地もある。

要因の区分：	（過去）	遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限, 気候変動
	（現在）	分布・産地局限

特記事項

1959年に北海道利尻島産の標本に基づいて新種として記載された単型属である。ミゾゴケ科としては花被を欠くという特異な形態をしている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	エゾヒメソロイゴケ	<i>Cryptocoleopsis imbricata</i> Amakawa	VU
第4次 2019:	エゾヒメソロイゴケ	<i>Cryptocoleopsis imbricata</i> Amakawa	VU
第4次 2018:	エゾヒメソロイゴケ	<i>Cryptocoleopsis imbricata</i> Amakawa	VU
第4次 2017:	エゾヒメソロイゴケ	<i>Cryptocoleopsis imbricata</i> Amakawa	VU
第4次 2015:	エゾヒメソロイゴケ	<i>Cryptocoleopsis imbricata</i> Amakawa	VU
第4次:	エゾヒメソロイゴケ	<i>Cryptocoleopsis imbricata</i> Amakawa	VU
第3次:	エゾヒメソロイゴケ	<i>Cryptocoleopsis imbricata</i> Amak.	VU
第2次:	エゾヒメソロイゴケ (マルバサキジロゴケ)	<i>Cryptocoleopsis imbricata</i> Amak.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況 (令和4年度末時点)

富山県[情報不足] 長野県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況 (令和4年度末時点)

指定なし

参考文献

- Amakawa, T., 1957. Family Jungermanniaceae of Japan. I. J. Hattori Bot. Lab, 21: 248-291.
- 樋口正信, 2023. エゾヒメソロイゴケの新産地. 蘚苔類研究, 13: 15.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- Kitagawa, N., 1959. New or interesting species of *Gymnomitrium* (Hepaticae) in Japan. Acta Phytotax. Geobot., 18: 33-38.
- Kitagawa, N., 1963. A revision of the family Marsupellaceae of Japan. J. Hattori Bot. Lab., 26: 76-118.
- 大石善隆・山田耕作, 2008. 利尻島産のタイ類とツノゴケ類. 利尻研究, 27: 63-72.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Cryptocoleopsis imbricata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cryptocoleopsis imbricata* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
 Author: Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

イトミゾゴケ

Marsupella boeckii (Austin) Lindb. ex Kaal.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 北半球の周北地域や高標高地などの冷涼な環境に生育しているが、夏の高温と乾燥により群落が消失する可能性があり、一部の生育地では生育量の減少が観察されている。気候変動によって今後も減少が危惧される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は苔類ミゾゴケ属の中では最も小型で、細い茎に小さい葉が離在し、葉が小さくて糸のように見える植物体をしている。この外見から野外ではコヤバネゴケ属の種と間違え易い。しかし、花被が沈生して雌苞葉に隠れており、腹葉を欠くことで区別できる。北半球の北部に分布し、国内では北海道と本州中部の亜高山の 2 か所に知られている。生育数が少なく、絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

植物体は淡緑色、茎葉状、非常に小さくて繊細、長さ数～15 mm、幅は葉を含めて約0.2～0.25 mm、葉は離生し、1/2～1/5 まで不等に2裂し、裂片は三角形状、先端は鈍頭または鋭頭である。腹葉はない。葉細胞は、多角形で薄膜から厚膜で、大きなトリゴンを持つ。油体は球形～楕円体、葉身細胞に主に2（まれに3～4）個含まれ、無色、極微粒からなる。雌雄異株。雌花は主茎に頂生、花被は雌苞葉に沈生する。雄苞葉は主茎に2～5対が頂生し、1/3～2/5 まで2裂し、基部は膨れ、先端は円頭～鈍頭、葉腋に造精器を1～3個つける。若い胞子体が確認されている。

【生活史】

雌雄異株。無性芽はない。

【生育環境】

雪渓脇や年中凍土が存在するような高山帯において、岩水が滴る岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道と長野県に分布し、国外では欧州やヒマラヤ、シベリア、アリューシャン、北米など北半球の北部に分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

北海道羅臼岳と長野県八ヶ岳から知られている。北海道では最近では調査されていないので不明である。八ヶ岳では亜高山帯針葉樹林の湿った岩上にわずかに生育している。

【生育地の現況】

北海道では1984年に確認されて以降、調査されておらず、生育環境の現状は不明である。八ヶ岳では大きな安山岩の岩塊の隙間の岩上に1×2 cmの小さな純群落を形成していたが、近年、周辺の樹木が倒れた影響による乾燥化の影響を受けている。

【個体数の現況】

北海道では不明である。長野県では数十個体である。

存続を脅かす要因

生育地の気温上昇と乾燥化である。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限, 気候変動
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	イトミゾゴケ	<i>Marsupella boeckii</i> (Austin) Kaal.	DD
第4次 2019:	イトミゾゴケ	<i>Marsupella boeckii</i> (Austin) Kaal.	DD
第4次 2018:	イトミゾゴケ	<i>Marsupella boeckii</i> (Austin) Kaal.	DD
第4次 2017:	イトミゾゴケ	<i>Marsupella boeckii</i> (Austin) Kaal.	DD
第4次 2015:	イトミゾゴケ	<i>Marsupella boeckii</i> (Austin) Kaal.	DD
第4次:	イトミゾゴケ	<i>Marsupella boeckii</i> (Austin) Kaal.	DD
第3次:	イトミゾゴケ	<i>Marsupella boeckii</i> (Austin) Kaal.	DD
第2次:	イトミゾゴケ	<i>Marsupella boeckii</i> (Austin) Kaal.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 古木達郎・滝田謙譲, 1988. 北海道羅臼岳で見つかった日本新産の苔類. 日本蘚苔類学会会報, 4: 197-200.
- 古木達郎・島立正広, 2015. 長野県八ヶ岳においてイトミゾゴケが見つかる. 蘚苔類研究, 11: 138-139.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Marsupella boeckii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Marsupella boeckii* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location. b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	古木達郎 (元千葉県立中央博物館) Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ミジンコミゾゴケ

Marsupella vermiformis (R.M.Schust.) Bakalin & Fedosov

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab

基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。

【地点数】5 地点以下

b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

発見されてまもなく生育数の減少が観察されており、継続的な減少が推定される。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

本種はボルネオ島から記載されたミゾゴケ属の苔類で、ニューギニアや韓国に分布しており、国内では屋久島に知られている。本属の中ではもっとも小さいことからミジンコミゾゴケと呼ばれる。山頂部の花崗岩上に生育しており、登山者の影響を受け易く、絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、長さ数 mm、幅約 0.1 mm、葉は横につき、圧接、1/5～1/4 まで 2 裂し、裂片は三角形状。花被は円筒形。胞子体は未知。葉が小さくて植物体が紐状になることで他種から容易に区別される。

【生活史】

雌雄異株。国内では成熟した胞子体は見つかっていないため、胞子が成熟する季節は不明である。

【生育環境】

山頂の露岩地帯において、霧がかかりやすい大きな花崗岩の壁面に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では鹿児島県屋久島の山頂付近に分布し、国外ではニューギニアやボルネオ島、韓国などに知られている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

富浦岳と永田岳に生育し、発見されて以来、生育地点数に変化はない。

【生育地の現況】

山頂部の霧がかかりやすい大きな花崗岩の壁面に知られている。一般の登山者でも容易に手が届くところに生育している。

【個体数の現況】

発見後に、1 地点においては生育数の減少が確認された。

存続を脅かす要因

生育地は局限しており、登山道沿いにあるため、絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限, その他（登山者による被害）, 気候変動
	(現在)	分布・産地局限, その他（登山者による被害）

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ミジンコミゾゴケ	<i>Marsupella stoloniformis</i> N.Kitag. ssp. <i>vermiformis</i> R.M.Schust.	CR+EN
第4次 2019:	ミジンコミゾゴケ	<i>Marsupella stoloniformis</i> N.Kitag. ssp. <i>vermiformis</i> R.M.Schust.	CR+EN
第4次 2018:	ミジンコミゾゴケ	<i>Marsupella stoloniformis</i> N.Kitag. ssp. <i>vermiformis</i> R.M.Schust.	CR+EN
第4次 2017:	ミジンコミゾゴケ	<i>Marsupella stoloniformis</i> N.Kitag. ssp. <i>vermiformis</i> R.M.Schust.	CR+EN
第4次 2015:	ミジンコミゾゴケ	<i>Marsupella stoloniformis</i> N.Kitag. ssp. <i>vermiformis</i> R.M.Schust.	CR+EN
第4次:	ミジンコミゾゴケ	<i>Marsupella stoloniformis</i> N.Kitag. ssp. <i>vermiformis</i> R.M.Schust.	CR+EN
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Bakalín, V. A., V. E. Fedosov, A. V. Fedorova & V. S. Nguyen, 2019. Integrative taxonomic revision of *Marsupella* (Gymnomitriaceae, Hepaticae) reveals neglected diversity in Pacific Asia. *Cryptog. Bryol.*, 40: 59-85.
- 横山勇人・山口富美夫・秋山弘之・古木達郎・田中篤司・嶋村正樹・出口博則, 2006. 屋久島における蘚苔類の生態学的研究. *蘚苔類研究*, 9: 124.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Marsupella vermiformis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Marsupella vermiformis* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution, Other (登山者による被害) , Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
 Author: Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ツボミゴケ目 Jungermanniales ミゾゴケ科 Gymnomitriaceae

キレハウロコゴケ

Nardia breidleri (Limpr.) Lindb.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地が乾燥化しており、継続的な減少が見られる。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は非常に珍しい茎葉状苔類で、欧州やシベリア、北アメリカ大陸に分布し、国内では北海道 1 か所と本州中部の 3 か所において亜高山帯以上の岩場や倒木上に生育する。夏の乾燥化により減少していたが、最近 20 年間は確認されていない。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、茶褐色、匍匐し、長さが数 mm、幅は葉を含めて 0.3 mm。分枝は主にハネゴケ型分枝、稀にヤスデゴケ型分枝をする。葉は 1/5～1/3 まで 2 裂し、裂片は三角形、鈍頭、全縁。腹葉は痕跡的、全縁。葉身細胞は多角形で薄壁、トリゴンは小さく、油体は各細胞に 1～2 個で微粒からなる。花被は雌苞葉と雌腹苞葉に沈生し、ペリギニウムが発達し、短く下延し、マルスピウムが発達する。

【生活史】

雌雄異株。無性芽は知られていない。

【生育環境】

高山帯の岩壁やハイマツ林内の岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道（大雪山）、長野県（木曽御嶽山、八ヶ岳）、石川県（白山）に分布し、国外では欧州、シベリア、北米などに知られている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

北海道と石川県では 50 年以上不明。木曽御嶽山では現状不明。八ヶ岳では 20 年前には確認できたが、近年は夏期の乾燥により確認できなくなった。

【生育地の現況】

八ヶ岳では夏期の乾燥化が顕著である。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

生育地の乾燥化。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限, 気候変動
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	キレハウロコゴケ	<i>Nardia breidler</i> (Limpr.) Lindb.	DD
第4次 2019:	キレハウロコゴケ	<i>Nardia breidler</i> (Limpr.) Lindb.	DD
第4次 2018:	キレハウロコゴケ	<i>Nardia breidler</i> (Limpr.) Lindb.	DD
第4次 2017:	キレハウロコゴケ	<i>Nardia breidler</i> (Limpr.) Lindb.	DD
第4次 2015:	キレハウロコゴケ	<i>Nardia breidler</i> (Limpr.) Lindb.	DD
第4次:	キレハウロコゴケ	<i>Nardia breidler</i> (Limpr.) Lindb.	DD
第3次:	ミヤマウロコゴケ	<i>Nardia breidler</i> (Limpr.) Lindb.	DD
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Amakawa, T., 1959. Family Jungermanniaceae of Japan I. J. Hattori Bot. Lab., 21: 248-291.
- Furuki, T. and H. Inoue, 1984. The Hepaticae and Anthocerotae of the Mts. Yatsugatake, central Japan. Bull. Natl. Sci. Mus., Tokyo ser. B (Bot.), 10: 1-25.
- Hattori, S., 1958. The Hepaticae of Ontake Mountain, middle Japan. J. Hattori Bot. Lab., 20: 33-53.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Nardia breidler has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Nardia breidler* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ツボミゴケ目 Jungermanniales ツボミゴケ科 Jungermanniaceae

ヤツガタケツボミゴケ

Jungermannia borealis Damsh. & Váňa

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 夏期の乾燥化が著しく、生育への影響が懸念される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種はヨーロッパ、北アメリカ、極東ロシアに分布する茎葉状苔類。国内では本州中部の亜高山帯及び高山帯露岩地の湿った石灰岩および安山岩質集塊岩上に小さな純群落をなすが、夏季の乾燥化により生育数が減少している。

基礎情報

【形態】

植物体は緑色～灰緑色、しばしば赤味を帯び、茎葉状、長さ 5～15 mm、幅は葉を含めて 0.5～1.5 mm。茎の腹面、または側面から分枝する。葉は瓦状に離在～密に重なり、楕円～卵形。腹葉はない。仮根は散在し、無色～淡茶色。雄花は茎の途中につく。雌花は頂生、花被は紡錘形。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。無性芽はない。

【生育環境】

亜高山帯及び高山帯露岩地の湿った石灰岩および安山岩の集塊岩上に小さな純群落をなす。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では長野県に分布する。国外ではヨーロッパ、北アメリカ、極東ロシアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

八ヶ岳山頂付近と南アルプス仙丈ヶ岳山麓の地蔵岳から報告されているが、近年、南アルプスについては不明である。

【生育地の現況】

八ヶ岳横岳に生育しているが、近年、夏季の乾燥が著しく、生育範囲が狭くなっている。南アルプスの現況は不明である。

【個体数の現況】

数 10 個体。

存続を脅かす要因

夏期の乾燥化が著しく、影響が懸念される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限, 気候変動
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	—	—	—
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—
第4次 2017:	—	—	—
第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Bakalin, V. A., 2014. The revision of ‘*Jungermannia* s. l. ’ in the North Pacific: the genera *Endogemma*, *Jungermannia* s. str., *Metasolenostoma*, *Plectocolea* and *Solenostoma* (Hepaticae). *Botanica Pacifica*, 3: 55-128.
- 片桐知之・古木達郎, 2018. 日本産タイ類・ツノゴケ類チェックリスト, 2018. 蘚苔類研究, 10: 291-292.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Jungermannia borealis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Jungermannia borealis* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ツボミゴケ目 Jungermanniales ツボミゴケ科 Jungermanniaceae

オオイチョウゴケ

Mesoptychia collaris (Nees) L.Söderstr. & Váňa

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 国内において最初に報告された 1970 年当時と比較して、生育地点周辺の蘚苔類の減少が観察されており、本種についても減少していると判断した。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は、本属としては大きいことが和名の由来になっている茎葉状苔類。葉が横に広く、大きな腹葉で近縁種から区別される。北半球の石灰岩地の高山に分布し、国内では南アルプスの山頂付近の 3 地点の非常に限られた範囲から少数が知られている。登山者などの影響が懸念される。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、緑色、匍匐し、長さ 1～3 cm、幅 1～2 mm。葉はやや横に広く、1/4～1/3 まで 2 裂し、裂片は三角形、鋭頭。腹葉は大きく、長三角形、縁に数本の毛を持つ。葉身細胞はトリゴンが小さく、表面に弱いベルカがある。無性芽はない。横広の葉と大きな腹葉を特徴として近縁種から区別される。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

高山帯の石灰岩の露頭に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では南アルプスに分布し、国外では欧米や中国などの石灰岩地域に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1970 年に南アルプス仙丈ヶ岳から報告されて以来、生育が確認されていなかったが、約 40 年ぶりに南アルプス北岳（山梨県）、物見岳（山梨県）、間ノ岳（静岡県）から確認された。全ての生育地において生育範囲は限られている。

【生育地の現況】

生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

小さい群落を形成し、個体数は少ない。

存続を脅かす要因

産地は少なく局在し、登山者の活動などによる減少が懸念される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限, その他（登山者の活動）, 気候変動
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

学名は、 *Lophozia collaris* (Nees) Dumort. とされていたが、近年、分子系統学的な知見に基づき属の概念が変更され、 *Leiocolea* に移された。更にその後、ブシュカンゴケ属

Mesoptychia とされた (Vána et al., 2012)。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オオイチョウゴケ	<i>Leiocolea collaris</i> (Nees) Schljakov	CR+EN
第4次 2019:	オオイチョウゴケ	<i>Leiocolea collaris</i> (Nees) Schljakov	CR+EN
第4次 2018:	オオイチョウゴケ	<i>Leiocolea collaris</i> (Nees) Schljakov	CR+EN
第4次 2017:	オオイチョウゴケ	<i>Leiocolea collaris</i> (Nees) Schljakov	CR+EN
第4次 2015:	オオイチョウゴケ	<i>Leiocolea collaris</i> (Nees) Schljakov [= <i>Lophozia collaris</i> (Nees) Dumort.]	CR+EN
第4次:	オオイチョウゴケ	<i>Leiocolea collaris</i> (Nees) Schljakov [= <i>Lophozia collaris</i> (Nees) Dumort.]	CR+EN
第3次:	オオイチョウゴケ	<i>Leiocolea collaris</i> (Nees) Schljakov (= <i>Lophozia collaris</i> (Nees) Dumort.)	DD
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 榊崎浩亮・片桐知之, 2010. 北岳・間の岳の苔類. 増沢武弘(編), 南アルプス 地形と生物. pp. 257-276, 静岡県, 静岡.
- Takaki, N., T. Amakawa, T. Osada and E. Sakuma, 1970. Bryophytes flora of Mt. Kaikoma, Mt. Senjo and Mt. Kitadake (Southern Japan Alps). J. Hattori Bot. Lab., 33: 171-202.
- Vána, J., L. Söderström, A. Hagborg and M. von Konrat, 2012. Notes on early land plants today 8. New combinations and some lectotypifications in *Mesoptychia*. Phytotaxa, 65: 52-56.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Mesoptychia collaris has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Mesoptychia collaris* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution, Other（登山者の活動）, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎（元千葉県立中央博物館）
 Author: Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ヤエヤマスギバゴケ

Neolepidozia mamillosa (Schiffn.) E.D.Cooper

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 本種の生育地であるマングローブ林の減少により、本種の生育が脅かされている。全ての生育地はゴミの漂着などにより環境が悪化している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

葉が丸みを帯び、縁が不規則に突出することを特徴とするヒラハスギバゴケ属の茎葉性苔類。蘚苔類は海水の影響を嫌うため海辺にはほとんど生育していないが、本種はマングローブ林縁の土上に生育する珍しい種として知られる。近年のマングローブ林の減少により、本種の生育も脅かされている。

協力者: 山口富美夫 (広島大学)・佐藤匠 (広島大学)・西畑和輝 (広島大学)・桐生賢太 (広島大学)

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、緑色、茎葉性、長さ数 mm、幅は葉を含めて 0.7 mm、葉は茎にほぼ水平に広がり、先端は 4 裂し、裂片の基部は 2 細胞幅。葉細胞が丸みを帯び、縁部の細胞が不規則に突出する。腹葉は葉と同形だが、小さい。無性芽はない。細胞が凸レンズ状に丸みを帯びる特徴により他種から区別できる。なおタイプ産地であるニューギニア産の植物体では長さが 2～3 cm、葉を含めた幅は 0.5 mm として知られている。

【生活史】

国内では造精器や造卵器、孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

マングローブ林内において陸側の林縁部の土上にのみ生育する。

生育環境区分：	【陸域_海岸部】塩沼地・塩性湿地・河口干潟

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では沖縄県西表島に分布し、分布の北限として知られる。国外ではボルネオ、ニューギニアなどに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

産地数について大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

マングローブ林に知られるが、全ての生育地において環境が悪化している。

【個体数の現況】

生育数は減少している。

存続を脅かす要因

産地が少なく局限しており、生育地はゴミの漂着などにより環境が悪化している。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

国立公園内にある生育地もある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヤエヤマシギバゴケ	<i>Lepidozia mamillosa</i> Schiffn.	CR+EN
第4次 2019:	ヤエヤマシギバゴケ	<i>Lepidozia mamillosa</i> Schiffn.	CR+EN
第4次 2018:	ヤエヤマシギバゴケ	<i>Lepidozia mamillosa</i> Schiffn.	CR+EN
第4次 2017:	ヤエヤマシギバゴケ	<i>Lepidozia mamillosa</i> Schiffn.	CR+EN
第4次 2015:	ヤエヤマシギバゴケ	<i>Lepidozia mamillosa</i> Schiffn.	CR+EN
第4次:	ヤエヤマシギバゴケ	<i>Lepidozia mamillosa</i> Schiffn.	CR+EN
第3次:	ヤエヤマシギバゴケ	<i>Lepidozia mamillosa</i> Schiffn.	CR+EN
第2次:	ヤエヤマシギバゴケ	<i>Lepidozia mamillosa</i> Schiffn.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Cooper, E. D., L. Söderström, A. Hagborg and M. von Konrat, 2013. Notes on early land plants today. 38. New combinations and synonyms in Lepidoziaceae (Marchantiophyta). *Phytotaxa*, 97: 52-62.
- Engel, J. J. and G. L. S. Merrill, 2004. Austral Hepaticae. 35. A taxonomic and phylogenetic study of *Telaranea* (Lepidoziaceae), with a monograph of the genus in temperate Australasia and commentary on extra-Australasian taxa. *Fieldiana Bot.*, 44: 1-261.
- Schiffner, V., 1893. Ueber exotische hepaticae, hauptsächlich aus Java, Amboina und Brasilien, nebst einigen morphologischen und kritischen Bemerkungen über *Marchantia*. *Nova Acta Acad. Caes. Leop. - Carol. German. Nat. Cur.*, 60: 217-316.
- 山口富美夫・中越信和・根平邦人, 1987. マングローブ林内の土上蘚苔類. 日本蘚苔類学会会報, 4: 137-140.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Neolepidozia mamillosa has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Neolepidozia mamillosa* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of

a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】 Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland)
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

シャンハイハネゴケ

Plagiochila shangaica Steph.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 現在までに確認されている生育地点は 2 地点であり、その内の 1 地点である三重県では現在生育が確認できないため、継続的な減少が推定される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種はハネゴケ属の種としては葉が全縁であることを特徴とする茎葉状苔類。ヒマラヤや中国などに知られる。日本では山口県において 1982 年に初めて生育が確認され、最近も生育が確認されているが、三重県では 50 年以上生育が確認できないため、絶滅が危惧される。

協力者： 林正典（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

植物体は黄緑色、茎葉状、長さ 4～6 cm、幅は葉を含めて 2.5～3 mm。葉は接在、横に開出、楕円形、基部は下延し、縁は全縁。腹葉は痕跡的で 2～7 細胞よりなる。雌花は茎に頂生、花被は左右に偏平になる。国内に雄株は知られていない。葉が全縁であることが特徴であり、国産同属の他種からで区別できる。

【生活史】

雌雄異株。国内では雄株、胞子体は見つかっていない。

【生育環境】

常緑広葉樹林域の自然林において、岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では、本州に分布する。国外ではヒマラヤと中国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

山口県から最初に報告されて以来、長い間生育が確認されていなかったが、最近になり再確認された。また、三重県からは 1951 年に採集された標本に基づき新たな産地が報告されたがその後は確認されていない。

【生育地の現況】

生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

非常に少ない。

存続を脅かす要因

産地が局限していたが、最近の確認できない産地があり、何らかの要因により、生育範囲と生育量が減少している。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

ハネゴケ属の種としては葉が全縁であるという際だった形質を持つ。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	シャンハイハネゴケ	<i>Plagiochila shangaica</i> Steph.	CR+EN
第4次 2019:	シャンハイハネゴケ	<i>Plagiochila shangaica</i> Steph.	CR+EN
第4次 2018:	シャンハイハネゴケ	<i>Plagiochila shangaica</i> Steph.	CR+EN
第4次 2017:	シャンハイハネゴケ	<i>Plagiochila shangaica</i> Steph.	CR+EN
第4次 2015:	シャンハイハネゴケ	<i>Plagiochila shangaica</i> Steph.	CR+EN
第4次:	シャンハイハネゴケ	<i>Plagiochila shangaica</i> Steph.	CR+EN
第3次:	シャンハイハネゴケ	<i>Plagiochila shangaica</i> Steph.	VU
第2次:	シャンハイハネゴケ	<i>Plagiochila shangaica</i> Steph.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

三重県[絶滅危惧 IA 類(CR)] 山口県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 井上 浩, 1982. 日本新産の *Plagiochila shangaica* Steph.について. J. Jpn. Bot., 57: 304-306.
- 水谷正美・林 正典・山田耕作, 1999. シャンハイハネゴケの新産地（三重県）. 蘚苔類研究, 7: 269-270.
- 塩見隆行・鈴岡洋志, 1982. 山口県の現生苔植物. 山口県のコケとシダ. pp. 27-134. 山口県立博物館, 山口.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Plagiochila shangaica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Plagiochila shangaica* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence

(ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, Upper river basin
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

サトミヨツデゴケ

Pseudolepicolea andoi (R.M.Schust.) Inoue

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 国内 3 か所のいずれの産地においても生育数が非常に少ない。河川開発の影響を受け、生育数が減少している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

富山県黒部溪谷の標本を基に新種として記載された茎葉性苔類。葉が深く 2 裂し、各裂片が更に 3/4 まで 2 裂することを特徴とする。長年、タイプ産地にだけ知られていたが、白神山地と屋久島において生育していることが確認された。いずれの産地でも生育数が少なく絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐ないし斜上、緑褐色、茎葉状、長さ約 1 cm、幅は葉を含めて 1～1.2 mm。葉は茎に横につき、先端から 4/5 まで 2 裂し、各裂片は 3/4 まで 2 裂する。小裂片の基部は 2～5 細胞幅。腹葉は葉とほとんど同形同大。雌花は茎に頂生、花被は円筒形で弱いヒダがある。本属としては日本に産する唯一の種である。

【生活史】

雌雄同株。胞子で繁殖していると考えられるが、未熟なものしか確認されていないため成熟する季節は不明である。

【生育環境】

本州のブナ林や屋久島のツガ林などの自然林において溪谷の湿った岩上に他の蘚苔類と混生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州中部以北の日本海側と九州（屋久島）の山地に分布し、国外では中国とボルネオに不連続に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

長年、富山県黒部溪谷のタイプ産地にだけ知られていたが、白神山地（秋田県）と鹿児島県屋久島においてに生育していることが確認された。

【生育地の現況】

生育地は河川開発による影響を受けている。

【個体数の現況】

国内 3 か所のいずれの産地においても生育数が非常に少ない。

存続を脅かす要因

産地は 3 か所と局限し、非常に離れている。いずれの産地でも生育量が非常に少なく、河川開発による影響を受けている。

要因の区分：	(過去)	河川開発, 分布・産地局限
	(現在)	河川開発, 分布・産地局限

特記事項

生育地は、国立公園内または世界自然遺産地域内である。本種を *Pseudolepicolea trollii* の異名として扱う見解もあるが（Singh et al. 2014）、ここでは従来通りの扱いとした。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	サトミヨツデゴケ	<i>Pseudolepicolea andoi</i> (R.M.Schust.) Inoue	CR+EN
第4次 2019:	サトミヨツデゴケ	<i>Pseudolepicolea andoi</i> (R.M.Schust.) Inoue	CR+EN
第4次 2018:	サトミヨツデゴケ	<i>Pseudolepicolea andoi</i> (R.M.Schust.) Inoue	CR+EN
第4次 2017:	サトミヨツデゴケ	<i>Pseudolepicolea andoi</i> (R.M.Schust.) Inoue	CR+EN
第4次 2015:	サトミヨツデゴケ	<i>Pseudolepicolea andoi</i> (R.M.Schust.) Inoue	CR+EN
第4次:	サトミヨツデゴケ	<i>Pseudolepicolea andoi</i> (R.M.Schust.) Inoue	CR+EN
第3次:	サトミヨツデゴケ	<i>Pseudolepicolea andoi</i> (R.M.Schust.) Inoue	CR+EN
		<i>Pseudolepicolea andoi</i> (Schust.) Inoue Syn. <i>P.</i>	
第2次:	サトミヨツデゴケ	<i>trollii</i> (Herz.) Grolle et Ando ssp. <i>andoi</i> (Schust.) Hatt. et Mizut.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

富山県[情報不足]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Ando, H., 1963. A *Pseudolepicolea* found in the middle Honshu of Japan. *Hikobia*, 3: 177-183.
- 古木達郎, 2006. 日本産タイ類 7 種の新産地. *蘚苔類研究*, 9: 91-92.
- Hattori, S. and M. Mizutani, 1968. Asiatic species of *Pseudolepicolea* (Hepaticae). *J. Hattori Bot. Lab.*, 31: 251-259.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp., 192 pls. 平凡社, 東京.
- 大西規靖, 2000. 屋久島で発見されたサトミヨツデゴケ (*Pseudolepicolea andoi*) とその形態的特徴. *蘚苔類研究*, 7: 327-331 .
- 坂井奈緒子, 2015. 富山県で再確認されたサトミヨツデゴケとナンジャモンジャゴケ. *蘚苔類研究*, 11: 123-125.
- Singh, D., S. Majumdar and D. K. Singh, 2014. Taxonomic studies on Indian *Pseudolepicoleaceae* (Marchantiophyta: Jungermanniales). *Taiwania*, 59: 37-53.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Pseudolepicolea andoi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pseudolepicolea andoi* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	River development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 片桐知之 (高知大学)
Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月: 2025 年 3 月

イボイボムクムクゴケ

Trichocolea japonica T.Katag.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地が限定されており、いずれの産地でも生育量が少ない。生育地は登山道と近接しており、森林伐採等の人間活動による生育地の環境悪化が予測される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ムクムクゴケ科の茎葉性苔類で日本固有種。山梨県（甲斐駒ヶ岳）で最初に発見され、その後長野県（塩見岳）からも生育地が発見された。ムクムクゴケ属の他種からは葉裂片の繊毛状部位（シリア）の細胞に半球状の大きなベルカをもち、蒴壁最外層の細胞が線状に肥厚する点で区別される。本州中部の2カ所の亜高山帯に知られるが、生育範囲は狭く、生育数も少ない。生育地は登山道と近接しており森林伐採や登山道の整備など人間活動による影響を受けやすく絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、淡緑色、長さ 30～60 mm、幅 10～15 mm。茎は規則的に 2～3 回羽状に分枝して、表面には毛葉をもつ。葉は細かく裂け、裂片の先端は毛状になる。葉裂片の繊毛状部位（シリア）の細胞は薄壁、細胞間接合部は膨潤しない。胞子体保護器官はシーロカウレ。蒴は長楕円形で規則的に 4 つに裂開する。蒴壁は 5～6 層からなり、最外層の細胞には線状の肥厚をもつ。日本に広く分布するムクムクゴケ *Trichocolea tomentella* に似るが、本種はシリア表面に半球状の大きなベルカをもち、蒴壁最外層の細胞が線状に肥厚する点で区別される（Katagiri et al. 2011）。

【生活史】

詳しい生活史は不明だが、山梨県の産地では有性生殖を行い 6 月頃に蒴をつける。

【生育環境】

標高 2000 m 程度の亜高山帯の針葉樹林内の湿った岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

日本固有種、山梨県（甲斐駒ヶ岳）と長野県（塩見岳）に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

産地数について大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

いずれの生育地においても生育範囲は狭い。山梨県（甲斐駒ヶ岳）では蒴をつけ有性生殖が確認されているが、長野県（塩見岳）からは蒴は見つかっていない。

【個体数の現況】

生育数は少ない。

存続を脅かす要因

産地が極限されており、生育地が登山道とも近いことから森林伐採が進むと消失する恐れがある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

近年ベトナムからも本種の報告があるがベトナム産の植物体に関する詳しい情報が無い
ためここでは日本固有種として扱う。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	—	—	—
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—
第4次 2017:	—	—	—
第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Bakalin, V. A., V. S. Nguyen and E. A. Borovichev, 2018. New liverwort records for Vietnam. J. Bryol., 40: 68-73.
- 井上侑哉・立石幸敏・片桐知之・坪田博美, 2012. *Trichocolea japonica* (新称: イボイボムクムクゴケ) の新産地. 蘚苔類研究, 10: 291-292.
- Katagiri, T., H. Miyauchi and H. Deguchi, 2011. *Trichocolea japonica* (Trichocoleaceae), a new species from Japan. Bryologist, 114: 744-748.
- Katagiri, T., A. Sadamitsu, H. Miyauchi, H. Tsubota and H. Deguchi, 2013. Taxonomic studies of the Trichocoleaceae in Southeast Asia III. *Trichocolea* Dumort. Hattoria, 4: 1-42.
- Piippo, S., 2017. Bryophyte flora of the Hunan Province, China. 23. Trichocoleaceae and Neotrichocoleaceae (Hepaticae, Jungermanniopsida). Acta Bryolichenol. Asiat., 7: 93-98.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Trichocolea japonica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Trichocolea japonica* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



執筆者: 片桐知之 (高知大学)
Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月: 2025 年 3 月

ツボミゴケ目 Jungermanniales オヤコゴケ科 Schistochilaceae

ケナシオヤコゴケ

Schistochila nuda Horik.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 国内唯一の産地である奄美群島では、森林伐採により乾燥化が進み、生育量が減少している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

国内では奄美大島と徳之島からしか知られていない種であるが、植物体は比較的大きく、かたまって生育しているため野外で発見するのはそれほど困難ではない。葉の腹片は大きく楕円形でほぼ全縁であり、背片は小さく長方形で腹片の中央につくのがこの種の特徴である。

協力者： 秋山弘之（兵庫県立人と自然の博物館）

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状性、緑色～黄緑色で、斜めに立ち上がる。茎は長さ 2～4 cm で分枝は少ない。葉は横に広く開出し、小型の背片と大型の腹片に 2 裂する。背片は長方形で腹片の中央部につき鈍頭で全縁。腹片は楕円形で鈍頭、ほぼ全縁で先端部に微鋸歯がある。腹葉は生殖器官の周辺に限られる。無性芽はない。徳之島に分布する同属のフィリピンオヤコゴケ *Schistochila aligera* は腹片の縁に明瞭な鋸歯があることで本種と容易に区別することができる。

【生活史】

生殖器官が見つかっておらず、繁殖の仕方などは不明。

【生育環境】

霧のよくかかる山頂近くの常緑広葉樹林内の湿った樹幹上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では鹿児島県の奄美大島と徳之島のみから知られ、国外では台湾、フィリピン、タイに分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

産地数に大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

森林伐採により乾燥化が進んでいたが、生育地は 2017 年に国立公園に指定された。

【個体数の現況】

生育量が減少している。

存続を脅かす要因

国内では産地が奄美諸島の 2 か所しかなく、生育地も限られており、森林伐採により生育地が乾燥化することによって消滅するおそれがある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

1934年に台湾をタイプ標本の産地として新種として記載され、その他の産地として奄美大島が挙げられた。その後、日本では奄美大島と徳之島以外では見つかっていない。日本にはオヤコゴケ科はアマミオヤコゴケ属の3種が知られているが、そのうちの2種は日本においては奄美諸島以外では見つかっていない。山頂近くの霧のよくかかる森林内の湿った樹幹上に生えるので、森林を乾燥させることになるような変化を森林やその周辺の環境に及ぼさないようにすることが重要である。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	ケナシオヤコゴケ	<i>Schistochila nuda</i> Horik.	CR+EN
第4次 2019:	ケナシオヤコゴケ	<i>Schistochila nuda</i> Horik.	CR+EN
第4次 2018:	ケナシオヤコゴケ	<i>Schistochila nuda</i> Horik.	CR+EN
第4次 2017:	ケナシオヤコゴケ	<i>Schistochila nuda</i> Horik.	CR+EN
第4次 2015:	ケナシオヤコゴケ	<i>Schistochila nuda</i> Horik. [= <i>Gottschea nuda</i> (Horik.) Grolle & Zijlstra]	CR+EN
第4次:	ケナシオヤコゴケ	<i>Schistochila nuda</i> Horik. [= <i>Gottschea nuda</i> (Horik.) Grolle & Zijlstra]	CR+EN
第3次:	ケナシオヤコゴケ	<i>Schistochila nuda</i> Horik. (= <i>Gottschea nuda</i> (Horik.) Grolle & Zijlstra)	CR+EN
第2次:	ケナシオヤコゴケ	<i>Gottschea nuda</i> (Horik.) Grolle et Zijlstra Syn. <i>Paraschistochila nuda</i> (Horik.) Inoue; <i>Schistochila nuda</i> Horik.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Horikawa, Y., 1934. Monographia hepaticarum Australi-Japonicarum. J. Sci. Hiroshima Univ. ser. B. div. 2, 2: 101-325, pl. 11-21.
- 井上 浩, 1976. 続・日本産苔類図鑑. 193 pp. 築地書館, 東京.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp., 192 pls. 平凡社, 東京.

- Juengprayoon, W., P. Shukkharak and S. Chantanaorrapint, 2015. Genus *Schistochila* Dumort. (Schistochilaceae, Marchantiophyta) in Thailand. Songklanakarin J. Sci. Technol., 37: 409-415.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Schistochila nuda has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Schistochila nuda* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 片桐知之 (高知大学)
Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月: 2025 年 3 月

ヤクシマオヤコゴケ

Schistochila sciurea (Nees) Schiffn.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 2005 年の調査時に数個体が確認されているが、その後の調査では生育が確認できていないことから生育量は減少していると判断した。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

2003 年に屋久島とタイ産の植物体を基に *Schistochila yakushimensis* として記載されたが、近年の研究により東南アジアに広く分布する *Schistochila sciurea* の同種であることが提案された。茎葉性苔類で葉が不等に 2 裂して背片と腹片になり、背片と腹片に通常は多数の鋸歯をもつことを特徴とする。山頂部の霧がかかる林の樹幹に着生している。最近の調査では確認できておらず、要因は特定できないが生育数が減少していると考えられる。

協力者: 林田信明 (Yamakara 屋久島)・池松泰一 (広島大学)・佐藤匠 (広島大学)・古木達郎 (元千葉県立中央博物館)

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、樹幹に着生、鮮緑色から赤褐色、長さ約 2 cm、幅 2～3 mm。葉は腹片と背片に 2 裂し、背片は長楕円形、通常は多数の鋸歯をもつが稀に全縁、鋭頭から鋭尖。腹片は背片に似るがやや小型か同長、通常は多数の鋸歯をもつが稀に全縁。腹葉は茎の約 2 倍幅、不規則に 2 裂し、縁に毛がある。葉身細胞に大きなトリゴンがある。無性芽はない。

【生活史】

国内では造精器や造卵器、胞子体は知られていない。

【生育環境】

霧がかかりやすい尾根に発達するツガ林などにおいて、樹幹に着生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

日本では九州（屋久島）に分布する。国外では東南アジアに広くに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

屋久島モッチョム岳では 2005 年の調査において数個体が確認されて以降、その後の調査では生育が確認できていない。その他、1970 年代の標本から過去には荒川周辺にも生育していたことが明らかになったが生育地の詳細は不明。再発見が望まれる。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

2005 年以降確認できていないことから、生育量は減少していると考えられる。

存続を脅かす要因

産地が局限しており、発見当初から生育量が非常に少なく、近年の調査では確認できていない。何らかの要因により生育範囲と生育量が減少しているため絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	不明, 分布・産地局限
	(現在)	不明, 分布・産地局限

特記事項

2003 年に屋久島から新種 *Schistochila yakushimensis* として記載されたが近年東南アジアに広く分布する *Schistochila sciurea* と同種とされた。本属は、熱帯の雲霧林を代表する苔類である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヤクシマオヤコゴケ	<i>Schistochila yakushimensis</i> Ohnishi & Deguchi	CR+EN
第4次 2019:	ヤクシマオヤコゴケ	<i>Schistochila yakushimensis</i> Ohnishi & Deguchi	CR+EN
第4次 2018:	ヤクシマオヤコゴケ	<i>Schistochila yakushimensis</i> Ohnishi & Deguchi	CR+EN
第4次 2017:	ヤクシマオヤコゴケ	<i>Schistochila yakushimensis</i> Ohnishi & Deguchi	CR+EN
第4次 2015:	ヤクシマオヤコゴケ	<i>Schistochila yakushimensis</i> Ohnishi & Deguchi	CR+EN
第4次:	ヤクシマオヤコゴケ	<i>Schistochila yakushimensis</i> Ohnishi & Deguchi	CR+EN
第3次:	ヤクシマオヤコゴケ	<i>Schistochila yakushimensis</i> Ohnishi & Deguchi	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Juengprayoon, W., P. Shukkharak and S. Chantanaorrapint, 2015. Genus *Schistochila* Dumort. (Schistochilaceae, Marchantiophyta) in Thailand. Songklanakarin J. Sci. Technol., 37: 409-415.
- Katagiri, T., S. Chantanaorrapint and Y. Inoue, 2022. On the taxonomic status of *Schistochila yakushimensis* (Schistochilaceae) from Japan and Thailand. Hattoria, 13: 13-24.
- Ohnishi, N. and H. Deguchi, 2003. A new species of *Schistochila* (Hepaticae) from East Asia. Bryologist, 106: 451-453.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Schistochila sciurea has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Schistochila sciurea is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Unknown, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

イリオモテヤスデゴケ

Frullania iriomotensis S.Hatt.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育範囲が限られており、生育量も少ない。森林伐採などの影響を受けると考えられる。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

日本では八重山諸島にのみ知られるヤスデゴケ属の茎葉性苔類。樹木に着生するが個体数が少ないために、絶滅が危惧されている。葉の先端がやや尖り、腹葉が縦に長く、2/3 まで 2 裂することを特徴とする。これまで日本固有種と考えられていたが、近年中国の海南島からも生育が確認された。

協力者: 山口富美夫 (広島大学)・佐藤匠 (広島大学)・西畑和輝 (広島大学)・桐生賢太 (広島大学)

基礎情報

【形態】

植物体は黄褐色、茎葉性、長さ約 1 cm、幅 0.8～1 mm、葉は背片と袋状の腹片になる。背片は背中側に反り返り、先端はやや尖り、内曲する。腹葉は縦に長く、2/3 まで 2 裂する。無性芽はない。近縁種とは、葉先が尖ること、腹葉が細長いことで区別される。

【生活史】

生育地や個体数が少なく生殖器官や孢子体が知られていないため詳細は不明であったが、中国（海南島）産の植物体の発見によって雌雄同株であることが明らかにされた。孢子体は未知。

【生育環境】

常緑広葉樹の自然林において、樹幹に着生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

日本では八重山諸島に分布する。国外では中国（海南島）で近年生育が確認された。

現在の生育状況

【分布域の現況】

産地数について大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

生育範囲が限られており、生育量も少ない。

存続を脅かす要因

産地が少なく局限しており、生育地では森林伐採の影響を受けている。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

1980 年に西表島産の標本に基づき、新種として記載された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	イリオモテヤスデゴケ	<i>Frullania iriomotensis</i> S.Hatt.	VU
第4次 2019:	イリオモテヤスデゴケ	<i>Frullania iriomotensis</i> S.Hatt.	VU
第4次 2018:	イリオモテヤスデゴケ	<i>Frullania iriomotensis</i> S.Hatt.	VU
第4次 2017:	イリオモテヤスデゴケ	<i>Frullania iriomotensis</i> S.Hatt.	VU
第4次 2015:	イリオモテヤスデゴケ	<i>Frullania iriomotensis</i> S.Hatt.	VU
第4次:	イリオモテヤスデゴケ	<i>Frullania iriomotensis</i> S.Hatt.	VU
第3次:	イリオモテヤスデゴケ	<i>Frullania iriomotensis</i> S.Hatt.	VU
第2次:	イリオモテヤスデゴケ	<i>Frullania iriomotensis</i> Hatt.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hattori, S., 1980. Notes on *Frullania* species of Iriomote and Ishigaki Islands, the Ryukyu Archipelago. J. Jpn. Bot., 55: 132-135.
- Promma, C., S. -H. Lu, C. Shen, L. -N. Zhang and R. -L. Zhu, 2023. Range extension, taxonomic note, molecular-phylogenetic relationship, and conservation of *Frullania iriomotensis* S. Hatt. (Marchantiophyta, Frullaniaceae), a rare liverwort previously known only from the type locality in Japan. Phytotaxa, 589: 51-67.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Frullania iriomotensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Frullania iriomotensis* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence

(ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—
執筆者: 片桐知之（高知大学） Author: Tomoyuki Katagiri	

公表年月：2025 年 3 月

イボヤスデゴケ

Frullania repandistipula Sande Lac.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 父島では開発や外来樹木の影響等により生育環境が悪化しており、生育数が激減している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

和名は葉の腹片表面のいぼ状の突起があることに由来する。葉背片の縁に仮根状の毛を生じることなどによって近縁種から区別できる。東南アジアの熱帯に分布しているが国内では小笠原諸島にのみ知られ、湿った森林において樹幹に着生している。森林伐採や外来種の樹木などの影響を受けている。

協力者： 山口富美夫（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、赤褐色、長さ約 1.5 cm、幅 2～3 mm。茎は羽状に分枝する。葉は倒瓦状に重なり、背片と腹片に不等に 2 裂する。背片は円形、やや尖り、縁にしばしば仮根状の毛があり脱落し易い。腹片は円筒形で表面に著しい凸突起がある。無性芽はない。胞子体は知られていない。和名は腹片の表面のいぼに由来し、この特徴によって近縁種から区別できる。

【生活史】

雌雄異株。国内では造精器や造卵器、胞子体は見つかっていないため、早落性の葉により繁殖していると考えられる。

【生育環境】

常緑広葉樹の湿性低木林の自然林において樹幹に着生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では小笠原諸島にのみ分布し、国外では東南アジアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

生育範囲は狭く、確認されている生育量は少ない。森林伐採などの影響を受けていると考えられる。

【生育地の現況】

父島では開発や外来樹木の影響等により生育環境が悪化しており、生育数が激減している。

【個体数の現況】

生育数は少ない。

存続を脅かす要因

産地が少なく局限しており、森林伐採などの開発や外来種の樹木の影響による森林荒廃の影響を受けている。

要因の区分：	(過去)	森林伐採
	(現在)	森林伐採

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	イボヤスデゴケ	<i>Frullania repandistipula</i> Sande Lac.	VU
第4次 2019:	イボヤスデゴケ	<i>Frullania repandistipula</i> Sande Lac.	VU
第4次 2018:	イボヤスデゴケ	<i>Frullania repandistipula</i> Sande Lac.	VU
第4次 2017:	イボヤスデゴケ	<i>Frullania repandistipula</i> Sande Lac.	VU
第4次 2015:	イボヤスデゴケ	<i>Frullania repandistipula</i> Sande Lac.	VU
第4次:	イボヤスデゴケ	<i>Frullania repandistipula</i> Sande Lac.	VU
第3次:	イボヤスデゴケ	<i>Frullania repandistipula</i> Sande Lac.	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 文献なし

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Frullania repandistipula has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Frullania repandistipula* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

アマカワヒメゴヘイゴケ

Archilejeunea amakawana Inoue

カテゴリ判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育環境に大きな変化はないため、まだ生育していると考えられるが、いずれの生育地でも生育が確認できないため、生育量が減少していると判断する。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

クサリゴケ科の茎葉性苔類で日本固有種。葉が早落性で、葉背片が著しく鎌状になることによってツクシクロウロコゴケ属の他種から区別できる。九州（熊本県、宮崎県、屋久島）、琉球列島（石垣島、西表島）から知られているが、いずれの生育地でも長期間にわたり生育が確認されていない。

協力者： 山口富美夫（広島大学）・佐藤匠（広島大学）・西畑和輝（広島大学）・桐生賢太（広島大学）・長谷川二郎（服部植物研究所）

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性で、小さく、茎は長さ 5～10 mm で不規則に分枝する。葉は重なり合っ
てつき、広く開出する。背片は鎌状に曲がった長方形、円頭で全縁。腹片は長方形で、
背片の約 1/2 長、先端の角に 1～3 細胞の長の歯牙がある。腹葉は離在し、小さく、丸み
を帯びた長方形で全縁。花被は長卵形で、上部に 5～6 個の稜がある。近縁種のミヤジマ
ヒメゴハイゴケ *Archilejeunea planifolia* からは葉が早落性で、葉背片が著しく鎌状になる
ことによって区別できる。

【生活史】

雌雄異株。産地が少なく、十分な調査が行われておらず、生活史などについては不
明。

【生育環境】

常緑広葉樹の自然林や社寺林の樹幹上や腐木上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林	【陸域_平地部】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

日本固有種で、九州（熊本県、宮崎県、屋久島）、琉球列島（石垣島、西表島）から知ら
れている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

いずれの生育地でも長期間にわたり生育が確認されておらず、再調査の必要性がある。

【生育地の現況】

産地が少なく、生育数も少ない。詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林の伐採などによって生育地の環境が変化することで消滅するおそれがあると考え
られるが、十分な調査がなされていないので、減少傾向にある原因については不明な点
が多い。

要因の区分：	(過去)	不明, 森林伐採
	(現在)	不明, 森林伐採

特記事項

日本産の種としては4種がツクシクロウロコゴケ属に分類されているが、本属はクロウロコゴケ属やナミゴヘイゴケ属などによく似ており、アマカワヒメゴヘイゴケ以外の他種は別属に分類されていたことがある。宮崎県からの報告に関しては再調査の必要性がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	アマカワヒメゴヘイゴケ	<i>Archilejeunea amakawana</i> Inoue	VU
第4次 2019:	アマカワヒメゴヘイゴケ	<i>Archilejeunea amakawana</i> Inoue	VU
第4次 2018:	アマカワヒメゴヘイゴケ	<i>Archilejeunea amakawana</i> Inoue	VU
第4次 2017:	アマカワヒメゴヘイゴケ	<i>Archilejeunea amakawana</i> Inoue	VU
第4次 2015:	アマカワヒメゴヘイゴケ	<i>Archilejeunea amakawana</i> Inoue	VU
第4次:	アマカワヒメゴヘイゴケ	<i>Archilejeunea amakawana</i> Inoue	VU
第3次:	アマカワヒメゴヘイゴケ	<i>Archilejeunea amakawana</i> Inoue	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)] 沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Mizutani, M., 1993. Notes on the Lejeuneaceae 18. Japanese species of the genus *Archilejeunea*. J. Hattori Bot. Lab., 73: 175-182.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Archilejeunea amakawana has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Archilejeunea amakawana* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location. b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Forest
Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: Author:	片桐知之（高知大学） Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

クラマゴケモドキ目 Porellales クサリゴケ科 Lejeuneaceae

リュウキュウシゲリゴケ

Cheilolejeunea ryukyuensis Mizut.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 開発等により生育量が減少している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

沖縄島から新種記載された茎葉性苔類。同属の他種からは小さい腹片とその不明瞭な歯によって区別される。中国からも報告されている。琉球列島のマングローブ林の樹幹に着生する。マングローブ林の開発等により生育が脅かされている。

協力者: 山口富美夫 (広島大学)・佐藤匠 (広島大学)・西畑和輝 (広島大学)・桐生賢太 (広島大学)

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、長さ約 1 cm、幅は 1～1.5 mm。葉は倒瓦状に重なり、背片と腹片に 2 裂する。背片は円形、全縁。腹片は背片の長 1/3 長、方形、第 1 歯はなく、第 2 歯も不明瞭。腹葉は茎の約 3 倍幅、約 1/2 まで 2 裂する。無性芽はない。腹片の形や第 2 歯の特徴から近縁種と区別される。

【生活史】

雌雄同株。産地が少なく、生物季節について十分な調査が行われておらず、詳細は不明である。孢子体は知られていない。

【生育環境】

マングローブ林やその周辺の常緑樹林において樹幹に着生する。

生育環境区分：	【陸域_海岸部】森林、塩沼地・塩性湿地・河口干潟

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では沖縄島、石垣島、西表島に分布し、国外では中国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

産地数について大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

沖縄県琉球列島の数か所のマングローブ林に生育しているが、環境が悪化している。

【個体数の現況】

開発等により生育量は減少している。

存続を脅かす要因

産地が少なく局限しており、生育地はゴミの漂着などにより環境が悪化している。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	リュウキュウシゲリゴケ	<i>Cheilolejeunea ryukyuensis</i> Mizut.	VU
第4次 2019:	リュウキュウシゲリゴケ	<i>Cheilolejeunea ryukyuensis</i> Mizut.	VU
第4次 2018:	リュウキュウシゲリゴケ	<i>Cheilolejeunea ryukyuensis</i> Mizut.	VU
第4次 2017:	リュウキュウシゲリゴケ	<i>Cheilolejeunea ryukyuensis</i> Mizut.	VU
第4次 2015:	リュウキュウシゲリゴケ	<i>Cheilolejeunea ryukyuensis</i> Mizut.	VU
第4次:	リュウキュウシゲリゴケ	<i>Cheilolejeunea ryukyuensis</i> Mizut.	VU
第3次:	リュウキュウシゲリゴケ	<i>Cheilolejeunea ryukyuensis</i> Mizut.	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Mizutani, M., 1982. Notes on the Lejeuneaceae. 6. Japanese species of the genus *Cheilolejeunea*. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 51: 151-173.
- So, M. L. and R. -L. Zhu, 1996. Studies on Hong Kong *Cheilolejeunea* with two species new to China. Tropical Bryology, 12: 5-10.
- Zhu, R. -L. and M. L. So, 2001. Epiphyllous liverworts of China. Nova Hedwigia Beiheft, 121: 1-418.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cheilolejeunea ryukyuensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cheilolejeunea ryukyuensis* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】 Forest, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland)
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

キララヨウジョウゴケ

Cololejeunea ceratilobula (P.C.Chen) R.M.Schust.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 近年いずれの産地でも生育が確認されていないため、生育量は減少していると判断する。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

東南アジア～台湾に広く分布しているが、日本では数か所の産地が知られているだけである。植物体が非常に小さいので見つけにくい、葉の縁に波状に曲がった透明な細胞があることが特徴であり顕微鏡下では他種から容易に区別することができる。

協力者: 山口富美夫 (広島大学)・佐藤匠 (広島大学)・西畑和輝 (広島大学)・桐生賢太 (広島大学)

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、黄緑色で茎の長さは約 5 mm と小さく、密に羽状に分枝し、着生した葉の表面に密着している。葉は広楕円形で円頭、背片の縁は波状に曲がった透明な細胞によって縁取られ、腹片は小さく、三角形状で第 1 歯が細長く毛状に伸び、第 2 歯を欠く。多数の円盤状の無性芽をつける。雌花序は短い枝に頂生し、花被は倒心臓形で 2 稜を有する。葉背片の縁が波状に曲がった透明な細胞で縁取られることによって、日本産の同属の他種から容易に区別することができる。

【生活史】

雌雄同株。産地が少ないので十分な調査がなされておらず、生活史などについては不明。

【生育環境】

常緑広葉樹林の溪流沿いの空中湿度の高い林の樹木の葉やシダの葉の表面に密着して生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(5) 沿岸域, (7) 島嶼地域

【分布域】

国内では、九州（宮崎県、屋久島）、沖縄県（石垣島、西表島）で産地が知られている。国外では、台湾、中国東南部、ベトナム、ボルネオ、スリランカ、インドから報告されている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

いずれの産地でも近年生育が確認されていない。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

近年生育が確認されておらず、生育量は少ないと考えられる。

存続を脅かす要因

空中湿度の高い自然林の樹木やシダの葉に少量が着生して生育しており、生育地およびその周辺の樹木の伐採などによる森林の乾燥化によって消滅するおそれがある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採
	(現在)	森林伐採

特記事項

東南アジア～台湾、中国南部に広く分布しているが、日本では数か所の産地が知られているだけである。植物体が非常に小さいので見つけにくい、葉の縁の特異な細胞の存在によって、顕微鏡下では容易に種を確認することができる。本種の保護においては、生育地の乾燥化をもたらすおそれのある生育地およびその周辺の環境の変化に注意を払う必要がある。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	キララヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea</i>	<i>ceratilobula</i>	(P.C.Chen)	CR+EN
		R.M.Schust.			
第4次 2019:	キララヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea</i>	<i>ceratilobula</i>	(P.C.Chen)	CR+EN
		R.M.Schust.			
第4次 2018:	キララヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea</i>	<i>ceratilobula</i>	(P.C.Chen)	CR+EN
		R.M.Schust.			
第4次 2017:	キララヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea</i>	<i>ceratilobula</i>	(P.C.Chen)	CR+EN
		R.M.Schust.			
第4次 2015:	キララヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea</i>	<i>ceratilobula</i>	(P.C.Chen)	CR+EN
		R.M.Schust. [= <i>C. formosana</i> Mizut.]			
第4次:	キララヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea</i>	<i>ceratilobula</i>	(P.C.Chen)	CR+EN
		R.M.Schust. [= <i>C. formosana</i> Mizut.]			
第3次:	キララヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea</i>	<i>ceratilobula</i>	(P.C.Chen)	CR+EN
		R.M.Schust. (= <i>C. formosana</i> Mizut.)			
第2次:	—	—			—
第1次:	—	—			—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧ⅠA類(CR-r)] 沖縄県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp., 192 pls. 平凡社, 東京.

- Mizutani, M., 1961. A revision of Japanese Lejeuneaceae. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 24: 115-302.
- Zhu, R. -L. and M. L. So, 1998. Reappraisal of *Cololejeunea ceratilobula*, *C. formosana*, and *C. reineckeana* (Hepaticae, Lejeuneaceae). Taxon, 47: 839-842.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Cololejeunea ceratilobula has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cololejeunea ceratilobula* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: 片桐知之 (高知大学)
Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

ホソバイトクスゴケ

Cololejeunea sintenisii (Steph.) Pócs

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 植物体が非常に微小で発見が難しいことから、まだ生育していると考えられるが、長期にわたり採集記録が無く、最近の調査でも確認できないため、生育量が減少していると判断する。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ヒメクサリゴケ属の中でも本種の植物体は長さは 2~3 mm 程度と非常に微小であることが特徴。植物体が微小で発見しにくいということもあるが、長期にわたり採集記録がなく、最近の調査でも確認できない。

基礎情報

【形態】

植物体は淡緑色、茎葉性で、茎はあまり分枝せず、糸状で、長さは2～3 mm程度。葉は茎にまばらにつき、ほとんど立ち上がって開出する。背片は長卵形～披針形で、全縁、葉先は鋭頭～鈍頭でしばしば内曲する。腹片は長橢円形で背片の1/2～4/5の長さがあるが、強く膨らみ、第1歯は2細胞で、第2歯は不明瞭、しばしば腹片がないことがある。無性芽が葉の背片の縁や背面につき、円盤状。雌花序は茎の先端につき、花被は円筒形で、はっきりした5稜を有する。植物体が非常に微小で、葉がまばらにつき、棒状に退化したものが混ざることなどで他種からは容易に区別することができる。

【生活史】

雌雄同株。無性芽をつけることはわかっているが、生活史などの詳細は不明。

【生育環境】

常緑広葉樹の自然林の樹幹上や林床のシダの葉上で極少量が、多くの場合、他のコケに混ざって生育している。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では、三重県と九州に数か所（熊本県、宮崎県、鹿児島県）の産地が知られている。国外ではボルネオからの報告がある。

現在の生育状況

【分布域の現況】

長期にわたり採集記録がなく、最近の調査でも確認できない。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

もともと生育地、生育量ともに少ない。最近の調査で確認できないため、生育量は減少していると考えられる。

存続を脅かす要因

減少要因については不明だが、生育地の乾燥化などの環境の変化によって消滅することが考えられる。

要因の区分：	(過去)	不明
	(現在)	不明

特記事項

かつては、ヨーロッパ産の *Cololejeunea microscopica* と同一種とされ世界に広く分布すると考えられていたが、日本産のものは別種に分類されるようになり、本種の日本以外での分布についてはあまりよくわかっていない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ホソバイトクズゴケ	<i>Cololejeunea angustiloba</i> (Horik.) Mizut.	CR+EN
第4次 2019:	ホソバイトクズゴケ	<i>Cololejeunea angustiloba</i> (Horik.) Mizut.	CR+EN
第4次 2018:	ホソバイトクズゴケ	<i>Cololejeunea angustiloba</i> (Horik.) Mizut.	CR+EN
第4次 2017:	ホソバイトクズゴケ	<i>Cololejeunea angustiloba</i> (Horik.) Mizut.	CR+EN
第4次 2015:	ホソバイトクズゴケ	<i>Cololejeunea angustiloba</i> (Horik.) Mizut.	CR+EN
第4次:	ホソバイトクズゴケ	<i>Cololejeunea angustiloba</i> (Horik.) Mizut.	CR+EN
第3次:	ホソバイトクズゴケ	<i>Cololejeunea angustiloba</i> (Horik.) Mizut.	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧 I A 類(CR-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Mizutani, M., 1961. A revision of Japanese Lejeuneaceae. J. Hattori Bot. Lab., 24: 115-302.
- 水谷正美, 1996. ホソバイトクズゴケについて. 日本蘚苔類学会報, 6: 244-246.
- Pócs, T., A. Bernecker and P. Tixier, 2014. Synopsis and key to species of Neotropical *Cololejeunea* (Lejeuneaceae). Acta Bot. Hung., 56: 185-226.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cololejeunea sintenisii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cololejeunea sintenisii* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of

a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

オガサワラキララゴケ

Cololejeunea subminutilobula Mizut.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 湿った谷のシダ類の生葉上に限られ、その生育は森林の攪乱に敏感で、減少傾向が見られ、今後の消長を調べることが望ましい。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ヒメクサリゴケ属の茎葉性苔類であり、腹片が非常に小さいことを特徴とする。小笠原諸島に固有に分布し、おもにオオタニワタリの仲間の生葉上に生育する。個体数が少なく、絶滅が危惧されている。

協力者： 山口富美夫（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体はシダなどの葉に密着し、光沢のある緑色、茎葉性、長さ 2～5 cm、幅は葉を含めて 0.6～1.0 mm。葉は倒瓦状に重なり、背片と腹片になる。背片は円形、透明な細胞で縁取られる。腹片は小さく、三角形。雌花は茎や枝に頂生、花被は心臓形。雄花は短い側枝となる。無性芽は円盤状。小笠原固有種のイノウエヨウジョウゴケ *Cololejeunea inoueana* が近縁であるが、腹片が卵形であり本種と異なる。

【生活史】

雌雄同株。無性芽は豊富である。生活史の詳細は不明。

【生育環境】

湿性常緑広葉樹林において湿った谷に生育するシダ類のオオタニワタリの仲間などの生葉上に着生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

日本固有で、小笠原諸島（父島、母島）と北硫黄島に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

産地数について大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

湿った溪谷のシダなどの葉に着生している。台風などによる森林の攪乱がみられる。

【個体数の現況】

生育数は少ない。

存続を脅かす要因

産地が局限しており、台風などによる森林の攪乱の影響を受けている。

要因の区分：	(過去)	自然災害, 分布・産地局限
	(現在)	自然災害, 分布・産地局限

特記事項

1931 年に小笠原諸島産の標本に基づき新種として記載された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オガサワラキララゴケ	<i>Cololejeunea subminutilobula</i> Mizut.	VU
第4次 2019:	オガサワラキララゴケ	<i>Cololejeunea subminutilobula</i> Mizut.	VU
第4次 2018:	オガサワラキララゴケ	<i>Cololejeunea subminutilobula</i> Mizut.	VU
第4次 2017:	オガサワラキララゴケ	<i>Cololejeunea subminutilobula</i> Mizut.	VU
第4次 2015:	オガサワラキララゴケ	<i>Cololejeunea subminutilobula</i> Mizut.	VU
第4次:	オガサワラキララゴケ	<i>Cololejeunea subminutilobula</i> Mizut.	VU
第3次:	オガサワラキララゴケ	<i>Cololejeunea subminutilobula</i> Mizut.	VU
第2次:	オガサワラキララゴケ	<i>Cololejeunea subminutilobula</i> Mizut.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Horikawa, Y., 1931. Studies on the Hepaticae of Japan. IV. J. Sci. Hiroshima Univ., Ser. B, Div. 2, Bot., 1: 13-35.
- Mizutani, M., 1961. A revision of Japanese Lejeuneaceae. J. Hattori Bot. Lab., 24: 115-302.
- Mizutani, M., 1984. Notes on the Lejeuneaceae. 9. *Cololejeunea lanciloba* and its related species in Japan. J. Hattori Bot. Lab., 57: 427-442.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cololejeunea subminutilobula has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cololejeunea subminutilobula* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Natural disasters, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

マルバサンカクゴケ

Drepanolejeunea obtusifolia T.Yamag.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 沖縄島でも新たな産地が発見されたが、タイプ産地の石垣島の於茂登岳山頂付近では、生育が確認できなくなった。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

サンカクゴケ属としては苞葉が全縁という特徴を持つ茎葉性苔類。日本では石垣島と沖縄島に分布する。樹木の枝や倒木上に生育するが個体数が少なく絶滅が危惧されている。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性。茎は長さ 3～5 mm、幅は葉を含めて 0.4～0.6 mm、葉は卵状三角形、葉先はほぼ鈍頭。腹葉は楔形で、1/2～2/3 まで 2 裂する。油体は単粒で、1 細胞に 2～3 個、眼点細胞が散在する。雌苞葉は全縁、円頭。花被は短側枝につく。無性芽はない。本属の種としては苞葉に鋸歯を欠く特異な形態を持つことで、他種と異なる。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

常緑広葉樹の自然林において、樹木の枝や倒木上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林	【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域	

【分布域】

日本では沖縄県沖縄島、石垣島に分布する。近年中国でも生育が確認されている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

タイプ産地の石垣島の於茂登岳山頂付近では、生育が確認できなくなった。

【生育地の現況】

沖縄島における生育は狭い範囲に限られる。

【個体数の現況】

生育量は減少している。

存続を脅かす要因

産地が 3 か所と局限しており、1 か所では近年生育が確認できないため、絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

1984 年に石垣島産の標本に基づき、新種として記載された。同属としては例外的な全縁の苞葉を持つ。近年では本種を基本種とする新属 (*Soella*) が提案されており *Soella obtusifolia* (T.Yamag.) R.L.Zhu, L.Shu, Qiong He & Y.M.Wei の学名が使用されることもあ

る。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	マルバサンカクゴケ	<i>Drepanolejeunea obtusifolia</i> T.Yamag.	CR+EN
第4次 2019:	マルバサンカクゴケ	<i>Drepanolejeunea obtusifolia</i> T.Yamag.	CR+EN
第4次 2018:	マルバサンカクゴケ	<i>Drepanolejeunea obtusifolia</i> T.Yamag.	CR+EN
第4次 2017:	マルバサンカクゴケ	<i>Drepanolejeunea obtusifolia</i> T.Yamag.	CR+EN
第4次 2015:	マルバサンカクゴケ	<i>Drepanolejeunea obtusifolia</i> T.Yamag.	CR+EN
第4次:	マルバサンカクゴケ	<i>Drepanolejeunea obtusifolia</i> T.Yamag.	CR+EN
第3次:	マルバサンカクゴケ	<i>Drepanolejeunea obtusifolia</i> T.Yamag.	VU
第2次:	マルバサンカクゴケ	<i>Drepanolejeunea obtusifolia</i> Yamag.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 古木達郎・藤田明嗣, 2006. マルバサンカクゴケ沖縄島で新たに見つかる. 蘚苔類研究, 9: 95.
- Yamaguchi, T., 1984. *Drepanolejeunea obtusifolia* sp. nov. and *Euosmolejeunea fuscobrunnea* Horik. from the Yaeyama Islands, Japan. J. Jpn. Bot., 59: 332-336.
- Zhu, R. -L., L. Shu, Q. He and Y. -M. Wei, 2018. *Soella* (Marchantiophyta: Lejeuneaceae), a new genus from China and Japan. Bryologist, 121:324-339.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Drepanolejeunea obtusifolia has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Drepanolejeunea obtusifolia* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

ツメクサリゴケ

Lejeunea apiculata Sande Lac.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 植物体が小型で発見が難しいため継続して生育している可能性はあるが、近年の調査では生育が確認されていない。生育地は分断されており、いずれの地点においても生育範囲は狭い範囲に限られ生育数が非常に少ない。以上より、減少傾向にあると判断する。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

和名は背片と腹葉の先端が尖り曲がっていることにちなむ。東南アジアから日本にかけて分布し、国内では琉球列島と小笠原諸島の数か所に知られる。いずれの産地に置いても生育範囲は狭い範囲に限られ、生育量も少ないことから絶滅が危惧される。

協力者: 山口富美夫 (広島大学)・佐藤匠 (広島大学)・西畑和輝 (広島大学)・桐生賢太 (広島大学)

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、緑色、匍匐し、長さ約 5 mm、幅約 0.5 mm。葉は倒瓦状に重なり、背片と腹片に 2 裂する。背片は三角形で先が尖る。腹片は背片の 1/3 長、第 1 歯が単細胞からなり、第 2 歯は不明瞭。腹葉は 1/2～2/3 まで深く 2 裂し、裂片が先細りになり尖る。無性芽はない。背片と腹片の先端が尖り、ツメのように曲がることでクサリゴケ属の他種から容易に区別できる。

【生活史】

雌雄同株。産地が少なく、生物季節については十分な調査が行われておらず、胞子が成熟する季節は不明である。

【生育環境】

湿度が高い常緑広葉樹の自然林において、湿岩や樹幹に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では琉球列島（沖縄島、西表島、石垣島）と小笠原諸島（母島）に分布し、国外では中国から東南アジアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

産地数について大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

生育範囲は狭い範囲に限られる。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

産地が少なく局限しており、生育量が少ない。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

本種はかつて *Stenolejeunea* ツメクサリゴケ属に含まれていたが、現在では

Stenolejeunea ツメクサリゴケ属は *Lejeunea* クサリゴケ属の異名とされている (Söderström et al. 2010)。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ツメクサリゴケ	<i>Stenolejeunea</i>	<i>apiculata</i>	(Sande Lac.)	VU
		R.M.Schust.			
第4次 2019:	ツメクサリゴケ	<i>Stenolejeunea</i>	<i>apiculata</i>	(Sande Lac.)	VU
		R.M.Schust.			
第4次 2018:	ツメクサリゴケ	<i>Stenolejeunea</i>	<i>apiculata</i>	(Sande Lac.)	VU
		R.M.Schust.			
第4次 2017:	ツメクサリゴケ	<i>Stenolejeunea</i>	<i>apiculata</i>	(Sande Lac.)	VU
		R.M.Schust.			
第4次 2015:	ツメクサリゴケ	<i>Stenolejeunea</i>	<i>apiculata</i>	(Sande Lac.)	VU
		R.M.Schust.			
第4次:	ツメクサリゴケ	<i>Stenolejeunea</i>	<i>apiculata</i>	(Sande Lac.)	VU
		R.M.Schust.			
第3次:	ツメクサリゴケ	<i>Stenolejeunea</i>	<i>apiculata</i>	(Sande Lac.)	VU
		R.M.Schust.			
第2次:	—	—			—
第1次:	—	—			—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Söderström, L., S. R. Gradstein and A. Hagborg, 2010. Checklist of hornworts and liverworts of Java. *Phytotaxa*, 9: 53–149.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lejeunea apiculata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Lejeunea apiculata is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

オオハラバクサリゴケ

Lejeunea sordida (Nees) Nees

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地が分断されており、いずれの産地においても生育数が少ない。現在生育が確認される 2 地点の内、少なくとも 1 地点では生育範囲が狭小化しており、種として減少傾向にあると判断する。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

和名は大きな腹葉を持つことにちなみ、この特徴によってクサリゴケ属の他種から容易に区別される。日本から東南アジアにかけて分布するが、国内では小笠原諸島（父島と母島）にのみ知られている。森林伐採などの影響で減少している生育地があり、絶滅が危惧される。

協力者： 山口富美夫（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、緑色、匍匐し、長さ約 1 cm、幅約 1 mm。葉は倒瓦状に重なり、背片と腹片に 2 裂する。背片は円形、円頭。腹片は背片の約 1/5 長、第 1 歯はなく、第 2 歯は尖る。腹葉は非常に多く、葉と同大、1/3 まで浅く 2 裂し、鈍頭。腹葉が大きいことでクサリゴケ属の他種から容易に区別できる。

【生活史】

国内では、造精器や造卵器、孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

常緑広葉樹の自然林において、湿岩や樹幹に生育している。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では小笠原諸島（父島と母島）に分布し、国外では中国から東南アジアにかけて広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

産地数について大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

開発や森林伐採などの影響がみられる。

【個体数の現況】

父島では減少し、生育範囲が狭く、生育量が非常に少ない。

存続を脅かす要因

産地が少なく局限しており、生育量が少ない。開発や森林伐採などの影響を受けられていると考えられる。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オオハラバクサリゴケ	<i>Lejeunea sordida</i> (Nees) Nees	VU
第4次 2019:	オオハラバクサリゴケ	<i>Lejeunea sordida</i> (Nees) Nees	VU
第4次 2018:	オオハラバクサリゴケ	<i>Lejeunea sordida</i> (Nees) Nees	VU
第4次 2017:	オオハラバクサリゴケ	<i>Lejeunea sordida</i> (Nees) Nees	VU
第4次 2015:	オオハラバクサリゴケ	<i>Lejeunea sordida</i> (Nees) Nees	VU
第4次:	オオハラバクサリゴケ	<i>Lejeunea sordida</i> (Nees) Nees	VU
第3次:	オオハラバクサリゴケ	<i>Lejeunea sordida</i> (Nees) Nees	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 文献なし

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lejeunea sordida has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lejeunea sordida* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest

Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

ゴマダラクサリゴケ

Stictolejeunea iwatsukii Mizut.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 1978 年に西表島から新種記載されたが 1997 年以降生育が再確認できず、石垣島でも絶滅が危惧される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

八重山諸島に固有の茎葉性苔類で 1978 年に新種として記載された。本属としては国内で唯一の種である。葉や腹葉に眼点細胞が散在することが和名の由来になっており、かつ腹葉が円形であることで他属から区別される。要因は特定できないが、1997 年以降の調査では生育が再確認できず、絶滅が危惧される。

協力者: 山口富美夫 (広島大学)・佐藤匠 (広島大学)・西畑和輝 (広島大学)・桐生賢太 (広島大学)

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、褐色、匍匐し、長さ 1～1.5 cm、幅 1～1.5 mm。葉は倒瓦状に重なり、背片は広卵形、全縁で円頭。腹片は背片の約 1/5 長、第 1 歯は基部で 1～2 細胞幅、2～3 細胞長、第 2 歯は不明瞭。腹葉は円形、茎径の約 3 倍幅。無性芽はない。本属としては日本に生育する唯一の種で、眼点細胞が背片、腹片、腹葉に散在し、腹葉が円形であることで他属から区別され、和名の由来になっている。

【生活史】

雌雄同株。胞子体により繁殖しているが、胞子が成熟する季節は不明である。

【生育環境】

常緑広葉樹の自然林において、岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

日本固有で、琉球列島（石垣島、西表島）に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1978 年に西表島から新種記載されたが、詳細な調査にもかかわらず、1997 年以降西表島では生育が再確認できない。石垣島でも絶滅が危惧される。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

生育地は 2 か所に局限し、生育量が少ないことから絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ゴマダラクサリゴケ	<i>Stictolejeunea iwatsukii</i> Mizut.	CR+EN
第4次 2019:	ゴマダラクサリゴケ	<i>Stictolejeunea iwatsukii</i> Mizut.	CR+EN
第4次 2018:	ゴマダラクサリゴケ	<i>Stictolejeunea iwatsukii</i> Mizut.	CR+EN
第4次 2017:	ゴマダラクサリゴケ	<i>Stictolejeunea iwatsukii</i> Mizut.	CR+EN
第4次 2015:	ゴマダラクサリゴケ	<i>Stictolejeunea iwatsukii</i> Mizut.	CR+EN
第4次:	ゴマダラクサリゴケ	<i>Stictolejeunea iwatsukii</i> Mizut.	CR+EN
第3次:	ゴマダラクサリゴケ	<i>Stictolejeunea iwatsukii</i> Mizut.	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Mizutani, M., 1978. Lejeuneaceae from Ishigaki and Iriomote Islands of Ryukyu Archipelago. J. Hattori Bot. Lab., 44: 121-136.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Stictolejeunea iwatsukii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Stictolejeunea iwatsukii* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy
 - area, extent and/or quality of habitat
 - number of locations or subpopulations
 - number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

ヒメゴヘイゴケ

Thysananthus retusus (Reinw., Blume & Nees) B.M.Thiers & Gradst.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧 I B 類 (EN)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 植物体が小型で発見が難しいことからまだ生育していると考えられるが、大隅半島では、60 年以上生育が確認されておらず、詳細な調査が望まれる。屋久島では生育量が非常に少ない。森林伐採などの要因により生育数が減少しているが詳細は不明である。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

和名は本種が本科の中では例外的に小さいことにちなむ。葉が全縁であることも大きな特徴である。中国と日本に分布するが、国内では大隅半島と屋久島に知られる。大隅半島では最近生育が確認されておらず、再調査が望まれる。屋久島では生育数が少ない。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、橙緑色、長さ 1～2 cm、幅約 1 mm。葉倒瓦状に重なり、背片と腹片に 2 裂する。背片は楕円形、円頭、全縁。腹片は背片の約 1/2 長、第 1 歯が 3 細胞長、基部は 2 細胞幅、第 2 歯は不明瞭。腹葉は円形で全縁。無性芽はない。苞葉が全縁であることが本種の特徴である。花被は 5 稜。近縁種のルソングヘイゴケ *Thysananthus aculeatus* は南九州以南に分布するが、葉に鋸歯がある。

【生活史】

雌雄異株。産地が少なく、生物季節については十分な調査が行われておらず、孢子の成熟時期は不明である。

【生育環境】

湿度が高い常緑広葉樹の自然林において、湿岩や樹幹に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では九州（鹿児島県大隅半島、屋久島）に分布し、国外では中国などに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

大隅半島では 60 年以上生育が確認されておらず、詳細な調査が望まれる。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

屋久島では生育量が非常に少ない。

存続を脅かす要因

産地が局限しており、森林伐採などの要因により生育数が減少しているが、詳細は不明である。

要因の区分：	(過去)	不明, 森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	不明, 森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヒメゴヘイゴケ	<i>Thysananthus flavescens</i> (S.Hatt.) Gradst.	VU
第4次 2019:	ヒメゴヘイゴケ	<i>Thysananthus flavescens</i> (S.Hatt.) Gradst.	VU
第4次 2018:	ヒメゴヘイゴケ	<i>Thysananthus flavescens</i> (S.Hatt.) Gradst.	VU
第4次 2017:	ヒメゴヘイゴケ	<i>Thysananthus flavescens</i> (S.Hatt.) Gradst.	VU
第4次 2015:	ヒメゴヘイゴケ	<i>Thysananthus flavescens</i> (S.Hatt.) Gradst.	VU
第4次:	ヒメゴヘイゴケ	<i>Thysananthus flavescens</i> (S.Hatt.) Gradst.	VU
第3次:	ヒメゴヘイゴケ	<i>Thysananthus flavescens</i> (S.Hatt.) Gradst.	VU
第2次:	ヒメゴヘイゴケ	<i>Thysananthus flavescens</i> (Hatt.) Gradst.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Sukkharak, P., 2015. A systematic monograph of the genus *Thysananthus* (Lejeuneaceae, Marchantiophyta). *Phytotaxa*, 193: 1-81.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Thysananthus retusus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Thysananthus retusus* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy
 - area, extent and/or quality of habitat
 - number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

コバノイクビゴケ

Diphyscium perminutum Takaki

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 溪流の転石上、自然林や社叢林の岩上に、まばらな群落を形成するが生育量は少ない。森林伐採や近年の気候変動に伴う台風・洪水などによって生育地全体の現存量が減少傾向にある。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

コバノイクビゴケは日本固有で、イクビゴケ属の中ではもっとも小型のものである。同属の他種からは普通葉の葉身細胞がマミラ状に膨れることなどで区別される。生育環境はミギワイクビゴケに似ている。

協力者： 秋山弘之（兵庫県立人と自然の博物館）・西畑和輝（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 5 mm 以下。まばらに生える。茎は分枝せず、長さ約 1 mm の細長い舌形の葉を密につける。イクビゴケ属の中ではもっとも小型で、他種からは、普通葉の葉身細胞がマミラ状に膨れること、内側の雌苞葉の葉身上部の縁には多数の毛があり、芒状に伸びだした中肋表面がいぼ状になることなどで区別される。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

常緑広葉樹の自然林や社叢林などの湿度の高い場所の岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

日本固有で、本州（中部以西）、四国、九州、琉球列島に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

愛知県から新種として記載された。その後、四国、九州、琉球列島の数地点から報告された。第 2 次レッドリスト作成のための調査では、タイプ産地で減少し、四国の産地で絶滅したとされた。第 4 次レッドリスト作成のための調査では、愛知県、大分県、熊本県、鹿児島県（徳之島）、沖縄県（石垣島）で生育が確認された。第 5 次レッドリスト作成のための調査では、鹿児島県徳之島と沖縄県石垣島で生育が確認された。

【生育地の現況】

沢や登山道沿いの岩上に点々と生育する。第 4 次レッドリスト作成のための調査では、愛知県、大分県、熊本県、鹿児島県（徳之島）、沖縄県（石垣島）では個体の数は少なく、特に、愛知県鳳来寺山では生育数が著しく減少したと報告された。第 5 次レッドリスト作成のための調査では、鹿児島県徳之島と沖縄県石垣島の生育量は少なかった。森林伐採や近年の気候変動に伴う台風・洪水などによって生育環境が悪化している。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

低地の森林内の溪流沿いに生育するので、森林伐採や河川開発による生育環境の変化によって壊滅的な影響を受ける可能性がある。全体として、産地が局限し、個体群の数

もサイズも小さく、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 河川開発, 分布・産地局限

特記事項

生育地の一部は国立公園または国の天然記念物地域内にある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	コバノイクビゴケ	<i>Diphyscium perminutum</i> Takaki	CR+EN
第4次 2019:	コバノイクビゴケ	<i>Diphyscium perminutum</i> Takaki	CR+EN
第4次 2018:	コバノイクビゴケ	<i>Diphyscium perminutum</i> Takaki	CR+EN
第4次 2017:	コバノイクビゴケ	<i>Diphyscium perminutum</i> Takaki	CR+EN
第4次 2015:	コバノイクビゴケ	<i>Diphyscium perminutum</i> Takaki	CR+EN
第4次:	コバノイクビゴケ	<i>Diphyscium perminutum</i> Takaki	CR+EN
第3次:	コバノイクビゴケ	<i>Diphyscium perminutum</i> Takaki	CR+EN
第2次:	コバノイクビゴケ	<i>Diphyscium perminutum</i> Tak.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

神奈川県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 愛知県[絶滅危惧ⅠB類(EN)] 大分県[絶滅危惧ⅠA類(CR)] 沖縄県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Magombo, Z. L. K., 2003. Taxonomic revision of the moss family Diphysciaceae M. Fleischer (Musci). Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 94: 1-86.
- Suzuki, T., Y. Inoue and H. Tsubota, 2015. *Diphyscium* (Diphysciaceae, Bryopsida) species newly found in Japan. Hattoria, 6: 63-73.
- 高木典雄, 1950. 日本産蘚類植物報告 (3). 植物研究雑誌, 25: 185-192.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Diphyscium perminutum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Diphyscium perminutum* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

スズキイクビゴケ

Diphyscium suzukii Z.Iwats.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 これまでに確認された生育地のいくつかは不安定な環境にあり、生育量も極めて少なく、これまで記録された 4 か所の生育地のうち 1 か所は絶滅した。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

スズキイクビゴケは日本固有で、イクビゴケ属の中では小型のものである。同属の他種からは普通葉の葉身細胞が平滑なことなどで区別される。これまで記録された 4 か所の生育地のうち 1 か所は絶滅した。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 3～10 mm。まばらに生える。茎は分枝せず、長さ 3～5 mm の細長い舌形の葉を密につける。イクビゴケ属の中では小型で、他種からは、普通葉の葉身細胞が平滑なこと、内側の雌苞葉の葉身上部の縁には多数の毛があり、芒状に伸びだした中肋表面が平滑なことなどで区別される。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

常緑広葉樹林の溪谷の粘土質の土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

日本固有で、これまでに静岡県、愛知県、高知県、鹿児島県から報告されている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

静岡県から新種として記載された。第 2 次レッドリスト作成のための調査では、タイプ産地では絶滅したが近くの別の場所で確認され、高知県の産地では絶滅したとされた。第 3 次レッドリスト作成のための調査では愛知県から確認された。また、小林（2010）は鹿児島県屋久島から報告している。

【生育地の現況】

詳細は不明。

【個体数の現況】

生育量は極めて少ない。

存続を脅かす要因

産地が局限し、個体群の数もサイズも小さい。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

生育地の一部は国定公園および国定公園内にある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	スズキイクビゴケ	<i>Diphyscium suzukii</i> Z.Iwats.	CR+EN
第4次 2019:	スズキイクビゴケ	<i>Diphyscium suzukii</i> Z.Iwats.	CR+EN
第4次 2018:	スズキイクビゴケ	<i>Diphyscium suzukii</i> Z.Iwats.	CR+EN
第4次 2017:	スズキイクビゴケ	<i>Diphyscium suzukii</i> Z.Iwats.	CR+EN
第4次 2015:	スズキイクビゴケ	<i>Diphyscium suzukii</i> Z.Iwats.	CR+EN
第4次:	スズキイクビゴケ	<i>Diphyscium suzukii</i> Z.Iwats.	CR+EN
第3次:	スズキイクビゴケ	<i>Diphyscium suzukii</i> Z.Iwats.	CR+EN
第2次:	スズキイクビゴケ	<i>Diphyscium suzukii</i> Z. Iwats.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

愛知県[絶滅危惧 I A 類(CR)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Iwatsuki, Z., 1976. Bryological miscellanies. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 40: 139-149.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 小林亮平, 2010. 屋久島（鹿児島県）で新たに見つかった絶滅危惧藓類 2 種. 藓苔類研究, 10: 56.
- Magombo, Z. L. K., 2003. Taxonomic revision of the moss family Diphysciaceae M. Fleischer (Musci). Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 94: 1-86.
- Suzuki, T., Y. Inoue and H. Tsubota, 2015. *Diphyscium* (Diphysciaceae, Bryopsida) species newly found in Japan. Hattoria, 6: 63-73.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Diphyscium suzukii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Diphyscium suzukii* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location. b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫（広島大学）
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

ケキンシゴケ目 Distichiales センボンウリゴケ科 Timmiellaceae

クロコゴケ

Luisierella barbula (Schwägr.) Steere

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab

基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。

【地点数】5 地点以下

b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

これまで本州、四国、九州、琉球列島の各地で報告されているが、石灰岩地あるいは石灰岩の古い石垣上に生育が限定されており、生育量も極めて少ない。石灰岩の採掘や石垣の整備などで個体群が消失する懸念があり、継続的な減少が予測される。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

クロコゴケは本州、四国、九州、琉球列島に分布する。植物体は小さく、暖地の石灰岩上に生育する。舌形で葉先が鈍頭の葉は乾くと弱く巻縮する。葉の特徴は同じセンボンゴケ科のホソコゴケモドキに似るが、葉の基部の緑色細胞と透明細胞の境界が本種ではV字形になるのに対し、ホソコゴケモドキでは逆U字形になる。

協力者： 西畑和輝（広島大学）・Seo Jae Heum（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、全長 1～1.5 mm で、薄く芝状に生える。茎は分枝せず、舌形で葉先が鈍頭の葉をつける。葉の長さは 1.2～1.5 mm、乾くと弱く巻縮し、湿ると展開する。中肋は太く、先端まで届かない。葉身細胞は腹側が膨らんでマミラ状になる。葉の特徴は同じセンボンゴケ科のホソコゴケモドキ (*Weisiopsis anomala*) に似るが、葉の基部の緑色細胞と透明細胞の境界が本種ではV字形になるのに対し、ホソコゴケモドキでは逆U字形になる。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

暖地の湿り気のある石灰岩壁や石灰岩を使った構造物などに生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）	【陸域_平地部】森林, 市街緑地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域	

【分布域】

国内では本州、四国、九州、琉球列島に分布し、国外では中国、インドネシア、北米、中米、南米に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では、沖縄県那覇市で生育を確認した。また、立石ほか (2012) は、本種の生育を徳島県から報告している。

【生育地の現況】

沖縄県那覇市では古い石灰岩の石垣上にわずかに生育しているが、石垣の整備などで個体群が消失する懸念がある。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、石灰採掘により生育地が消滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 石灰採掘, 分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失
	(現在)	森林伐採, 石灰採掘, 分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失

特記事項

生育地の一部は国定公園内、国営公園内にある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	クロコゴケ	<i>Luisierella barbula</i> (Schwägr.) Steere	CR+EN
第4次 2019:	クロコゴケ	<i>Luisierella barbula</i> (Schwägr.) Steere	CR+EN
第4次 2018:	クロコゴケ	<i>Luisierella barbula</i> (Schwägr.) Steere	CR+EN
第4次 2017:	クロコゴケ	<i>Luisierella barbula</i> (Schwägr.) Steere	CR+EN
第4次 2015:	クロコゴケ	<i>Luisierella barbula</i> (Schwägr.) Steere	CR+EN
第4次:	クロコゴケ	<i>Luisierella barbula</i> (Schwägr.) Steere	CR+EN
第3次:	クロコゴケ	<i>Luisierella barbula</i> (Schwägr.) Steere	CR+EN
第2次:	クロコゴケ	<i>Luisierella barbula</i> (Schwaegr.) Steere	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 岡山県[絶滅危惧Ⅰ類] 広島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 宮崎県[絶滅危惧ⅠA類(CR-r)] 沖縄県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Deguchi, H., 1987. *Luisierella* (Pottiaceae, Musci), a moss genus with a disjunctive distribution in Neotropics and Japan. *Journal of Japanese Botany*, 62: 7-15.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 立石幸敏・川合啓二・田村英子・西村直樹, 2012. 慈眼寺石灰岩地（徳島県勝浦郡上勝町）の蘚苔類. *Naturalistae*, 16: 91-97.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Luisierella barbula has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Luisierella barbula* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of

a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Forest, Urban green area
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining, Limited distribution, Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

ギボウシゴケ目 Grimmiales ギボウシゴケ科 Grimmiaceae

ウシオギボウシゴケ

Schistidium maritimum (R.Scott) Bruch & Schimp.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 1989 年に北見神威岬において確認された集団は、2019 年の調査において生育量の減少が確認された。海岸沿いの岩上に生育し、海水面の変動によって生育地が水没して個体群が縮小する可能性がある。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ウシオギボウシゴケは国内では北海道北部に、国外ではヨーロッパ、北米に分布する小形の直立性の蘚類。海岸に生育する。国内 3 か所の生育地のうち 2 か所の現況は不明であるが、1 か所でコロニー数の減少が見られた。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ約 1 cm。茎はほとんど分枝せず、長さ 1.8-2.3 mm の卵形の葉を密につける。萌は葉の間に隠れる。シズミギボウシゴケ属の他の種から、葉の中肋にガイドセルとステライドがあること、雌苞葉が通常葉の 2 倍の長さになることで区別される。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

北海道北部の海岸の波しぶきがかかるような岩上に点々と生育する。したがって、海水面の変動により沈水し、消滅する可能性が高い。

生育環境区分：	【陸域_海岸部】海崖・岩浜・岩礁（磯）

国土地域区分：	(5) 沿岸域

【分布域】

国内では北海道北部の三地点（利尻島、北見神威岬、知床半島）から報告があり、国外ではヨーロッパ、北米に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

利尻島と知床半島での生育についての詳細は不明。北見神威岬でコロニー数の減少が確認された。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

1962 年に北海道利尻島から国内では初めて報告された。その後、知床半島、北見神威

岬で生育が確認された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ウシオギボウシゴケ	<i>Schistidium maritimum</i> (Turner) Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次 2019:	ウシオギボウシゴケ	<i>Schistidium maritimum</i> (Turner) Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次 2018:	ウシオギボウシゴケ	<i>Schistidium maritimum</i> (Turner) Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次 2017:	ウシオギボウシゴケ	<i>Schistidium maritimum</i> (Turner) Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次 2015:	ウシオギボウシゴケ	<i>Schistidium maritimum</i> (Turner) Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次:	ウシオギボウシゴケ	<i>Schistidium maritimum</i> (Turner) Bruch & Schimp.	CR+EN
第3次:	ウシオギボウシゴケ	<i>Schistidium maritimum</i> (Turner) Bruch & Schimp.	CR+EN
第2次:	和名なし	<i>Calymperes strictifolium</i> (Mitt.) Roth Syn. <i>C. tuberculosum</i> (Ther. et Dix.) Broth.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Deguchi, H., 1979. A revision of the genera *Grimmia*, *Schistidium* and *Coscinodon* (Musci) of Japan. Journal of science of the Hiroshima University Series B, Division 2 (Botany), 16: 121-256.
- 樋口正信, 1989. 興味ある北海道産蘚類数種. Hikobia, 10: 299-301.
- 樋口正信, 2015. ウシオギボウシゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 83. ぎょうせい, 東京.
- Iwatsuki, Z., 1962. Mosses of Rishiri and Rebun Islands, northern Japan. J. Hattori Bot. Lab., 25: 107-125.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Schistidium maritimum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Schistidium maritimum* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】 Sea Cliff/Rocky beach/Reef
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—



執筆者: 樋口正信 (国立科学博物館)
 Author: Masanobu Higuchi

公表年月: 2025 年 3 月

エゾキヌシツポゴケ

Seligeria tristichoides Kindb.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地の一つ、北海道の中頓別町では生育地が公園になり、2019 年に数個体が確認されたが環境変化による絶滅が危惧される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

エゾキヌシツポゴケは国内では北海道と埼玉県に、国外ではヨーロッパ、北米に分布する微小の直立性の蘚類。石灰岩上に生育する。埼玉県の生育の現況は不明であるが、北海道の生育地では生育量の減少が見られた。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 3 mm 以下。茎は分枝せず、葉は長さ 0.8-1.0 mm の披針形で 3 列に並ぶ。キヌシッポゴケ属の他の種からは、軸柱が長く、蒴の口から突出すること、胞子が大きいこと（直径 18-24 μm ）で区別される。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

湿った石灰岩の岩壁に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道中頓別町と埼玉県秩父市に分布し、国外ではヨーロッパ、北米に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

中頓別町では生育地が公園になり、2019 年に数個体が確認されたが環境変化による絶滅が危惧される。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	石灰採掘, 分布・産地局限, その他（生育地の公園整備）
	(現在)	石灰採掘, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	エゾキヌシッポゴケ	<i>Seligeria tristichoides</i> Kindb.	CR+EN
第4次 2019:	エゾキヌシッポゴケ	<i>Seligeria tristichoides</i> Kindb.	CR+EN
第4次 2018:	エゾキヌシッポゴケ	<i>Seligeria tristichoides</i> Kindb.	CR+EN
第4次 2017:	エゾキヌシッポゴケ	<i>Seligeria tristichoides</i> Kindb.	CR+EN
第4次 2015:	エゾキヌシッポゴケ	<i>Seligeria tristichoides</i> Kindb.	CR+EN
第4次:	エゾキヌシッポゴケ	<i>Seligeria tristichoides</i> Kindb.	CR+EN
第3次:	エゾキヌシッポゴケ	<i>Seligeria tristichoides</i> Kindb.	CR+EN
第2次:	エゾキヌシッポゴケ	<i>Seligeria tristichoides</i> Kindb.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧 I 類(CE)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Higuchi, M., 1984. Four species of Seligeriaceae (Musci) newly found in Hokkaido, northern Japan. *Hikobia*, 9: 57-60.
- 樋口正信, 2015. エゾキヌシッポゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 86. ぎょうせい, 東京.
- Suzuki, T., Z. Iwatsuki and H. Kiguchi, 2006. The family Seligeriaceae (Bryopsida) in Japan. *Journal of the Hattori Botanical Laboratory*, 100: 469-493.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Seligeria tristichoides has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Seligeria tristichoides* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence

(ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limestone mining, Limited distribution, Other (生育地の公園整備)
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信 (国立科学博物館)
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

キイアミゴケ

Syrrhopodon kiiensis Z.Iwats.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地が極めて限定されており、生育量も少ない。斜面の崩落や倒木などの自然災害によって消失する可能性が高い場所に生育するため、継続的な減少が推定される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

キイアミゴケは日本固有で、木の根元などに生育する。アミゴケ属の他種からは、葉の縁は弱く内側に巻くこと、中肋の背面と葉の縁に鋸歯があること、葉身細胞には多くの小さなパピラがあることなどで区別される。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 2～3 cm。茎はほとんど分枝せず、長さ約 4 mm の狭披針形の葉を密につける。葉は乾燥すると縮れる。カタシログケ属の他種からは、葉の縁は弱く内側に巻くこと、中肋の背面と葉の縁に鋸歯があること、葉身細胞には多くの小さなパピラがあることなどで区別される。

【生活史】

孢子体は知られていない。

【生育環境】

常緑広葉樹林の木の根元や湿った岩壁（チャート）に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

日本固有種で、紀伊半島と九州に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本種は Iwatsuki (1959) によって三重県から新種として記載された。その後、屋久島 (Iwatsuki & Sharp 1967)、タイプ産地とは異なる三重県および和歌山県南部 (木口・立石 2005) から報告されている。これら 4 か所以外からの報告はないが、広島大学植物標本庫には 2012 年に和歌山県新宮市で採集された標本が保管されている。

これまでのところ、本種が報告された産地は三重県 2 か所、和歌山県 2 か所、屋久島のみである。第 5 次レッドリスト作成のための調査ではこれらの生育地は調査対象となっておらず、確認できなかった。しかし、2005 年に確認されている三重県の生育地、標本で確認されている和歌山県の生育地については、確認後に生育地の環境が大きく変化していないため、現在も生育しているものと思われる。

【生育地の現況】

木口・立石 (2005) の報告、2012 年採集の標本とも生育地は溪流沿いの岩壁である。いずれの生育地においても生育環境に大きな変化はないと考えられる

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

生育地の一部は国立公園内である。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	キイアミゴケ	<i>Syrrhopodon kiiensis</i> Z.Iwats.	CR+EN
第4次 2019:	キイアミゴケ	<i>Syrrhopodon kiiensis</i> Z.Iwats.	CR+EN
第4次 2018:	キイアミゴケ	<i>Syrrhopodon kiiensis</i> Z.Iwats.	CR+EN
第4次 2017:	キイアミゴケ	<i>Syrrhopodon kiiensis</i> Z.Iwats.	CR+EN
第4次 2015:	キイアミゴケ	<i>Syrrhopodon kiiensis</i> Z.Iwats.	CR+EN
第4次:	キイアミゴケ	<i>Syrrhopodon kiiensis</i> Z.Iwats.	CR+EN
第3次:	キイアミゴケ	<i>Syrrhopodon kiiensis</i> Z.Iwats.	CR+EN
第2次:	キイアミゴケ	<i>Syrrhopodon kiiensis</i> Z. Iwats.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

三重県[絶滅危惧 IA 類(CR)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Iwatsuki, Z., 1959. Bryological miscellanies, VII-XI. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 21: 236-247.
- Iwatsuki, Z. and A. J. Sharp, 1967. Mosses of Yakushima Island. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 30: 277-314.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- 木口博史・立石幸敏, 2005. 三重県の *Syrrhopodon kiiensis* (キイアミゴケ). 蘚苔類研究, 8: 404-405.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Syrrhopodon kiiensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Syrrhopodon kiiensis* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
 Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

ヤクシマアミゴケ

Syrrhopodon yakushimensis Takaki & Z.Iwats.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 国内では屋久島、沖縄島、西表島の 3 島に分布が限られており、いずれの生育地でも個体群のサイズは小さく、生育量も少ない。人為的攪乱あるいは倒木などによる影響を受けやすく、生育地の存続が危惧される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ヤクシマアミゴケは日本固有で、樹幹や岩壁に生育する。アミゴケ属の他種からは、葉の縁は強く内側に巻くこと、中肋の背面と葉の縁は平滑であること、葉身細胞には先が 2~4 に分かれたパピラがあることなどで区別される。

協力者： 西畑和輝（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 1.2～2.0 mm。茎はほとんど分枝せず、長さ 2.5～3.3 mm の狭披針形の葉を密につける。葉の上部は腹側に巻きこみ、乾燥すると縮れる。カタシロゴケ属の他種からは、葉の縁が強く内側に巻くこと、中肋の背面と葉の縁は平滑であること、葉身細胞には先が 2～4 に分かれたパピラがあることなどで区別される。

【生活史】

胞子体は知られていない。葉の先端に作られる無性芽で繁殖する。

【生育環境】

常緑広葉樹林の樹幹に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

日本固有で、屋久島、沖縄島、西表島に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では、西表島の 2 か所で生育が確認された。そのほか、岩田（2018）は屋久島の 2 か所から報告している。

【生育地の現況】

生育地の一部では森林伐採や自然災害などにより生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

比較的低地の森林内に生育するので、森林伐採による生育環境の変化によって壊滅的な影響を受ける可能性がある。産地が局限し、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

生育地の一部は国立公園内にある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヤクシマアミゴケ	<i>Syrrhopodon yakushimensis</i> Takaki & Z.Iwats.	CR+EN
第4次 2019:	ヤクシマアミゴケ	<i>Syrrhopodon yakushimensis</i> Takaki & Z.Iwats.	CR+EN
第4次 2018:	ヤクシマアミゴケ	<i>Syrrhopodon yakushimensis</i> Takaki & Z.Iwats.	CR+EN
第4次 2017:	ヤクシマアミゴケ	<i>Syrrhopodon yakushimensis</i> Takaki & Z.Iwats.	CR+EN
第4次 2015:	ヤクシマアミゴケ	<i>Syrrhopodon yakushimensis</i> Takaki & Z.Iwats.	CR+EN
第4次:	ヤクシマアミゴケ	<i>Syrrhopodon yakushimensis</i> Takaki & Z.Iwats.	CR+EN
第3次:	ヤクシマアミゴケ	<i>Syrrhopodon yakushimensis</i> Takaki & Z.Iwats.	CR+EN
第2次:	ヤクシマアミゴケ	<i>Syrrhopodon yakushimensis</i> Tak. et Z. Iwats.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Iwasuki, Z., 1956. Bryological miscellanies, IV-VI. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 17: 59-63.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- 木口博史・藤田明嗣, 2006. 沖縄島と屋久島のヤクシマアミゴケ. 蘚苔類研究, 9: 64-65.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Syrrhopodon yakushimensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Syrrhopodon yakushimensis* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy
 - area, extent and/or quality of habitat
 - number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫（広島大学）
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

ヘビゴケ

Campylopodium medium (Duby) Giese & J.-P.Frahm

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 第 5 次レッドリスト調査（2016-2019）では西表島で確認されなかった。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ヘビゴケは国内では伊豆諸島、トカラ列島、琉球列島に、国外ではアメリカを除く世界の熱帯に広く分布する小形の直立性の蘚類。今回の調査では琉球列島で確認できず、本地域では絶滅した可能性が高い。

協力者: 山口富美夫（広島大学）・佐藤匠（広島大学）・西畑和輝（広島大学）・桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

茎は高さ 5-15 mm、葉は長さ 2-5.5 mm で、広い基部から急に針状に伸び、葉先は中肋で占められる。蒴柄は長さ 5 mm、湿ると蛇状に曲がり、卵形の蒴が垂れ下がるようになる。本属の種は日本では本種のみからなる。蛇状に曲がる蒴柄が特徴である。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

伊豆諸島以南の島嶼部の日当たりの良い火山岩や土上に生育する。国内では火山島からの記録が多い。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】草地

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では琉球列島（西表島）、トカラ列島（硫黄島）、桜島、伊豆諸島（大島、八丈島）に見られ、国外では中央アメリカを除く熱帯地域に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト調査（2016-2019）では西表島で確認されなかった。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限しているため絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヘビゴケ	<i>Campylopodium medium</i> (Duby) Giese & J.- P.Frahm	VU
第4次 2019:	ヘビゴケ	<i>Campylopodium medium</i> (Duby) Giese & J.- P.Frahm	VU
第4次 2018:	ヘビゴケ	<i>Campylopodium medium</i> (Duby) Giese & J.- P.Frahm	VU
第4次 2017:	ヘビゴケ	<i>Campylopodium medium</i> (Duby) Giese & J.- P.Frahm	VU
第4次 2015:	ヘビゴケ	<i>Campylopodium medium</i> (Duby) Giese & J.- P.Frahm	VU
第4次:	ヘビゴケ	<i>Campylopodium medium</i> (Duby) Giese & J.- P.Frahm	VU
第3次:	ヘビゴケ	<i>Campylopodium medium</i> (Duby) Giese & Frahm	VU
第2次:	ヘビゴケ	<i>Campylopodium medium</i> (Duby) Giese et Frahm	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・木口博史, 1979. 伊豆七島新産のヘビゴケについて. 蘚苔地衣雑報, 8: 121-124.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1987. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 1. pp. 1-242. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- Shin, T., 1970. Mosses of the Ryukyu Islands V. Sci. Rep. Kagoshima Univ. 19: 51-65.
- 山口富美夫, 2015. ヘビゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 157. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Campylopodium medium has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Campylopodium medium is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Grassland
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

フチドリコゴケ

Pachyneurosis perinvoluta (Tixier) M.Alonso, M.J.Cano & J.A.Jiménez

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 本種は沖縄島北部の石灰岩地に局所的に分布している。また、生育地はハイキングコース沿いにあるため、人の踏みつけや遊歩道の整備により、個体群の減少が懸念される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は中国、ベトナム、日本に分布する。日本では沖縄島北部石灰岩地の山頂部や尾根沿いの石灰岩上に限って生育する。第 5 次レッドリスト作成のための調査では沖縄島の 2 か所で確認された。いずれの生育地もハイキングコース沿いにあり、人の踏みつけや遊歩道の整備によって個体群の減少が懸念される。

協力者： 西畑和輝（広島大学）・池松泰一（広島大学）・岸田知展（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は小型で、密な塊状の群落を形成する。茎は長さ 1～2 cm。葉は線状披針形で長さ 5～7 mm、乾くと強く巻縮する。葉鞘部をのぞき、葉の縁が 2～3 細胞層となることが大きな特徴である。葉身細胞は丸みを持った方形で膨らみ、密に小さなパピラがある。葉鞘部の細胞は大型薄壁で、葉鞘部の縁に沿ってせり上がり、葉身細胞との境界が V 字形となる。葉腋毛は長さ 0.4～0.7 mm で、20～40 の小型の細胞が数珠状に連なる。本属の種は日本では本種のみである。日本産のセンボンゴケ科の種からは、葉縁が多細胞層になること、数珠状の葉腋毛を持つことで容易に区別できる。

【生活史】

雌雄異株。孢子体は知られていない。

【生育環境】

沖縄島の 2 か所で生育が確認されているが、いずれも熱帯カルスト的な地形の山頂部あるいは尾根沿いで、日当たりのよい石灰岩の露頭の窪みや割れ目に塊状の群落を作って生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

日本、中国、ベトナムの石灰岩地の石灰岩上に生育する種で、日本では沖縄県（沖縄島）のみに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では、沖縄島北部の石灰岩地で生育が確認された。

【生育地の現況】

沖縄本島北部石灰岩地の 2 つの山域に生育する。いずれもハイキングコースの遊歩道沿いで、ハイカーが休憩する場所の足下あるいは歩くときに容易に手の届く範囲にあり、影響が危惧される。

【個体数の現況】

2 つの生育地のうち、一方では少ないが、もう 1 つの山域では比較的多くの個体数が確認された。

存続を脅かす要因

本種は沖縄島北部の石灰岩地に局所分布しており、生育地はハイキングコース沿いに

あるため、人の踏みつけや遊歩道の整備の影響が懸念される。

要因の区分：	(過去)	人の踏みつけ、分布・産地局限
	(現在)	人の踏みつけ、分布・産地局限

特記事項

本種は Yamaguchi (2006) が *Pachyneuropsis miyagii* として沖縄島固有種として新種記載したもので、Alonso et al. (2018) によって *Pachyneuropsis perinvoluta* のシノニムとされた。沖縄島、中国、ベトナムに隔離的に分布するが、これまでに確認されている生育地は限られている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	フチドリコゴケ	<i>Pachyneuropsis miyagii</i> T.Yamag.	CR+EN
第4次 2019:	フチドリコゴケ	<i>Pachyneuropsis miyagii</i> T.Yamag.	CR+EN
第4次 2018:	フチドリコゴケ	<i>Pachyneuropsis miyagii</i> T.Yamag.	CR+EN
第4次 2017:	フチドリコゴケ	<i>Pachyneuropsis miyagii</i> T.Yamag.	CR+EN
第4次 2015:	フチドリコゴケ	<i>Pachyneuropsis miyagii</i> T.Yamag.	CR+EN
第4次:	フチドリコゴケ	<i>Pachyneuropsis miyagii</i> T.Yamag.	CR+EN
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Alonso, M., M. J. Cano and J. A. Jiménez, 2018. Taxonomy and distribution of *Pachyneuropsis* (Pottiaceae, Bryophyta). *Plant Systematics and Evolution*, 304: 1069-1076.
- Yamaguchi, T., 2006. *Pachyneuropsis miyagii* T. Yamag. (Pottiaceae), a new species from Okinawa Island, Japan. *Journal of the Hattori Botanical Laboratory*, 100: 577-580.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Pachyneuropsis perinvoluta has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pachyneuropsis perinvoluta* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Human trampling, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

センボンゴケ目 Pottiales センボンゴケ科 Pottiaceae

ムカゴネジレゴケ

Syntrichia gemmascens (P.C.Chen) R.H.Zander

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 徳島県剣山大剣神社のニワトコ樹幹に数センチ四方のコロニーが多数見られたが、以前より少なくなっていた。長野県青木川燕岩では生育を確認できなかった。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ムカゴネジレゴケは国内では本州と四国に分布し、国外では中国に分布する直立性の蘚類。生育地の 1 か所では確認できず、他の 1 か所では生育量の減少が見られる。

協力者: 井上侑哉 (国立科学博物館)・古木達郎 (元千葉県立中央博物館)・木口博史 (岡山コケの会)・出口博則 (広島大学)

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、長さ 4 cm 以下。茎は分枝せず、エゾネジレゴケ属では大型の長さ 2.5-3 mm の長卵形～披針形の葉をつける。棍棒状の無性芽を持つ。エゾネジレゴケ属の他の種から、茎が長く、中心束を欠くこと、葉の上半部の縁に鋸歯があること、無性芽を持つことなどで区別される。

【生活史】

葉の上に作られる無性芽で繁殖する。

【生育環境】

石灰岩地の石灰岩や樹幹に着生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では長野県、埼玉県、徳島県から報告されている。国外では中国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト調査（2016-2019）では、埼玉県中津川林道、徳島県剣山で確認された。中津川林道沿いの大若沢で 30 cm×30 cm 程度の範囲に小群落が点在していた。剣山大剣神社のニフトコ樹幹に数センチ四方のコロニーが多数見られたが、以前より少なくなっていた。剣山の行場の石灰岩壁に 5×10 cm 程度のコロニーが 3 か所見られた。長野県青木川燕岩では生育を確認できなかった。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、石灰採掘により生育地が消滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	石灰採掘, 分布・産地局限
	(現在)	石灰採掘, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ムカゴネジレゴケ	<i>Desmatodon gemmascens</i> P.C.Chen	CR+EN
第4次 2019:	ムカゴネジレゴケ	<i>Desmatodon gemmascens</i> P.C.Chen	CR+EN
第4次 2018:	ムカゴネジレゴケ	<i>Desmatodon gemmascens</i> P.C.Chen	CR+EN
第4次 2017:	ムカゴネジレゴケ	<i>Desmatodon gemmascens</i> P.C.Chen	CR+EN
第4次 2015:	ムカゴネジレゴケ	<i>Desmatodon gemmascens</i> P.C.Chen [= <i>Syntrichia gemmascens</i> (P.C.Chen) R.H.Zand.]	CR+EN
第4次:	ムカゴネジレゴケ	<i>Desmatodon gemmascens</i> P.C.Chen [= <i>Syntrichia gemmascens</i> (P.C.Chen) R.H.Zand.]	CR+EN
第3次:	ムカゴネジレゴケ	<i>Desmatodon gemmascens</i> P.C.Chen [= <i>Syntrichia gemmascens</i> (P.C.Chen) R.H.Zand.]	CR+EN
第2次:	ムカゴネジレゴケ (新称)	<i>Desmatodon gemmascens</i> Chen Syn. <i>Syntrichia gemmascens</i> (Chen) Zand.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況 (令和4年度末時点)

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

保護に係る法令指定状況 (令和4年度末時点)

指定なし

参考文献

- Deguchi, H., 1987. Noteworthy mosses from the Shikoku District of Japan (3). Mem. Fac. Sci. Kochi Univ., Ser. D (Biol.), 8: 39-46.
- 樋口正信, 2015. ムカゴネジレゴケ. 環境省 (編), レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 23. ぎょうせい, 東京.
- Noguchi, A., 1988. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 2. pp. 243-491. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- Saito, K., 1973. Memoir of the Japanese Pottiaceae (1). Bull. Natl. Sci. Mus. Tokyo, 16: 61-91.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Syntrichia gemmascens has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Syntrichia gemmascens is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limestone mining, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信 (国立科学博物館)
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

オオツボゴケ

Splachnum ampullaceum Hedw.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 2010 年に生育が確認された北海道東部の落石岬で 2017 年に調査したが発見することができなかった。現地では絶滅したと思われる。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

オオツボゴケは国内では北海道と長野県に、国外では北半球の寒冷地にまれに分布する直立性の蘚類。国内 4 か所の生育地のうち北海道の 2 か所の生育の現況は不明であるが、北海道の 1 か所では生育が確認されなかった。長野県では従来の生育地の現況は不明であるが、別の場所で確認された。

協力者： 上野健（都留文科大学）

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ約 1 cm、密生し、芝状になる。茎は分枝せず、長さ約 5 mm の卵形から披針形の葉をまばらにつける。オオツボゴケ科の種は植物体に比べ大型の胞子体をもち、蒴柄や蒴は赤味がかった黄色から濃い赤褐色を示す。ユリゴケ属の種とは、蒴の下部が胞子のある上部よりも肥大していることで区別される。

【生活史】

雌雄異株または同株。成熟した胞子はハエの仲間によって散布される。

【生育環境】

オオツボゴケ属の種は動物の遺骸や糞など腐った有機物や腐植土に生えるという特徴がある。オオツボゴケは寒冷地や高山の腐った動物の糞や遺骸の上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林, 湿地・湿原・細流

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道と長野県に分布し、国外では北半球の寒冷地にまれに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

国内で最初に報告された北海道の風連湿原と納沙布での生育の現況は不明である。2010 年に生育が確認された北海道東部の落石岬については、2017 年の調査で生育が確認されなかった。現地では絶滅したと思われる。長野県八ヶ岳ではこれまで報告されている生育地の現況は不明であるが、別の場所で生育が確認されている。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、生育している個体群の数もサイズも小さく、生育環境が特殊であり、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オオツボゴケ	<i>Splachnum ampullaceum</i> Hedw.	CR+EN
第4次 2019:	オオツボゴケ	<i>Splachnum ampullaceum</i> Hedw.	CR+EN
第4次 2018:	オオツボゴケ	<i>Splachnum ampullaceum</i> Hedw.	CR+EN
第4次 2017:	オオツボゴケ	<i>Splachnum ampullaceum</i> Hedw.	CR+EN
第4次 2015:	オオツボゴケ	<i>Splachnum ampullaceum</i> Hedw.	CR+EN
第4次:	オオツボゴケ	<i>Splachnum ampullaceum</i> Hedw.	CR+EN
第3次:	オオツボゴケ	<i>Splachnum ampullaceum</i> L. ex Hedw.	CR+EN
第2次:	オオツボゴケ	<i>Splachnum ampullaceum</i> L. ex Hedw.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信・上野 健, 2010. 北海道落石岬で確認されたオオツボゴケ. 蘚苔類研究, 10: 57-58.
- 樋口正信, 2015. オオツボゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）, p. 87. ぎょうせい, 東京.
- 西村直樹・井上 浩, 1981. 北八ヶ岳産のショクダイゴケについて. 植物研究雑誌, 56: 63-64.
- 島立正広・樋口正信, 2017. 長野県八ヶ岳で確認されたオオツボゴケ. 蘚苔類研究, 11: 265.
- Suzuki, H., 1960. *Splachnum ampullaceum* Hedw. found in Hokkaido, Japan. Hikobia, 2: 31.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Splachnum ampullaceum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Splachnum ampullaceum* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of

a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, Wetland/Marsh/Stream
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—



執筆者: 樋口正信 (国立科学博物館)
Author: Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ヒメハナガサゴケ

Splachnum melanocaulon (Wahlenb.) Schwägr.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 2005 年に国内で最初に生育が確認された栃木県男体山ではその後の状況は不明。2018 年に八ヶ岳で 2 か所目の生育地が報告されたが、その後、その個体群は消滅した。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

国内では栃木県と長野県に、国外ではヨーロッパ北部、アジア北部（シベリア、カムチャッカ）、北アメリカ北部（アラスカ）に分布する直立性の蘚類。国内 2 か所の生育地のうち栃木県の生育状況は不明であるが、長野県では消滅したことが確認されている。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ約 1 cm、密生する。茎は分枝せず、倒卵形の葉をまばらにつける。蒴の頸部が傘状に広がり、成熟すると赤褐色になる。同属のオオツボゴケとは、蒴の頸部が傘状に広がること、葉は倒卵形で葉先は急に細く尖ること、上部の葉縁に小型の鈍歯かやや密に並ぶことなどで区別される。

【生活史】

雌雄異株または同株。成熟した孢子はハエの仲間によって散布される。

【生育環境】

オオツボゴケ属の種は動物の遺骸や糞など腐った有機物や腐植土に生えるという特徴がある。オオツボゴケは寒冷地や高山の腐った動物の糞や遺骸の上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林, 湿地・湿原・細流

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では栃木県と長野県に、国外ではヨーロッパ北部、アジア北部（シベリア、カムチャッカ）、北アメリカ北部（アラスカ）に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2005 年に国内で最初に生育が確認された栃木県男体山ではその後の状況は不明。2018 年に八ヶ岳で 2 か所目の生育地が報告されたが、その後、その個体群は消滅した。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、生育している個体群の数もサイズも小さく、生育環境が特殊であり、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

国内の 2 か所の生育地では鹿の糞の上で生育が確認されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	—	—	—
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—
第4次 2017:	—	—	—
第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信・古木達郎，2018．ハケ岳の蘚苔類チェックリスト．国立科学博物館専報，52: 39-64.
- 岩月善之助・鈴木 直・齊藤亀三，2005．*Splachnum melanocaulon* ヒメハナガサゴケ（新称）は日本にも産する．蘚苔類研究，9: 12-15.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Splachnum melanocaulon has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Splachnum melanocaulon* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy
 - area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, Wetland/Marsh/Stream
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—



©樋口正信

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ウワバミゴケ

Breutelia arundinifolia (Duby) M.Fleisch.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 ただし、国内では、屋久島のように局所的に分布しているが、2016 年以降確認されておらず、絶滅が危惧される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ウワバミゴケは日本では屋久島に分布する。植物体は大型で、全長 20 cm になり、全体がブラシ状になる。葉は披針形で、長さ 8 mm に達する。中肋は葉の先端に達するか少し突出する。蒴は卵状楕円形で、水平に傾き、乾くと明瞭な縦溝ができる。第 5 次レッドリスト作成のための調査では確認されなかった。

基礎情報

【形態】

植物体は全長 20 cm にもなり、下部は倒伏し、上部は直立する。茎はほとんど分枝せず、基部で反り返って展開する葉と仮根が密生し、全体がブラシ状になる。葉は披針形で、長さ 8 mm に達する。中肋は葉の先端に達するか少し突出する。蒴は基部がつぼまった円筒形で、水平に傾く。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

湿った岩や腐植土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では九州（屋久島）に分布し、国外ではアジアの熱帯および亜熱帯地域、さらにタスマニア、ハワイに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では確認されていない。広島大学植物標本庫には、2015 年に屋久島の 2 か所で採集された標本が保管されている。湿原周辺のほか、駐車場の周辺の側溝などの湿った場所に生育することもあり、今後の調査で新たな生育地点が見つかる可能性もある。

【生育地の現況】

生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

屋久島が分布の北限となっている。湿原周辺のほか、駐車場の周辺の側溝などの湿った場所に生育することもあり、今後の調査で見つかる可能性が高い。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ウバミゴケ	<i>Breutelia arundinifolia</i> (Duby) M.Fleisch.	CR+EN
第4次 2019:	ウバミゴケ	<i>Breutelia arundinifolia</i> (Duby) M.Fleisch.	CR+EN
第4次 2018:	ウバミゴケ	<i>Breutelia arundinifolia</i> (Duby) M.Fleisch.	CR+EN
第4次 2017:	ウバミゴケ	<i>Breutelia arundinifolia</i> (Duby) M.Fleisch.	CR+EN
第4次 2015:	ウバミゴケ	<i>Breutelia arundinifolia</i> (Duby) M.Fleisch.	CR+EN
第4次:	ウバミゴケ	<i>Breutelia arundinifolia</i> (Duby) M.Fleisch.	CR+EN
第3次:	ウバミゴケ	<i>Breutelia arundinifolia</i> (Duby) M.Fleisch.	CR+EN
第2次:	ウバミゴケ	<i>Breutelia arundinifolia</i> (Duby) Fl.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1989. Illustrated moss flora of Japan. Part 3. 250 pp. Hattori Botanical Laboratory, Nichinan.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Breutelia arundinifolia has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Breutelia arundinifolia* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫（広島大学）
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

マルバツガゴケ

Distichophyllum obtusifolium Thér.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地が局在しており、生育量も少ない。森林伐採などの環境悪化により、個体群の消滅が危惧される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

マルバツガゴケは国内では屋久島と琉球列島に分布し、国外では中国とフィリピンに分布する。ツガゴケ属の中では大型で、フチナシツガゴケに似るが、葉の上部が鈍頭から円頭で、先端がわずかに尖ることや全周にわたって葉の縁の細胞は葉身細胞と形や大きさが異なることなどで特徴づけられる。

協力者： 西畑和輝（広島大学）・岸田知展（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、茎は長さ約 3 cm。密に重なりあって生える。茎はほとんど分枝せず、長さ約 2 mm の倒卵形から楕円形の葉を平たく密につける。ツガゴケ属の中では大型で、フチナシツガゴケ (*Distichophyllum osterwardii*) に似る。本属の他種からは、葉の上部が鈍頭から円頭で、先端がわずかに尖ること、葉の縁の細胞は全周にわたって葉身細胞と形や大きさが異なることなどで区別される。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

常緑広葉樹林の溪流沿いの岩上や林内の湿った岩上や倒木上などに生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では四国、九州（屋久島）と琉球列島に分布し、国外では中国とフィリピンに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では確認されなかったが、その後 2021 年の調査で沖縄島から確認された。また、岩田（2018）は屋久島から、秋山・佐治（2023）は徳島県から報告している。

【生育地の現況】

沖縄島では沢沿いの湿った倒木上に生育していた。いずれの生育地においても生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

確認できた個体群は一つのみで、個体数も少ない。

存続を脅かす要因

産地が局限し、個体数も少なく、森林伐採により生育地の環境悪化によって、個体群の消滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

日本が本種の分布の北限である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	マルバツガゴケ	<i>Distichophyllum obtusifolium</i> Thér.	CR+EN
第4次 2019:	マルバツガゴケ	<i>Distichophyllum obtusifolium</i> Thér.	CR+EN
第4次 2018:	マルバツガゴケ	<i>Distichophyllum obtusifolium</i> Thér.	CR+EN
第4次 2017:	マルバツガゴケ	<i>Distichophyllum obtusifolium</i> Thér.	CR+EN
第4次 2015:	マルバツガゴケ	<i>Distichophyllum obtusifolium</i> Thér.	CR+EN
第4次:	マルバツガゴケ	<i>Distichophyllum obtusifolium</i> Thér.	CR+EN
第3次:	マルバツガゴケ	<i>Distichophyllum obtusifolium</i> Thér.	VU
第2次:	マルバツガゴケ	<i>Distichophyllum obtusifolium</i> Thér.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 秋山弘之・佐治まゆみ, 2023. 日本の貴重なコケの森「轟九十九滝（徳島県海部郡海陽町）」．*蘚苔類研究*, 12: 316-318.
- 岩田和鷹, 2018. 屋久島（鹿児島県）における蘚苔類の垂直分布. *Naturalistae*, 22: 73-84.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 岸田知展・西畑和輝・山口富美夫, 2023. 59年ぶりに沖縄島で再発見されたマルバツガゴケ *Distichophyllum obtusifolium* Thér.について. *蘚苔類研究*, 12: 286.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Distichophyllum obtusifolium has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Distichophyllum obtusifolium* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of

a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫（広島大学）
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales ヤナギゴケ科 Amblystegiaceae

ヒメコガネハイゴケ

Podperaea krylovii (Podp.) Z.Iwats. & Glime

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 第 5 次レッドリスト調査 (2016-2019) では、北海道大雪山、埼玉県秩父山地、山梨県八ヶ岳吐竜の滝のいずれもで生育を確認できなかった。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ヒメコガネハイゴケは北海道、埼玉県、長野県に分布する小形の匍匐性の蘚類。腐木、土壌、石灰岩の上に生育する。複数の生育地で生育が確認できず、絶滅が懸念される。

協力者： 古木達郎（元千葉県立中央博物館）・木口博史（岡山コケの会）

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、小型。茎は不規則に分枝し、茎の表皮細胞は内側の細胞に比べ大きく、外側の壁は薄い。葉は卵状披針形で、長さ 0.65-0.83 mm、細長く尖る。中肋は 1 本または基部で分枝する。葉身細胞背面の上下端はパピラ状に突出する。葉の縁には隣合う細胞の端が突出した鋸歯がある。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

林床の腐った木の上、地上、石灰岩の岩壁などに生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道、埼玉県、長野県に分布し、国外ではロシア東部に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト調査（2016-2019）では、北海道大雪山、埼玉県秩父山地、山梨県八ヶ岳吐竜の滝のいずれでも生育を確認できなかった。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

1984 年に北海道の屈斜路湖から国内で初めて報告され、その後、2005 年に埼玉県の大滝村（現、秩父市）と長野県の八ヶ岳から報告された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヒメコガネハイゴケ	<i>Podperaea krylovii</i> (Podp.) Z.Iwats. & Glime	CR+EN
第4次 2019:	ヒメコガネハイゴケ	<i>Podperaea krylovii</i> (Podp.) Z.Iwats. & Glime	CR+EN
第4次 2018:	ヒメコガネハイゴケ	<i>Podperaea krylovii</i> (Podp.) Z.Iwats. & Glime	CR+EN
第4次 2017:	ヒメコガネハイゴケ	<i>Podperaea krylovii</i> (Podp.) Z.Iwats. & Glime	CR+EN
第4次 2015:	ヒメコガネハイゴケ	<i>Podperaea krylovii</i> (Podp.) Z.Iwats. & Glime	CR+EN
第4次:	ヒメコガネハイゴケ	<i>Podperaea krylovii</i> (Podp.) Z.Iwats. & Glime	CR+EN
第3次:	ヒメコガネハイゴケ	<i>Podperaea krylovii</i> (Podp.) Z.Iwats. & Glime	CR+EN
第2次:	和名なし	<i>Calymperes strictifolium</i> (Mitt.) Roth Syn. <i>C. tuberculosum</i> (Ther. et Dix.) Broth.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧 I 類(CE)] 長野県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. ヒメコガネハイゴケ. 環境省 (編), レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 76. ぎょうせい, 東京.
- Iwatsuki, Z. and J. M. Glime, 1984. *Podperaea*, a new genus of Hypnaceae (Musci). J. Hattori Bot. Lab., 55: 495-500.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 木口博史・岩月善之助, 2005. 本州で見つかった *Podperaea krylovii* (ヒメコガネハイゴケ). 蘚苔類研究, 9: 18.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Podperaea krylovii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Podperaea krylovii* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

キアラハゴケモドキ

Taxiphyllopsis iwatsukii Higuchi & Deguchi

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 遊歩道整備のために個体群が消失した生育地がある。そのため、減少傾向にあると判断した。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

キアラハゴケモドキは日本固有で、本州西部、四国、九州に分布する匍匐性の蘚類。石灰岩上に生育する。2017 年に山口県萩市で新たな生育地が確認されたが生育量は少ない。山口県秋芳洞では遊歩道整備のため消失したが、別の場所で少量の生育が確認されている。四国と九州の生育状況は不明。

協力者： 林正典（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐する。茎は不規則に分枝し、葉を扁平につける。枝葉は卵状披針形で、長さ 0.6-0.8 mm、先端は短く尖る。中肋は 2 本で短い不明瞭、ときに欠く。葉身細胞は蛆虫状に曲がり、平滑。翼細胞はあまり分化しない。雌苞葉は大きく、1 本の長い中肋がある。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

低地の石灰岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）	【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域	

【分布域】

日本固有種で、本州西部、四国、九州に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

山口県秋芳洞で以前確認されていた地点は遊歩道整備にて消失したが、第 5 次レッドリスト調査（2016-2019）では、別の場所で生育が確認された。2017 年に山口県萩市から新産地が確認された。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、遊歩道の整備などの影響が懸念される。

要因の区分：	(過去)	石灰採掘, 交通インフラ建設, 分布・産地局限
	(現在)	石灰採掘, 交通インフラ建設, 分布・産地局限

特記事項

本種は 1 属 1 種で、日本固有である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	キャラハゴケモドキ	<i>Taxiphyllopsis iwatsukii</i> Higuchi & Deguchi	CR+EN
第4次 2019:	キャラハゴケモドキ	<i>Taxiphyllopsis iwatsukii</i> Higuchi & Deguchi	CR+EN
第4次 2018:	キャラハゴケモドキ	<i>Taxiphyllopsis iwatsukii</i> Higuchi & Deguchi	CR+EN
第4次 2017:	キャラハゴケモドキ	<i>Taxiphyllopsis iwatsukii</i> Higuchi & Deguchi	CR+EN
第4次 2015:	キャラハゴケモドキ	<i>Taxiphyllopsis iwatsukii</i> Higuchi & Deguchi	CR+EN
第4次:	キャラハゴケモドキ	<i>Taxiphyllopsis iwatsukii</i> Higuchi & Deguchi	CR+EN
第3次:	キャラハゴケモドキ	<i>Taxiphyllopsis iwatsukii</i> Higuchi & Deguchi	CR+EN
第2次:	キャラハゴケモドキ	<i>Taxiphyllopsis iwatsukii</i> Higuchi et Deguchi	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

岡山県[絶滅危惧Ⅰ類] 山口県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 熊本県[絶滅危惧ⅠA類(CR)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 林 正典・樋口正信, 2017. キャラハゴケモドキの山口県における新産地. 蘚苔類研究, 11: 238-239.
- Higuchi, M. and H. Deguchi, 1987. *Taxiphyllopsis*, a new genus of the Hypnaceae from Japan. Mem. New York Bot. Garden, 45: 528-532.
- 樋口正信, 2015. キャラハゴケモドキ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 92. ぎょうせい, 東京.
- 木口博史・立石幸敏, 2006. 岡山県のキャラハゴケモドキ. 蘚苔類研究, 9: 65-66.
- 立石幸敏・木口博史, 2014. 熊本県のキャラハゴケモドキ. 蘚苔類研究, 11: 39.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Taxiphyllopsis iwatsukii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Taxiphyllopsis iwatsukii* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Forest
Threat types:	Limestone mining, Transportation infrastructure construction, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



©樋口正信

執筆者:	樋口正信 (国立科学博物館)
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales キヌイトゴケ科 Anomodontaceae

ムチエダイトゴケ

Haplomenium flagelliforme L.I.Savicz

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 岡山県高梁市の生育地では 2010 年ごろに 5 年間で 10 分の 1 ほどに減少していることが確認されている。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ムチエダイトゴケは、極東ロシア、中国、日本に分布する蘚類で、国内では長野県、岡山県、広島県、熊本県の石灰岩の岩壁近くの木の枝に着生する。岡山県では 2010 年頃に荒廃が進んで遷移が進行し、5 年前の 10 分の 1 程度に減少していることが確認されている。広島県では帝釈峡一帯に広く分布し、場所によっては個体数の多いところもある。

協力者： 出下卓（広島大学）・川合啓二（岡山コケの会）

基礎情報

【形態】

植物体は時に 10 cm 近くになり、細長く伸びて垂れ下がり、不規則に分枝し、枝先は細く鞭状になる。枝は長さ約 5 mm。葉の縁は下部では全縁であるが、葉先にはとさか状で反り返った歯がある。中肋は葉の 2/3 以上に達する。葉身細胞には 3～5 個のパピラがある。

【生活史】

雌雄異株。孢子体は知られていない。

【生育環境】

石灰岩の岩壁近くの木々の枝に着生する。広島県ではコツゲ、岡山県ではヒメツゲ、熊本県ではイブキシモツケの枝に着生した記録がある。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州（中部地方以西）と九州に分布しており、国外では中国と極東ロシアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

長野県南アルプス、岡山県、広島県、熊本県の石灰岩地でのみ記録がある（田中ほか、2000）。第 4 次レッドリスト（2012 年）作成のための調査では、広島県神石高原町の帝釈峡と岡山県高梁市で確認された。

【生育地の現況】

広島県神石高原町の帝釈峡と岡山県高梁市ではどちらもチョウセンヒメツゲの樹幹にごくわずか確認された。2010 年頃の調査の時点で、岡山県の生育地では荒廃が進んで遷移が進行し、減少している。）。)

【個体数の現況】

岡山県の生育地は 1995 年に県内で初めて発見されたが、2010 年頃の調査の時点で、荒廃が進んで遷移が進行し、5 年前の 10 分の 1 程度に減少していた。広島県では帝釈峡一帯に広く分布し、場所によっては個体数の多いところもある（関・出口, 2012）。

存続を脅かす要因

生育地付近の森林伐採や石灰採掘で生育地が失われるおそれがある。また、岡山県の生育地では、山道が使われなくなり森林植生の遷移が進んで生育環境が変化したと思われる。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 石灰採掘, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移
	(現在)	森林伐採, 石灰採掘, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

極東ロシア、中国北部などの北方に由来する本種が、西南日本の暖温帯の石灰岩地帯に分布していることは、遺存的に生育しているためと推察されている（田中ほか，2000）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ムチエダイトゴケ	<i>Haplohymenium flagelliforme</i> L.I.Savicz	VU
第4次 2019:	ムチエダイトゴケ	<i>Haplohymenium flagelliforme</i> L.I.Savicz	VU
第4次 2018:	ムチエダイトゴケ	<i>Haplohymenium flagelliforme</i> L.I.Savicz	VU
第4次 2017:	ムチエダイトゴケ	<i>Haplohymenium flagelliforme</i> L.I.Savicz	VU
第4次 2015:	ムチエダイトゴケ	<i>Haplohymenium flagelliforme</i> L.I.Savicz	VU
第4次:	ムチエダイトゴケ	<i>Haplohymenium flagelliforme</i> L.I.Savicz	VU
第3次:	ムチエダイトゴケ	<i>Haplohymenium flagelliforme</i> L.I.Saviz	VU
第2次:	ムチエダイトゴケ	<i>Haplohymenium flagelliforme</i> L. I. Saviz	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 岡山県[絶滅危惧Ⅰ類] 広島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 熊本県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 安藤久次, 1961. *Haplohymenium flagelliforme* (ムチエダイトゴケ—新称) 日本に産す. Hikobia, 2: 178.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- 岩月善之助, 2000. ムチエダイトゴケ. 環境庁(編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—9. 植物Ⅱ(維管束植物以外). p. 171. 自然環境研究センター, 東京.

- 関太郎・出口博則, 2012. ムチエダイトゴケ. レッドデータブックひろしま改定検討委員会 (編), 広島県の絶滅のおそれのある野生生物 (第3版) レッドデータブックひろしま 2011. p. 539. 広島県, 広島.
- 田中敦司・木口博史・立石幸敏・西村直樹, 2000. ムチエダイトゴケの新産地と地理的分布について. 蘚苔類研究, 7: 331-333.
- 立石幸敏・西村直樹, 1995. ムチエダイトゴケとタイワントラノオゴケの新産地. 日本蘚苔類学会会報, 6: 162-163.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Haplohymenium flagelliforme has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Haplohymenium flagelliforme* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月: 2025 年 3 月

オニシメリゴケ

Limnohypnum mizushimae (Sakurai) Ignatov & Czernjad.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 過去に報告があったところからも報告がない。おそらく生育に適した湿原は減っている。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

オニシメリゴケは、長さ 15 cm に達する大型の蘚類で、カムチャッカ、千島列島、北海道から本州北部の限られた低地の池の周りや湿地の腐植土上に稀に生育する。葉身細胞が大きな、左右非相称の大きな葉を持つことが特徴である。湿地開発によって生育環境の変化、生育地の消失が危惧される。

基礎情報

【形態】

植物体は暗緑色で大きく、長さ 15 cm に達する。茎は匍匐し、不規則に分枝する。葉は茎に偏平につき、いつもしわ寄るか縮れる。広卵形～長楕円形をなし、左右非相称、長さ約 5 mm。中肋は 1 本、時々分岐し、葉の長さの 4/5 に達する。葉身細胞は線状ひし形で非常に大きく、長さ 125 μm になる。翼細胞は大きく膨れ、明瞭に分化する。葉の基部は強く茎の上に下延する。外観はササバゴケ属 *Calliergon* やサナダゴケ属 *Plagiothecium* に似るが、より大きな葉身細胞と、左右非相称な葉を持ち、中肋は 1 本であることで区別できる。

【生活史】

雌雄異株。孢子体は知られていない。

【生育環境】

低地の池の周りや湿地の腐植土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_平地部】湿地・湿原、ため池・池沼

国土地域区分：	(4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では北海道、本州に分布し、千島列島とカムチャツカ半島にも分布する (Ignatov et al., 2014)。

現在の生育状況

【分布域の現況】

Kanda (1976) は、北海道 (豊頃、サロベツ、雨竜沼)、福島県・群馬県 (尾瀬ヶ原)、新潟県 (高田)、長野県 (白馬) から報告しているが、新潟県のレッドデータブックには掲載されていない。坂井 (2010) は長野県白馬村親海湿原から本種を報告している。

【生育地の現況】

坂井 (2010) は長野県白馬村親海湿原から本種を報告しているが、湿原中央部の比較的広い範囲にわたり、水中あるいは湿った泥炭上で確認された、としている。本種の生育に適した湿原は減っていると考えられる。

【個体数の現況】

詳細は不明。

存続を脅かす要因

湿地開発によって生育環境の変化、生育地の消失が危惧される。また、産地が局限しているため絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	湿地開発, 分布・産地局限
	(現在)	湿地開発, 分布・産地局限

特記事項

Ignatov et al. (2014) は本種をコウヤノマンネングサ科とし新属を設けた。今回学名と所属はその見解によっている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オニシメリゴケ	<i>Leptodictyum mizushimae</i> (Sakurai) Kanda	CR+EN
第4次 2019:	オニシメリゴケ	<i>Leptodictyum mizushimae</i> (Sakurai) Kanda	CR+EN
第4次 2018:	オニシメリゴケ	<i>Leptodictyum mizushimae</i> (Sakurai) Kanda	CR+EN
第4次 2017:	オニシメリゴケ	<i>Leptodictyum mizushimae</i> (Sakurai) Kanda	CR+EN
第4次 2015:	オニシメリゴケ	<i>Leptodictyum mizushimae</i> (Sakurai) Kanda	CR+EN
第4次:	オニシメリゴケ	<i>Leptodictyum mizushimae</i> (Sakurai) Kanda	CR+EN
第3次:	オニシメリゴケ	<i>Leptodictyum mizushimae</i> (Sakurai) Kanda	CR+EN
第2次:	オニシメリゴケ	<i>Leptodictyum mizushimae</i> (Sak.) Kanda	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

福島県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Ignatov, M. S., O. I. Kuznetsova and I. V. Czernyadjeva, 2014. On the systematic position of *Leptodictyum mizushimae* (Bryophyta). *Arctoa*, 23: 185-193.
- Kanda, H., 1976. A revision of the family Amblystegiaceae of Japan I. *Journal of Science of the Hiroshima University, Ser. B, Div. 2*, 15: 201-276.
- 坂井奈緒子, 2010. 長野県白馬村親海湿原で確認されたオニシメリゴケ. *蘚苔類研究*, 10: 61-62.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Limnohypnum mizushimae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Limnohypnum mizushimae* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Wetland, Reservoir/Pond
Threat types:	Wetland development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
 Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

フウチョウゴケ

Macrothamnium macrocarpum (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 現在の生育地は屋久島の 3 か所のみであり、いずれの生育地においても個体群のサイズは小さく、近年の気候変動に伴う台風・洪水による増水などによって個体群が消滅する可能性が大きい。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

フウチョウゴケは国内では静岡県と屋久島に分布し、国外ではヒマラヤ、東南アジア、中国、台湾に分布する。沢の湿った岩上に生育する。植物体は大型で、年次成長により階段状になる。

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、全長約 10 cm。茎は 1 回または 2 回、不規則または羽状に分枝する。年次成長が明瞭。茎葉は広卵形で、長さ 1.5～2.0 mm、先端は急に狭くなり、短く尖る。中肋は 2 本で短い。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

屋久島では標高 600 m 付近の沢の岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では九州（屋久島）と静岡県に分布し、国外ではヒマラヤ、東南アジア、中国、台湾に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では確認されていない。岩田（2018）は、屋久島鈴川、前岳登山道の 2 か所から報告しており、また、広島大学植物標本庫には、2016 年に屋久島の花揚川、前岳登山口で採集された標本が保管されている。本種は 1927 年に静岡県で採集された標本を野口（1954）が報告しているが、その後静岡県からは報告はない。現在生育が確認されているのは屋久島のみである。

【生育地の現況】

生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

産地が局限し、生育している個体群の数もサイズも小さく、増水時の冠水により消滅する可能性が高い。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 河川開発, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限
	（現在）	森林伐採, 河川開発, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限

特記事項

静岡県では再確認されておらず、屋久島では秋山・田中（2006）によって 68 年ぶりに生育が確認された。その後、屋久島から数か所で生育が確認されている。日本産のフウチョウゴケ属の種はフウチョウゴケのみであり、日本がフウチョウゴケおよびフウチョウゴケ属の分布の北限である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	フウチョウゴケ	<i>Macrothamnium macrocarpum</i> (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch.	CR+EN
第4次 2019:	フウチョウゴケ	<i>Macrothamnium macrocarpum</i> (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch.	CR+EN
第4次 2018:	フウチョウゴケ	<i>Macrothamnium macrocarpum</i> (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch.	CR+EN
第4次 2017:	フウチョウゴケ	<i>Macrothamnium macrocarpum</i> (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch.	CR+EN
第4次 2015:	フウチョウゴケ	<i>Macrothamnium macrocarpum</i> (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch.	CR+EN
第4次:	フウチョウゴケ	<i>Macrothamnium macrocarpum</i> (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch.	CR+EN
第3次:	フウチョウゴケ	<i>Macrothamnium macrocarpum</i> (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch.	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 秋山弘之・田中敦司，2006．アジア産蘚苔類分類・生態ノート，11．蘚類フウチョウゴケ（イワダレゴケ科フウチョウゴケ属）68年ぶりの再発見．蘚苔類研究，9: 112-114.

- 岩田和鷹, 2018. 屋久島（鹿児島県）における蘚苔類の垂直分布. *Naturalistae*, 22: 73-84.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- 野口 彰, 1954. 日本産蘚類の研究 (16). 植物研究雑誌, 29: 83-86.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Macrothamnium macrocarpum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Macrothamnium macrocarpum* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫（広島大学）
 Author: Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

オオシカゴケ

Neodolichomitra yunnanensis (Besch.) T.J.Kop.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 溪流の谷底水際に生育し、台風等による増水によって個体群が消失する可能性がある。2000 年に報告された青木川燕岩周辺の生育地における 2019 年のレッドリスト調査では本種の生育が確認されなかった。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

オオシカゴケは国内では長野県に分布し、国外ではブータン、中国西南部、台湾に分布する大形の匍匐性の蘚類。国内の 2 か所の生育地のうち 1 か所では生育が確認されたが、他の 1 か所では生育が確認されず、絶滅した可能性が高い。

協力者： 井上侑哉（国立科学博物館）

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、一年で成長する茎は長さ 6 cm になることがある。茎は 1 回または 2 回、規則的に羽状に分枝し、樹状になる。年次成長が明瞭で、全形が階段状になるのはイワダレゴケ科の特徴のひとつである。茎葉は卵形で、長さ 2.4-3.2 mm、先端は短く尖り、ねじれる。中肋は 1 本で長く、通常基部で枝を出す。オオシカゴケ属にはオオシカゴケ 1 種のみがある。

【生活史】

雌雄異株。国内から孢子体と雄植物が見つかった。

【生育環境】

長野県大鹿村の標高 1,300～1,400 m の落葉広葉樹の自然林内の溪谷で、林床にある腐植土で覆われた岩壁や倒木上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では長野県大鹿村の 2 か所から知られ、国外ではブータン、中国西南部、台湾に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本種が国内で最初に確認された塩川沿いの生育地より約 10 km 南に位置する青木川燕岩周辺の生育地では、2019 年のレッドリスト調査で確認されなかった。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、生育している個体群の数もサイズも小さく、生育場所が登山道に近いため、その整備などの影響が懸念される。

要因の区分：	(過去)	交通インフラ建設, 分布・産地局限
	(現在)	交通インフラ建設, 分布・産地局限

特記事項

1998年に初めて国内から報告され、その生育地はオオシカゴケの分布の北限である。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	オオシカゴケ	<i>Neodolichomitra yunnanensis</i> (Besch.) T.J.Kop.	CR+EN
第4次 2019:	オオシカゴケ	<i>Neodolichomitra yunnanensis</i> (Besch.) T.J.Kop.	CR+EN
第4次 2018:	オオシカゴケ	<i>Neodolichomitra yunnanensis</i> (Besch.) T.J.Kop.	CR+EN
第4次 2017:	オオシカゴケ	<i>Neodolichomitra yunnanensis</i> (Besch.) T.J.Kop.	CR+EN
第4次 2015:	オオシカゴケ	<i>Neodolichomitra yunnanensis</i> (Besch.) T.J.Kop.	CR+EN
第4次:	オオシカゴケ	<i>Neodolichomitra yunnanensis</i> (Besch.) T.J.Kop.	CR+EN
第3次:	オオシカゴケ	<i>Neodolichomitra yunnanensis</i> (Besch.) T.J.Kop.	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Higuchi, M. and N. Nishimura, 1998. *Neodolichomitra yunnanensis* (Musci) new to Japan. Bull. Natl. Sci. Mus., Tokyo, Ser. B, 3: 143-148.
- 樋口正信, 2015. オオシカゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 66. ぎょうせい, 東京.
- 西村直樹・樋口正信, 1999. 日本産オオシカゴケへの補足. 蘚苔類研究, 7: 267-268.
- 立石幸敏・田中敦司・木口博史, 2000. ハリロカイゴケとオオシカゴケの新産地. 蘚苔類研究, 7: 286.

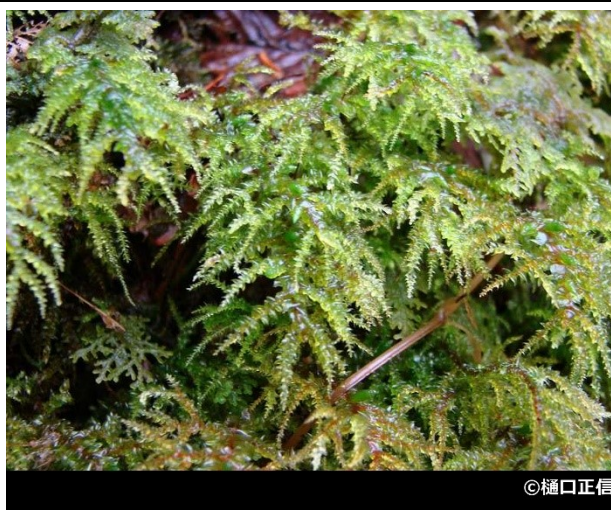
アセスメントサマリー（Assessment summary）

Neodolichomitra yunnanensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Neodolichomitra yunnanensis* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Transportation infrastructure construction, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



©樋口正信

執筆者: 樋口正信 (国立科学博物館)
 Author: Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ツヤダシタカネイタチゴケ

Leucodon alpinus H.Akiyama

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 南アルプスでは調査が行われているが確認できておらず、仙丈ヶ岳の産地は消失したと判断されている。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ツヤダシタカネイタチゴケは、匍匐枝型の茎、線状披針形の葉を持つことが特徴である。中部地方以北の高山～亜高山帯の石灰岩地に生育する。第4次レッドリスト作成のための調査では調査が行われた仙丈ヶ岳の産地で確認できず、第5次レッドリスト作成のための調査でも確認されていない。北海道の産地の調査が求められる。

基礎情報

【形態】

植物体は光沢のある黄緑色、基部は黒褐色を帯びる。匍匐枝を持った茎は岩か土上をばう。斜上型の茎は長さ 2~8 cm になり、まばらに分枝する。茎に中心束を欠く。偽毛葉はわずかで、線状~披針形。葉腋毛は 4~5 細胞からなる。茎葉は線状披針形で先端に向かって次第に狭くなり、しわ寄り、長さ約 3 mm に達する。葉縁は平坦で、先端部に細鈍鋸歯があるが、下部は全縁。葉身細胞は上部で線形~紡錘形、中部では長方形で厚壁、弱いくびれがある。翼細胞は方形~長方形、褐色を帯びる。本種はしばしばキイチゴケ *Leucodon luteus* と混同されてきたが、高山~亜高山帯に生育し、植物体には光沢があり、茎の先は匍匐枝状になって長く伸び、茎葉が線状披針形であることなどで区別される。

【生活史】

雌雄異株だと思われるが不明。孢子体は知られていない。

【生育環境】

高山~亜高山帯の日当たりのよい石灰岩地の石灰岩上あるいは地上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道と本州の中部地方以北の高山~亜高山帯に分布する。かつては日本固有とされていたが、中国の東北部からも報告されている (Zhang & He, 1999)。

現在の生育状況

【分布域の現況】

Akiyama (1988) が本種を記載した時点では産地として北海道芦別岳と長野県南アルプスの白岩岳、北岳、仙丈ヶ岳（タイプ産地）の 4 か所があげられていた。のちに立石ほか (2000) は南アルプスの豊口山（大鹿村）からも報告した。第 4 次レッドリスト作成のための調査では長野県で確認できず、調査が行われた仙丈ヶ岳の産地では絶滅したと考えられた (山口, 2015)。北海道の産地の調査が求められる。

【生育地の現況】

生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

分布は石灰岩地に限られているが、現在までに確認されている産地は高山帯のため、石灰採掘の影響を受けることはないと思われる。産地が局限している。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	ツヤダシタカネイタチゴケ	<i>Leucodon alpinus</i> H.Akiyama	CR+EN
第4次 2019:	ツヤダシタカネイタチゴケ	<i>Leucodon alpinus</i> H.Akiyama	CR+EN
第4次 2018:	ツヤダシタカネイタチゴケ	<i>Leucodon alpinus</i> H.Akiyama	CR+EN
第4次 2017:	ツヤダシタカネイタチゴケ	<i>Leucodon alpinus</i> H.Akiyama	CR+EN
第4次 2015:	ツヤダシタカネイタチゴケ	<i>Leucodon alpinus</i> H.Akiyama	CR+EN
第4次:	ツヤダシタカネイタチゴケ	<i>Leucodon alpinus</i> H.Akiyama	CR+EN
第3次:	ツヤダシタカネイタチゴケ	<i>Leucodon alpinus</i> H.Akiyama	CR+EN
第2次:	ツヤダシタカネイタチゴケ	<i>Leucodon alpinus</i> Akiyama	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Akiyama, H., 1988. Studies on *Leucodon* (Leucodontaceae, Musci) and related genera in East Asia, IV. Taxonomic revision of *Leucodon* in East Asia. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 65: 1-80.
- 立石幸敏・木口博史・田中敦司, 2000. 豊口山（長野県大鹿村）の蘚類. 自然環境科学研究, 13: 105-120.
- 山口富美夫, 2015. ツヤダシタカネイタチゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）, p. 54. ぎょうせい, 東京.

- Zhang M. -X. and Q. He, 1999. Two species of *Leucodon* (Leucodontaceae, Musci) new to China. *Chenia*, 6: 35-39.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Leucodon alpinus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Leucodon alpinus* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月: 2025 年 3 月

モミノキゴケ

Taiwanobryum anacamptolepis (Müll.Hal.) S.Olsson, Enroth & D.Quandt

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 過去には四国、九州、琉球列島の数か所で報告されてきたが、ここ 10 年間で確認されたのは、高知県と沖縄県合わせて 2 か所のみである。生育地の減少が危惧される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

日本、中国、東南アジア、スリランカに分布する樹幹着生性の蘚類。国内では四国、九州、琉球列島から報告がある。生育地を流れる川の改修やダム建設により生育環境が失われる心配がある。

基礎情報

【形態】

植物体は中型で、第二次茎は長さ 1～3 cm、上部で羽状に分枝する。下部の枝は長さ約 8 mm でさらに羽状に分枝する。第二次茎の葉は広卵形で、広く尖り、明瞭に非相称。上部の葉縁には細かい歯がある。中肋は細く、葉の中部に達する。葉身中部の細胞は厚壁でくびれがある。葉の基部の細胞は矩形。枝葉は密につくが、あまり偏平にはならない。同属のキブリハネゴケ (*Pinnatella makinoi*) からは、葉が広卵形で非相称なこと、中肋がより短くて葉の中部で終わること、葉身細胞がより長いことなどで区別できる。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

暖地の林内溪流沿いの樹幹や岩上に着生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 河川源流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

国内では四国、九州、琉球列島に分布しており、国外では中国、フィリピン、ジャワ、スマトラ、ニューギニア、スリランカに分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では確認されなかったが、広島大学植物標本庫には 2014 年に高知県で、2016 年に沖縄県石垣島で採集された標本が保管されている。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

生育量は少ないと考えられる。

存続を脅かす要因

森林伐採。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, ダム・河川工作物建設, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 河川開発, ダム・河川工作物建設, 分布・産地局限, シカ食害

特記事項

日本が分布の北限となっている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	モミノキゴケ	<i>Pinnatella anacamptolepis</i> (Müll.Hal.) Broth.	VU
第4次 2019:	モミノキゴケ	<i>Pinnatella anacamptolepis</i> (Müll.Hal.) Broth.	VU
第4次 2018:	モミノキゴケ	<i>Pinnatella anacamptolepis</i> (Müll.Hal.) Broth.	VU
第4次 2017:	モミノキゴケ	<i>Pinnatella anacamptolepis</i> (Müll.Hal.) Broth.	VU
第4次 2015:	モミノキゴケ	<i>Pinnatella anacamptolepis</i> (Müll.Hal.) Broth. [= <i>Porotrichum gracilescens</i> Nog.]	VU
第4次:	モミノキゴケ	<i>Pinnatella anacamptolepis</i> (Müll.Hal.) Broth. [= <i>Porotrichum gracilescens</i> Nog.]	VU
第3次:	モミノキゴケ	<i>Pinnatella anacamptolepis</i> (Müll.Hal.) Broth. (= <i>Porotrichum gracilescens</i> Nog.)	VU
第2次:	モミノキゴケ	<i>Pinnatella anacamptolepis</i> (C. Muell.) Broth. Syn. <i>Porotrichum gracilescens</i> Nog.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)] 沖縄県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 3. pp. 493-742. Hattori Botanical Laboratory, Nichinan.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Taiwanobryum anacamptolepis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Taiwanobryum anacamptolepis* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location. b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area _Low-altitude area】 Forest, River headwater
Threat types:	Logging and wood harvesting, Dam/River structures construction, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫（広島大学）
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

マツカリタケナガゴケ

Plagiothecium obtusissimum Broth.

カテゴリ判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 過去に発見されていた八甲田山で消失したものと思われる。その他の産地においても過去に見つかった産地で明らかに失われているところもある。近年確認されていない。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

マツカリタケナガゴケは極東ロシアと日本に分布する蘚類で、日本からは北海道と青森県（八甲田山）から報告があるが、非常にまれな種である。2018 年の調査では青森県八甲田山の本種が記録されていた石倉岳で確認できず、おそらく消失したものと思われる。北海道で過去に記録があった地点も、ダムに水没したり再調査で発見できなくなったりしている。

協力者： 樋口正信（国立科学博物館）・古木達郎（元千葉県立中央博物館）・木口博史（岡山コケの会）・内田暁友（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

植物体は小型で、やや光沢があり、平たいマットを作る。茎は這い、まばらに長さ 1～2 cm の枝を出す。葉は長さ 0.9～1.2 mm、楕円状卵形でほぼ相称、葉先は円頭～鈍頭。葉の翼部の細胞は薄壁、透明で他の葉身細胞からは明瞭に分化する。蒴柄は赤褐色で細い。オオサナダゴケモドキ *Plagiothecium euryphyllum* に似るが、植物体がより小さく、葉先が丸みを持つことで区別できる。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

林内の岩上、地上、朽木上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道、本州（青森県八甲田山）に分布し、国外では極東ロシアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2018 年の調査では青森県八甲田山の本種が記録されていた石倉岳で確認できず、おそらく消失したものと思われた。2019 年の調査では過去に記録がある北海道大雪山では確認されなかった。広島大学植物標本庫（HIRO）には北海道新得町トムラウシ温泉富村ダム予定地で 1973 年に採集された標本があるが、当地はダムで失われている。1999 年に北海道阿寒湖で取られた写真は岩月（2001）に掲載されている。他に北海道内で文献上記録があるのは、マツカリ岳（後方羊蹄山）、雌阿寒岳、様似目黒である（Iwatsuki, 1970）。

【生育地の現況】

北海道新得町トムラウシ温泉の生育地はダムに水没した。その他の生育地の詳細は不明。

【個体数の現況】

近年の調査では確認できていない。

存続を脅かす要因

森林伐採によって生育環境の変化が危惧される。また、産地が局限しているため絶滅する可能性が高い。過去に記録があったトムラウシでは生育地がダムに水没した。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限

	(現在)	森林伐採, ダム・河川工作物建設, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	マツカリタケナガゴケ	<i>Plagiothecium obtusissimum</i> Broth.	CR+EN
第4次 2019:	マツカリタケナガゴケ	<i>Plagiothecium obtusissimum</i> Broth.	CR+EN
第4次 2018:	マツカリタケナガゴケ	<i>Plagiothecium obtusissimum</i> Broth.	CR+EN
第4次 2017:	マツカリタケナガゴケ	<i>Plagiothecium obtusissimum</i> Broth.	CR+EN
第4次 2015:	マツカリタケナガゴケ	<i>Plagiothecium obtusissimum</i> Broth.	CR+EN
第4次:	マツカリタケナガゴケ	<i>Plagiothecium obtusissimum</i> Broth.	CR+EN
第3次:	マツカリタケナガゴケ	<i>Plagiothecium obtusissimum</i> Broth.	CR+EN
第2次:	マツカリタケナガゴケ	<i>Plagiothecium obtusissimum</i> Broth.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

青森県[重要希少野生生物（B ランク）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Iwatsuki, Z., 1970. A revision of *Plagiothecium* and its related genera from Japan and her adjacent areas, I. Journ. Hattori Bot. Lab., 33: 331-380.
- 岩月善之助（編），2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社，東京. 355pp., 192pls.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Plagiothecium obtusissimum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Plagiothecium obtusissimum* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ミミヒラゴケ

Calypothecium philippinense Broth.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 2020 年、2021 年の調査では沖縄島嘉津宇岳で確認されたが、生育量は少なく登山道沿いにあるため人為的な影響によって個体数の減少が危惧される。第 5 次レッドリスト調査では奄美大島で確認できなかったが、2011 年の調査では個体数が 5 年前の 1/10 程度に減少したと報告されている。環境の変化によって個体数が大きく変動するものと考えられる。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

琉球列島から中国、フィリピン、ジャワ、ニューギニア、ポリネシアにかけて分布する大型で柔らかい蘚類。日本国内での生育地は数か所に限られており、個体数が激減している生育地も確認されている。生育地付近の森林伐採や河川改修、植生遷移により生育環境が損なわれている。

協力者： 西畑和輝（広島大学）・岸田知展（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は大型で柔らかく、第二次茎が長く伸びて時に 30 cm に達する。枝はやや羽状に出て、長さ 3 cm 前後、葉はあまり偏平につかない。第二次茎の葉は卵状楕円形、長さ 3～3.5 mm、先は短く尖り、基部は明らかに耳状になる。中肋は細くて葉の中部に達するが、時に二叉する。上部の葉はより小さく、中肋も短く、しばしば二叉する。トガリミミゴケ (*Calyptothecium hookeri*) は葉がしわ寄らないことで区別される。

【生活史】

国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

林内の石灰岩を含む岩上あるいは樹幹上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

国内では琉球列島（奄美大島、徳之島、沖縄島）、四国（高知県）に分布し、国外では中国、フィリピン、インド、スリランカ、ミャンマー、インドネシア、ニューギニア、ニューカレドニア、フィジーに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト調査では、沖縄島の嘉津宇岳で確認された。個体群は複数か所で見つかったが、個体群のサイズは小さかった。

【生育地の現況】

沖縄島では石灰岩地にある石灰岩や樹幹上から懸垂して生育している。沖縄島の生育地は登山道沿いにあり、登山者の手の届く範囲に群落をつくっている。いずれの生育地においても環境改変や植生遷移により生育環境が損なわれている。

【個体数の現況】

沖縄島の生育地では、個体数は少ない。

存続を脅かす要因

生育地付近の森林伐採や遊歩道の整備などにより生育環境が損なわれる危険がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採
	(現在)	森林伐採

特記事項

日本が分布の北限となっている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ミミヒラゴケ	<i>Calypsothecium philippinense</i> Broth.	VU
第4次 2019:	ミミヒラゴケ	<i>Calypsothecium philippinense</i> Broth.	VU
第4次 2018:	ミミヒラゴケ	<i>Calypsothecium philippinense</i> Broth.	VU
第4次 2017:	ミミヒラゴケ	<i>Calypsothecium philippinense</i> Broth.	VU
第4次 2015:	ミミヒラゴケ	<i>Calypsothecium philippinense</i> Broth. [= <i>C. urvilleanum</i> (Müll.Hal.) Broth.]	VU
第4次:	ミミヒラゴケ	<i>Calypsothecium philippinense</i> Broth. [= <i>C. urvilleanum</i> (Müll.Hal.) Broth.]	VU
第3次:	ミミヒラゴケ	<i>Calypsothecium philippinense</i> Broth. [= <i>C. urvilleanum</i> (Müll.Hal.) Broth.]	VU
第2次:	ミミヒラゴケ	<i>Calypsothecium philippinense</i> Broth. Syn. <i>C. urvilleanum</i> (C. Muell.) Broth. ; <i>C. japonicum</i> Ther.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 出口博則, 1989. 奄美群島産蘚類の植物地理学的研究, 国立科学博物館専報, 22: 57-80.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Calypsothecium philippinense has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Calypsothecium philippinense* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
 Author: Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales キヌゴケ科 Pylaisiaceae

サジバラッコゴケ

Gollania japonica (Cardot) Ando & Higuchi

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 第 5 次レッドリストの調査において、長野県大鹿村では確認ができなかった。北海道の生育地では、最初の報告以来確認されておらず絶滅した可能性がある。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

サジバラッコゴケは北海道と本州中部に分布する匍匐性の蘚類。林内の湿った岩、まれに土の上や岩壁に生育する。本種が確認できない複数の生育地があり、そこでは絶滅した可能性が高い。

協力者： 井上侑哉（国立科学博物館）

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、茎は長さ 5 cm 以内。茎は不規則または羽状に分枝し、葉を丸くつける。茎の背面の葉は卵状披針形～楕円状披針形で、さじ状に凹み、長さ約 1.4-1.8 mm、先端は急に短く尖る。中肋は 2 本で長く、まれに葉の中ほどまで達する。葉の基部の縁は背面側に反り返る。翼部の細胞は大型で、方形になる。本種は本属の他種から、背面の茎葉は先端が急に短く尖り、葉の先端部の縁に小さな鋸歯があること、さじ状に凹むこと、中肋は 2 本でかなり長いことなどで区別される。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

亜高山帯の森林内の湿った岩、まれに土の上や岩壁の上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道、本州中部に分布し、国外では台湾に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト調査（2016-2019）では、長野県大鹿村で生育が確認されなかった。北海道では 1985 年以降、確認されていない。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限するため、森林伐採による生育環境の変化によって壊滅的な影響を受ける可能性がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	サジバラッコゴケ	<i>Gollania japonica</i> (Cardot) Ando & Higuchi	VU
第4次 2019:	サジバラッコゴケ	<i>Gollania japonica</i> (Cardot) Ando & Higuchi	VU
第4次 2018:	サジバラッコゴケ	<i>Gollania japonica</i> (Cardot) Ando & Higuchi	VU
第4次 2017:	サジバラッコゴケ	<i>Gollania japonica</i> (Cardot) Ando & Higuchi	VU
第4次 2015:	サジバラッコゴケ	<i>Gollania japonica</i> (Cardot) Ando & Higuchi	VU
第4次:	サジバラッコゴケ	<i>Gollania japonica</i> (Cardot) Ando & Higuchi	VU
第3次:	サジバラッコゴケ	<i>Gollania japonica</i> (Cardot) Ando & Higuchi	VU
第2次:	サジバラッコゴケ	<i>Gollania japonica</i> (Card.) Ando et Higuchi	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧 I 類(CE)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Ando, H. and M. Higuchi, 1981. *Gollania taxiphylloides* Ando et Higuchi, sp. nov. and *Gollania japonica* (Card.) Ando et Higuchi, comb. nov. (Hypnaceae, Musci) from Japan. Hikobia suppl., 1: 189-195.
- Higuchi, M., 1985. A taxonomic revision of the genus *Gollania* Broth. (Musci). J. Hattori Bot. Lab., 59: 1-77.
- Higuchi, M., 2016. Taxonomic notes on *Gollania* (Hypnaceae, Bryophyta) in Asia. J. Jpn. Bot., 91 Suppl. : 335-339.
- 樋口正信, 2015. サジバラッコゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 178. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Gollania japonica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Gollania japonica* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of

a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



©樋口正信

執筆者: 樋口正信 (国立科学博物館)
Author: Masanobu Higuchi

公表年月: 2025 年 3 月

オオカギトゴケ

Gollania splendens (Ihsiba) Nog.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab

基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。

【地点数】5 地点以下

b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

産地が局限し、千葉県、茨城県とも火入れや除草により湿地植生が維持されている。一方、本種の保全を目的とした管理をしているという状況ではないため、湿地の過度な陸地化や台風等による土砂流入によって、生育に適した環境が失われる可能性がある。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

オオカギトゴケは日本固有で、宮城県、千葉県、茨城県に分布する匍匐性の蘚類。3 か所の生育地のうち 1 か所では最初の報告以来、生育を確認できておらず絶滅した可能性が高い。

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、茎は長さ 8 cm 以内。茎は不規則に分枝し、葉を丸くつける。茎葉は楕円状披針形で、深く凹み、長さ 1.9-2.4 mm、上部に向かって次第に細くなる。中肋は基部で枝分かれし、短い。葉身細胞は菱形で、とても薄壁、翼細胞はわずかに分化する。本種は本属の他種から、葉が深く凹むこと、葉の縁にはほぼ鋸歯がないこと、葉身細胞が菱形で薄壁であることで区別される。

【生活史】

胞子体は知られていない。

【生育環境】

低地の湿地に生育する。

生育環境区分：	【陸域_平地部】湿地・湿原、ため池・池沼

国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

日本固有種で、宮城県、千葉県、茨城県に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2019 年、茨城県霞ヶ浦で新たな分布が確認された。宮城県仙台市からは最初に報告された 1935 年以降、確認されていないので絶滅した可能性が高い。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。千葉県成東湿地及び茨城県妙岐ノ鼻の生育量は少ない。

存続を脅かす要因

産地が局限し、千葉県、茨城県とも火入れや除草により湿地植生が維持されているため管理放棄されると絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	管理放棄、分布・産地局限
	(現在)	管理放棄、分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オオカギイトゴケ	<i>Gollania splendens</i> (Iisiba) Nog.	CR+EN
第4次 2019:	オオカギイトゴケ	<i>Gollania splendens</i> (Iisiba) Nog.	CR+EN
第4次 2018:	オオカギイトゴケ	<i>Gollania splendens</i> (Iisiba) Nog.	CR+EN
第4次 2017:	オオカギイトゴケ	<i>Gollania splendens</i> (Iisiba) Nog.	CR+EN
第4次 2015:	オオカギイトゴケ	<i>Gollania splendens</i> (Iisiba) Nog.	CR+EN
第4次:	オオカギイトゴケ	<i>Gollania splendens</i> (Iisiba) Nog.	CR+EN
第3次:	オオカギイトゴケ	<i>Gollania splendens</i> (Iisiba) Nog.	CR+EN
第2次:	オオカギイトゴケ	<i>Gollania splendens</i> (Ihs.) Nog.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮城県[情報不足（DD）] 茨城県[絶滅危惧Ⅰ類] 千葉県[最重要・重要保護生物（A-B）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Higuchi, M., 1985. A taxonomic revision of the genus *Gollania* Broth. (Musci). J. Hattori Bot. Lab., 59: 1-77.
- 樋口正信, 2015. オオカギイトゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 40. ぎょうせい, 東京.
- 鶴沢美穂子・杉村康司・樋口正信, 2019. 茨城県妙岐ノ鼻におけるオオカギイトゴケの発見. 蘚苔類研究, 12: 14-16.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Gollania splendens has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Gollania splendens* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Wetland, Reservoir/Pond
Threat types:	Abandonment of management, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ヒロハコモチイトゴケ

Clastobryellina ceylonensis (Broth.) H.Akiyama

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地の一部は山頂域の林内にあり、気象の影響を受けやすい。奄美大島の湯湾岳山頂域は、台風の影響で倒木が多数あり、本種の生育が確認できなかった。いずれの生育地においても個体数は少なくごくまれな種であり、森林伐採や台風等の影響を受けやすいことから、生育地の減少や消滅が危惧される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

日本、中国から東南アジアにかけてと、アフリカに分布する蘚類で、葉腋に糸状でパピラのある無性芽を少量つける。国内では、三重県、徳島県、宮崎県、鹿児島県（屋久島、奄美大島）に分布している。樹上に生育するが、生育地での森林伐採により生育地の存続が心配される。

協力者： 秋山弘之（兵庫県立人と自然の博物館）

基礎情報

【形態】

植物体は小型で、茎は短く這い、二次茎は長さ 1 cm 未満で、斜上して基物に接せず、先端はしばしばもろくて壊れやすい。枝葉は卵形～長卵形で長さ 0.6 mm 以下、葉先は鈍等のことが多く、翼細胞は方形～短矩形で格子状になる。葉腋につける無性芽は糸状で、密にマミラがある。

【生活史】

生殖器官及び孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

暖地にある深い渓谷内のよく湿った環境下で、樹木の幹上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 河川源流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では三重県、徳島県、宮崎県、鹿児島県（屋久島、奄美大島）に分布しており、国外ではインド南西部、スリランカ、ミャンマー北部、タイ北部、ベトナム、中国に分布しているほか、アフリカ東岸、マダガスカルからも報告されている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

Akiyama (2019)、秋山 (2020) は、三重県、徳島県、宮崎県、鹿児島県（屋久島）から報告している。

【生育地の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための奄美大島の湯湾岳山頂域での調査では、台風の影響で倒木が多数あり、本種の生育が確認できなかった。その他の生育地に関しては、生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

生育数は少ない。

存続を脅かす要因

森林伐採

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

本種はこれまでヒロハコモチイトゴケとされてきた種を分類学的に再検討したもので、狭義のヒロハコモチイトゴケとなる。従来報告されてきたヒロハコモチイトゴケについては、再検討を要する。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヒロハコモチイトゴケ	<i>Gammiella ceylonensis</i> (Broth.) B.C.Tan & W.R.Buck	VU
第4次 2019:	ヒロハコモチイトゴケ	<i>Gammiella ceylonensis</i> (Broth.) B.C.Tan & W.R.Buck	VU
第4次 2018:	ヒロハコモチイトゴケ	<i>Gammiella ceylonensis</i> (Broth.) B.C.Tan & W.R.Buck	VU
第4次 2017:	ヒロハコモチイトゴケ	<i>Gammiella ceylonensis</i> (Broth.) B.C.Tan & W.R.Buck	VU
第4次 2015:	ヒロハコモチイトゴケ	<i>Gammiella ceylonensis</i> (Broth.) B.C.Tan & W.R.Buck	VU
第4次:	ヒロハコモチイトゴケ	<i>Gammiella ceylonensis</i> (Broth.) B.C.Tan & W.R.Buck	VU
第3次:	ヒロハコモチイトゴケ	<i>Gammiella ceylonensis</i> (Broth.) B.C.Tan & W.R.Buck	VU
第2次:	ヒロハコモチイトゴケ	<i>Gammiella ceylonensis</i> (Broth.) Tan et Buck	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Akiyama, H., 2019. Phylogenetic re-examination of the "*Gammiella ceylonensis*" complex reveals three new genera in the Phylaisiadelphaceae (Bryophyta). *Bryophyte Diversity & Evolution*, 41: 35-64.

- 秋山弘之, 2020. アジア産蘚苔類の分類・生態ノート 34. ヒロハコモチイトゴケ種複合体とはどんな蘚類か ―日本産ニセタマコモチイトゴケ属 *Bonnosukea* およびヒメコモチイトゴケ属 *Clastobryellina* (蘚類, コモチイトゴケ科) の分類学的研究の紹介―. 蘚苔類研究, 12: 99-105.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Clastobryellina ceylonensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Clastobryellina ceylonensis* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, River headwater
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales コモチイトゴケ科 Pylaisiadelphaceae

イボミスジヤバネゴケ

Clastobryum cuculligerum (Sande Lac.) Tixier

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地が局在しており、生育量も少ない。生育基物である森林が伐採や台風などの影響によって倒木し、生育基物ごと消失することがあり、減少傾向にあると考えられる。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

アジアの熱帯～亜熱帯に広く分布するが、日本では沖縄島と西表島のみから記録されている。島の山頂部や沢沿いの空中湿度の高い林内に限って生育している。

基礎情報

【形態】

茎は這い、立ち上がる枝を出す。茎は断面でやや三角形になる。葉は弱く 3 列に並ぶ傾向がある。葉は披針形で中肋を欠き、上部の縁には小さい歯がある。葉身細胞は線形で、背面の中央に 1 個のパピラを持つが、時に不明瞭となる。葉翼部は明瞭に分化し、厚壁の細胞が 1 列に並ぶ。枝の上部の葉腋に糸状でパピラを持つ無性芽をつける。パピラのある糸状無性芽をつけることで、ヒロハコモチイトゴケ (*Gammiella ceylonensis*) に似るが、本種では葉が披針形で葉身細胞にパピラがあることで区別できる。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

琉球列島の島内の空中湿度の高い沢沿いか山頂部で、樹木の幹あるいは枝上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では琉球列島に分布し、国外ではアジアの熱帯～亜熱帯に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本種は、Iwatsuki (1978) によって沖縄島から日本で初めて報告され、その後、山口 (1985) が西表島から報告した。沖縄島からは、その後確認されていない。第 5 次レッドリスト調査 (2016-2019) では西表島の 1 か所で確認されている。広島大学植物標本庫には、1981～2017 年に西表島の浦内川水系の 4 か所、ヒナイ川の 1 か所で採集された標本が保管されている。

【生育地の現況】

生育基物である森林が伐採や台風などの影響によって倒木し、生育基物ごと消失した事例がある。

【個体数の現況】

生育量は極めて少ない。

存続を脅かす要因

森林伐採によって生育環境の変化が危惧される。また、産地が局限しているため絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限

	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

沖縄島が分布の北限となっている。一部の生育地は国立公園内にある。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	イボミスジャバネゴケ	<i>Clastobryum cuculligerum</i> (Sande Lac.) Tixier	CR+EN
第4次 2019:	イボミスジャバネゴケ	<i>Clastobryum cuculligerum</i> (Sande Lac.) Tixier	CR+EN
第4次 2018:	イボミスジャバネゴケ	<i>Clastobryum cuculligerum</i> (Sande Lac.) Tixier	CR+EN
第4次 2017:	イボミスジャバネゴケ	<i>Clastobryum cuculligerum</i> (Sande Lac.) Tixier	CR+EN
第4次 2015:	イボミスジャバネゴケ	<i>Clastobryum cuculligerum</i> (Sande Lac.) Tixier [= <i>Clastobryella cuculligera</i> (Sande Lac.) M.Fleisch.]	CR+EN
第4次:	イボミスジャバネゴケ	<i>Clastobryum cuculligerum</i> (Sande Lac.) Tixier [= <i>Clastobryella cuculligera</i> (Sande Lac.) M.Fleisch.]	CR+EN
第3次:	イボミスジャバネゴケ	<i>Clastobryum cuculligerum</i> (Sande Lac.) Tixier [= <i>Clastobryella cuculligera</i> (Sande Lac.) M.Fleisch.]	CR+EN
第2次:	和名なし	<i>Calymperes strictifolium</i> (Mitt.) Roth Syn. <i>C. tuberculosum</i> (Ther. et Dix.) Broth.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Iwatsuki, Z., 1978. Bryological miscellanies XXV. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 44: 555-561.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 山口富美夫, 1985. 八重山群島の蘚苔類フロラ. Hikobia, 9: 243-264.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Clastobryum cuculligerum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Clastobryum cuculligerum* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
 Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

ミスジヤバネゴケ

Clastobryum glabrescens (Z.Iwats.) B.C.Tan, Z.Iwats. & D.H.Norris

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 第 5 次レッドリスト作成のための調査では確認できなかったが、岩田 (2018) は屋久島の 2 か所から報告している。広島大学植物標本庫には岩田 (2018) の調査範囲になっている白谷雲水峡やヤクスギランドで採集された標本が保管されているが、岩田 (2018) の報告にはない。いくつかの生育地が消滅したか、生育個体数が減少したことが考えられる。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

屋久島、台湾、フィリピン、ボルネオに点々と分布する蘚類で、枝葉が明瞭に 3 列に並ぶ。国内では屋久島の溪流沿いに生育し、福岡県からも報告されている。産地がもともと限られているが、その生育地での森林伐採により生育環境が失われる心配がある。

基礎情報

【形態】

茎は基物上を這い、長さ 4～10 mm の枝を上方に出す。枝には光沢のある葉が規則正しく、密に 3 列に並ぶ。枝葉は茎葉よりも大きく、長さ 0.8～1.2 mm、披針形で舟状にくぼみ、葉先は尖る。中肋はない。葉の翼部の細胞は明瞭に分化して厚壁、枝葉の葉先近くの細胞は背面上端に時に明瞭なパピラがある。本種は枝葉が明瞭に 3 列に並ぶことで、近縁の種から容易に区別できる。

【生活史】

胞子のほか、無性芽によっても繁殖する。

【生育環境】

溪流沿いや山腹の湿度の高い明るい場所の木の枝に着生する。

生育環境区分： 【陸域_中標高地 低標高地】森林, 河川源流域

国土地域区分： (1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

Iwatsuki (1977) は、*Tristichella glabrescens* として本種を屋久島から報告している。尼川 (1975) は、*Clastobryum indicum* を福岡県の英彦山から報告しているが、Iwatsuki (1977) は日本から報告された *Clastobryum indicum* は、*Tristichella glabrescens* (= *C. glabrescens*) であるとしている。したがって、国内での分布は屋久島と福岡県 (英彦山) の 2 か所である。国外では台湾、フィリピン、ボルネオに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

尼川 (1975) 以来、福岡県からは確認できていない。屋久島のみで確認されている。

【生育地の現況】

屋久島の溪流沿いに生育する。生育地の一部では森林伐採や自然災害などにより生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限

特記事項

屋久島は本種の分布の北限である。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	ミスジャバネゴケ	<i>Clastobryum glabrescens</i> (Z.Iwats.) B.C.Tan, Z.Iwats. & D.H.Norris	VU
第4次 2019:	ミスジャバネゴケ	<i>Clastobryum glabrescens</i> (Z.Iwats.) B.C.Tan, Z.Iwats. & D.H.Norris	VU
第4次 2018:	ミスジャバネゴケ	<i>Clastobryum glabrescens</i> (Z.Iwats.) B.C.Tan, Z.Iwats. & D.H.Norris	VU
第4次 2017:	ミスジャバネゴケ	<i>Clastobryum glabrescens</i> (Z.Iwats.) B.C.Tan, Z.Iwats. & D.H.Norris	VU
第4次 2015:	ミスジャバネゴケ	<i>Clastobryum glabrescens</i> (Z.Iwats.) B.C.Tan, Z.Iwats. & D.H.Norris [= <i>Tristichella glabrescens</i> Z.Iwats.]	VU
第4次:	ミスジャバネゴケ	<i>Clastobryum glabrescens</i> (Z.Iwats.) B.C.Tan, Z.Iwats. & D.H.Norris [= <i>Tristichella glabrescens</i> Z.Iwats.]	VU
第3次:	ミスジャバネゴケ	<i>Clastobryum glabrescens</i> (Z.Iwats.) B.C.Tan, Z.Iwats. & D.H.Norris (= <i>Tristichella glabrescens</i> Z.Iwats.)	VU
第2次:	ミスジャバネゴケ	<i>Clastobryum glabrescens</i> (Iwats.) Tan, Z. Iwats. et Norris Syn. <i>Tristichella glabrescens</i> Iwats.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

福岡県[情報不足]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 尼川大録, 1975. 福岡県植物目録コケ植物門. 福岡県高等学校生物研究部会 (編), 福岡県植物誌, pp. 248-263. 博洋社, 福岡.
- 岩田和鷹, 2018. 屋久島 (鹿児島県) における蘚苔類の垂直分布. *Naturalistae*, 22: 73-84.
- Iwatsuki, Z., 1977. *Tristichella glabrescens*, a new species of Sematophyllaceae (Musci) with a special reference to *Clastobryum indicum*. *Bulletin of the National Science Museum. Series B, Botany*, 3: 13-22.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Clastobryum glabrescens has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Clastobryum glabrescens* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, River headwater
Threat types:	Logging and wood harvesting, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

シマフデノホゴケ

Acroporium secundum (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 奄美大島湯湾岳山頂域の生育地は面積が狭く、2017 年に襲来した台風によって倒木が多数あり、山頂域の林内が明るく風通しが良くなって、環境が激変している。ほかの生育地も同様の要因によって減少する可能性があり、全体の生育個体数の減少が予想される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

熱帯アジアに広く分布する蘚類で、日本では暖地の溪流近くの樹幹や腐木の上に黄緑色の光沢のあるマットを作る。第 5 次レッドリスト作成のための調査では奄美大島湯湾岳で確認された。生育地での森林伐採により生育地の存続が心配される。

協力者： 秋山弘之（兵庫県立人と自然の博物館）

基礎情報

【形態】

枝は葉を含めて幅 1～3 mm、先は葉が集まって尾状に尖る。中部の葉は乾いても展開し、卵形で葉先は短く尖り、長さ 1～1.5 mm、葉面は深く凹み、葉縁は内曲する。中肋はない。翼細胞はすぐ上の厚壁な細胞に比べとても大きく黄褐色で、外側の細胞は腎臓形になる。蒴はまれ。蒴柄は長さ約 8 mm、上部には明瞭な乳頭がある。蒴は小型で相称、ふたには長い嘴があり、口環を欠く。本属の種としては日本には本種のみが分布する。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

日本では暖地の溪流近くの樹幹や腐木の上に黄緑色の光沢のあるマットを作る。本属の種はおもに熱帯、亜熱帯地方の森林内に分布するものが多い。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川源流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

国内では九州（宮崎県、屋久島）、琉球列島（奄美大島、徳之島、沖縄島）に分布する。国外では中国と熱帯アジアに広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では奄美大島湯湾岳で確認された。

【生育地の現況】

奄美大島湯湾岳山頂域の生育地は面積が狭く、2017 年に襲来した台風によって倒木が多数あり、山頂域の林内が明るく風通しが良くなって、環境が激変している。

【個体数の現況】

生育量は極めて少ない。

存続を脅かす要因

樹上や腐木上に生育するが、生育地での森林伐採により生育地の存続が心配される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 自然災害, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

本属の種はおもに熱帯、亜熱帯地方の森林内に生育する。日本は本種の分布の北限である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	シマフデノホゴケ	<i>Acroporium secundum</i> (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch.	VU
第4次 2019:	シマフデノホゴケ	<i>Acroporium secundum</i> (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch.	VU
第4次 2018:	シマフデノホゴケ	<i>Acroporium secundum</i> (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch.	VU
第4次 2017:	シマフデノホゴケ	<i>Acroporium secundum</i> (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch.	VU
第4次 2015:	シマフデノホゴケ	<i>Acroporium secundum</i> (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch. [= <i>A. suzukii</i> Sakurai]	VU
第4次:	シマフデノホゴケ	<i>Acroporium secundum</i> (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch. [= <i>A. suzukii</i> Sakurai]	VU
第3次:	シマフデノホゴケ	<i>Acroporium secundum</i> (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch. (= <i>A. suzukii</i> Sakurai)	VU
第2次:	シマフデノホゴケ	<i>Acroporium secundum</i> (Reinw. et Hornsch.) Fl. Syn. <i>A. suzukii</i> Sak.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)] 沖縄県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Seki, T., 1968. A revision of the family Sematophyllaceae of Japan with special reference to a statistical demarcation of the family. Journal of Science of the Hiroshima University, Series B, Division 2 (Botany), 12: 1-80.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Acroporium secundum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Acroporium secundum* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, River headwater
Threat types:	Logging and wood harvesting, Natural disasters, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

マムシゴケ

Meiothecium microcarpum (Harv.) Mitt.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地が局在しており、生育量も少ない。森林伐採などの環境悪化により、個体群の消滅が危惧される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

マムシゴケは和歌山県以南に分布する。樹幹上に生育する。葉は卵形～狭卵形で、先端は短く尖り、中肋を欠く。葉の特徴でナガハシゴケ属の種に似るが、外蒴歯全面にパピラがあること、内蒴歯を欠くことで区別される。

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐する。茎はわずかに分枝し、葉を密につける。葉は卵形～狭卵形で、先端は短く尖り、長さ 1～1.5 mm。中肋を欠く。葉身細胞は長菱形で、表面は平滑。葉の特徴でナガハシゴケ属 (*Sematophyllum*) の種に似るが、外蒴歯全面にパピラがあること、内蒴歯を欠くことで区別される。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

低地の樹幹上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

国内では本州和歌山県以南、九州、琉球列島に分布し、国外ではヒマラヤ、スリランカ、マレーシア、インドネシア、ニューギニア、サモアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では、和歌山県田辺市で確認された。また、岩田 (2018) は、鹿児島県屋久島から報告している。

【生育地の現況】

生育地の一部では森林伐採や自然災害などにより生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

産地が局限し、比較的低地の森林内に生育するので、森林伐採による生育環境の変化によって壊滅的な影響を受ける可能性がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

日本は本種の分布の北限である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	マムシゴケ	<i>Meiothecium microcarpum</i> (Harv.) Mitt.	CR+EN
第4次 2019:	マムシゴケ	<i>Meiothecium microcarpum</i> (Harv.) Mitt.	CR+EN
第4次 2018:	マムシゴケ	<i>Meiothecium microcarpum</i> (Harv.) Mitt.	CR+EN
第4次 2017:	マムシゴケ	<i>Meiothecium microcarpum</i> (Harv.) Mitt.	CR+EN
第4次 2015:	マムシゴケ	<i>Meiothecium microcarpum</i> (Harv.) Mitt.	CR+EN
第4次:	マムシゴケ	<i>Meiothecium microcarpum</i> (Harv.) Mitt.	CR+EN
第3次:	マムシゴケ	<i>Meiothecium microcarpum</i> (Harv.) Mitt.	VU
第2次:	マムシゴケ	<i>Meiothecium microcarpum</i> (Harv.) Mitt.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

和歌山県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)] 沖縄県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩田和鷹, 2018. 屋久島（鹿児島県）における蘚苔類の垂直分布. *Naturalistae*, 22: 73-84.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 土永浩史・山本誠二, 2013. 紀伊半島産のマムシゴケ. *蘚苔類研究*, 10: 355-356.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Meiothecium microcarpum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Meiothecium microcarpum* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy
 - area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫（広島大学）
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales ナガハシゴケ科 Sematophyllaceae

リュウキュウカギホソエゴケ

Radulina borbonica (Bél.) W.R.Buck

カテゴリー判定結果

絶滅危惧 I B 類 (EN)

B2ab

基準 A: —

基準 B: EN

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。

【地点数】5 地点以下

b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

生育地が局在しており、生育量も少ない。生育基物である森林が伐採や台風などの影響によって倒木し、生育基物ごと消失することがあり、減少傾向にあると考えられる。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

リュウキュウカギホソエゴケは琉球列島の石垣島と西表島に分布する。林内の樹幹や倒木に生育する。植物体は小型で、茎葉は卵状披針形で凹み、長さ約 1.0 mm。葉身細胞の背面中央には 3～5 個の小さなパピラが 1 列に並ぶ。日本産のカギホソエゴケ属のもう 1 種のカギホソエゴケから、茎葉がより小さいこと、葉身細胞のパピラがより明瞭なことで区別される。

協力者： 佐藤匠（広島大学）・西畑和輝（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、小型。茎は長さ 3～5 mm の枝を上方に出し、まばらに葉をつける。茎葉は卵状披針形で凹み、長さ約 1.0 mm、先端は長く尖る。葉身細胞は線状菱形で、細胞の背面中央には 3～5 個の小さなパピラが 1 列に並ぶ。枝葉は茎葉よりも細くて長い。日本産のカギホソエゴケ属のもう 1 種のカギホソエゴケ (*Radulina borbonica* var. *ferriei*) からは茎葉がより小さいこと、葉身細胞のパピラがより明瞭なことで区別される。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

暖地の林内の樹幹や倒木に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 河川上流域

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では琉球列島の石垣島と西表島に分布し、国外では中国、フィリピン、ジャワ、スマトラ、ミクロネシアに分布する。国内における標本に基づいた報告としては、石垣島からは山口（1985）が、西表島からは Deguchi and Yamaguchi（1997）が最後である。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト調査（2016-2019）では西表島の 1 か所で確認されている。

【生育地の現況】

生育地の一部では森林伐採や自然災害などにより生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

個体群、個体数ともに少ない。

存続を脅かす要因

産地が局限し、比較的低地の森林内に生育するので、森林伐採による生育環境の変化によって壊滅的な影響を受ける可能性がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

八重山諸島が分布の北限となっている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	リュウキュウカギホソエゴケ	<i>Radulina elegantissima</i> (M.Fleisch.) W.R.Buck & B.C.Tan	CR+EN
第4次 2019:	リュウキュウカギホソエゴケ	<i>Radulina elegantissima</i> (M.Fleisch.) W.R.Buck & B.C.Tan	CR+EN
第4次 2018:	リュウキュウカギホソエゴケ	<i>Radulina elegantissima</i> (M.Fleisch.) W.R.Buck & B.C.Tan	CR+EN
第4次 2017:	リュウキュウカギホソエゴケ	<i>Radulina elegantissima</i> (M.Fleisch.) W.R.Buck & B.C.Tan	CR+EN
第4次 2015:	リュウキュウカギホソエゴケ	<i>Radulina elegantissima</i> (M.Fleisch.) W.R.Buck & B.C.Tan [= <i>Trichosteleum elegantissimum</i> M.Fleisch.]	CR+EN
第4次:	リュウキュウカギホソエゴケ	<i>Radulina elegantissima</i> (M.Fleisch.) W.R.Buck & B.C.Tan [= <i>Trichosteleum elegantissimum</i> M.Fleisch.]	CR+EN
第3次:	リュウキュウカギホソエゴケ	<i>Radulina elegantissima</i> (M.Fleisch.) W.R.Buck & B.C.Tan (= <i>Trichosteleum elegantissimum</i> M.Fleisch.)	VU
第2次:	リュウキュウカギホソエゴケ (新称)	<i>Radulina elegantissima</i> (Fl.) Buck et Tan Syn. <i>Trichosteleum elegantissimum</i> Fl.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Buck, W. R. and B. C. Tan, 1989. The Asiatic genera of Sematophyllaceae associated with *Trichosteleum*. Acta Bryolichenologica Asiatica, 1: 5-19.
- Deguchi, H. and T. Yamaguchi, 1997. Bryophytes of Asia, fasc. 4. Hikobia, 12: 279-280.

- O'Shea, B. J., 2006. A revision of the genus *Radulina* W. R. Buck & B. C. Tan (Sematophyllaceae: Bryopsida). *Tropical Bryology*, 27: 25-43.
- Seki, T., 1968. A revision of the family Sematophyllaceae of Japan with special reference to a statistical demarcation of the family. *Journal of Science of the Hiroshima University, Series B, Division 2 (Botany)*, 12: 1-80.
- Tan, B. C., T. Koponen and D. H. Norris, 2005. Bryophyte flora of the Huon Peninsula, Papua New Guinea. LXIX. Preliminary report on the Sematophyllaceae (Musci), with nomenclatural notes. *Annales Botanici Fennici*, 42: 231-233.
- 山口富美夫, 1985. 八重山群島の蘚苔類フロラ. *Hikobia*, 9: 243-264.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Radulina borbonica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Radulina borbonica* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
 Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

ヤクシマヒラツボゴケ

Filibryum yakoushimae (Cardot) W.Kim & T.Yamag.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧 I B 類 (EN) B2ab				
基準 A: —	基準 B: EN	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 500 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。 【地点数】5 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 屋久島だけに生育し、現在確認されている生育地は登山道沿いにある。生育量も少ないことから、人の踏み付けなどの影響を受けていると考えられる。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

屋久島だけから記録されている日本の固有種である。林内の湿った転石上に生育する。

基礎情報

【形態】

茎は這い、やや密に葉をつけた小数の枝を分け、枝先はしばしば鞭状に細く伸びる。葉は長楕円形で葉先は鋭頭、大きな葉で長さ 1.0 mm、幅 0.40～0.45 mm の大きさでさじ形にくぼむ。葉の縁は広く内側に巻き、先端部には小さな歯がある。中肋は短く、不明瞭。葉身中部の細胞は線形で、長さ 50～60 μm 、蛆虫状に曲がり、壁はやや厚く、両端に小さいが明瞭なパピラがある。葉の基部の細胞は短く、30～45 μm 。葉基部の細胞は矩形で透明、壁はやや厚い。同属のツクシヒラツボゴケ (*Filibryum ogatae*) は植物体がしばしば赤褐色に近づき、葉先は鈍頭であるが、本種は赤くならず、葉先は鋭頭である。

【生活史】

不明。

【生育環境】

林内の湿った岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林, 河川源流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

日本固有種で、屋久島に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査で、屋久島では確認できなかった。Kim & Yamaguchi (2017) が引用している標本のうち、広島大学植物標本庫に保管されているものは 2013 年に屋久島内の 2 か所で採集されたものである。

【生育地の現況】

林内の溪流沿いの湿った転石上に生育している。生育量も少ないことから、人の踏み付けなどの影響を受けていると考えられる。

【個体数の現況】

ごく少ない。

存続を脅かす要因

森林伐採。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限

特記事項

Kim & Yamaguchi (2017) によって新属 *Filibryum* に組み替えられた。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヤクシマヒラツボゴケ	<i>Glossadelphus yakoushimae</i> (Cardot) Nog.	CR+EN
第4次 2019:	ヤクシマヒラツボゴケ	<i>Glossadelphus yakoushimae</i> (Cardot) Nog.	CR+EN
第4次 2018:	ヤクシマヒラツボゴケ	<i>Glossadelphus yakoushimae</i> (Cardot) Nog.	CR+EN
第4次 2017:	ヤクシマヒラツボゴケ	<i>Glossadelphus yakoushimae</i> (Cardot) Nog.	CR+EN
第4次 2015:	ヤクシマヒラツボゴケ	<i>Glossadelphus yakoushimae</i> (Cardot) Nog. [= <i>Taxithelium yakoushimae</i> Cardot]	CR+EN
第4次:	ヤクシマヒラツボゴケ	<i>Glossadelphus yakoushimae</i> (Cardot) Nog. [= <i>Taxithelium yakoushimae</i> Cardot]	CR+EN
第3次:	ヤクシマヒラツボゴケ	<i>Glossadelphus yakoushimae</i> (Cardot) Nog. (= <i>Taxithelium yakoushimae</i> Cardot)	CR+EN
第2次:	ヤクシマヒラツボゴケ (新称)	<i>Glossadelphus yakoushimae</i> (Card.) Nog. Syn. <i>Taxithelium yakoushimense</i> Card.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kim, W. & T. Yamaguchi, 2017. *Filibryum* (Hypnaceae), a new moss genus with a new species from East Asia. *Journal of Bryology*, 39: 152-160.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Filibryum yakoushimae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Filibryum yakoushimae* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of

a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, River headwater
Threat types:	Logging and wood harvesting, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

オガサワラキブリツノゴケ

Dendroceros tubercularis S.Hatt.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) B2ab				
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 2000 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 最近の調査において小笠原諸島では生育が確認されたが、石垣島では確認できなかった。その他の産地では、西表島の 1 地点のみでしか近年確認されておらず、生育量が減少していると判断する。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種はかつてキノボリツノゴケ *Dendroceros japonicus* と混同されていたこともあるが、蒴の表皮細胞が瘤状に肥厚しないこと、胞子が小さいこと、葉状体が切れ込んで波状にならないことなどで区別できる。タイプ標本の産地である小笠原諸島では生育は良好であるが、近年他の産地では西表島の 1 地点のみでしか確認されていない。

協力者: 山口富美夫 (広島大学)・佐藤匠 (広島大学)・西畑和輝 (広島大学)・桐生賢太 (広島大学)

基礎情報

【形態】

植物体は葉状性で、濃緑色、やや頻繁に二又状に分枝し、1.6 cm の長さになる。葉状体は中肋部と翼部に分化し、翼部は1細胞層で、ほとんど切れ込まず、背面は平坦。蒴は角状で、1.2 cm の長さに達し、表皮細胞は縦方向に肥厚する。胞子は多細胞、球状～丸みを帯びた楕円形で、通常、50～60 μm 。弾糸は螺旋状に肥厚する。同属のキノボリツノゴケ *Dendroceros japonicus* は、葉状体の翼部の裂片が頭巾状に膨らみ、背面が波打つこと、蒴の表皮細胞が瘤状に肥厚し、胞子が大きいことで区別される。

【生活史】

雌雄同株。生殖器官や胞子体も見つかっているが、十分な調査が行われておらず生活史などについては不明。

【生育環境】

常緑広葉樹林内の樹幹や枝に着生する。小笠原諸島の母島では、霧がよくかかる稜線の灌木の幹や枝に固まって生えていることがある。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では小笠原諸島（母島）、火山列島（北硫黄島、南硫黄島）、琉球列島（沖縄島、石垣島、西表島）に分布し、国外では台湾からの報告がある。

現在の生育状況

【分布域の現況】

最近の調査では母島では生育が確認されたが、石垣島では確認できなかった。その他の産地では、西表島の1地点のみでしか近年確認されていない。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

タイプ標本の産地である小笠原諸島の母島では生育は良好であるが、近年生育が確認されていない産地も多く、生育量は減少している。

存続を脅かす要因

湿度の高い森林の樹木の幹に着生する種なので、森林の伐採や、生育地周辺の道路建設などにより、生育地の林の環境が変わることによって消滅するおそれがある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 交通インフラ建設
	(現在)	森林伐採, 交通インフラ建設

特記事項

ヘゴの幹に着生しているのがよく見られる。ツノゴケ類の葉状体は藍藻類と共生し、藍藻類のコロニーを宿すための特別な組織構造を発達させることが知られているが、オガサワラキブリツノゴケでは、それが葉状体の中肋部の腹面に球状に張り出し、非常に顕著になる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オガサワラキブリツノゴケ	<i>Dendroceros tubercularis</i> S.Hatt.	CR+EN
第4次 2019:	オガサワラキブリツノゴケ	<i>Dendroceros tubercularis</i> S.Hatt.	CR+EN
第4次 2018:	オガサワラキブリツノゴケ	<i>Dendroceros tubercularis</i> S.Hatt.	CR+EN
第4次 2017:	オガサワラキブリツノゴケ	<i>Dendroceros tubercularis</i> S.Hatt.	CR+EN
第4次 2015:	オガサワラキブリツノゴケ	<i>Dendroceros tubercularis</i> S.Hatt.	CR+EN
第4次:	オガサワラキブリツノゴケ	<i>Dendroceros tubercularis</i> S.Hatt.	CR+EN
第3次:	オガサワラキブリツノゴケ	<i>Dendroceros tubercularis</i> S.Hatt.	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hasegawa, J., 1980. Taxonomical studies on Asian Anthocerotae II. Some Asian species of *Dendroceros*. J. Hattori Bot. Lab., 47: 287-309.
- Inoue, H., 1978. Memoir of *Dendroceros tubercularis* Hatt., an endemic hornwort in the Bonin Island. Mem. Natl. Sci. Mus., Tokyo, 11: 31-36.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Dendroceros tubercularis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Dendroceros tubercularis is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

オオサイハイゴケ

Asterella cruciata (Steph.) Horik.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】 10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
石灰岩の採掘によって、生育地が減少する可能性がある。また、理由は不明だが生育地の乾燥化が進んでおり、今後も乾燥化により本種が減少するおそれがある。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

サイハイゴケ属は葉状体が独特なドクダミ臭を発することから、野外において容易に識別できる葉状苔類である。中でも本種はこの匂いが強い。淡緑色の葉状体は独特なドクダミ臭がするため野外において容易に識別できる葉状苔類。日本および近隣国に分布し、日本では関東、東北の低地の石灰岩地に生育する。石灰岩の採掘や開発により産地が激減し、絶滅が危惧されている。

基礎情報

【形態】

植物体は淡緑色、ドクダミ臭があり、葉状、長さ 1～2.5 cm、幅 2～6 mm、通気組織は数層、気室孔はアーチ状。腹鱗片の附属物は長三角形。無性芽はない。雌器托は傘状、雌器床は盤状、目立つ偽花被がある。雄器床は雌器托の根元につき、柄はなく盤状に盛り上がる。無性芽はない。ヨシナガサイハイゴケ (*Asterella leptophylla* (Mont.) Grolle) と近縁であるが、造精器のつく位置が異なる。また、本種は低地に、ヨシナガサイハイゴケは高地に生育する。

【生活史】

雌雄同株。胞子は晩夏から初秋にかけて成熟するが、胞子体の有無は、同じ産地でも多産する年と皆無の年があり、受精時期の天候の影響を受けていると考えられる。

【生育環境】

落葉広葉樹林の石灰岩地ないしその周辺において、石灰岩やチャート、土の上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林 【陸域_平地部】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

国内では岩手県、秩父山地、奥多摩に分布する。国外では中国、朝鮮半島に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

岩手県については、詳細な産地不明であり、現況不明である。埼玉県秩父山地（秩父市：橋立、落合、川浦谷溪谷、大血川西谷、三峰）、東京都（奥多摩御岳山大岳）に分布する。

【生育地の現況】

石灰岩採掘や道路建設などのために失われた産地がある。大部分の生育地では乾燥化が著しく、生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

上記の理由により生育数は激減しており、いずれの生育地においても数個体から数 10 個体である。

存続を脅かす要因

生育地が局限しており、石灰採掘や道路建設、開発により絶滅した生育地がある。また、乾燥によって生育量が減少した生育地が多い。

要因の区分：	(過去)	石灰採掘, 交通インフラ建設, 分布・産地局限

	(現在)	石灰採掘, 分布・産地局限

特記事項

和名のサイハイゴケは、目立つ大きな偽花被をつけた雌器托が「采配」に似ていることによる。1997年に、チチブサイハイゴケ（*Asterella chichibuensis* Shimizu & S.Hatt.）とドクダミサイハイゴケ（*Asterella odora* S.Hatt.）は本種の同種異名とされた。植物体は独特なドクダミ臭を発するので、野外でも容易に生育が確認できる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オオサイハイゴケ	<i>Asterella cruciata</i> (Steph.) Horik.	VU
第4次 2019:	オオサイハイゴケ	<i>Asterella cruciata</i> (Steph.) Horik.	VU
第4次 2018:	オオサイハイゴケ	<i>Asterella cruciata</i> (Steph.) Horik.	VU
第4次 2017:	オオサイハイゴケ	<i>Asterella cruciata</i> (Steph.) Horik.	VU
第4次 2015:	オオサイハイゴケ	<i>Asterella cruciata</i> (Steph.) Horik.	VU
第4次:	オオサイハイゴケ	<i>Asterella cruciata</i> (Steph.) Horik.	VU
第3次:	オオサイハイゴケ	<i>Asterella cruciata</i> (Steph.) Horik.	VU
第2次:	オオサイハイゴケ (チチブサイハイゴケ、 ドクダミサイハイゴケ)	<i>Asterella cruciata</i> (Steph.) Horik. Syn. <i>A.</i> <i>chichibuensis</i> Shim. et Hatt.; <i>A. odora</i> Hatt.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- Long, D. G., 1997. Studies on the genus *Asterella* P. Beauv. III: *Asterella cruciata* (Steph.) Horik. in Eastern Asia. *Cryptogamie*, 18: 169-176.
- Long, D. G., 2006. Revision of the genus *Asterella* P. Beauv. in Eurasia. *Bryophyt. Biblioth.*, 63: 1-299.
- Shimizu, D. and S. Hattori, 1952. Studies on the Japanese species of *Asterella* (1). *J. Hattori Bot. Lab.*, 8: 46-54.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Asterella cruciata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Asterella cruciata* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Forest
Threat types:	Limestone mining, Transportation infrastructure construction, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
Author: Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ゼニゴケ目 Marchantiales ジンチョウゴケ科 Cleveaceae

チチブゼニゴケ

Clelea pusilla (Steph.) Rubas. & D.G.Long

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
石灰岩地、あるいは石灰岩地に隣接する場所に生育しており、乾燥化の影響を受けて個体数が減少している。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

本種は雌器托が小さく単配形をなす葉状苔類。チチブゼニゴケ属では日本産唯一の種である。ヒマラヤ、中国など東アジアに分布している。生育地が古生層などに限られ、少なく、また、石灰岩採掘や道路建設などにより消失した産地があり、また、近年、生育地の乾燥化により生育数が減少しているため、絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

植物体は淡緑色、葉状でしばしば光を反射して光る。葉状体は長さ 5～10 mm、幅 5 mm、気室は 1～2 層、同化糸はない、気室孔はアーチ状、腹鱗片は付属物が不明瞭で、不規則に多細胞列。無性芽はない。雌器托は柄が短く、柄の溝を欠き、雌器床はしばしば軍配形となる。雄器托は柄がなく盤状となる。無性芽はない。近縁種の (*Clevea spathysii* (Lindenb.) Müll.Frib.) はアフリカや南北米などに分布し、腹鱗片が規則的に配列することで区別される。

【生活史】

雌雄同株。胞子は夏に成熟する。

【生育環境】

おもに古生層地域の落葉広葉樹や亜高山性針葉樹の自然林にかけての湿岩上や土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地 低標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では日高山地（北海道）、秩父山地、長野県佐久地域、南アルプス、紀伊半島に分布している。国外ではヒマラヤ（インド、ネパール）や中国、ロシアなどに知られている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

日高山地では不明。秩父山地では埼玉県の上尾市、秩父市、山梨県北相模郡の三峰山、十文字峠（白岩沢、赤沢）、秩父湖畔上中尾、両神山に知られているが、生育数が減少している。長野県北相模郡では不明。山梨県（北岳）や大杉谷（三重県）、大台ヶ原（奈良県）では生育数が非常に少ない。

【生育地の現況】

森林の管理に伴い、樹木が伐採され、乾燥化により減少している生育地がある。

【個体数の現況】

いずれの生育地においても少ない。

存続を脅かす要因

産地が局在していたが、石灰岩採掘や道路建設などにより消失した産地がある。また、近年、生育地の乾燥化により生育数が減っている。

要因の区分：	(過去)	石灰採掘, 交通インフラ建設, 分布・産地局限, 気候変動
	(現在)	石灰採掘, 交通インフラ建設, 分布・産地局限

特記事項

1953年に埼玉県産の標本を基に新種 *Gollaniella nana* Shimizu & S.Hatt. として記載されたが、2011年にヒマラヤや中国に分布する本種の異名にされた。しかし、近年 *Clevea nana* (Shimizu & S.Hatt.) Borovich. & Bakalin として分ける見解もあり (Borovich & Bakalin (2013), 更なる研究が必要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	チチブゼニゴケ	<i>Clevea pusilla</i> (Steph.) Rubasinghe & D.G.Long	VU
第4次 2019:	チチブゼニゴケ	<i>Clevea pusilla</i> (Steph.) Rubasinghe & D.G.Long	VU
第4次 2018:	チチブゼニゴケ	<i>Clevea pusilla</i> (Steph.) Rubasinghe & D.G.Long	VU
第4次 2017:	チチブゼニゴケ	<i>Clevea pusilla</i> (Steph.) Rubasinghe & D.G.Long	VU
第4次 2015:	チチブゼニゴケ	<i>Clevea pusilla</i> (Steph.) Rubasinghe & D.G.Long [= <i>Athalamia nana</i> (Shimizu & S.Hatt.) S.Hatt.]	VU
第4次:	チチブゼニゴケ	<i>Clevea pusilla</i> (Steph.) Rubasinghe & D.G.Long [= <i>Athalamia nana</i> (Shimizu & S.Hatt.) S.Hatt.]	VU
第3次:	チチブゼニゴケ	<i>Athalamia nana</i> (Shimizu & S.Hatt.) S.Hatt.	VU
第2次:	チチブゼニゴケ (グンバイゼニゴケ)	<i>Athalamia nana</i> (Shim. et Hatt.) Hatt. Syn. <i>A. glauco-virens</i> Shim. et Hatt.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Borovich, E. A. and V. A. Bajalin, 2013. The survey of Marchantiales from the Russian Far East 1. The review of Cleveaceae (Hepaticae). Botanica Pacifica, 2: 53-61.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- Rubasinghe, S. C. K., 2011. Phylogeny and Taxonomy of the complex thalloid liverwort family Cleveaceae Cavers. University of Edinburgh, Scotland. 264pp

- Shimizu, D. and S. Hattori, 1954. Marchantiales of Japan. III. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 12: 53-75.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Clevea pusilla has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Clevea pusilla* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area Low-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limestone mining, Transportation infrastructure construction, Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
 Author: Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ゼニゴケ目 Marchantiales ハマグリゼニゴケ科 Targioniaceae

ハマグリゼニゴケ

Targionia hypophylla L.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
道路建設や石灰採掘により消失した産地もある。埼玉県では人家付近にも、かつては石垣などに豊富に生育していたが、生育地と生育量が減少している。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

ゼニゴケ目の葉状性苔類で特徴的な形態の雌包膜をもつ。胞子体は葉状体先端の腹面につき 1 対の包膜に包まれる。汎世界的に分布するが、国内では本州（関東、中部）にのみ知られ、石灰岩の採掘などにより生育地が減少している。

基礎情報

【形態】

植物体はやや褐色を帯びた緑色の葉状、長さ 1～2 cm、幅 2～5 mm、通気組織は 1 層、気室孔はアーチ状。腹鱗片は 2 列、付属物は三角形状で縁に毛を持つ。無性芽はない。造卵器は葉状体先端の腹面につき、傘状の雌器托は発達せず、孢子体は 1 対の包膜に包まれて成熟する。雄器床は葉状体の脇から出る短枝となる。本属としては日本に産する唯一の種である。近縁種はアフリカなどに知られる *Targionia lorbeeriana* であるが、孢子の特徴などが異なる。

【生活史】

雌雄同株。孢子は夏に成熟する。

【生育環境】

落葉広葉樹の自然林の溪谷の湿った崖や土上、人家の石垣などに生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州（関東、中部）に分布し、中国、ヒマラヤ、アフリカ、マダガスカル、欧州、北米、中南米、ハワイ、ニュージーランド、タスマニア、オーストラリアなど汎世界に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

秩父山地（埼玉県）、八ヶ岳（長野県）、南アルプス（長野県）、御嶽山（長野県）などに知られている。道路建設や石灰採掘により消失した産地もある。

【生育地の現況】

埼玉県ではかつて石垣などの人家付近にも豊富に生育していたが、現在は生育地と生育量が減少している。

【個体数の現況】

石灰採掘により、生育数が減少している。

存続を脅かす要因

石灰採掘や河川開発などにより産地が消失した地域がある。また、人家付近では道路建設による影響を受けている。

要因の区分：	（過去）	河川開発, 石灰採掘, 交通インフラ建設
	（現在）	河川開発, 石灰採掘, 交通インフラ建設

特記事項

多くの生育地は国立公園または国定公園内である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ハマグリゼニゴケ	<i>Targionia hypophylla</i> L.	VU
第4次 2019:	ハマグリゼニゴケ	<i>Targionia hypophylla</i> L.	VU
第4次 2018:	ハマグリゼニゴケ	<i>Targionia hypophylla</i> L.	VU
第4次 2017:	ハマグリゼニゴケ	<i>Targionia hypophylla</i> L.	VU
第4次 2015:	ハマグリゼニゴケ	<i>Targionia hypophylla</i> L.	VU
第4次:	ハマグリゼニゴケ	<i>Targionia hypophylla</i> L.	VU
第3次:	ハマグリゼニゴケ	<i>Targionia hypophylla</i> L.	VU
第2次:	ハマグリゼニゴケ (チンピンゼニゴケ)	<i>Targionia hypophylla</i> L.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 服部新佐, 1951. 日本およびハワイ新記録の Targioniaceae. 植物学雑誌, 64: 26.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 352 pp., 192 pls. 平凡社, 東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Targionia hypophylla has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Targionia hypophylla* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	River development, Limestone mining, Transportation infrastructure construction
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

ヒメトロイブゴケ

Apotreubia nana (S.Hatt. & Inoue) S.Hatt. & Mizut.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】 10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
早池峰山では 60 年以上確認できず、秩父山地と八ヶ岳でも生育数が激減している。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

トロイブゴケ科は茎葉性苔類と葉状性苔類の中間的な形態をもつ特異な苔類である。国内ではこの科の唯一の種である本種は秩父山地で発見され、1954 年に新種として記載されて以来、早池峰山や八ヶ岳、南アルプスから記録された。おもに亜高山の林床に生育するが、植物体が比較的大きく鮮緑色で、認識し易い種である。最近の調査によれば、既知の産地のいずれにおいても生育が極めて少ない。

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、鮮緑色、長さ 1～3 cm、幅 4～8 mm、茎葉体と葉状体の中間的な形態をもつ。葉状体の縁は深く切れ込み半円形の葉があるように見え、背面には舌状の背片が 2 列に並ぶ。油体は点在する油体細胞に 1 個、細胞内に充満するほど大きい。雌花は葉状体の背面につき、偽花被はなく、多肉質のカリプトラがある。造精器は葉状体の背面につく。無性芽は多細胞性楕円体。

【生活史】

国内の植物体は雌雄同株であるとされている。孢子体は秋に成熟する。南アルプスでは孢子体や無性芽をもつ植物体が確認されている。

【生育環境】

高山のハイマツ林や亜高山性針葉樹の自然林において、林床または転石上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州（東北、関東、中部）の高地に分布し、国外ではインド、ネパール、中国、台湾、ロシア、アラスカに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

早池峰山（岩手県）や秩父山地（埼玉県、長野県）、八ヶ岳（長野県）、南アルプス（長野県、山梨県）に知られるが、早池峰山では 60 年以上確認されていない。

【生育地の現況】

森林伐採や砂防ダムの建設、登山道整備などにより生育環境が悪化している生育地が多い。

【個体数の現況】

秩父山地と八ヶ岳で生育数が激減している。

存続を脅かす要因

森林伐採や砂防ダムの建設、登山道整備などにより生育環境が悪化している生育地が多く、絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発, ダム・河川工作物建設
	(現在)	森林伐採, 河川開発, ダム・河川工作物建設

特記事項

生育地は国立公園内または国定公園内である。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	ヒメトロイブゴケ	<i>Apotreubia nana</i> (S.Hatt. & Inoue) S.Hatt. & Mizut.	CR+EN
第4次 2019:	ヒメトロイブゴケ	<i>Apotreubia nana</i> (S.Hatt. & Inoue) S.Hatt. & Mizut.	CR+EN
第4次 2018:	ヒメトロイブゴケ	<i>Apotreubia nana</i> (S.Hatt. & Inoue) S.Hatt. & Mizut.	CR+EN
第4次 2017:	ヒメトロイブゴケ	<i>Apotreubia nana</i> (S.Hatt. & Inoue) S.Hatt. & Mizut.	CR+EN
第4次 2015:	ヒメトロイブゴケ	<i>Apotreubia nana</i> (S.Hatt. & Inoue) S.Hatt. & Mizut.	CR+EN
第4次:	ヒメトロイブゴケ	<i>Apotreubia nana</i> (S.Hatt. & Inoue) S.Hatt. & Mizut.	CR+EN
第3次:	ヒメトロイブゴケ	<i>Apotreubia nana</i> (S.Hatt. & Inoue) S.Hatt. & Mizut.	CR+EN
第2次:	ヒメトロイブゴケ	<i>Apotreubia nana</i> (Hatt. et Inoue) Hatt. et Mizut.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Bakalin, V. and A. Vilnet, 2017. How many species are in *Apotreubia* S. Hatt. & Mizut. (Marchantiophyta)? Nova Hedwigia, 104: 473-482.
- Hattori, S. and H. Inoue, 1954. On a new liverwort of fam. Treubiaceae. J. Hattori Bot. Lab., 11: 99-102.
- 樋口正信, 2004. 長野県光岳で見つかったヒメトロイブゴケ. 蘚苔類研究, 8: 247-248.

- 樋口正信, 2017. 南アルプス(明石山脈)仙水峠に見つかったキレハコマチゴケとヒメトロイブゴケ. 蘚苔類研究, 11: 295-297.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp., 192 pls. 平凡社, 東京.
- 片桐知之・桒崎浩亮・嶋村正樹, 2009. 南アルプス甲斐駒ヶ岳におけるヒメトロイブゴケ (*Apotreubia nana*) の孢子体の発見. 蘚苔類研究, 9: 364-365.
- Schuster, R. M. and N. A. Konstantinova, 1995. Studies on Treubiales, I. On *Apotreubia* Hatt. et al. and *A. hortoniae* Schust. et Konstantinova, sp. n. J. Hattori Bot. Lab., 78: 41-61.
- 嶋村正樹・桒崎浩亮・片桐知之, 2010. ヒメトロイブゴケの無性芽. 蘚苔類研究, 10: 13-14.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Apotreubia nana has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Apotreubia nana* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Dam/River structures construction
Law designation status for conservation	—



©片桐知之

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

イリオモテウロコゼニゴケ

Fossombronia myrioides Inoue

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
西表島の河川流域の 5 地点にのみ小さい群落を形成して生育する。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

本種は西表島に固有なウロコゼニゴケ属の茎葉状苔類。本属では河川に生育する唯一の種であり、生育地が限られている。観光客による踏みつけなどの影響が懸念され、絶滅が危惧される。

協力者： 山口富美夫（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、緑色、茎葉状、長さ 5～9 mm、幅は葉を含めて 3.5～4.2 mm。茎の背面に鱗片が散在する。葉はやや長方形で縁は波打ち、鋸歯を持つ。雌花は茎の背面につき、偽花被は口部が広く、円筒形。造精器は茎の背面に散在する。無性芽はない。国産の同属の他種とは、葉縁が鋸歯状になることで区別される。

【生活史】

雌雄同株。胞子は冬に成熟する。

【生育環境】

常緑広葉樹の自然林において、溪流の転石上や崖に生育する。

生育環境区分：	【陸域_平地部】河川中流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

西表島に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

分布域に大きな変化はない。

【生育地の現況】

浦内川上流の数か所と板敷川、仲間川上流において、流域の大きな転石及び河岸の湿岩上に小さな群落を作っていた。生育量の変動が見られるが、生育範囲に変化は少ないと推測される。

【個体数の現況】

各生育地において、小さい群落を形成して生育する。

存続を脅かす要因

産地が局限しており、絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

1973 年に西表島産の標本を基に新種として記載された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	イリオモテウロコゼニゴケ	<i>Fossombronia myrioides</i> Inoue	CR+EN
第4次 2019:	イリオモテウロコゼニゴケ	<i>Fossombronia myrioides</i> Inoue	CR+EN
第4次 2018:	イリオモテウロコゼニゴケ	<i>Fossombronia myrioides</i> Inoue	CR+EN
第4次 2017:	イリオモテウロコゼニゴケ	<i>Fossombronia myrioides</i> Inoue	CR+EN
第4次 2015:	イリオモテウロコゼニゴケ	<i>Fossombronia myrioides</i> Inoue	CR+EN
第4次:	イリオモテウロコゼニゴケ	<i>Fossombronia myrioides</i> Inoue	CR+EN
第3次:	イリオモテウロコゼニゴケ	<i>Fossombronia myrioides</i> Inoue	VU
第2次:	イリオモテウロコゼニゴケ	<i>Fossombronia myrioides</i> Inoue	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Higuchi, M., 2016. A new locality of *Fossombronia myrioides* (Fossombroniaceae, Marchantiophyta). Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. B., 42: 19-23.
- Inoue, H., 1973. The genus *Fossombronia* Raddi in Japan. J. Hattori Bot. Lab., 37: 293-297.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Fossombronia myrioides has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Fossombronia myrioides* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Middle river basin
Threat types:	Limited distribution

Law designation status for conservation	—



執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

クモノスゴケ目 Pallaviciniales チヂレヤハズゴケ科 Moerckiaceae

チヂレヤハズゴケ

Moerckia blytii (Mørck) Brockm.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
生育地は日本海側の高山における雪渓脇の水際であり、夏でも雪が解けずに残っている地域に限定される。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

本種は単純葉状苔類で、葉状体の中心束がはっきりせず、雌包膜が偽花被の周囲にあることを特徴としている。本属としては日本唯一の種である。日本海側の高山において雪渓脇の高山草原などに生育している。生育範囲が非常に狭く、生育数も少ないため、絶滅が危惧される。

協力者： 坂井奈緒子（富山市立科学博物館）

基礎情報

【形態】

植物体は葉状、匍匐し、濃緑色、長さ 2～3 cm、幅数 mm、中肋部は不明瞭であるが、縁が縮れているかのように波打ち、和名の由来になっている。中心束は不明瞭。無性芽はない。包膜が鱗片状で、円筒状の偽花被の周囲にあることが特徴である。近縁属のヤマトヤハズゴケ (*Sandeothallus japonicum* (Inoue) Crand.-Stotl. & Stotler) は雌包膜が偽花被の背側にある。

【生活史】

雌雄異株。胞子は初夏に成熟する。

【生育環境】

高山帯において、雪解け水が流れている雪渓脇の水辺に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】湿地・湿原・細流

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国外では欧州、北米太平洋岸などの寒帯に分布し、国内では日本海側の朝日岳、飯豊山と北アルプスに知られている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

飯豊山（新潟県）の山頂付近、立山室堂（富山県）において生育が確認されているが、生育数は少ない。朝日岳（山形県）は近年未調査。

【生育地の現況】

いずれの生育地においても雪渓脇の雪解け水が流れている水辺に生育する。

【個体数の現況】

いずれの生育地においても生育数は少ない。

存続を脅かす要因

産地が少なく日本海側の高山雪渓に局在し、生育量が少ない。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限, 気候変動
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

国内では雪渓脇の草原において流れがある水辺に群落を形成する。このような苔類は

日本産では稀である。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	チヂレヤハズゴケ	<i>Moerckia blytii</i> (Mørck) Brockm.	VU
第4次 2019:	チヂレヤハズゴケ	<i>Moerckia blytii</i> (Mørck) Brockm.	VU
第4次 2018:	チヂレヤハズゴケ	<i>Moerckia blytii</i> (Mørck) Brockm.	VU
第4次 2017:	チヂレヤハズゴケ	<i>Moerckia blytii</i> (Mørck) Brockm.	VU
第4次 2015:	チヂレヤハズゴケ	<i>Moerckia blytii</i> (Mørck) Brockm.	VU
第4次:	チヂレヤハズゴケ	<i>Moerckia blytii</i> (Moerck) Brockm.	VU
第3次:	チヂレヤハズゴケ	<i>Moerckia blytii</i> (Moerck) Brockm.	DD
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

富山県[絶滅危惧Ⅱ類]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Inoue, H., 1985. Studies on Pallaviciniaceae & Allisoniaceae (Metzgeriales) in Japan, 2. Bull. Natl. Sci. Mus., Ser. B, Bot., 11: 1-10.
- Söderström, L., 2016. World checklist of hornworts and liverworts. PhytoKeys, 59: 1-828.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Moerckia blytii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Moerckia blytii* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Wetland/Marsh/Stream

Threat types:	Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—



©古木達郎（元千葉県立中央博物館）

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ムカシヒシヤクゴケ

Scapania ornithopoides (With.) Waddell

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 秩父山地や紀伊半島では既知の生育地の乾燥化が認められ生育地が減少している。他の生育地においても減少が見られる。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

本種はヒシヤクゴケ属の中では大型の種で、腹片と背片が癒合しないことを特徴とする茎葉状苔類。欧州やヒマラヤ、ハワイに隔離分布する。日本では本州と四国の山地に生育するが、森林伐採などにより、生育地が減少している。

基礎情報

【形態】

植物体は斜上し、褐色を帯びた緑色、長さ 3～7 cm、幅は葉細胞を含めて 3～4 mm。葉は瓦状に緩く重なるか接在、大きな腹片と小さな背片となり、キールはない、縁は鋸歯状。背片は円形で、基部に毛を持つ。腹片は楕円形、背片の約 2 倍長。細胞の表面に著しいベルカがある。雌雄異株、無性芽は 2 細胞性。無性芽は 2～3 細胞性楕円体。タニガワヒシャクゴケ (*Scapania ciliatospinosa* Horik.) が似ているが、キールがあり葉縁の鋸歯が単細胞になることで本種と区別できる。

【生活史】

雌雄異株。胞子は夏に成熟する。無性芽は非常にまれ。

【生育環境】

落葉広葉樹や亜高山性針葉樹の自然林において岩上や林床に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州の関東（埼玉県、東京都）、中部（新潟県、山梨県、長野県）、近畿（三重県、奈良県、和歌山県）と四国（徳島県、愛媛県、高知県）に知られている。国外では欧州や北アメリカ、ヒマラヤ、中国、フィリピン、ボルネオ、台湾、ハワイなどに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

分布域に大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

秩父山地や紀伊半島では既知の生育地の乾燥化が確認される。森林伐採による森林の荒廃などが確認される地域もある。

【個体数の現況】

東京都（奥多摩）や埼玉県（秩父山地）、長野県（南アルプス）、三重県・奈良県（大台ヶ原）などで減少している。各生育地において数 100 個体。

存続を脅かす要因

森林伐採や乾燥化などによる環境の変化により減少している。

要因の区分：	(過去)	森林伐採、分布・産地局限、気候変動
	(現在)	河川開発、分布・産地局限

特記事項

欧州やヒマラヤ、ハワイなどに不連続に隔離分布することで知られる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ムカシヒシャクゴケ	<i>Scapania ornithopoides</i> (With.) Waddell	VU
第4次 2019:	ムカシヒシャクゴケ	<i>Scapania ornithopodioides</i> (With.) Waddell	VU
第4次 2018:	ムカシヒシャクゴケ	<i>Scapania ornithopodioides</i> (With.) Waddell	VU
第4次 2017:	ムカシヒシャクゴケ	<i>Scapania ornithopodioides</i> (With.) Waddell	VU
第4次 2015:	ムカシヒシャクゴケ	<i>Scapania ornithopodioides</i> (With.) Waddell	VU
第4次:	ムカシヒシャクゴケ	<i>Scapania ornithopodioides</i> (With.) Waddell	VU
第3次:	ムカシヒシャクゴケ	<i>Scapania ornithopodioides</i> (With.) Waddell	VU
第2次:	ムカシヒシャクゴケ	<i>Scapania ornithopodioides</i> (With.) Waddell	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 奈良県[絶滅寸前種] 和歌山県[情報不足（DD）] 愛媛県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Amakawa, T. & S. Hattori, 1954. A revision of the Japanese species of Scapaniaceae, II. J. Hattori Bot. Lab., 12: 91-112.
- 井上 浩, 1958. 甲斐駒ヶ岳産の苔類 2 種. 蘚苔地衣雑報, 1: 2-3.
- 岩月善之助・水谷正美, 1972. 原色日本蘚苔類図鑑. 405 pp., 48 pls. 保育社, 大阪.
- 片桐知之・出口博則, 2009. ムカシヒシャクゴケ (*Scapania ornithopodioides*) の雄花序. 蘚苔類研究, 9: 365-366.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Scapania ornithopoides has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Scapania ornithopoides* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of

a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ツボミゴケ目 Jungermanniales チチブイチョウゴケ科 Acrobolbaceae

ケハネゴケモドキ

Acrobolbus knightii (Mitt.) Briscoe

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
奄美大島湯湾岳、屋久島の白谷雲水峡、前岳、本富岳の 4 か所に生育し、それぞれの地点において標高が高い一部の範囲内にのみ生育している。このことから、生育地面積および生育地点が極めて限定していると判断した。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

本種は茎が斜上し、鋸歯で縁取られた丸い葉を特徴とする茎葉状苔類。本属としては国内に知られる唯一の種。おもに熱帯の雲霧林に分布し、国内では鹿児島県にのみ生育し、湿った常緑樹林の樹幹に着生するが、個体数が少なく、乾燥化や森林の荒廃によって生育が脅かされている。

基礎情報

【形態】

植物体は樹木の幹から斜上し、鮮緑色、茎葉状、長さ 1～2 cm、幅は葉を含めて 1.5～2.5 mm。葉は瓦状に斜めに開出、卵形、縁は鋸歯状。腹葉はない。無性芽はない。葉の形態により、他の葉茎状苔類から区別できる。

【生活史】

国内では造精器や造卵器、胞子体は見つかっていない。

【生育環境】

霧のかかりやすい湿った常緑広葉樹の自然林において樹幹に着生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では九州（鹿児島県半島部、屋久島）、琉球列島（奄美群島）に分布し、国外では中国、台湾、ニューギニア、オーストラリア、ニューカレドニア、ニュージーランドなどに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

奄美大島湯湾岳、屋久島の白谷雲水狭、前岳、本富岳の 4 か所で生育が確認される。大隅半島においては近年確認されていない。

【生育地の現況】

湿った森林の樹幹に生育しているが、近年、森林が乾燥化している。

【個体数の現況】

約 1,000 個体と推定する。

存続を脅かす要因

森林伐採が生育地の近くにまで及んでおり、乾燥化などの環境の悪化が懸念される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 気候変動
	(現在)	森林伐採

特記事項

チチブイチョウゴケ科は主に南半球に知られている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ケハネゴケモドキ	<i>Marsupidium knightii</i> Mitt.	VU
第4次 2019:	ケハネゴケモドキ	<i>Marsupidium knightii</i> Mitt.	VU
第4次 2018:	ケハネゴケモドキ	<i>Marsupidium knightii</i> Mitt.	VU
第4次 2017:	ケハネゴケモドキ	<i>Marsupidium knightii</i> Mitt.	VU
第4次 2015:	ケハネゴケモドキ	<i>Marsupidium knightii</i> Mitt.	VU
第4次:	ケハネゴケモドキ	<i>Marsupidium knightii</i> Mitt.	VU
第3次:	ケハネゴケモドキ	<i>Marsupidium knightii</i> Mitt.	VU
第2次:	ケハネゴケモドキ	<i>Marsupidium knightii</i> Mitt. Syn. <i>Adelanthus piliferus</i> Horik.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 堀川芳雄, 1939. 苔蘚類. 朝比奈泰彦 (監), 日本隠花植物図鑑. pp. 783-992. 三省堂, 東京.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Acrobolbus knightii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Acrobolbus knightii* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Climate change

Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ツボミゴケ目 Jungermanniales ツキヌキゴケ科 Calypogeiaceae

サイシュウホラゴケモドキ

Eocalypogeia quelpaertensis (S.Hatt. & Inoue) R.M.Schust.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】 10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
30 年以上前は登山道沿いになどで普通に見られたが、2020 年代は調査しても見つけることが困難な場所もあり、減少傾向にあると考えられる。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

本種はツキヌキゴケ科の他種とは葉縁に鋸歯を持つことで区別される茎葉状苔類。東アジアに固有に分布し、国内では西南日本の数か所から知られているが、全ての産地において減少傾向があり、絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

植物体は、匍匐し、褐色、茎葉状、長さ 5～8 mm、幅は葉を含めて 1.2～1.5 mm。葉は倒瓦状に緩く重なり、三角形状、先端は鈍頭、背縁に鋸歯がある。腹葉は先端から 1/2 まで 2 裂し、しばしば側縁に弱い棘が出る。油体は楕円形で 1 細胞に数個、微粒よりなる。雌花は茎に頂生し、外肉囊花となる。雄花は茎の途中につく。無性芽はない。近縁種とされる北極圏に分布する *Eocalypogeia schusterana* (S.Hatt.& Mizut.) R.M.Schust. は葉が全縁である。

【生活史】

雌雄異株。国内では成熟した孢子体は見つかっていないため、孢子が成熟する季節は不明である。

【生育環境】

溪谷の常緑広葉樹の自然林において、湿った岩上や倒木上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州（関西以西）、九州（南部、屋久島）に分布し、国外では中国、台湾、韓国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

紀伊半島（三重県、和歌山県）や山口県、鹿児島県（南部の半島部、屋久島）において確認されている。

【生育地の現況】

多くの産地において環境が悪化し、生育数が減少している。

【個体数の現況】

三重県と屋久島以外の生育地では減少傾向が著しいが、その他の地点の詳細は不明。

存続を脅かす要因

森林伐採などの開発や何らかの要因による環境の変化により影響を受けている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採、分布・産地局限
	（現在）	分布・産地局限

特記事項

雌花、雄花が主軸につくことや葉の背縁に鋸歯があることなどから科の中では祖先形質を保持している種と考えられており、系統学的に重要な種である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	サイシュウホラゴケモドキ	<i>Eocalypogeia quelpaertensis</i> (S.Hatt. & Inoue) R.M.Schust.	VU
第4次 2019:	サイシュウホラゴケモドキ	<i>Eocalypogeia quelpaertensis</i> (S.Hatt. & Inoue) R.M.Schust.	VU
第4次 2018:	サイシュウホラゴケモドキ	<i>Eocalypogeia quelpaertensis</i> (S.Hatt. & Inoue) R.M.Schust.	VU
第4次 2017:	サイシュウホラゴケモドキ	<i>Eocalypogeia quelpaertensis</i> (S.Hatt. & Inoue) R.M.Schust.	VU
第4次 2015:	サイシュウホラゴケモドキ	<i>Eocalypogeia quelpaertensis</i> (S.Hatt. & Inoue) R.M.Schust. [= <i>Metacalypogeia quelpaertensis</i> S.Hatt. & Inoue]	VU
第4次:	サイシュウホラゴケモドキ	<i>Eocalypogeia quelpaertensis</i> (S.Hatt. & Inoue) R.M.Schust. [= <i>Metacalypogeia quelpaertensis</i> S.Hatt. & Inoue]	VU
第3次:	サイシュウホラゴケモドキ	<i>Eocalypogeia quelpaertensis</i> (S.Hatt. & Inoue) R.M.Schust. (= <i>Metacalypogeia quelpaertensis</i> S.Hatt. & Inoue)	VU
第2次:	サイシュウホラゴケモドキ	<i>Eocalypogeia quelpaertensis</i> (Hatt. et Inoue) Schust. Syn. <i>Metacalypogeia quelpaertensis</i> Hatt. et Inoue	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

三重県[絶滅危惧 IA 類(CR)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・水谷正美, 1972. 原色日本蘚苔類図鑑, 405pp., 48 pls. 保育社, 大阪.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- Schuster, R. M., 1996. Studies on the distribution of critical arctic/subarctic Hepaticae with special reference to taxa found in Russia, *Lindbergia*, 21: 26-48.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Eocalypogeia quelpaertensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Eocalypogeia quelpaertensis* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
 Author: Tatsuwo Furuki

公表年月: 2025 年 3 月

カネマルムチゴケ

Bazzania ovistipula (Steph.) Abeyw.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】 10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
近年生育が確認されてない地域がある。また、生育数が少なく、森林伐採などにより湿度が失われ、生育が脅かされている。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

小型なムチゴケ属として知られる茎葉性苔類。西南日本の湿った常緑樹林域に生育しているが、生育数が少なく、森林伐採などにより湿度が失われ、生育が脅かされている。

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、褐色を帯びた緑色、茎葉状、長さ約 3 cm、幅は葉を含めて 2 mm。葉は倒瓦状に重なり、長卵形、先端に 3 歯がある。腹葉は円形、先端はわずかに凹状。無性芽はない。近縁種のヤマトムチゴケ *Bazzania japonica* は葉と腹葉が基部で癒合することで本種と区別される。

【生活史】

国内では造精子や造卵器、孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

常緑広葉樹の自然林において湿った花崗岩上や腐植土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では紀伊半島、九州南部、鹿児島県屋久島に分布し北限になっている。国外ではヒマラヤ、インド、スリランカ、中国などに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

宮崎県の産地では 70 年以上生育が確認されておらず再調査が必要。

【生育地の現況】

一部の地域では森林伐採などにより本種の生育に必要な空中湿度が失われている。

【個体数の現況】

紀伊半島（三重県、奈良県）、九州（宮崎県、熊本県、屋久島）のいずれの産地においても個体数が少ない。屋久島では比較的良好。

存続を脅かす要因

森林伐採などの開発による環境の変化により生育量が減少している。

要因の区分：	(過去)	森林伐採
	(現在)	森林伐採

特記事項

国定公園または国立公園内にある産地もある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	カネマルムチゴケ	<i>Bazzania ovistipula</i> (Steph.) Abeyw.	VU
第4次 2019:	カネマルムチゴケ	<i>Bazzania ovistipula</i> (Steph.) Abeyw.	VU
第4次 2018:	カネマルムチゴケ	<i>Bazzania ovistipula</i> (Steph.) Abeyw.	VU
第4次 2017:	カネマルムチゴケ	<i>Bazzania ovistipula</i> (Steph.) Abeyw.	VU
第4次 2015:	カネマルムチゴケ	<i>Bazzania ovistipula</i> (Steph.) Abeyw.	VU
第4次:	カネマルムチゴケ	<i>Bazzania ovistipula</i> (Steph.) Abeyw.	VU
第3次:	カネマルムチゴケ	<i>Bazzania ovistipula</i> (Steph.) Abeyw.	VU
第2次:	カネマルムチゴケ	<i>Bazzania ovistipula</i> (Steph.) Abeyw. Syn. <i>B. kanemarui</i> Hatt.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

三重県[絶滅危惧 IA 類(CR)] 奈良県[絶滅危惧種,注目種] 宮崎県[情報不足(DD-1)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hattori, S. and M. Mizutani, 1958. A revision of the Japanese species of the family Lepidoziaceae. J. Hattori Bot. Lab., 19: 76-118.
- 山田耕作・小笠原昇一, 1971. 御在所岳の *Bazzania ovistipula* (苔類). 三重生物, 21: 7-8.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Bazzania ovistipula has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Bazzania ovistipula* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy
 - area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

ツボミゴケ目 Jungermanniales ムチゴケ科 Lepidoziaceae

イリオモテスギバゴケ(テララゴケ)

Tricholepidozia neesii (Lindenb.) E.D.Cooper

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 沖縄県西表島の数か所に生育しており比較的安定した生育地もみられるが、生育地の多くは溪流沿いで大雨が降ると水流に浸かってしまうような不安定な環境であるため台風などによる増水や土砂の流入などにより、一度に複数の個体群が消滅もしくは減少する可能性も高い。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

葉が 4~6 裂し、裂片が長い糸状になる茎葉性苔類。国内では西表島に分布し、溪谷の湿った岩上や土上などに生育しているが、何らかの理由により、生育数が減少している。

協力者： 山口富美夫（広島大学）・古木達郎（元千葉県立中央博物館）

基礎情報

【形態】

植物体は黄緑色、茎葉性。茎は斜上し 2～3 回羽状に分枝し、長さ 1～2 cm、幅は葉を含めて約 1 mm。葉は基部近くまで 4～6 裂し、裂片は 1 細胞列の糸状。雄花は短枝につく。無性芽はない。国産の近縁種とは葉の裂片が長い糸状になる特徴によって区別される。

【生活史】

国内では雌花と孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

常緑広葉樹の自然林において、溪谷の明るい湿岩上や土上に生育している。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では沖縄県西表島のみ分布し、国外では東南アジア、中国などに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

産地数について大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

狭い溪谷の岩上では比較的大きな純群落を作っていることもあるが生育地の多くは溪流沿いで大雨が降ると水流に浸かってしまうような不安定な環境である。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限しており、生育範囲が著しく狭く、何らかの攪乱により、影響を受けている。

要因の区分：	(過去)	不明, 森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	不明, 森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

国立公園内にある生育地もある。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	テララゴケ	<i>Telaranea neesii</i> (Lindenb.) Fulford	CR+EN
第4次 2019:	テララゴケ	<i>Telaranea neesii</i> (Lindenb.) Fulford	CR+EN
第4次 2018:	テララゴケ	<i>Telaranea neesii</i> (Lindenb.) Fulford	CR+EN
第4次 2017:	テララゴケ	<i>Telaranea neesii</i> (Lindenb.) Fulford	CR+EN
第4次 2015:	テララゴケ	<i>Telaranea neesii</i> (Lindenb.) Fulford [= <i>T. iriomotensis</i> T.Yamag. & Mizut.]	CR+EN
第4次:	テララゴケ	<i>Telaranea neesii</i> (Lindenb.) Fulford [= <i>T. iriomotensis</i> T.Yamag. & Mizut.]	CR+EN
第3次:	テララゴケ	<i>Telaranea iriomotensis</i> T.Yamag. & Mizut.	VU
第2次:	テララゴケ	<i>Telaranea iriomotensis</i> T. Yamag. et Mizut.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Cooper, E. D., L. Söderström, A. Hagborg and M. von Konrat, 2013. Notes on early land plants today. 38. New combinations and synonyms in Lepidoziaceae (Marchantiophyta). *Phytotaxa*, 97: 52-62.
- Deguchi, H. and T. Yamaguchi, 1997. Bryophytes of Asia fasc. 4. *Hikobia*, 12: 281-282.
- Engel, J. J. and G. L. S. Merrill, 2004. Austral Hepaticae. 35. A taxonomic and phylogenetic study of *Telaranea* (Lepidoziaceae), with a monograph of the genus in temperate Australasia and commentary on extra-Australasian taxa. *Fieldiana Bot.*, 44: 1-261.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp., 192 pls. 平凡社, 東京.
- Yamaguchi, T., 1983. *Telaranea iriomotensis* Yamaguchi et Mizutani (Hepaticae), a new species from Japan. *Misc. Bryol. Lichenol*, 9: 161-163.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tricholepidozia neesii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tricholepidozia neesii* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

ツボミゴケ目 Jungermanniales ムチゴケ科 Lepidoziaceae

ミジンコゴケ

Zoopsis liukuensis Horik.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
多くの産地において生育数が減少している。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

植物体が非常に小さく、茎が扁平で、葉が痕跡的なことからムチゴケ科の他種から容易に区別することができる。国内では九州～八重山諸島と小笠原諸島に点々と産地が知られている。最近生育が確認された産地もあるが、多くの産地において生育数が減少している。

協力者: 山口富美夫 (広島大学)・佐藤匠 (広島大学)・西畑和輝 (広島大学)・桐生賢太 (広島大学)・Seo Jae Heum (広島大学)

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、淡緑色で、非常に小さく、茎は長さ約 5 mm で、幅は 0.2～0.4 mm にしかならず、背腹に扁平で不規則に分枝する。葉は離在し、痕跡的で、4～6 細胞から成り、基部まで 2 裂する。腹葉も痕跡的で 2 裂する。雌花は短い腹枝につき、花被は紡錘形で弱く 3 褶し、口部は長毛で縁取られ、苞葉と腹苞葉は深く 2 裂する。植物体が非常に小さく、茎が扁平で、葉が小さく痕跡的なことによって、この科の他の種からは容易に区別することができる。

【生活史】

雌雄異株。産地も少なく、生活史などを明らかにするための調査は十分になされていない。

【生育環境】

常緑樹林帯の溪谷中の湿った岩上や樹幹上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では、九州（鹿児島県、屋久島）、奄美諸島、沖縄諸島、八重山諸島、小笠原諸島に点々と産地が知られている。国外では、台湾、ヒマラヤ、マレーシア、インドネシア、ニューギニアに分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

産地数について大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

多くの産地において環境が悪化している。

【個体数の現況】

多くの産地において生育数が減少している。

存続を脅かす要因

常緑広葉樹林の溪谷中の湿った場所に生育するので、森林の伐採などによる森林の乾燥化によって消滅するおそれがある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採
	(現在)	森林伐採

特記事項

生育地の多くは国立公園または国定公園内にある。沖縄産の新種として記載され、その後、東南アジアや南太平洋地域に広く分布することが明らかにされた。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ミジンコゴケ	<i>Zoopsis liukuensis</i> Horik.	VU
第4次 2019:	ミジンコゴケ	<i>Zoopsis liukuensis</i> Horik.	VU
第4次 2018:	ミジンコゴケ	<i>Zoopsis liukuensis</i> Horik.	VU
第4次 2017:	ミジンコゴケ	<i>Zoopsis liukuensis</i> Horik.	VU
第4次 2015:	ミジンコゴケ	<i>Zoopsis liukuensis</i> Horik.	VU
第4次:	ミジンコゴケ	<i>Zoopsis liukuensis</i> Horik.	VU
第3次:	ミジンコゴケ	<i>Zoopsis liukuensis</i> Horik.	VU
第2次:	ミジンコゴケ	<i>Zoopsis liukuensis</i> Horik.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 古木達郎・樋口正信・松井 透, 1991. 小笠原諸島の蘚苔植物. 第2次小笠原諸島自然環境現況調査報告書 1990-1991. pp. 13-23.
- 井上 浩, 1976. 続・日本産苔類図鑑. 築地書館, 東京. 193pp.
- 岩田和鷹, 2018. 屋久島（鹿児島県）における蘚苔類の垂直分布. *Naturalistae*, 22: 73-84.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Yokoyama, H., T. Yamaguchi, N. Nishimura, T. Furuki and H. Akiyama, 2007. Checklist of bryophytes known from Yakushima Island, southern Kyushu, Japan. *Bryol. Res.*, 9: 159-197.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Zoopsis liukuensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Zoopsis*

liukuensis is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

アマノウロコゴケ

Heteroscyphus aselliformis (Reinw., Blume & Nees) Schiffn.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) B2ab				
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 既知の産地である島のいずれにおいても生育範囲が狭くなり、生育量も少ない。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

東アジア～オセアニアに分布し、屋久島を分布の北限とする茎葉性苔類。葉は背面側に偏向し、葉先は2裂して先端が長毛状になることを特徴とする。ウロコゴケ科としては国内では珍しい樹幹着生種であり、生育地の乾燥化や森林伐採などにより生育量が減っている。

基礎情報

【形態】

東アジア～オセアニアに分布し、屋久島を分布の北限とする茎葉性苔類。葉が背面側に偏向し、葉先は2裂して先端が長毛状になることを特徴とする。ウロコゴケ科としては国内では珍しい樹幹着生種である。

【生活史】

雌雄異株。胞子は、早春に成熟する。

【生育環境】

常緑広葉樹の自然林において、霧がかかり易い山頂や尾根付近の樹幹に着生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では九州（屋久島）、琉球列島に分布し、国外では中国、東南アジア、ニューギニア、オセアニアなどに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

産地数について大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

既知の産地である島のいずれにおいても生育範囲が狭くなり、生育量も少ない。森林伐採により、減少が著しい。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

産地では森林伐採により乾燥化などの影響を受けている。

要因の区分：	(過去)	森林伐採
	(現在)	森林伐採

特記事項

国定公園内または国立公園内にある生育地もある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	アマノウロコゴケ	<i>Heteroscyphus aselliformis</i> (Reinw., Blume & Nees) Schiffn.	VU
第4次 2019:	アマノウロコゴケ	<i>Heteroscyphus aselliformis</i> (Reinw., Blume & Nees) Schiffn.	VU
第4次 2018:	アマノウロコゴケ	<i>Heteroscyphus aselliformis</i> (Reinw., Blume & Nees) Schiffn.	VU
第4次 2017:	アマノウロコゴケ	<i>Heteroscyphus aselliformis</i> (Reinw., Blume & Nees) Schiffn.	VU
第4次 2015:	アマノウロコゴケ	<i>Heteroscyphus aselliformis</i> (Reinw., Blume & Nees) Schiffn. [= <i>Chiloscyphus aselliformis</i> (Reinw., Blume & Nees) Nees]	VU
第4次:	アマノウロコゴケ	<i>Heteroscyphus aselliformis</i> (Reinw., Blume & Nees) Schiffn. [= <i>Chiloscyphus aselliformis</i> (Reinw., Blume & Nees) Nees]	VU
第3次:	アマノウロコゴケ	<i>Heteroscyphus aselliformis</i> (Reinw., Blume & Nees) Schiffn. (= <i>Chiloscyphus aselliformis</i> (Reinw., Blume & Nees) Nees)	VU
第2次:	アマノウロコゴケ	<i>Heteroscyphus aselliformis</i> (Reinw. et al.) Schiffn. Syn. <i>Chiloscyphus aselliformis</i> (Reinw. et al.) Nees; <i>Heteroscyphus javanicus</i> (Steph.) Schiffn.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 秋山弘之・山口富美夫, 2018. 日本の貴重なコケの森「湯湾岳山頂部一帯ならびに井之川岳（大原ルート）」. 蘚苔類研究, 11: 317-319.
- 井上 浩, 1976. 続・日本産苔類図鑑. 193 pp. 築地書館, 東京.

- Kitagawa, N., 1960. Notes on the Hepatic flora of the island of Yakushima I. Acta Phytotax. Geobot., 18: 187-192.
- Kuwahara, Y., and S. Hattori, 1953. *Chiloscyphus javanicus* in Liukiu. J. Hattori Bot. Lab., 9: 63-64.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Heteroscyphus aselliformis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Heteroscyphus aselliformis* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: 片桐知之 (高知大学)
Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月: 2025 年 3 月

オオサワラゴケ

Mastigophora diclados (Brid. ex F.Weber) Nees

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
多くの産地において生育数が減少している。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

葉が3～4裂する大型の茎葉性苔類。東南アジアから太平洋諸島にかけての雲霧林に分布し、日本でも湿った林に生育していたが、本州、四国、九州では生育を確認できない産地もあり、生育数が激減している。道路建設などの影響により減少している産地がある。

基礎情報

【形態】

植物体は斜上し、黄褐色で茎葉性、長さ 3～7 cm、幅は葉を含めて 0.5～1.0 mm。茎は 1～2 回羽状に分枝する。葉は先端から約 1/3 まで 3～4 裂し、掌状。腹葉は先端から 1/2 まで 2 裂する。無性芽はない。雌花は茎に頂生し、雌苞葉は 2 裂し、長毛を縁につけ、円筒形の花被を包む。雄花は茎の途中につく。本属の種としては日本に産する唯一の種である。

【生活史】

雌雄異株。国内では成熟した胞子体は見つかっていないため、胞子が成熟する季節は不明である。

【生育環境】

湿った常緑広葉樹の自然林において、樹幹に着生するか林床に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では、和歌山県、高知県、宮崎県、鹿児島県（大隅半島）、屋久島、奄美大島、火山列島に分布する。国外では中国、マレーシア、インドネシア、ニューギニア、太平洋諸島、アフリカなどに分布し、日本は北限となっている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

宮崎県の産地では 70 年以上確認されていない。高知県の産地の 1 つは道路工事により生育が確認できなくなった。

【生育地の現況】

森林伐採や道路建設などの開発の影響がみられる。

【個体数の現況】

近年、屋久島と奄美大島、火山列島以外の生育地においては減少が著しく、生育数が非常に少ない。

存続を脅かす要因

本州や四国、九州では森林伐採や道路建設などの開発の影響により、生育数が激減しており、消失した産地もある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 交通インフラ建設
	(現在)	森林伐採, 交通インフラ建設

特記事項

国立公園内にある産地もある。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	オオサワラゴケ	<i>Mastigophora diclados</i> (F.Weber) Nees	VU
第4次 2019:	オオサワラゴケ	<i>Mastigophora diclados</i> (F.Weber) Nees	VU
第4次 2018:	オオサワラゴケ	<i>Mastigophora diclados</i> (F.Weber) Nees	VU
第4次 2017:	オオサワラゴケ	<i>Mastigophora diclados</i> (F.Weber) Nees	VU
第4次 2015:	オオサワラゴケ	<i>Mastigophora diclados</i> (Brid.) Nees	VU
第4次:	オオサワラゴケ	<i>Mastigophora diclados</i> (Brid.) Nees	VU
第3次:	オオサワラゴケ	<i>Mastigophora diclados</i> (Brid.) Nees	VU
第2次:	オオサワラゴケ	<i>Mastigophora diclados</i> (Brid.) Nees	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

和歌山県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 宮崎県[情報不足(DD-1)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 尼川大録, 1954. 日本産苔類報告(1). 植物研究雑誌, 29: 177-180.
- Hattori, S., 1942. Notulae de hepaticis Japonicis (III). 植物研究雑誌, 18: 469-477.
- Horikawa, Y., 1934. Monographia hepaticarum Australi-Japonicarum. Journal of science of the Hiroshima University Series B, Division 2 (Botany), 2: 101-325.
- Horikawa, Y., 1951. Symbolae florae bryophytae Orientali-Asiae et Micronesiae XII. Hikobia, 1: 78-100.
- 井上 浩, 1962. 日本産苔類ノート(3). 植物研究雑誌, 37: 101-105.
- 井上 浩, 1974. 日本産苔類図鑑. 189 pp. 築地書館, 東京.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp., 192 pls. 平凡社, 東京.
- Kodama, T., 1970. Hepaticae and Anthocerotae of the Kinki district, central Japan. Journal of the Hattori Botanical Laboratory., 33: 88-114.
- 児玉 務, 1972. 大塔国有林でみつかったオオサワラゴケについて. 大塔山系の自然, 3: 33.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Mastigophora diclados has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Mastigophora diclados* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction
Law designation status for conservation	—

執筆者: 片桐知之 (高知大学)
Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月: 2025 年 3 月

キヤスデゴケ

Frullania gaudichaudii (Nees & Mont.) Nees & Mont.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) B2ab				
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 開発や森林の荒廃により生育地が減っている。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本属の他種からは、腹片が非常に小さく、背片の約 1/10 で、植物体が長さ 10 cm 以上と大きく、樹幹から懸垂することから容易に識別できる。和名は本属としては黄色みが強いことにちなむ。奄美大島以南の琉球列島の湿った谷において、樹幹から懸垂する。森林伐採などの開発により、空中湿度が失われると、影響を受け易いため、減少している。

協力者: 山口富美夫 (広島大学)・佐藤匠 (広島大学)・西畑和輝 (広島大学)・桐生賢太 (広島大学)

基礎情報

【形態】

植物体は、茎葉性、黄褐色、樹幹や枝から懸垂し、大型で長さ 10 cm 以上になり、幅 2 ～3 mm。葉は倒瓦状に重なり、不等に 2 裂し、卵形の背片と円筒形の腹片になる。腹葉は茎径の約 4 倍幅、1/4 まで 2 裂し、側縁に鋸歯がある。無性芽はない。花被は卵形で稜が低い。腹片が非常に小さく、背片の約 1/10 で、懸垂することから識別は容易である。

【生活史】

雌雄異株。国内では成熟した胞子体は見つかっていないため、胞子が成熟する季節は不明である。

【生育環境】

湿度の高い溪谷に発達する湿性常緑広葉樹の自然林において、樹幹や枝から懸垂する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では奄美大島以南の琉球列島に分布し、国外では世界の熱帯に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

産地数に大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

沖縄県八重山諸島では良好な産地もあるが、沖縄島や奄美大島では、開発や森林伐採などの影響により、本種の生育に必要な空中湿度が低下している。

【個体数の現況】

生育量が減少している。

存続を脅かす要因

開発や森林伐採の影響により森林が乾燥化するなどの影響を受けている。

要因の区分：	(過去)	森林伐採
	(現在)	森林伐採

特記事項

ヤスデゴケ属としては大型で、樹幹から懸垂するまれな種である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	キヤスデゴケ	<i>Frullania gaudichaudii</i> (Nees & Mont.) Nees & Mont.	VU
第4次 2019:	キヤスデゴケ	<i>Frullania gaudichaudii</i> (Nees & Mont.) Nees & Mont.	VU
第4次 2018:	キヤスデゴケ	<i>Frullania gaudichaudii</i> (Nees & Mont.) Nees & Mont.	VU
第4次 2017:	キヤスデゴケ	<i>Frullania gaudichaudii</i> (Nees & Mont.) Nees & Mont.	VU
第4次 2015:	キヤスデゴケ	<i>Frullania gaudichaudii</i> (Nees & Mont.) Nees & Mont.	VU
第4次:	キヤスデゴケ	<i>Frullania gaudichaudii</i> (Nees & Mont.) Nees & Mont.	VU
第3次:	キヤスデゴケ	<i>Frullania gaudichaudii</i> (Nees & Mont.) Nees & Mont.	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 文献なし

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Frullania gaudichaudii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Frullania gaudichaudii* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

サカワヤスデゴケ

Frullania sackawana Steph.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 最近の調査では、分布の北限になる埼玉県では確認できず、四国や近畿地方でも産地が少なく、地域によっては、生育地周辺の開発による環境の変化によって消滅するおそれがある。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

ヤスデゴケ属の中では、大型で葉の腹片が棍棒状になり、背片下縁から下垂するという特徴を有する Homotropantha 亜属に分類される。この亜属の種は日本には 2 種が分布しており、他の 1 種カミムラヤスデゴケ *Frullania brotheri* は葉の背片基部と腹葉基部が耳状に膨れることによって本種と区別することができる。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性で赤褐色～黄褐色、比較的大形で、長さは5 cmに達し、やや規則的に短く羽状に分枝する。葉は密に重なり、卵形で1.3～1.5 mmの長さがあり、円頭、背片の背側基部は耳状に膨れず、腹片は棍棒状で背片下縁より下垂する。腹葉は重なり、ほぼ円形で1/4まで2裂し、基部は耳状に膨れない。雄花序及び成熟した花被の形態は未知。近縁種のカミムラヤステゴケ *Frullania brotheri* は葉の背片基部と腹葉基部が耳状に膨れることによって本種と区別することができる。

【生活史】

雌雄異株。雄花序と孢子体が見つかっておらず、繁殖様式は不明。

【生育環境】

常緑広葉樹林帯の自然林や二次林内の岩上や樹幹に着生している。石灰岩に着生していることもある。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

国内では、本州（埼玉県、三重県、愛知県、和歌山県）、四国（高知県）、九州（熊本県）で産地が知られている。国外では中国、ラオス、タイに分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

最近の調査では分布の北限になる埼玉県では確認できない。愛知県からも過去に報告があるが生育が再確認できておらず絶滅したとされる。

【生育地の現況】

四国や近畿地方では産地が少なく、地域によっては、生育地周辺の開発による環境の変化によって消滅するおそれがあるが、良好な産地もある。

【個体数の現況】

生育数が減少している。

存続を脅かす要因

生育が良好な産地もあるが、産地が少なく、最近、確認できない産地もあり、生育地が減少していくおそれがある。その原因については、調査が不十分なため不明。

要因の区分：	(過去)	不明
	(現在)	不明

特記事項

1897年に高知県産の新種として記載され、その後、国内に埼玉県を北限として数か所の産地が発見されたが、産地の数は少ない。当初は日本固有の種と考えられていたが、その後、タイやラオスにも分布していることが確認された。タイプ産地である高知県佐川町でも近年生育が再確認されていない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	サカワヤスデゴケ	<i>Frullania sackawana</i> Steph.	VU
第4次 2019:	サカワヤスデゴケ	<i>Frullania sackawana</i> Steph.	VU
第4次 2018:	サカワヤスデゴケ	<i>Frullania sackawana</i> Steph.	VU
第4次 2017:	サカワヤスデゴケ	<i>Frullania sackawana</i> Steph.	VU
第4次 2015:	サカワヤスデゴケ	<i>Frullania sackawana</i> Steph.	VU
第4次:	サカワヤスデゴケ	<i>Frullania sackawana</i> Steph.	VU
第3次:	サカワヤスデゴケ	<i>Frullania sackawana</i> Steph.	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[情報不足（DD）] 三重県[準絶滅危惧（NT）] 和歌山県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp., 192 pls. 平凡社, 東京.
- Kamimura, M., 1961. Monograph of Japanese Frullaniaceae. J. Hattori Bot. Lab., 24: 1-109.
- Kodama, T., 1970. Hepaticae and Anthocerotae of Kinki district, central Japan. J. Hattori Bot. Lab., 33: 88-114.
- 松井 透, 2018. サカワヤスデゴケ. 佐川町文化財保護審議会（編）, 佐川町の文化財. p. 14. 佐川町教育委員会, 佐川町.
- 山田耕作, 2020. コケ植物（タイ類）. 愛知県環境調査センター（編）, 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2020—植物編—. pp. 759-774. 愛知県環境局環境政策部自然環境課, 名古屋市.

- 湯澤陽一, 2000. 日本のヤスデゴケ属 (ヤスデゴケ科, 苔類) I. 自然環境科学研究, 13: 1-24.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Frullania sackawana has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.
Frullania sackawana is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—

執筆者: 片桐知之 (高知大学)
 Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月: 2025 年 3 月

サガリヤスデゴケ

Frullania trichodes Mitt.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) B2ab

基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

B2. 生育地面積が 2000 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。

【地点数】10 地点以下

b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

宮崎県の産地では長期間にわたり生育が確認されているが、生育範囲は狭く生育量も少ない。また生育地周辺が森林公園化し、遊歩道に沿った樹木の伐採や枝打ちなどが頻繁に行われるようになったため生育量が減少している。その他の産地においても生育数が少なく、森林伐採などにより生育地の環境が変化し絶滅することが予測される。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ヤスデゴケ属の中では大型で樹木の幹や枝に着生し、細長く垂れ下がるという他の種には見られない顕著な特徴を有する。日本では四国（高知県）、九州（宮崎県）、西表島（沖縄県）にのみ分布が知られており、アジアの亜熱帯や熱帯地域には広く分布する。いずれの産地において生育数が少なく、森林伐採などにより生育地の環境が変化し絶滅するおそれがある。

協力者： 山口富美夫（広島大学）・佐藤匠（広島大学）・西畑和輝（広島大学）・桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性で黄緑色～赤褐色、樹幹や枝から垂れ下がり、細長く、長さは8 cmに達する。茎はまばらに短く羽状に分枝する。葉の背片は広卵形で、円頭～鋭頭、やや内側に窪み、葉基部に5～10個の眼点細胞の集まりがある。葉の腹片は棍棒状で、茎から外側へ広く開出する。腹葉は長卵形で、1/3まで2裂する。雌苞葉と腹苞葉の縁には密に荒い鋸歯を有する。細長く樹幹や枝から垂れ下がることによって、他の種から区別することができる。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっておらず、繁殖の仕方は不明。

【生育環境】

常緑広葉樹林帯の溪谷中の空中湿度の高い場所の樹幹や枝から垂れ下がりて生育している。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域 【陸域_海岸部】塩沼地・塩性湿地・河口干潟
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

国内では四国（高知県）、九州（宮崎県）、西表島（沖縄県）に分布が知られており、国外では、台湾、中国、フィリピン、セレベス、ビルマ、ニューギニア、ソロモン諸島、フィジーなど、熱帯アジア、太平洋地域に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

宮崎県の産地では長期間にわたり生育が確認されている。西表島では数か所のマングローブ林内で生育が確認されている。高知県では長年にわたり生育が確認されておらず再調査の必要がある。

【生育地の現況】

宮崎県では生育地が森林公園化し、樹木の伐採や枝打ちによる影響を受けている。

【個体数の現況】

全ての産地において生育数が著しく少ない。

存続を脅かす要因

溪谷中の空中湿度の高い林の樹幹や枝から垂れ下がりて生育しているので、森林伐採により生育地の環境が変化することによって消滅するおそれがある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限

	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

宮崎県の産地では生育地が森林公園化し遊歩道に沿った林の樹木の伐採や枝打ちなどが頻繁に行われるようになり生育量が減少している。本種が着生している枝や周辺の樹木を切り落とさないようにするなどの配慮が望まれる。高知県では長年にわたり生育が確認されておらず再調査の必要がある。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	サガリヤスデゴケ	<i>Frullania trichodes</i> Mitt.	CR+EN
第4次 2019:	サガリヤスデゴケ	<i>Frullania trichodes</i> Mitt.	CR+EN
第4次 2018:	サガリヤスデゴケ	<i>Frullania trichodes</i> Mitt.	CR+EN
第4次 2017:	サガリヤスデゴケ	<i>Frullania trichodes</i> Mitt.	CR+EN
第4次 2015:	サガリヤスデゴケ	<i>Frullania trichodes</i> Mitt.	CR+EN
第4次:	サガリヤスデゴケ	<i>Frullania trichodes</i> Mitt.	CR+EN
第3次:	サガリヤスデゴケ	<i>Frullania trichodes</i> Mitt.	CR+EN
第2次:	サガリヤスデゴケ	<i>Frullania trichodes</i> Mitt. Syn. <i>F. tenuicaulis</i> Mitt.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧ⅠA類(CR-r)] 沖縄県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp., 192 pls. 平凡社, 東京.
- Kamimura, M., 1961. Monograph of Japanese Frullaniaceae. J. Hattori Bot. Lab., 24: 1-109.
- 沖縄県, 2018. 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版（菌類編・植物編）— レッドデータおきなわ —. 沖縄県. 708 pp.
- 湯澤陽一, 2000. 日本のヤスデゴケ属（ヤスデゴケ科, 苔類）Ⅰ. 自然環境科学研究, 13: 1-24.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Frullania trichodes has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Frullania trichodes* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Beach】 Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



©片桐知之



©片桐知之

執筆者: 片桐知之 (高知大学)
Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月: 2025 年 3 月

ハットリヤスデゴケ

Neohattoria herzogii (S.Hatt.) Kamim.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) B2ab				
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 2000 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 早池峰山（岩手県）では登山道の整備にともない激減した。中央アルプス（長野県）と秩父山地（埼玉県）では近年確認されていない。八ヶ岳（長野県）では減少している。南アルプス（長野県）では非常に狭い範囲にわずかに生育する。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ヒメウルシゴケ科とヤスデゴケ科の中間的な形態をもつ特異な茎葉性苔類であるが、分子系統学的研究によりヒメウルシゴケ科に所属することが明らかにされた。数少ない東アジアに固有な属で日本では北海道と本州、国外ではロシアに分布する。亜高山帯の針葉樹林などの樹幹に着生しているが、生育範囲が狭く、生育数が少ない。登山道整備の影響を受け易い。

協力者： 横山正弘（日本蘚苔類学会）・古木達郎（元千葉県立中央博物館）・木口博史（岡山コケの会）・内田暁友（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

植物体は褐色を帯びた緑色で茎葉性、長さ 2～4 mm、幅は葉を含めて 0.4～0.5 mm、葉は倒瓦状につき、背片と腹片からなる。背片は卵形、鋸歯で縁取られる。腹片は倒卵形で袋状となり背片の基部に茎と接するようにつく。腹葉は茎と同じ幅で 1/2 まで 2 裂し、裂片は披針形。無性芽はない。ヒメウルシゴケ科とヤスデゴケ科の中間的な形態をもつが、分子系統学的研究によりヒメウルシゴケ科に所属することが明らかにされた。

【生活史】

雌雄異株とされているが、雄花と孢子体は知られていないため、生活史は不明である。

【生育環境】

亜高山性針葉樹や針広混交の自然林において、湿った低温の風が当たるシラビソやコメツガなどの樹幹上に着生する。いずれの産地においても、生育範囲は非常に狭く、微環境の違いに影響されやすい。他の蘚苔類と混生していることが多く、純群落を作ることとはまれである。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

日本では北海道と本州（東北、関東、中部）に分布する。国外ではロシアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

中央アルプス（長野県）と秩父山地（埼玉県）では近年確認されていない。

【生育地の現況】

北海道（根室、幌尻岳、然別湖畔）の生育地では非常に限られた範囲に生育する。早池峰山（岩手県）では登山道の整備にともない激減した。南アルプス（長野県）では非常に狭い範囲にわずかに生育する。八ヶ岳（長野県）でも減少している。

【個体数の現況】

多くの産地において生育数が減少している。

存続を脅かす要因

確認されている生育地は、湿った風の流れがある独特な環境であるため、登山道整備の影響による森林荒廃の影響を受け易い。また、成熟した生殖器官や無性芽は知られていないため、環境の変化により、急激に減少するおそれがある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採

	(現在)	森林伐採

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	ハットリヤスデゴケ	<i>Neohattoria herzogii</i> (S.Hatt.) Kamim.	CR+EN
第4次 2019:	ハットリヤスデゴケ	<i>Neohattoria herzogii</i> (S.Hatt.) Kamim.	CR+EN
第4次 2018:	ハットリヤスデゴケ	<i>Neohattoria herzogii</i> (S.Hatt.) Kamim.	CR+EN
第4次 2017:	ハットリヤスデゴケ	<i>Neohattoria herzogii</i> (S.Hatt.) Kamim.	CR+EN
第4次 2015:	ハットリヤスデゴケ	<i>Neohattoria herzogii</i> (S.Hatt.) Kamim.	CR+EN
第4次:	ハットリヤスデゴケ	<i>Neohattoria herzogii</i> (S.Hatt.) Kamim.	CR+EN
第3次:	ハットリヤスデゴケ	<i>Neohattoria herzogii</i> (S.Hatt.) Kamim.	CR+EN
第2次:	ハットリヤスデゴケ	<i>Neohattoria herzogii</i> (Hatt.) Kamim.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Bakalin, V. A., 2019. Liverworts of the Russian Far East: the taxa with ciliate leaves. *Botanica Pacifica*, 8: 85-103.
- Inoue, H., Y. Asakawa and S. R. Gradstein, 1981. A biosystematic study of *Neohattoria herzogii* (Hatt.) Kamim. *Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. B*, 7: 23-30.
- 岩月善之助・水谷正美, 1972. 原色日本蘚苔類図鑑. 405 pp., 48 pls. 保育社, 大阪.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp., 192 pls. 平凡社, 東京.
- Larraín, J., B. Carter, B. Shaw, J. Hentschel, L. S. Strozier, T. Furuki, J. Heinrichs, B. Crandall-Stotler, J. Engel and M. von Konrat, 2015. The resurrection of *Neohattoria* Kamim. (Jubulaceae, Marchantiophyta): a six decade systematic conflict resolved through a molecular perspective. *PhytoKeys*, 50: 101-122.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Neohattoria herzogii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Neohattoria herzogii* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: 片桐知之 (高知大学)
Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月: 2025 年 3 月

オオシマヨウジョウゴケ

Cololejeunea inflata Steph.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
生育が確認できない産地や、生育量が減少している産地が増えている。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

1931 年に奄美大島産の新種 *Cololejeunea oshimensis* として記載されたが、その後、東南アジアに広く分布している種と同一種であることが明らかにされ、現在の学名が使われるようになった。葉背片の縁が 2~3 列の透明細胞によって縁取られることが特徴。

協力者: 山口富美夫 (広島大学)・佐藤匠 (広島大学)・西畑和輝 (広島大学)・桐生賢太 (広島大学)

基礎情報

【形態】

植物体は淡緑色、茎葉性で強く基物に圧着している。茎は不規則に分枝し、長さは 5 mm 程度。葉は重なってつき、斜めに開出する。背片は広卵形で、円頭、背縁は基部を除いて 2~3 列の透明細胞によって縁取られ、基部には 3~4 列に並んだ眼点細胞群が存在し、通常細胞の背面には乳頭状の突起がある。腹片は背片の 1/2 の長さで、先端の切り取られた広卵形で、先端が丸い第 1 歯と先の尖った第 2 歯が存在する。葉腹面に多数の円盤状の無性芽がつく。生葉上苔類のうち葉縁が透明な細胞で縁取られる日本産種としてはキララヨウジョウゴケ *Cololejeunea ceratilobula* も知られているが、キララヨウジョウゴケでは葉縁の透明な細胞が波状に曲がった形をしており本種と区別できる。

【生活史】

雌雄同株。産地が少ないので、十分な調査は行われていない。

【生育環境】

常緑広葉樹林の湿度の高い場所の低木やシダの葉上に着生する。まれに樹幹上で見つかることもある。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

日本では、本州（三重県）、九州（宮崎県）、琉球列島（奄美大島、沖縄島、石垣島、西表島）に産地が知られている。国外では、台湾、セレベス、ジャワ、スマトラ、マラッカなど東南アジアに広く分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

生育が確認できない産地が増えている。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

生育量が減少している産地が増えている。

存続を脅かす要因

森林の伐採による乾燥化により消滅するおそれがある。産地、生育量ともに減少している原因については不明な点が多い。

要因の区分：	(過去)	不明, 森林伐採
	(現在)	不明, 森林伐採

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オオシマヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea inflata</i> Steph.	VU
第4次 2019:	オオシマヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea inflata</i> Steph.	VU
第4次 2018:	オオシマヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea inflata</i> Steph.	VU
第4次 2017:	オオシマヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea inflata</i> Steph.	VU
第4次 2015:	オオシマヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea inflata</i> Steph. [= <i>C. oshimensis</i> (Horik.) Benedix]	VU
第4次:	オオシマヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea inflata</i> Steph. [= <i>C. oshimensis</i> (Horik.) Benedix]	VU
第3次:	オオシマヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea inflata</i> Steph. (= <i>C. oshimensis</i> (Horik.) Benedix)	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)] 沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Mizutani, M., 1961. A revision of Japanese Lejeuneaceae. J. Hattori Bot. Lab., 24: 115-302.
- Zhu, R. -L. and M. L. So, 2001. Epiphyllous liverworts of China. Nova Hedwigia Beih., 121: 1-418.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cololejeunea inflata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cololejeunea inflata* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of

a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

ヤマトケクサリゴケ

Cololejeunea schmidtii Steph.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
宮崎県からは近年確認されず、屋久島でも減少していることが判明した。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

宮崎県産の植物体を基に日本固有の新種として記載され、その後台湾にも分布していることが明らかになった。樹木の葉やシダの葉に着生する生葉上苔類で、葉背片の背縁に不規則な針状の鋸歯をもつことが特徴。

協力者: 山口富美夫 (広島大学)・佐藤匠 (広島大学)・西畑和輝 (広島大学)・桐生賢太 (広島大学)

基礎情報

【形態】

植物体は淡緑色、茎葉性で強く基物に圧着している。茎は不規則に羽状に分枝し、長さは2～5 mm。葉は接在して斜めに開出する。背片は卵形で鈍頭、葉縁には中央から基部に向かって不規則な粗い針状の鋸歯を有し、細胞背面には大きな球状の突起がある。腹片は背片の1/2程度の長さで、卵形、2細胞から成る第1歯とやや不明瞭な単細胞の第2歯が存在する。葉腹面に多数の円盤状の無性芽がつく。近縁の種からは葉の背片の縁に粗い針状の鋸歯があることで区別できる。

【生活史】

雌雄同株。無性芽や胞子体をつけた植物体は比較的多いが、産地が少なく十分な調査が行われておらず生活史などについては不明な点が多い。

【生育環境】

常緑広葉樹林内の空中湿度の高い場所の樹木やシダの葉上に着生して生育している。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

日本では九州（宮崎県、屋久島）、琉球列島から知られ、国外では台湾からの報告がある。

現在の生育状況

【分布域の現況】

宮崎県の産地では近年確認されていない。

【生育地の現況】

屋久島では減少していることが判明した。

【個体数の現況】

生育数は減少している。

存続を脅かす要因

空中湿度の高い森林内に生育する葉上苔類なので、森林の伐採などによる乾燥化によって消滅するおそれがある。生育が確認できない産地が近年増えている原因については不明。

要因の区分：	(過去)	不明, 森林伐採
	(現在)	不明, 森林伐採

特記事項

植物体は長さ 2～5 mm 程度の微小な種であり、生きた樹木の葉やシダの葉上に着生している。宮崎県がタイプ標本の産地でこの種の分布の北限であるが、宮崎県では生育が近年確認されていない。宮崎県以外でも数か所の産地しか知られていない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヤマトケクサリゴケ	<i>Cololejeunea schmidtii</i> Steph.	VU
第4次 2019:	ヤマトケクサリゴケ	<i>Cololejeunea schmidtii</i> Steph.	VU
第4次 2018:	ヤマトケクサリゴケ	<i>Cololejeunea schmidtii</i> Steph.	VU
第4次 2017:	ヤマトケクサリゴケ	<i>Cololejeunea schmidtii</i> Steph.	VU
第4次 2015:	ヤマトケクサリゴケ	<i>Cololejeunea schmidtii</i> Steph. [= <i>C. nipponica</i> (Horik.) S.Hatt.]	VU
第4次:	ヤマトケクサリゴケ	<i>Cololejeunea schmidtii</i> Steph. [= <i>C. nipponica</i> (Horik.) S.Hatt.]	VU
第3次:	ヤマトケクサリゴケ	<i>Cololejeunea schmidtii</i> Steph. (= <i>C. nipponica</i> (Horik.) S.Hatt.)	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)] 沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Mizutani, M., 1961. A revision of Japanese Lejeuneaceae. J. Hattori Bot. Lab., 24: 115-302.
- Tixier, P., 1985. Connaissances des Cololejeuneoideae. Bryophyt. Boblioth., 27: 1-439.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cololejeunea schmidtii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cololejeunea schmidtii* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

カギヨウジョウゴケ

Cololejeunea subfloccosa Mizut.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 最近の調査で、近畿地方や宮崎県では著しく減少していることが明らかになった。生育地の環境の変化によって更に減少する可能性がある。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

かつてケヨウジョウゴケ *Cololejeunea floccosa* と混同されていたヒメクサリゴケ属の一群が独立した種として新種記載されたのが本種である。近畿地方に比較的多くの産地があるが、それ以外の地方では産地は少ない。かつては日本固有種と考えられていたが、近年では中国とインドネシアからも報告されている。

基礎情報

【形態】

植物体は淡緑色、茎葉性で樹幹や枝、まれに葉上に着生する。茎は不規則に分枝し、長さは3～5 mm。葉は重なってつき、広く斜めに開出する。背片は卵形、円頭で全縁、基部に1列に並んだ4～5個の眼点細胞があり、細胞背面に乳頭状の突起がある。腹片は卵形、背片の約2/5の長さで、第1歯は2細胞で強く鉤状に曲がり、第2歯は非常に小さく、目立たない。葉腹面に多数の円盤状の無性芽をつける。雌花序は枝先に頂生し、雄花序はその直ぐ下につく。近縁種のケヨウジョウゴケ *Cololejeunea floccosa* は雌花序と雄花序が別々の枝につくことで本種と区別できる。

【生活史】

雌雄同株。無性芽や雌雄の生殖器官も見つかっているが、産地が少なく十分な調査が行われておらず、生活史などについては不明な点が多い。

【生育環境】

常緑広葉樹林の樹幹や枝、まれに葉上に着生して生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では近畿（三重県、和歌山県、奈良県、大阪府、兵庫県）、九州（熊本県、宮崎県）に分布し、国外では中国とインドネシアで報告されている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

最近の調査で、近畿地方や宮崎県では産地が著しく減少していることが明らかになった。

【生育地の現況】

生育地の一部では生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

最近の調査で、近畿地方や宮崎県では生育量が著しく減少していることが明らかになった。

存続を脅かす要因

森林内の湿度の高い場所の樹幹や樹枝に着生する種なので、森林の伐採などによる林内の乾燥化によって消滅するおそれがあるが、最近、産地が減少している原因については不明。

要因の区分：	(過去)	不明, 森林伐採

	(現在)	不明, 森林伐採

特記事項

本州（近畿以西）から九州にかけて点々と産地が散在しておりかつては日本固有種と考えられていたが、近年では中国とインドネシアからも報告されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	カギヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea subfloccosa</i> Mizut.	VU
第4次 2019:	カギヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea subfloccosa</i> Mizut.	VU
第4次 2018:	カギヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea subfloccosa</i> Mizut.	VU
第4次 2017:	カギヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea subfloccosa</i> Mizut.	VU
第4次 2015:	カギヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea subfloccosa</i> Mizut.	VU
第4次:	カギヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea subfloccosa</i> Mizut.	VU
第3次:	カギヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea subfloccosa</i> Mizut.	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

京都府[絶滅寸前種] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Haerida, I., 2017. Liverworts of Bali, Indonesia, with new records to the island. Gard. Bull. Singapore, 69: 81-87.
- Zhu, R. -L. and M. L. So, 2001. Epiphyllous liverworts of China. Nova Hedwigia Beih., 121: 1-418.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cololejeunea subfloccosa has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cololejeunea subfloccosa* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of

a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

イヌイムシトリゴケ

Colura inuii Horik.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 最近の調査で、北限の産地である種子島からは、生育地の森林が伐採されたため消滅したことが明らかとなった。他の生育地でも生育量が少なく、生育地の森林伐採等による消滅が予測される。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

日本から知られるムシトリゴケ属 3 種のうちの 1 種。葉が幅広く、葉縁に微鋸歯をもつことなどによりボウズムシトリゴケ *Colura meijeri* (紀伊半島～奄美大島) から区別される。樹木の生葉や枝に着生して生育するが、植物体が微小であるため野外で見つけるのは非常に難しい。種子島では生育地の森林が伐採されたため消滅したと考えられており、他の生育地でも生育量が少なく環境の変化により消滅するおそれがある。

協力者: 山口富美夫 (広島大学)・佐藤匠 (広島大学)・西畑和輝 (広島大学)・桐生賢太 (広島大学)・Seo Jae Heum (広島大学)

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、黄緑色で、樹木の葉に着生するが、時に樹枝上に着生することもある。茎は長さ 3～8 mm でやや不規則に分枝する。葉は基物から立ち上がり、背片は広卵形で背縁は大きく弧状に広がり、多少波打つ。腹片は背片より長く、腹縁がチューブ状に巻き込み、先端近くでは袋状になる。腹葉は 2/3 まで深く 2 裂し、裂片は Y 字状に開き、先端は鋭く尖る。雌花序は茎に頂生し、花被は円柱状で、明瞭な三稜があり、稜上には密に小歯がある。葉が幅広く、葉縁に微鋸歯をもつことなどによりボウズムシトリゴケ *Colura meijeri*（紀伊半島～奄美大島）から区別される。

【生活史】

雌雄異株と考えられる。産地が少なく、十分な調査が行われていない。

【生育環境】

常緑広葉樹林の湿度の高い場所の樹木の葉上や樹枝上に着生して生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

日本では、鹿児島県種子島、琉球列島から知られている。国外では台湾からの報告がある。

現在の生育状況

【分布域の現況】

最近の調査で、北限の産地である種子島からは、生育地の森林が伐採されたため消滅したことが明らかとなった。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

生育数は少ない。

存続を脅かす要因

産地が種子島以南の少数の島嶼に局限されており、それらの生育地の環境の変化で消滅するおそれがある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採
	(現在)	森林伐採

特記事項

種子島を分布の北限とし、奄美大島、琉球列島を通して、台湾まで分布している。一般に樹木の葉上に少量が着生して生育しているが、時には樹木の枝の上にかたまって生育することもある。植物体が微小で野外で見つけるのが非常に難しい。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	イヌイムシトリゴケ	<i>Colura inuii</i> Horik.	VU
第4次 2019:	イヌイムシトリゴケ	<i>Colura inuii</i> Horik.	VU
第4次 2018:	イヌイムシトリゴケ	<i>Colura inuii</i> Horik.	VU
第4次 2017:	イヌイムシトリゴケ	<i>Colura inuii</i> Horik.	VU
第4次 2015:	イヌイムシトリゴケ	<i>Colura inuii</i> Horik.	VU
第4次:	イヌイムシトリゴケ	<i>Colura inuii</i> Horik.	VU
第3次:	イヌイムシトリゴケ	<i>Colura inuii</i> Horik.	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 長谷川二郎, 1983. 種子島の *Colura inuii* について. 日本蘚苔類学会会報, 3: 104.
- 井上 浩, 1976. 続・日本産苔類図鑑. 193 pp. 築地書館, 東京.
- 水谷正美, 1982. 奄美大島の *Colura*. 蘚苔地衣雑報, 9: 131-132.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Colura inuii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Colura inuii* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location. b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

ボウズムシトリゴケ

Colura meijeri Jovet-Ast

カテゴリー判定結果 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) B2ab				
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 屋久島や他の地域ではかつての産地で確認できない場合が多くなっている。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ムシトリゴケ属の中では最も北にまで分布する種で、紀伊半島が分布の北限となっている。新産地も見つかってはいるが近年生育が確認できない産地も多くなっている。日本産の本属の中では比較的植物体が大きく、着生基物の多様性も大きいようである。

協力者： 秋山弘之（兵庫県立人と自然の博物館）・土永浩史（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

植物体は淡緑色、茎葉性で匍匐し不規則に羽状に分枝し、10 mm の長さに達する。葉は接在し、基物から立ち上がり、広く開出する。背片は三角形に近く、基部に向かって細くなり、全縁、腹片は背片より長く、背縁は内側に巻き込み、先端は大きく膨らみ袋状になる。腹葉は離在し、基部近くまで2裂し、裂片は披針形で先端は鋭く尖る。イヌイムシトリゴケ *Colura inuii* とは葉の腹片の先端の袋が大きく膨らみ、背片が三角形状であることで区別される。

【生活史】

国内では生殖器官も無性芽も見つかっておらず、繁殖の仕方については不明な点が多い。

【生育環境】

日本では、湿度の高い常緑広葉樹林内の樹木の葉や樹幹、シダの葉に着生するが、時に溪流沿いの湿った岩上に着生することもある。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

日本では、本州（三重県、和歌山県）、四国、九州（熊本県、宮崎県、鹿児島県、屋久島）、奄美大島から知られており、国外ではジャワからの報告がある。

現在の生育状況

【分布域の現況】

宮崎県では新産地が見つかった一方で、屋久島や他の地域ではかつての産地で確認できない場合が多くなっている。

【生育地の現況】

生育地の一部では森林伐採などにより生育条件が悪化している。宮崎県では最近の調査で生育が良好なことが確認された。

【個体数の現況】

生育数は減少している。

存続を脅かす要因

自然の状態が良く保たれた湿度の高い森林に生育するので、森林の伐採などで森林内の環境が変わることで消滅するおそれがある。また、産地が局限されており、環境の変化で産地が減少し、絶滅に向かうおそれがある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限

	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

一般に、樹木の葉上や樹幹上に着生することが多いが、宮崎県の産地では溪谷中の滝の近くの湿った岩上でややかたまって岩にへばりついて生育している。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ボウズムシトリゴケ	<i>Colura meijeri</i> Jovet-Ast	VU
第4次 2019:	ボウズムシトリゴケ	<i>Colura meijeri</i> Jovet-Ast	VU
第4次 2018:	ボウズムシトリゴケ	<i>Colura meijeri</i> Jovet-Ast	VU
第4次 2017:	ボウズムシトリゴケ	<i>Colura meijeri</i> Jovet-Ast	VU
第4次 2015:	ボウズムシトリゴケ	<i>Colura meijeri</i> Jovet.-Ast.	VU
第4次:	ボウズムシトリゴケ	<i>Colura meijeri</i> Jovet.-Ast.	VU
第3次:	ボウズムシトリゴケ	<i>Colura meijeri</i> Jovet.-Ast.	VU
第2次:	ボウズムシトリゴケ	<i>Colura meijeri</i> Jovet-Ast	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

三重県[絶滅（EX）] 和歌山県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Jovet-Ast, S., 1953. Le genre *Colura*. Hepatiques. Lejeuneaceae, Diplasiae. Rev. Bryol. Lichénol., 22: 206-312.
- Mizutani, M., 1961. A revision of Japanese Lejeuneaceae. J. Hattori Bot. Lab., 24: 115-302.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Colura meijeri has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Colura meijeri* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of

a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

ナガバムシトリゴケ

Colura tenuicornis (A.Evans) Steph.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
全ての産地において、生育量は著しく少ない。更に、生育が確認できなくなった地点が複数か所存在する。そのため、減少傾向にあると推定した。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

ムシトリゴケ属の特徴のひとつとして、植物体が小さいということが挙げられるが、日本産の 3 種の中でも、このナガバムシトリゴケはとくに微小で 2~4 mm ぐらいの大きさにしかない。もともと少量の植物体がまばらに基物に着生して生育している種であるが、いずれの産地においても生育量は著しく少なく生育が確認できない産地も多い。

協力者： 土永浩史（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状で淡緑色、極めて小さく、まばらに分枝し、茎の長さは2~4 mmしかない。葉は接在し、背側に著しく偏向してつき、ねじれている。背片はほぼ披針形で、基部に向かって狭まり、腹片は背片より長く、先端に向かって葉長の1/2 ぐらいが角状の袋になる。細長く尖った腹片の先端に円盤状の無性芽をつける。雌花序は主茎に頂生する。植物体が小さく、葉が披針形で、腹片が長い角状になることによって本属の他の種から区別することができる。

【生活史】

雌雄同株。宮崎県の個体群では無性芽を持つことが報告されている。産地が少なく、十分な調査がなされておらず、生活史などはわかっていない。

【生育環境】

多くは、常緑広葉樹林の溪流沿いの空中湿度の高い林の樹木の葉やシダの葉上に着生するが、海に面した霧のよくかかる山頂近くの樹木の葉に着生することもある。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では、本州（紀伊半島）、四国（高知県）、九州（宮崎県、鹿児島県、屋久島）、伊豆諸島、小笠原諸島から知られている。国外では、台湾、東南アジア、ハワイ、タヒチ、マダガスカル、アフリカ、南アメリカなど、世界中の亜熱帯、熱帯に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

産地数について大きな変化はないと考えられるが、最近、生育が確認できなくなった地点が複数か所存在する。

【生育地の現況】

生育地の一部では生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

宮崎県の2か所の産地では、比較的生育が良好であるが、全ての産地において、生育量は著しく少ない。

存続を脅かす要因

もともと少量の植物体がまばらに基物に着生して生育している種であるが、最近、生育が確認できない産地が多い。その原因については十分な調査が行われておらず、不明である。

要因の区分：	(過去)	不明
	(現在)	不明

特記事項

非常に微小な葉上苔類で、かたまって生えないので、発見するのが難しい。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ナガバムシトリゴケ	<i>Colura tenuicornis</i> (A.Evans) Steph.	CR+EN
第4次 2019:	ナガバムシトリゴケ	<i>Colura tenuicornis</i> (A.Evans) Steph.	CR+EN
第4次 2018:	ナガバムシトリゴケ	<i>Colura tenuicornis</i> (A.Evans) Steph.	CR+EN
第4次 2017:	ナガバムシトリゴケ	<i>Colura tenuicornis</i> (A.Evans) Steph.	CR+EN
第4次 2015:	ナガバムシトリゴケ	<i>Colura tenuicornis</i> (A.Evans) Steph.	CR+EN
第4次:	ナガバムシトリゴケ	<i>Colura tenuicornis</i> (A.Evans) Steph.	CR+EN
第3次:	ナガバムシトリゴケ	<i>Colura tenuicornis</i> (A.Evans) Steph.	CR+EN
第2次:	ナガバムシトリゴケ	<i>Colura tenuicornis</i> (Evans) Steph.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

和歌山県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 宮崎県[絶滅危惧ⅠA類(CR-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 林 達紀・長谷川二郎, 2000. 尾鈴山（宮崎県）で発見されたナガバムシトリゴケ. 蘚苔類研究, 7: 350-353.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp., 192 pls. 平凡社, 東京.
- Mizutani, M., 1961. A revision of Japanese Lejeuneaceae. J. Hattori Bot. Lab., 24: 115-302.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Colura tenuicornis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Colura tenuicornis* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

オチクサリゴケ

Lejeunea otiana S.Hatt.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
三重県では絶滅、愛媛県と熊本県では 70 年以上確認できていない。宮崎県からの報告に関しても再調査の必要性がある。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

本州、四国、九州から知られておりこれまで日本固有種と考えられていたが、近年韓国からも報告されている。溪谷中の湿った岩の上に生え、葉腹片の第 1 歯が細長い三角形で、第 2 歯がないことが特徴。三重県では絶滅、愛媛県と熊本県では 70 年以上確認されていない。他県からの報告に関しても再調査の必要性がある。

協力者： 長谷川二郎（服部植物研究所）・岩田和鷹（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性で濃緑色、茎は 5～10 mm の長さがあり、不規則に分枝する。葉は相互にやや離れてつき、背片は卵形で、全縁、円頭～鈍頭。腹片は斜めに傾いた長方形で、背片の 1/3～1/6 の長さがあり、第 1 歯は細長い三角形で、先端は尖り、透明細胞をつけるが、第 2 歯は無い。腹葉は広卵形で、幅は茎の 2 倍の長さで、先端から 2/5 ぐらい 2 裂する。雌花序はやや伸張した枝の先端につき、花被は西洋梨状。他の種からは、腹片の第 1 歯が細長い三角形で、第 2 歯がないことで区別することができる。

【生活史】

産地が少なく、十分な調査が行われておらず、生活史などについては不明。

【生育環境】

常緑広葉樹林の溪谷中の日陰になる湿った岩の上に生える。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

本州（埼玉県、三重県、和歌山県）、四国（愛媛県）、九州（熊本県、宮崎県）から知られており、日本固有種と考えられていたが、近年韓国からも報告されている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

三重県では絶滅、愛媛県と熊本県でも 70 年以上確認されていない。その他の県からの報告に関しては再調査の必要がある。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

減少傾向にあると考えられるが、その原因については不明。

要因の区分：	(過去)	不明
	(現在)	不明

特記事項

1952年に愛媛県産の新種として記載され、その後、数か所の産地が確認されたが、この種の分布については不明な点が多い。宮崎県からの報告に関しては再調査の必要性がある。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	オチクサリゴケ	<i>Lejeunea otiana</i> S.Hatt.	CR+EN
第4次 2019:	オチクサリゴケ	<i>Lejeunea otiana</i> S.Hatt.	CR+EN
第4次 2018:	オチクサリゴケ	<i>Lejeunea otiana</i> S.Hatt.	CR+EN
第4次 2017:	オチクサリゴケ	<i>Lejeunea otiana</i> S.Hatt.	CR+EN
第4次 2015:	オチクサリゴケ	<i>Lejeunea otiana</i> S.Hatt.	CR+EN
第4次:	オチクサリゴケ	<i>Lejeunea otiana</i> S.Hatt.	CR+EN
第3次:	オチクサリゴケ	<i>Lejeunea otiana</i> S.Hatt.	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

三重県[絶滅（EX）] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 宮崎県[絶滅危惧ⅠA類(CR-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Choi, S. S., V. A. Bakalin and S. -J. Park, 2021. Integrating continental mainland and islands in temperate East Asia: liverworts and hornworts of the Korean Peninsula. *PhytoKeys*, 176: 131-226.
- Hattori, S., 1952. Hepaticarum species novae et minus cognitae Nipponenses VII. *Bot. Mag., Tokyo*, 65: 763-764.
- 児玉 務, 1975. 近畿新産の苔類2種について. *蘚苔地衣雑報*, 7: 55.
- Mizutani, M., 1961. A revision of Japanese Lejeuneaceae. *J. Hattori Bot. Lab.*, 24: 115-302.
- 山田耕作, 2015. セン・タイ類. In: 三重県農林水産部みどり共生推進課（編）, 三重県レッドデータブック 2015, pp. 659-690. 共立印刷株式会社, 津市.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lejeunea otiana has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lejeunea*

otiana is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Unknown
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

オビケビラゴケ

Radula campanigera Mont. subsp. *obiensis* (S.Hatt.) K.Yamada

カテゴリー判定結果 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) B2ab				
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 2000 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 宮崎県では 1 か所のみで知られており、小規模ながら比較的安定した生育が確認されているものの発見当初と比べると生育量は大幅に減少している。屋久島では複数か所で生育が確認されているが近年確認できない地点もあり生育量が減少している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ケビラゴケ属の種としては大型で、樹幹から垂れ下がって生育するという特徴を持っており、日本産の本属の他種とは容易に区別することができる。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、鈍い緑色で、樹幹にやや垂れ下がるように着生し、密に羽状に分枝し、70 mm の長さに達する。葉は相互に接してつき、斜めに開出する。背片は長卵形で円頭、腹縁は内側へ丸く折れたたまる。腹片は卵形で、先端は鈍頭、葉基部が茎の幅の 1/3 ぐらい茎を覆う。雌花序は側枝の先端につき、花被は短いランペット状で、口部は唇状にならない。近縁種からは、植物体が羽状に分枝し、葉の背片の腹縁が内曲し、腹片の基部が耳状に発達しないことによって区別できる。

【生活史】

雌雄異株。産地の数も生育量も少なく、繁殖様式は不明。

【生育環境】

湿度の高い常緑広葉樹林の溪谷中の樹幹や湿った岩上に小さな塊になって着生している。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域

国土地域区分：	(4) 河川・湿地地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

日本固有の亜種で、九州（宮崎県、鹿児島県屋久島）にのみ分布する。基本亜種は日本には分布せず、東南アジアと南太平洋に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

宮崎県では 1 か所のみで知られており、小規模ながら比較的安定している。屋久島では複数か所で生育が確認されているが、近年確認できない地点もある。

【生育地の現況】

生育地の一部では森林伐採などにより生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

宮崎県では 1 か所のみで知られており、小規模ながら比較的安定した生育が確認されているものの、発見当初と比べると生育量は大幅に減少している。屋久島でも生育量が減少している。

存続を脅かす要因

樹木の伐採による着生木の消失や森林の状態を変えることによる森林の乾燥化によって生育地を失う可能性がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採
	(現在)	森林伐採

特記事項

1944年に宮崎県産の新種として記載されたが、1979年に東南アジアに分布する種の亜種とされた。宮崎県では1か所の産地で小規模ながら比較的安定した生育が確認されているが、森林公園化にともない遊歩道や休憩場所の整備などが行われていることから周辺の生育環境が壊されないように配慮することが望まれる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オビケビラゴケ	<i>Radula campanigera</i> Mont. ssp. <i>obiensis</i> (S.Hatt.) K.Yamada	CR+EN
第4次 2019:	オビケビラゴケ	<i>Radula campanigera</i> Mont. ssp. <i>obiensis</i> (S.Hatt.) K.Yamada	CR+EN
第4次 2018:	オビケビラゴケ	<i>Radula campanigera</i> Mont. ssp. <i>obiensis</i> (S.Hatt.) K.Yamada	CR+EN
第4次 2017:	オビケビラゴケ	<i>Radula campanigera</i> Mont. ssp. <i>obiensis</i> (S.Hatt.) K.Yamada	CR+EN
第4次 2015:	オビケビラゴケ	<i>Radula campanigera</i> Mont. ssp. <i>obiensis</i> (S.Hatt.) K.Yamada	CR+EN
第4次:	オビケビラゴケ	<i>Radula campanigera</i> Mont. ssp. <i>obiensis</i> (S.Hatt.) K.Yamada	CR+EN
第3次:	オビケビラゴケ	<i>Radula campanigera</i> Mont. ssp. <i>obiensis</i> (S.Hatt.) Yamada	CR+EN
第2次:	オビケビラゴケ	<i>Radula campanigera</i> Mont. ssp. <i>obiensis</i> (Hatt.) Yamada	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧ⅠA類(CR-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hattori, S., 1950. 屋久島苔類誌 IV. J. Hattori Bot. Lab., 4: 49-70.
- 服部新佐, 1944. 南九州苔類誌. 東京科学博物館研究報告, 11: 1-203.
- 岩田和鷹, 2018. 屋久島（鹿児島県）における蘚苔類の垂直分布. Naturalistae, 22: 73-84.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp., 192 pls. 平凡社, 東京.
- Yamada, K., 1979. A revision of Asian taxa of *Radula*, Hepaticae. J. Hattori Bot. Lab., 45: 201-322.
- Yokoyama, H., T. Yamaguchi, N. Nishimura, T. Furuki and H. Akiyama, 2007. Checklist of bryophytes known from Yakushima Island, southern Kyushu, Japan. Bryol. Res. 9: 159-197.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Radula campanigera subsp. *obiensis* has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Radula campanigera* subsp. *obiensis* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—



©片桐知之

©片桐知之

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

ミミケビラゴケ

Radula chinensis Steph.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 すべての産地において生育数が少ない。本種の生育する石灰岩地を含む周辺地域の一部では石灰採掘や開発が行われており、乾燥化などの周辺環境の変化から生育地の減少が予測される。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

葉の基部が耳状になることを特徴とするケビラゴケ属の茎葉性苔類。日本および近隣国に分布し、日本では本州と四国の石灰岩地などから報告されているが、生育数が少なく、石灰採掘などの影響が懸念される。

基礎情報

【形態】

植物体は、褐色を帯びた緑色、茎葉性、長さ 3～6 cm、幅は葉を含めて 2.5～3 mm。葉は倒瓦状に重なり、2 つに折れ大きな背片と小さな腹片となる。背片は卵形、基部が著しい耳状、全縁。腹片は背片の 1/2 の大きさ、基部が著しい耳状。無性芽はない。葉の基部が著しく発達して耳状となることで同属の他種から区別される。

【生活史】

造精器や造卵器、孢子体は知られていないため、生活史は不明である。

【生育環境】

落葉広葉樹の自然林において、おもに石灰岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州と四国に点在する。東京都、岐阜県、石川県、岡山県、広島県から知られていたが、近年では周辺の複数の県からも分布が報告されている。国外では中国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

四国の産地（愛媛県、高知県）に関しては長年生育が確認されておらず、再調査が必要。

【生育地の現況】

石灰岩地に生育しており、石灰採掘により絶滅の恐れがある。

【個体数の現況】

いずれの産地においても生育数が少ない。

存続を脅かす要因

石灰採掘に係わる人為的影響が懸念される。

要因の区分：	(過去)	石灰採掘
	(現在)	石灰採掘

特記事項

四国の産地（愛媛県、高知県）に関しては長年生育が確認されておらず再調査が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ミミケビラゴケ	<i>Radula chinensis</i> Steph.	CR+EN
第4次 2019:	ミミケビラゴケ	<i>Radula chinensis</i> Steph.	CR+EN
第4次 2018:	ミミケビラゴケ	<i>Radula chinensis</i> Steph.	CR+EN
第4次 2017:	ミミケビラゴケ	<i>Radula chinensis</i> Steph.	CR+EN
第4次 2015:	ミミケビラゴケ	<i>Radula chinensis</i> Steph.	CR+EN
第4次:	ミミケビラゴケ	<i>Radula chinensis</i> Steph.	CR+EN
第3次:	ミミケビラゴケ	<i>Radula chinensis</i> Steph.	CR+EN
第2次:	ミミケビラゴケ	<i>Radula chinensis</i> Steph.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

兵庫県[A ランク] 岡山県[絶滅危惧 I 類] 広島県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2005. 東京都奥多摩のミミケビラゴケ. 蘚苔類研究, 9: 18-19.
- Yamada, K., 1979. A revision of Asian taxa of *Radula*, Hepaticae. J. Hattori Bot. Lab., 45: 201-322.
- 山田耕作, 1996. 日本産のケビラゴケ属（苔類）. 自然環境科学研究, 9: 63-96.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Radula chinensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Radula chinensis* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy
 - area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Limestone mining
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

イシヅチゴケ

Oedipodium griffithianum (Dicks.) Schwägr.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地は登山道沿いの急傾斜地の岩陰などであり、極めて崩壊しやすい場所である。個体群も数センチメートル四方程度しかなく、肉眼で数を数えることができるほどに個体数も少ない。生育地の崩壊により個体数が消滅する可能性が高い。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

北半球の北部とフォークランド諸島に分布する 1 属 1 種の蘚類で、葉がロゼット状につき、蒴に長い頸部がある。これまでに北海道、本州、四国から報告があり、第 5 次レッドリスト作成のための調査でも中部の山岳地の数か所で確認されている。登山道の整備などにより生育地が失われることが心配される。

協力者: 坂井奈緒子 (富山市立科学博物館)・古木達郎 (元千葉県立中央博物館)・内田暁友 (日本蘚苔類学会)・佐藤匠 (広島大学)・桐生賢太 (広島大学)・木口博史 (岡山コケの会)

基礎情報

【形態】

植物体は暗緑色で、短い茎に柔らかい葉がロゼット状につく。葉はへら形で先端は丸くて尖らず、長さ約 3 mm になる。葉基部の両側に透明で長い単細胞の毛がある。中肋は 1 本で弱く、葉の先端近くで終わる。葉身細胞は平滑で六角形、薄壁であるが厚角となる。葉基部の細胞は長い六角形。蒴柄は長さ約 10 mm で、蒴の下部は緑色を帯びた長い頸部となり気孔がある。蒴歯はない。1 属 1 種。

【生活史】

雌雄同株でしばしば孢子体をつける。

【生育環境】

高地の崩壊地の岩隙や雪渓沿いの砂礫地などに生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道、本州、四国、九州に分布し、国外では中国、極東ロシア、ヨーロッパ、アラスカ、グリーンランド、フォークランド諸島に分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

これまでに北海道と本州（関東山地、中部山岳地帯、紀伊半島、中国山地）、四国山地から報告があり、佐藤・井上（2023）は大分県から報告した。第 5 次レッドリスト作成のための調査では、北アルプスの立山、乗鞍岳、南アルプスの赤石岳、荒川岳、北岳、塩見岳で確認されたが、既知の産地である北海道大雪山、利尻岳では確認できなかった。

【生育地の現況】

高地の岩陰や崩壊地にまれに見られる。大部分の生育地で崩壊などにより消失が心配される。

【個体数の現況】

確認されている生育地では、個体群のサイズは数センチメートル四方と極めて小さく、また各個体群も数えるほどの個体数からなる。

存続を脅かす要因

登山道脇の崖などに生育しているので、登山道の整備や、崖地の植生の回復などにより生育地が失われることが心配される。また、産地は極めて限られる。

要因の区分：	（過去）	遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限
	（現在）	遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限

特記事項

一部の生育地は国立公園内にある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	イシヅチゴケ	<i>Oedipodium griffithianum</i> (Dicks.) Schwägr.	VU
第4次 2019:	イシヅチゴケ	<i>Oedipodium griffithianum</i> (Dicks.) Schwägr.	VU
第4次 2018:	イシヅチゴケ	<i>Oedipodium griffithianum</i> (Dicks.) Schwägr.	VU
第4次 2017:	イシヅチゴケ	<i>Oedipodium griffithianum</i> (Dicks.) Schwägr.	VU
第4次 2015:	イシヅチゴケ	<i>Oedipodium griffithianum</i> (Dicks.) Schwägr.	VU
第4次:	イシヅチゴケ	<i>Oedipodium griffithianum</i> (Dicks.) Schwägr.	VU
第3次:	イシヅチゴケ	<i>Oedipodium griffithianum</i> (Dicks.) Schwägr.	VU
第2次:	イシヅチゴケ	<i>Oedipodium griffithianum</i> (Dicks.) Schwaegr.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 富山県[絶滅危惧Ⅱ類] 長野県[準絶滅危惧(NT)] 兵庫県[Aランク] 奈良県[希少種] 鳥取県[情報不足(DD)] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 堀清 鷹・鈴木 亮・出川洋介・村上哲明, 2012. 菅平（長野県）で新たに確認された絶滅危惧コケ植物6種. 蘚苔類研究, 10: 259-260.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 佐藤匠・井上侑哉, 2023. 傾山（大分県豊後大野市）で発見されたイシヅチゴケ. 蘚苔類研究, 12: 278-280.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Oedipodium griffithianum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Oedipodium griffithianum* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of

a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

イクビゴケ目 Diphysciales イクビゴケ科 Diphysciaceae

ミギワイクビゴケ

Diphyscium chiapense D.H.Norris subsp. *unipapillosum* (Deguchi) T.Y.Chiang
& S.H.Lin

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】 10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 いずれの生育地でも個体数は少なく、人為的または自然災害の影響によって個体群の消失が危惧される。また、生育地の一部では森林伐採や自然災害などにより生育条件が悪化している					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

ミギワイクビゴケは名前の通り、溪谷などの湿り気のある岩壁に生育する小型のコケである。イクビゴケ属の他の種とは、普通葉の葉身細胞に 1 個のパピラがあることなどで区別される。産地は少なく、低地に限られることから、人為的影響を受けやすい。

協力者： 木口博史（岡山コケの会）・立石幸敏（岡山コケの会）・古木達郎（元千葉県立中央博物館）

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ約 1.5 cm。密生またはまばらに生える。茎は分枝せず、細長い舌形の葉を密につける。葉は乾燥すると縮れて内側に巻き込む。孢子体を包む雌苞葉は、葉身部は普通葉より小さいが先端から伸びだした中肋は長く糸状になる。イクビゴケ属の中では中型の大きさで、イクビゴケ (*Diphyscium fulvifolium*) に似る。本属の他種からは、普通葉の葉身細胞に 1 個のパピラがあること、内側の雌苞葉の葉身上部の縁が全縁で芒状に伸びだした中肋表面が平滑なことなどで区別される。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

常緑広葉樹の自然林などの溪流沿いの岩上や岩隙などに生育する。直接岩面に生育する他、薄く堆積した土の上に生えることもある。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では本州、四国に分布し、国外では台湾、フィリピンに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 4 次レッドリスト作成のための調査では、高知県の 3 か所で生育が確認されたが、梶ヶ森（高知県大豊町）では生育数が減少していた。

第 5 次レッドリスト作成のための調査では、徳島県と東京都で生育が確認された。その他、栃木県日光市（神山・鈴木 2010）、愛媛県東赤石山（藤田ほか 2013）、徳島県における別の地点（海陽町）（立石ほか 2017）から報告されている。

【生育地の現況】

生育地の一部では森林伐採や自然災害などにより生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

低地の森林内の溪流沿いに生育するので、森林伐採や河川開発による生育環境の変化によって壊滅的な影響を受ける可能性がある。全体として、産地が局限し、個体群の数もサイズも小さく、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発, 分布・産地局限

	(現在)	森林伐採, 河川開発, 分布・産地局限

特記事項

生育地の一部は国立公園または国定公園内にある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ミギワイクビゴケ	<i>Diphyscium chiapense</i> D.H.Norris	CR+EN
第4次 2019:	ミギワイクビゴケ	<i>Diphyscium chiapense</i> D.H.Norris	CR+EN
第4次 2018:	ミギワイクビゴケ	<i>Diphyscium chiapense</i> D.H.Norris	CR+EN
第4次 2017:	ミギワイクビゴケ	<i>Diphyscium chiapense</i> D.H.Norris	CR+EN
第4次 2015:	ミギワイクビゴケ	<i>Diphyscium chiapense</i> D.H.Norris [= <i>D. unipapillosum</i> Deguchi]	CR+EN
第4次:	ミギワイクビゴケ	<i>Diphyscium chiapense</i> D.H.Norris [= <i>D. unipapillosum</i> Deguchi]	CR+EN
第3次:	ミギワイクビゴケ	<i>Diphyscium chiapense</i> D.H.Norris (= <i>D. unipapillosum</i> Deguchi)	CR+EN
第2次:	ミギワイクビゴケ	<i>Diphyscium chiapense</i> Norris Syn. <i>D. unipapillosum</i> Deguchi	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

福島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 栃木県[絶滅危惧Ⅰ類(A ランク)] 和歌山県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 宮崎県[絶滅危惧ⅠA類(CR-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Deguchi, H., 1984. *Diphyscium unipapillosum*, sp. nov. (Diphysciaceae, Musci) from Japan. Journal of Japanese Botany, 59: 97-103.
- Deguchi, H., J. Ueno and T. Yamaguchi, 1997. Taxonomic notes on *Diphyscium* species with unipapillose leaf cells. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 82: 99-104.
- 藤田あゆな・立石幸敏・西村直樹, 2013. 東赤石山（愛媛県）で確認した絶滅危惧藓類5種. 藓苔類研究, 10: 375-376.

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎，2001．日本の野生植物コケ．平凡社，東京．355pp., 192pls.
- 神山隆之・鈴木 直，2010．栃木県で新たに見つかった絶滅危惧藓類 12 種．藓苔類研究，10: 18-20.
- 立石幸敏・木口博史・西村直樹，2017．轟九十九滝（徳島県海陽町）の藓類．Naturalistae，21: 89-96.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Diphyscium chiapense subsp. *unipapillosum* has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Diphyscium chiapense* subsp. *unipapillosum* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
 Author: Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

イクビゴケ目 Diphysciales イクビゴケ科 Diphysciaceae

カシミールクマノゴケ

Diphyscium kashmirens (H.Rob.) Magombo

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 個体群のサイズは数センチメートル四方であり、生育地内の個体群も数個程度と、極端に生育量が少ない。生育地は溪谷の滝つぼ付近の岩壁に限られており、森林伐採や近年の気候変動に伴う台風によって生育地自体が消失するリスクが高い場所に生育するため、継続的な減少が予測される。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

本種はパキスタンのカシミール地方で記載され、その後、日本に隔離的に分布していることが確認された。国内での産地は少なく、生育量も少ない。

協力者： 木口博史（岡山コケの会）・立石幸敏（岡山コケの会）

基礎情報

【形態】

植物体は高さ約 1 cm、濃い深緑色のパッチ状の群落を作る。茎は非常に短く、あまり分枝しない。葉は線状の舌形、長さ約 9 mm、幅は葉の中部で 0.25～0.35 mm、基部には広い葉身部があるが、上部に向かってしだいに狭くなる。中部の葉身細胞は方形でやや厚壁となり平滑。中肋は広く、葉の中部では葉幅の 1/2 を占める。胞子体はほとんど蒴のみからなり、蒴は卵形で非相称形、やや背腹方向に潰れたようになる。クマノゴケ (*Diphyscium lorifolium*) に似るが、狭いながらも葉身部が葉の全体に及び、葉は乾くと強く巻縮し、直接水のかからない湿った岩上に生育することなどで区別できる。

【生活史】

雌雄同株（雌雄同苞または雌雄異苞の状態が混在する）。

【生育環境】

溪流沿いの滝付近で、直接水のかからない湿った岩の垂直面に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では本州（福島県以南）～九州に分布し、国外ではパキスタン（カシミール）に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では高知県内の 1 か所と徳島県内の 1 か所で確認できた。このほかにも、2010 年以降では、栃木県（神山・鈴木 2010）、群馬県（木口・立石 2018）、愛媛県（西村ほか 2018、岩田・立石 2018）、徳島県（立石ほか 2017）、鹿児島県（岩田 2018）からの報告がある。

【生育地の現況】

生育地の一部では森林伐採や自然災害などにより生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

森林伐採によって生育環境の変化が危惧される。また、産地が局限しているため絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 分布・産地局限

	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

本種はカシミール地方と日本に隔離分布する。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	カシミールクマノゴケ	<i>Diphyscium kashmirensense</i> (H.Rob.) Magombo	VU
第4次 2019:	カシミールクマノゴケ	<i>Diphyscium kashmirensense</i> (H.Rob.) Magombo	VU
第4次 2018:	カシミールクマノゴケ	<i>Diphyscium kashmirensense</i> (H.Rob.) Magombo	VU
第4次 2017:	カシミールクマノゴケ	<i>Diphyscium kashmirensense</i> (H.Rob.) Magombo	VU
第4次 2015:	カシミールクマノゴケ	<i>Diphyscium kashmirensense</i> (H.Rob.) Magombo [= <i>Theriotia kashmirensis</i> H.Rob.]	VU
第4次:	カシミールクマノゴケ	<i>Diphyscium kashmirensense</i> (H.Rob.) Magombo [= <i>Theriotia kashmirensis</i> H.Rob.]	VU
第3次:	カシミールクマノゴケ	<i>Diphyscium kashmirensense</i> (H.Rob.) Magombo (= <i>Theriotia kashmirensis</i> H.Rob.)	VU
第2次:	カシミールクマノゴケ	<i>Theriotia kashmirensis</i> Robins.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

福島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 栃木県[絶滅危惧Ⅱ類(B ランク)] 埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 神奈川県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 奈良県[絶滅危惧種] 和歌山県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩田和鷹, 2018. 屋久島（鹿児島県）における蘚苔類の植物分布. *Naturalistae*, 22: 73-84.
- 岩田和鷹・立石幸敏, 2018. 桂川溪谷（愛媛県西予市）の蘚類. *岡山コケの会ニュース*, 45: 13-16.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 神山隆之・鈴木 直, 2010. 栃木県で新たに見つかった絶滅危惧蘚類 12 種. *蘚苔類研究*, 10: 18-20.

- 木口博史・立石幸敏, 2018. 群馬県妙義神社とその周辺の蘚類目録. 岡山コケの会ニュース, 45: 17-20.
- 西村直樹・立石幸敏・田村英子・岩田和鷹・山本栄治, 2018. 小田深山の蘚苔類. Naturalistae, 22: 85-94.
- 立石幸敏・木口博史・西村直樹, 2017. 轟九十九滝(徳島県海陽町)の蘚類. Naturalistae, 21: 89-96.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Diphyscium kashmirensense has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Diphyscium kashmirensense* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

ヤリカツギ目 Encalyptales ヤリカツギ科 Encalyptaceae

シナノセンボンゴケ(セイタカヤリカツギ)

Encalypta streptocarpa Hedw.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 剣山ではシカの食害で植生が変化し、生育環境の悪化が見られ、今後の生育量の減少が予測される。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

シナノセンボンゴケは北海道、本州、四国に分布する直立性の蘚類。石灰岩上に生育する。生育地の 1 か所では生育環境の悪化が見られ、今後の生育量の減少が予測される。

協力者： 山口富美夫（広島大学）・佐藤匠（広島大学）・桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 2 cm 以上。茎は分枝せず、葉腋に褐色で糸状の無性芽をつける。葉はへら形～広い披針形、長さ 4-4.5 mm、先端は鈍頭になる。中肋は 1 本で葉頂下で終わる。葉身細胞は方形～六角形、多くの小さなパピラがある。本種はヤリカツギ属の他種から、葉の先端が尖らず、中肋は先端に届かないこと、葉腋に糸状の無性芽を持つことで区別される。

【生活史】

雌雄同株。国内では孢子体は見つかっていない。葉腋に作られる無性芽で繁殖する。

【生育環境】

石灰岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では、北海道、本州、四国に分布し、国外ではヨーロッパ、中国、極東ロシアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

北海道の峠山と大平山、山梨県の北岳、徳島県の剣山から報告がある。第 5 次レッドリスト調査（2016-2019）では、北岳と剣山で生育が確認された。北岳では石灰岩上に少量の群落が見られた。剣山の行場では海拔 1750 m の地点の石灰岩の壁面に 10×2 cm、5×5 cm、3×3 cm の群落が隣接して認められた。

【生育地の現況】

剣山ではシカの食害で植生が変化し、生育環境の悪化が見られた。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅する可能性が高い。剣山ではシカの食害で植生が変化し、生育環境の悪化が見られた。

要因の区分：	(過去)	石灰採掘、遷移進行・植生変化/自然遷移
	(現在)	石灰採掘

特記事項

生育地の一部は国立公園または国定公園内にある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	シナノセンボンゴケ（セイタカヤリカツギ）	<i>Encalypta procera</i> Bruch	CR+EN
第4次 2019:	シナノセンボンゴケ（セイタカヤリカツギ）	<i>Encalypta procera</i> Bruch	CR+EN
第4次 2018:	シナノセンボンゴケ（セイタカヤリカツギ）	<i>Encalypta procera</i> Bruch	CR+EN
第4次 2017:	シナノセンボンゴケ（セイタカヤリカツギ）	<i>Encalypta procera</i> Bruch	CR+EN
第4次 2015:	シナノセンボンゴケ（セイタカヤリカツギ）	<i>Encalypta procera</i> Bruch	CR+EN
第4次:	シナノセンボンゴケ（セイタカヤリカツギ）	<i>Encalypta procera</i> Bruch	CR+EN
第3次:	シナノセンボンゴケ（セイタカヤリカツギ）	<i>Encalypta procera</i> Bruch	CR+EN
第2次:	シナノセンボンゴケ（セイタカヤリカツギ）	<i>Encalypta procera</i> Bruch Syn. <i>Merceya serratinervis</i> Takaki; <i>Encalypta streptocarpa</i> auct. non Hedw.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. シナノセンボンゴケ（セイタカヤリカツギ）. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 33. ぎょうせい, 東京.

- Horton, D. G., 1983. A revision of the Encalyptaceae (Musci), with particular reference to the North American taxa. Part. 1. J. Hattori Bot. Lab., 54: 353-532.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 岩月善之助・鈴木 直・木口博史, 2008. 日本に生育する糸状の無性芽を持つ *Encalypta* (ヤリカツギ属) の種. 蘚苔類研究, 9: 311-318.
- Noguchi, A., 1988. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 2. pp. 243-491. Hattori Bot. Lab., Nichinan.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Encalypta streptocarpa has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Encalypta streptocarpa* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area High-altitude area Mid-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limestone mining, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	—



©樋口正信

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

クサスギゴケ目 Timmiales クサスギゴケ科 Timmiaceae

ラクヨウクサスギゴケ

Timmia norvegica J.E.Zetterst.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
わずか 2 地点でしか見つかっていない。いずれも 20 cm ² 以下の小さな群落のみが見出されている。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

ラクヨウクサスギゴケは、日本産クサスギゴケ属の他の 1 種であるミヤマクサスギゴケとは、葉が脱落しやすいこと、葉の基部に透明で壊れやすい細胞を持つことなどで区別される。周極要素だが国内では北アルプスと南アルプスの高山帯のそれぞれ 1 か所でしか見つかっていない。

協力者： 山口富美夫（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ約 1～3 cm。茎は分枝せず、広い披針形の葉をつける。葉は長さ 3.5～7 mm で、基部で反り返って展開しており、乾くと内側に曲がる。日本産クサスギゴケ属の他の 1 種であるミヤマクサスギゴケ *Timmia megapolitana* とは、葉が脱落しやすいこと、葉の基部に透明で壊れやすい細胞を持つことなどで区別される（樋口, 2014）。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない（樋口, 2014）。

【生育環境】

高山帯（ハイマツ林）の石灰岩地の土壤に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】森林, 草地, 岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北アルプス、南アルプスに分布し、周極要素で国外ではヨーロッパ、北米、グリーンランド、アジア（シベリア北部、カザフスタン、中国北西部）に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2001 年に北アルプスの鎚ヶ岳のハイマツ林から国内で初めて見出された（Tanaka & Tateishi, 2002）。その後 2 か所目として、南アルプスの北岳の山頂付近の風衝草原内の石灰岩岩陰にも生育していることが 2015 年に見出された（佐藤・山口, 2017）。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

いずれも 20 cm² 以下の小さな群落のみが見出されているとのことである。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ラクヨウクサスギゴケ	<i>Timmia norvegica</i> J.E.Zetterst.	CR+EN
第4次 2019:	ラクヨウクサスギゴケ	<i>Timmia norvegica</i> J.E.Zetterst.	CR+EN
第4次 2018:	ラクヨウクサスギゴケ	<i>Timmia norvegica</i> J.E.Zetterst.	CR+EN
第4次 2017:	ラクヨウクサスギゴケ	<i>Timmia norvegica</i> J.E.Zetterst.	CR+EN
第4次 2015:	ラクヨウクサスギゴケ	<i>Timmia norvegica</i> J.E.Zetterst.	CR+EN
第4次:	ラクヨウクサスギゴケ	<i>Timmia norvegica</i> J.E.Zetterst.	CR+EN
第3次:	ラクヨウクサスギゴケ	<i>Timmia norvegica</i> Zett.	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2014. ラクヨウクサスギゴケ. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編）, レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 96. ぎょうせい, 東京.
- 佐藤 匠・山口富美夫, 2017. ラクヨウクサスギゴケ *Timmia norvegica* J. E. Zetterst. var. *norvegica* は北岳（赤石山脈, 山梨県）にも産する. 蘚苔類研究, 11 : 232-233.
- Tanaka, A. and T. Tateishi, 2002. *Timmia norvegica* var. *norvegica* (Timmiaceae, Bryopsida) new to Japan. Bryological Research, 8: 97-101.
- 田中敦司, 2012. 日本の石灰岩性蘚類. Naturalistae, 16: 47-82.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Timmia norvegica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Timmia norvegica* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of

locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Forest, Grassland, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ギボウシゴケ目 Grimmiales キヌシツポゴケ科 Seligeriaceae

コキヌシツポゴケ

Seligeria pusilla (Hedw.) Bruch & Schimp.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
長野県伊那市では林道整備により、生育量の減少が確認された。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

コキヌシツポゴケは石灰岩の岩壁に生育する微小な直立性の蘚類。多くが石灰岩の露頭で確認されており、今回の調査により生育地の 1 か所では林道整備により生育量の減少が確認されている。

協力者: 井上侑哉 (国立科学博物館)・古木達郎 (元千葉県立中央博物館)・木口博史 (岡山コケの会)

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 1-2 mm。茎は分枝せず、葉は長さ 1.15-2.5 mm で、基部が卵形で上部が線形になる。上部の葉が大きくなる。キヌシッポゴケ属の種はとても小さい。キヌシッポゴケ属の他の種からは、葉の先端部が尖ること、中肋が葉の先端からわずかに突出すること、蒴歯の表面が平滑なことなどで区別される。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

湿った石灰岩の岩壁に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道、本州、四国、九州に分布し、国外ではヨーロッパ、コーカサス、アラスカ、北米東部に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

大きな変化はないと考えられるが、詳細不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。長野県伊那市では林道整備により、生育量の減少が確認された。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

石灰岩地の石灰岩壁に生育しており、石灰採掘や道路建設により生育地が消滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	石灰採掘, 交通インフラ建設
	(現在)	石灰採掘, 交通インフラ建設

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	コキヌシッポゴケ	<i>Seligeria pusilla</i> (Hedw.) Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次 2019:	コキヌシッポゴケ	<i>Seligeria pusilla</i> (Hedw.) Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次 2018:	コキヌシッポゴケ	<i>Seligeria pusilla</i> (Hedw.) Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次 2017:	コキヌシッポゴケ	<i>Seligeria pusilla</i> (Hedw.) Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次 2015:	コキヌシッポゴケ	<i>Seligeria pusilla</i> (Hedw.) Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次:	コキヌシッポゴケ	<i>Seligeria pusilla</i> (Hedw.) Bruch & Schimp.	CR+EN
第3次:	コキヌシッポゴケ	<i>Seligeria pusilla</i> (Hedw.) Bruch & Schimp.	CR+EN
第2次:	コキヌシッポゴケ	<i>Seligeria pusilla</i> (Hedw.) B. S. G.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

福島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 岡山県[絶滅危惧Ⅰ類] 熊本県[絶滅危惧ⅠB類(EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. コキヌシッポゴケ. 環境省(編), レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ(蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 84. ぎょうせい, 東京.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- Noguchi, A., 1987. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 1. pp. 1-242. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- Suzuki, T., Z. Iwatsuki and H. Kiguchi, 2006. The family Seligeriaceae (Bryopsida) in Japan. J. Hattori Bot. Lab., 100: 469-493.
- 高木典雄, 1953. 赤石山脈石灰岩地域の蘚類相. 服部植物研究所報告, 10: 23-29.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Seligeria pusilla has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Seligeria pusilla* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limestone mining, Transportation infrastructure construction
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ツチゴケ目 Archidiales シラガゴケ科 Leucobryaceae

シロシラガゴケ

Leucobryum glaucum (Hedw.) Ångstr.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
過去に報告のあった大雪山では確認できなかった。第 5 次レッドリスト作成のための調査で確認できた北海道東部の 3 か所の湿原のうち 2 か所は生育量がごくわずかであり、湿地開発によって個体数の減少あるいは個体群の消失が危惧される。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

本種は北半球の温帯に広く分布する種であり、日本は分布の南限である。日本での生育地は減少しつつあり、最近確認されているのは北海道と群馬県の数か所のみである。

協力者: 樋口正信 (国立科学博物館)・古木達郎 (元千葉県立中央博物館)・木口博史 (岡山コケの会)・内田暁友 (日本蘚苔類学会)

基礎情報

【形態】

大型で、野外で湿った状態の時は青みがかった白緑色をしており、塊状の群落を作る。茎は長さ約 5 cm。葉は披針形で長さ 5~7 mm、葉先背面の細胞上端は平滑である。葉の基部の横断面で、透明細胞は厚い部分で 4~6 層あり、中央部の薄くなる部分でも 3 または 4 細胞あってほとんどくびれない。全体の形や大きさはホソバオキナゴケ (*Leucobryum juniperoideum*) に似ているが、葉の基部の横断面で、葉の中央部がほとんどくびれないことで区別できる。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

高層湿原内のミズゴケハンモック上、あるいは高層湿原周辺部の開けた場所で、カヤツリグサ科などの背の低い草本の根元の湿った腐植土にクッション状の群落を作って生育する。高山のハイマツ帯の岩場にも生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地 低標高地】湿地・湿原・細流

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道、本州に分布し、国外では北半球に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では、北海道の 3 か所の高層湿原およびその周辺で確認された。また、過去に報告のあった大雪山の地点では確認できなかった。これらの現地調査のほかに、樋口・島立 (2014) が長野県八ヶ岳から、樋口・上野 (2015) が北海道歯舞、標津湿原から、また乙幡 (2016) が大雪山千畳崩から本種を報告している。

【生育地の現況】

第 5 次レッドリスト調査により北海道で確認された 3 か所のうち、2 か所では生育量が少なかった。また、北海道東部の生育地は農耕地として開発が進みつつあり、生育環境の悪化が危惧される。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

森林伐採や湿地開発によって生育環境の変化、生育地の消失が危惧される。また、産地が局限しているため絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 湿地開発
	(現在)	森林伐採, 湿地開発

特記事項

一部の地域は国立区公園、国定公園、ナショナルトラストとして保護されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	シロシラガゴケ	<i>Leucobryum glaucum</i> (Hedw.) Åongstr.	CR+EN
第4次 2019:	シロシラガゴケ	<i>Leucobryum glaucum</i> (Hedw.) Åongstr.	CR+EN
第4次 2018:	シロシラガゴケ	<i>Leucobryum glaucum</i> (Hedw.) Åongstr.	CR+EN
第4次 2017:	シロシラガゴケ	<i>Leucobryum glaucum</i> (Hedw.) Åongstr.	CR+EN
第4次 2015:	シロシラガゴケ	<i>Leucobryum glaucum</i> (Hedw.) Åongstr.	CR+EN
第4次:	シロシラガゴケ	<i>Leucobryum glaucum</i> (Hedw.) Åongstr.	CR+EN
第3次:	シロシラガゴケ	<i>Leucobryum glaucum</i> (Hedw.) Åongstr.	DD
第2次:	シロシラガゴケ	<i>Leucobryum glaucum</i> (Hedw.) Aongstr. ex Fl.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

青森県[希少野生生物（Cランク）] 福島県[希少（D）] 栃木県[情報不足] 新潟県[絶滅危惧（EN+VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信・島立正広, 2014. 長野県八ヶ岳のシロシラガゴケ. 蘚苔類研究, 11: 78.
- 樋口正信・上野 健, 2015. 北海道東部のシロシラガゴケ. 蘚苔類研究, 11: 140-141.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 乙幡康之, 2016. 北海道大雪山国立公園, 東大雪地域のシロシラガゴケ. 蘚苔類研究, 11: 214-215.
- Yamaguchi, T., 1993. A revision of the genus *Leucobryum* (Musci) in Asia. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 73: 1-123.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Leucobryum glaucum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Leucobryum glaucum* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area Low-altitude area】 Wetland/Marsh/Stream
Threat types:	Logging and wood harvesting, Wetland development
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
 Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

ツチゴケ目 Archidiales シラガゴケ科 Leucobryaceae

ジャバシラガゴケ

Leucobryum javense (Brid.) Mitt.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) B2ab

基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

B2. 生育地面積が 2000 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。

【地点数】10 地点以下

b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

奄美大島湯湾岳山頂域の生育地では、30 年前と比較して目に見えて現存量が減少しており、最近の調査ではわずかに確認できた程度である。沖縄島で新たに発見された生育地は尾根筋の作業用の小径上にあり、踏圧によって減少が予測される。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

本種はアジアの熱帯、亜熱帯に広く分布するが、琉球列島はその分布の北限である。日本での記録は少なく、現在生育が確認されているのは、奄美大島、沖縄島、西表島の山頂近くなどである。

協力者： 秋山弘之（兵庫県立人と自然の博物館）

基礎情報

【形態】

この属の種としては大型で、ゆるい塊やクッションを作る。植物体は白っぽい、乾くとやや黄色または紫がかかることがある。茎は長さ 8 cm 以下。葉は披針形から細い披針形で、長さ 8~18 mm、幅 1.5~3.1 mm、やや鎌形に曲がり、葉先は鋭頭、またはやや鈍頭で、葉先部（葉長の 2/5 くらい）の背面は各細胞の上端がパピラ状に突出するので、ざらつく。葉の基部の横断面で、背腹それぞれ 3~4 層の大型の透明細胞の間に 1 層の小型の葉緑細胞がある。全形はオオシラガゴケ (*Leucobryum scabrum* Sande Lac.) に似るが、本種の葉はずっと大きく、18 mm に達することがある。また、葉先背面の細胞上端の突出部は、棘状のオオシラガゴケよりも小さく、パピラ状であることで区別できる。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。雄植物は小型で雌植物の葉の上に生育する（矮雄）。

【生育環境】

国内では奄美大島、沖縄島、西表島の霧のかかりやすい山頂部の林床やリュウキュウチク群落の根元、あるいは沢沿いの斜面など、空中湿度の高い場所の湿った土上で、柔らかいクッション状の群落を形成して生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では琉球列島（奄美大島、沖縄島、西表島）に分布し、国外では中国を含むアジアの熱帯、亜熱帯に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査（2019、2020）では、奄美大島の 3 か所と沖縄島の 2 か所で生育が確認された。沖縄島の生育地は今回初めて確認された場所である。西表島では生育が確認できなかった。

【生育地の現況】

沖縄島で発見された新たな生育地は尾根筋にあり、生育量も比較的多かったが、踏圧による影響が懸念される。奄美大島では個体群も少なく、生育地の一部では森林伐採や自然災害などにより生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

森林伐採による生育環境の変化が危惧される。また、産地が局限しているため絶滅する可能性が高い。沖縄島で新たに見つかった生育地は、尾根筋の作業用の小径となっており、人の踏みつけによる影響を受ける可能性もある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 人の踏みつけ, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 人の踏みつけ, 分布・産地局限

特記事項

琉球列島（奄美大島）が分布の北限となっている。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	ジャバシラガゴケ	<i>Leucobryum javense</i> (Brid.) Mitt.	CR+EN
第4次 2019:	ジャバシラガゴケ	<i>Leucobryum javense</i> (Brid.) Mitt.	CR+EN
第4次 2018:	ジャバシラガゴケ	<i>Leucobryum javense</i> (Brid.) Mitt.	CR+EN
第4次 2017:	ジャバシラガゴケ	<i>Leucobryum javense</i> (Brid.) Mitt.	CR+EN
第4次 2015:	ジャバシラガゴケ	<i>Leucobryum javense</i> (Brid.) Mitt.	CR+EN
第4次:	ジャバシラガゴケ	<i>Leucobryum javense</i> (Brid.) Mitt.	CR+EN
第3次:	ジャバシラガゴケ	<i>Leucobryum javense</i> (Brid.) Mitt.	VU
第2次:	ジャバシラガゴケ	<i>Leucobryum javense</i> (Brid.) Mitt.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Yamaguchi, T., 1993. A revision of the genus *Leucobryum* (Musci) in Asia. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 73: 1-123.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Leucobryum javense has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Leucobryum javense* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area _ Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Human trampling, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

オガサワラカタシロゴケ

Calymperes boninense Z.Iwats.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 父島や母島では台風の影響で斜面の崩壊や倒木が起こりやすく、それによって着生基物となる岩や樹木の減少がみられる。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

オガサワラカタシロゴケは日本固有で、林内の樹幹や岩上に生育する。カタシロゴケ属の中では小型で、他種からは、葉の上部の縁に鋸歯があること、葉身部に1列の細長い、多層の細胞が分化すること、葉身細胞は腹面が膨らみマミラ状になることなどで区別される。

協力者： 西畑和輝（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 2 cm 以下。茎はほとんど分枝せず、長さ 3～4 mm の鈍頭の披針形の葉を密につける。葉は乾燥すると内側に巻き込む。アミゴケ属の種とは葉の縁の細胞が分化しないこと、葉身細胞が平滑なこと、蒴歯がないことなどで区別される。カタシログケ属の中では小型で、他種からは、葉の上部の縁に鋸歯があること、葉身部に 1 列の細長い、多層の細胞が分化すること、葉身細胞は腹面が膨らみマミラ状になることなどで区別される。

【生活史】

孢子体は知られていない。

【生育環境】

常緑広葉樹林の樹幹や岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

日本固有で、小笠原諸島に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

これまで小笠原諸島の父島と母島から報告されている。第 5 次レッドリスト作成のための調査では、父島の常世の滝、母島の堺ヶ岳、乳房山で生育が確認された。これら 3 か所以外でも、2008～2009 年に父島と母島の数か所で確認されている。

【生育地の現況】

生育地は父島や母島の湿性高木林内に散在している。台風の影響で斜面の崩壊や倒木が起こり、それによって着生基物となる岩や樹木の減少がみられる。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

産地が局限し、台風などの自然災害によって被着生樹木が倒れ、着生基物が減少する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	自然災害, 分布・産地局限
	(現在)	自然災害, 分布・産地局限

特記事項

本種は小笠原諸島固有種である。生育地は国立公園内にある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オガサワラカタシロゴケ	<i>Calymperes boninense</i> Z.Iwats.	VU
第4次 2019:	オガサワラカタシロゴケ	<i>Calymperes boninense</i> Z.Iwats.	VU
第4次 2018:	オガサワラカタシロゴケ	<i>Calymperes boninense</i> Z.Iwats.	VU
第4次 2017:	オガサワラカタシロゴケ	<i>Calymperes boninense</i> Z.Iwats.	VU
第4次 2015:	オガサワラカタシロゴケ	<i>Calymperes boninense</i> Z.Iwats.	VU
第4次:	オガサワラカタシロゴケ	<i>Calymperes boninense</i> Z.Iwats.	VU
第3次:	オガサワラカタシロゴケ	<i>Calymperes boninense</i> Z.Iwats.	DD
第2次:	オガサワラカタシロゴケ	<i>Calymperes boninense</i> Z. Iwats.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Iwatsuki, Z., 1985. Bryophytes of the Bonin Islands and the Volcano Islands (5). Bulletin of the National Science Museum. Series B, Botany, 11: 57-68.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Calymperes boninense has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Calymperes boninense* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area _Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Natural disasters, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫（広島大学）
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

シラガゴケモドキ

Exostratum blumei (Hampe) L.T.Ellis

カテゴリー判定結果 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) B2ab				
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 2000 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 西表島の数か所で生育が確認されたほか、石垣島からも報告がある。樹幹、朽木、岩上に生育するがいずれの生育地点でも個体群数、個体数ともに少ない。近年の気候変動に伴う台風の影響によって林内環境が変化し、倒木や朽木の腐植の進行によって、個体群が減少あるいは消失する可能性がある。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

葉身の横断面で、背腹両面と中央の 3 列に葉緑細胞が並ぶ特徴的な蘚類で、アジア、オセアニアの熱帯、亜熱帯に分布する。日本では八重山諸島だけから報告されている。1998 年の調査の際に西表島横断道沿いで少数が確認されている。森林伐採による生育地の環境変化が心配される。

協力者： 佐藤匠（広島大学）・西畑和輝（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は小型で白緑色。茎は長さ 3 cm 以下。葉は根元の鞘部から線形に伸び、長さ 3 ～5 mm。中肋は鞘部では細く、その上の葉身部では幅の大部分を占め、背腹両面にパピラがある。葉鞘部の縁には数列の細長い細胞が並び、これらと中肋の間には大型で透明な細胞からなる網目状組織がある。葉身の横断面で、背腹両面と中央のあわせて 3 列の葉緑細胞の列があり、その間は大型の透明細胞が占める。

【生活史】

国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

林内の樹幹や朽木上、岩上にまばらな群落を作る。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では八重山諸島（石垣島、西表島）に分布し、国外ではアジア、オセアニアの熱帯、亜熱帯に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

日本では石垣島と西表島だけから報告がある。第 5 次レッドリスト作成のための調査では、西表島の数か所で生育が確認された。

【生育地の現況】

生育地の一部では自然災害などにより生育条件が悪化している。。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

森林伐採や自然災害による生育地の環境変化が心配される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 自然災害
	(現在)	森林伐採, 自然災害

特記事項

生育地の一部は、国立公園内にある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	シラガゴケモドキ	<i>Exostratum blumii</i> (Hampe) L.T.Ellis	VU
第4次 2019:	シラガゴケモドキ	<i>Exostratum blumii</i> (Hampe) L.T.Ellis	VU
第4次 2018:	シラガゴケモドキ	<i>Exostratum blumii</i> (Hampe) L.T.Ellis	VU
第4次 2017:	シラガゴケモドキ	<i>Exostratum blumii</i> (Hampe) L.T.Ellis	VU
第4次 2015:	シラガゴケモドキ	<i>Exostratum blumii</i> (Hampe) L.T.Ellis [= <i>Exodictyon blumii</i> (Hampe) M.Fleisch.]	VU
第4次:	シラガゴケモドキ	<i>Exostratum blumii</i> (Hampe) L.T.Ellis [= <i>Exodictyon blumii</i> (Hampe) M.Fleisch.]	VU
第3次:	シラガゴケモドキ	<i>Exostratum blumii</i> (Nees) L.T.Ellis [= <i>Exodictyon blumii</i> (Müll.Hal.) M.Fleisch.]	VU
第2次:	和名なし	<i>Calymperes strictifolium</i> (Mitt.) Roth Syn. <i>C. tuberculosum</i> (Ther. et Dix.) Broth.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎，2001．日本の野生植物コケ．355pp., 192pls. 平凡社，東京．
- Noguchi, A., 1988. Illustrated moss flora of Japan. Part 2. pp. 243-492. Hattori Botanical Laboratory, Nichinan.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Exostratum blumii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Exostratum blumii* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Natural disasters
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

ニセハブタエゴケ

Leucophanes angustifolium Renault & Cardot

カテゴリー判定結果 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) B2ab				
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 2000 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 国内では西表島、父島、母島の 3 島のみから知られており、いずれの生育地でも個体群のサイズは小さく、生育量もごくわずかである。生育地は亜熱帯域の島嶼であることから、人為的攪乱あるいは台風などの自然災害による影響を受けやすく、生育地の存続が危惧される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

広くアジア、アフリカ、オーストラリアの熱帯、亜熱帯地域に分布する、白緑色でやや絹様光沢のある蘚類で、国内では八重山諸島と小笠原諸島に分布する。うす暗い林内の樹幹の基部や根の上、転石上に生育する。森林伐採による絶滅が危惧される。

協力者： 佐藤匠（広島大学）・西畑和輝（広島大学）・桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は白緑色でやや絹様の光沢がある。葉は細い披針形で、長さ 4～8 mm、乾いてもほとんど曲がらない。中肋は細くて目立たないが、ほとんど葉先に届く。葉身の横断面では、大型薄壁の細胞が上下 2 層に並び、その間に挟まれて 1 層の小型の葉緑細胞が並ぶ。葉の先端に紡錘形の無性芽や褐色の仮根がつくことがあり、時には葉先に幼植物がつくこともある。本属は日本には本種のみである。植物体の色や、葉の構造はシラガゴケ属 (*Leucobryum*) に似たところもあるが、ニセハブタエゴケの葉には細い中肋があるので区別できる。

【生活史】

国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

亜熱帯域の林内で、樹幹の基部や転石上にまばらな群落を形成して生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では八重山諸島と小笠原諸島に分布し、国外では広くアジアの熱帯、亜熱帯地域やアフリカ、オーストラリアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では、八重山諸島西表島、小笠原諸島母島で調査を行い、母島では 2 か所、西表島では 8 か所で生育を確認した。

【生育地の現況】

生育地の一部では自然災害などにより生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

生育数は少ない。第 5 次レッドリスト調査では、確認したいずれの生育地でも個体群のサイズは小さく、個体数も少なかった。

存続を脅かす要因

森林伐採や自然災害による絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 自然災害
	(現在)	森林伐採, 自然災害

特記事項

日本は本種の分布の北限である。生育地の一部は国立公園内にある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ニセハブタエゴケ	<i>Leucophanes angustifolium</i> Renault & Cardot	VU
第4次 2019:	ニセハブタエゴケ	<i>Leucophanes angustifolium</i> Renault & Cardot	VU
第4次 2018:	ニセハブタエゴケ	<i>Leucophanes angustifolium</i> Renault & Cardot	VU
第4次 2017:	ニセハブタエゴケ	<i>Leucophanes angustifolium</i> Renault & Cardot	VU
第4次 2015:	ニセハブタエゴケ	<i>Leucophanes angustifolium</i> Renault & Cardot	VU
第4次:	ニセハブタエゴケ	<i>Leucophanes angustifolium</i> Renault & Cardot	VU
第3次:	ニセハブタエゴケ	<i>Leucophanes angustifolius</i> Renault & Cardot	VU
第2次:	ニセハブタエゴケ	<i>Leucophanes angustifolius</i> Ren. et Card. Syn. <i>L. octoblepharioides</i> auct. non Brid.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・木口博史, 1976. *Leucophanes octoblepharioides* Brid. は日本にも産する. 蘚苔地衣雑報, 7: 91-93.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Leucophanes angustifolium has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Leucophanes angustifolium* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Natural disasters
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

ジョウレンホウオウゴケ

Fissidens geppii M.Fleisch.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
生育地は溪流中の岩上であり、森林伐採や近年の気候変動に伴う台風・洪水などの影響を受けやすい場所である。個体群も数センチメートル四方ほどの小さなもので、生育環境の変化により個体数が消滅する可能性が高い。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

この属の種は葉の基部がアヤメのように二重になるのが特徴である。本種は自然度の高い森林中の清流の濡れた岩の上に生育する。アジアの熱帯、亜熱帯から朝鮮半島、日本の本州、四国、九州に分布する。林内の溪流中に生育が限られているため、森林伐採、洪水などの自然災害、水質の汚染などにより、近年各地で生育量が減少しつつある。

協力者: 立石幸敏（岡山コケの会）・木口博史（岡山コケの会）・西村直樹（岡山コケの会）・林正典（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

茎は長さ 3～9 mm、4～19 対の葉をやや密につける。葉は披針形で、鮮緑色～濃緑色、長さ 1.2～2.7 mm、葉の全周に細長い細胞からなる舷がある。舷は非常に明瞭で、断面で 2～数細胞の厚さがあり、葉頂よりかなり下で急に消える。葉基部はしばしば茎に下延する。中肋は強く、葉頂近くに達する。葉身細胞はほぼ六角形、長さ 5～13 μm 、平滑。蒴柄は茎の頂部の葉腋に 1～2 本。蒴はほぼ相称。雄器官は別の葉腋につくが、発育の悪い個体では見当たらないことが多い。エゾホウオウゴケ (*Fissidens bryoides*) に近いが、本種は濡れた場所に生え、葉縁の舷がより厚く、背翼の基部がしばしば茎に下延し、胞子が径 16～23(～27) μm と大きいことで区別できる。

【生活史】

雌雄同株（同苞）。

【生育環境】

林内溪流沿いの水中または水しぶきのかかる岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では本州、四国、九州に分布し、国外では朝鮮半島、中国、インド、スマトラ、ジャワ、ボルネオに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では熊本県と福岡県から確認されている。また、西村ほか（2018）が愛媛県から、佐治ほか（2021）が徳島県から、古木（2021）が千葉県から報告している。そのほか、広島大学植物標本庫には 2017 年に高知県と宮崎県で採集された標本がある。

【生育地の現況】

生育地の一部では森林伐採や自然災害などにより生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

森林伐採や自然災害によって生育環境の変化が危惧される。また、産地が局限しているため絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 自然災害, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 自然災害, 分布・産地局限

特記事項

日本は分布の北限である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ジョウレンハウオウゴケ	<i>Fissidens geppii</i> M.Fleisch.	VU
第4次 2019:	ジョウレンハウオウゴケ	<i>Fissidens geppii</i> M.Fleisch.	VU
第4次 2018:	ジョウレンハウオウゴケ	<i>Fissidens geppii</i> M.Fleisch.	VU
第4次 2017:	ジョウレンハウオウゴケ	<i>Fissidens geppii</i> M.Fleisch.	VU
第4次 2015:	ジョウレンハウオウゴケ	<i>Fissidens geppii</i> M.Fleisch. [= <i>F. neo-rivularis</i> Sakurai]	VU
第4次:	ジョウレンハウオウゴケ	<i>Fissidens geppii</i> M.Fleisch. [= <i>F. neo-rivularis</i> Sakurai]	VU
第3次:	ジョウレンハウオウゴケ	<i>Fissidens geppii</i> M.Fleisch. (= <i>F. neo-rivularis</i> Sakurai)	VU
第2次:	ジョウレンハウオウゴケ	<i>Fissidens geppii</i> Fl. Syn. <i>F. neo-rivularis</i> Sak.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

秋田県[絶滅危惧種Ⅰ類(CR+EN)] 福島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 茨城県[準絶滅危惧] 栃木県[準絶滅危惧(Cランク)] 埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 千葉県[要保護生物(C)] 神奈川県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 富山県[情報不足] 長野県[情報不足(DD)] 三重県[絶滅危惧ⅠB類(EN)] 京都府[絶滅寸前種] 大阪府[CR+EN] 兵庫県[Cランク] 奈良県[絶滅危惧種, 注目種] 和歌山県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 鳥取県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 岡山県[絶滅危惧Ⅱ類] 広島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 山口県[絶滅危惧ⅠB類(EN)] 愛媛県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 古木達郎, 2021. 生態園のコケ植物, 30年の変遷. 千葉中央博研究報告, 15: 87-97.
- Iwatsuki, Z. and T. Suzuki, 1982. A taxonomic revision of Japanese species of *Fissidens* (Musci). Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 51: 329-508.

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎，2001．日本の野生植物コケ．平凡社，東京．355pp., 192pls.
- 西村直樹・立石幸敏・田村英子・岩田和鷹・山本栄治，2018．小田深山の蘚苔類．Naturalistae, 22: 85-94.
- 佐治まゆみ・狩野登之助・西村直樹，2021．徳島県南の蘚類 3．頂生性蘚類．岡山コケの会ニュース，52: 11-16.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Fissidens geppii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Fissidens geppii* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Natural disasters, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
 Author: Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月